

---

# 幸せの赤い竜

さや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸せの赤い竜

### 【Nコード】

N7750S

### 【作者名】

さや

### 【あらすじ】

顔面凶器ゆえに孤独な竜人族マーシャルトと、それなりに平凡な日本人の中島亜美とのほのほののようなそうでないような恋愛物語。本作は上記2名の視点での重複展開がございます。事前にご了承ください。

## プロローグ

不思議な夢を見た。

神様を名乗る綺麗な少年が現れて『異世界に移住するとしたら、どのような世界を希望されますか？』なんて聞いて来る。

そんな夢だ。

夢の中だからか、特に疑問にも思わず私は彼の問いに答えた。

「え、と、そうですね。まずは…普通に空気があつて、重力が同じで、気候もこちらとの差があまりなくて、文明を持った同じサイズの人間が生息しているというのは大前提ですよ？私、ライトノベルとか結構好きで、やっぱり異世界と聞いて憧れるのは亜人や竜、魔族や魔物、妖精や精霊がいて魔法があるようなファンタジーな世界です。流石にいい大人なので、魔王とか勇者とか王とか巫女とか神子なんて設定はいらないですけどね。だから、黒髪黒目が珍しかったり迫害されたり神聖視されたりする世界は嫌です。どうしてもそういう世界しかなければ、色素等の改造をお願いします。改造と言えば、異世界に渡った後の私自身の魔法の才についてですが、これはそちらに全面的にお任せします。その世界に魔法を使える人間が少ないのであれば、私も使えなくても問題は無いです。むしろ、強すぎる能力を与えられる方が問題が生じやすいと思われまますのでその辺り是非ご考慮下さい。ただし、無力な一般人として生きる事になるのであれば確実に、戦争が無いかある程度収束している状態の世界であること望みます。力を持ったとしてもそうであるに越した事は無いですけど…。あ、これも大前提なのですが、善悪の感性が離れすぎている世界でお願いします。日本ほど充実していな

くても良いですが、ある程度の人権は主張したいですね。細かいところでは、男尊女卑が激し過ぎず、女性も外で働いたりズボンを着用したりすることが当たり前の世界だと過ごしやすいです。ああ、そつだ。どんな世界だろうとちゃんと言葉や文字が分かる補正は無いと困つちやいますよ？ 転生して赤子からやりなおすというのならまだしも、大人の私が言葉を一から覚えようなんて無謀も良いところですからね。数え方も十進法でお願いします。後、これは結構大事なのですが、衛生面がきちんとしていると好ましいですね。特に疫病なんか広まってしまふような環境は遠慮したいです。それと、魔法でも技術でも良いから医療はある程度発達していると良いですね。それが法外な値段では無いことも重要です。ついでに、水が貴重すぎるような環境もあつて欲しくありません。え〜つと、これは男性に言うのは少々アレなのですが…、生理の時に布をあてるだけとか、そういう処理しか出来無いのはキツイです。合わせて、下着類がこの世界のものに近いと助かります。最後に贅沢を言わせて貰つと、米や醤油や味噌などのソウルフード関連と、後は和でも洋でも甘味がある程度充実していると好ましいのですが、流石にこれは難しいでしょうか。」

長々と語る私に呆れるでもなく、真剣に聞いてくれた美少年神様は最後ににっこりと笑つて『ご希望承りました。厳正なる審査の上、当選が確定致しましたら後日改めてご挨拶に伺わせていただきます。ご協力ありがとうございます』等と良く分からない事を言つて消えた。

これが単なる夢では無かつたのだと理解したのは、それから3日後の事だつた。

再び夢に現れた美少年神様は私に向かって恭しく頭を下げ、こう

告げた。

「ご当選おめでとうございます。他に類を見ない程の細かな条件付けに感銘を受けました神一同、満場一致での異界渡りが可決される運びとなりました。

なお、異世界へ赴くにあたりまして、地球での貴方の存在は完全に消去されますのでご了承下さい。」

こうして、大した説明も無く私は身一つで異世界に飛ばされた。

問われた事に答えただけで、私に異世界トリップ願望などあるはずも無かったのに…。

第一話〜邂逅〜（前書き）

〜〜〜表記が時間経過。

表記が視点変更となっております。

## 第一話〜邂逅〜

気がつくくと、私は空中から落下していた。

薄いパジャマ越しに容赦無くぶつかって来る空気が酷く冷たい。

遙か下方に、鬱蒼と木々の生い茂る深い森が見える。

どうやら、かなりの上空から落ちていているようだ。

このまま地面に到達すれば、私はどうあっても助からないだろう。

そんな事を思いながら意識を失う直前、森から大きな深紅の何か  
がこちらに向かい飛び出して来るのが見えた。

~~~~~

「生き…てる…?」

ぼんやりと意識を浮上させた私は、その事実には驚いて無意識に呟  
いた。

薄く眼を開けると、とても大きな誰かに横向きに抱えられている  
ことが分かった。

この人に助けられたのだろうか、と未だハッキリしない思考の中  
で考える。

次の瞬間、私のすぐ真上から今まで聞いた事もないほど低い声が

響いた。

「目が覚めたか。」

反射的にそちらに顔を向けると、そこには金剛力士像も裸足で逃げ出しそうなほど恐ろしい容貌をした男がそのぎよろりとした三白眼で私を見据えていた。

きつと、こういう顔を顔面凶器と言うのだろうか。

彼の顔を視界に入れた瞬間ギクリと身体を強張らせて固まった私に対して、男はゆっくりと視線を外した後、どこかバツが悪そうに言った。

「スマン。」

「…え？」

なぜかいきなり謝られて、私は思わず疑問の声を出してしまった。不用意な発言が、このとても人間とは思えないほど迫力のある顔面をした相手の気に触っていたらと考えると、少しばかり顔から血の気が引いた。

「人と目を合わせるなど忠告されているのを忘れていた。

心臓に悪いだの、寿命が縮むだの散々言われていたんだが…。」

そう言って彼は眉間に皺を寄せ、目を細めた。



その行動はさらに男の容貌を恐ろしいものにしていたが、彼の思考内容を考えると先ほどよりも落ちついて眺める事が出来た。

見た目は凶悪犯罪者のようでも、どうやら悪い人間というワケでは無さそうだ。

状況を確認するために、私は男に問いかけた。

「あの、貴方が私を助けてくれたんですか？」

「…まあ。」

「そうですか。それはありがとうございます。」

彼の言葉が嘘か本当か見分ける術はないが、少なくとも今悪い印象を与えるわけにはいかない。

そんな事を考えながらお礼を述べ、ペコリと頭を下げる。

その際、腰に回された太い腕とお尻の下の胡坐をかいた状態の足が視界に入り、私はある疑問を口にした。

「そういえば、なぜ私は貴方に抱きかかえられているのでしょうか。」

「

「ああ。悪いとは思ったが、身体がかなり冷えちまってたんでな。」

「…それは、重ね重ねありがとうございました。」

もう一度、今度は先程よりも少しだけ深く頭を下げる。

「…いや、そう礼を言われるこっちゃねえ。」

それより嬢ちゃん。

お前さん靴すら履いて無いその軽装備でどうやってここまで来た？」

彼の問いにまともに答えられるはずもなく、私は押し黙ってしまった。

この時の私の脳内を占めていた考えを暴露すると『何て説明したらいいのか分からない』が5割、『正直に全部話したところで信じて貰えるわけがない』が3割、『嬢ちゃんって言われたけど、私にくつくらいに見えているんだろっ』が1割、『そういえば、私パジャマ姿だった恥ずかしい』が1割だ。

若干、緊張感の無い思考が混じっているけど、気になってしまったものは仕方が無いと思う。

俯いて何も言わない私に、彼は別の質問を投げかけた。

「それとだ、何をどうしたらあんな上空から落ちる事になるんだ？」

それは私が聞きたい。

異世界に飛ばされてしまったのはもうどうしようも無い事なのかもしれないけれど、その先が空である意味が分からない。

一体、神様とやらは何を考えているのだろうか。

なおも俯いている私に、男はガシガシと頭をかきながら口を開く。

「なあ、嬢ちゃん。せめてこれだけ教えてくれ。

言えねえのか？それとも、分かんねえのか？どっちだ？」

さすがにこの問いにまで黙っているのは得策ではないだろうと考えて、私は目を伏せながら答えを返した。

「……………後者、です。」

「はあ。成程なあ。」

…で、これからどうすんだ？アテはあるのか？」

黙って首を横に振る。

男の視線は相変わらず私から外されていたが、気配で分かったのだろう。

頭上から小さくため息が漏れるのを感じた。  
キュツと男の胸元の服を掴んで、縋るような気持ちで彼を見上げて言う。

「あ、あの…。」

ご迷惑にしかならないのは重々承知していますが、一緒に連れて行っていただくわけにはいかないでしょうか。

わ、私に出来る事は何でもしますから。だから…。」

もし断られてこの深い森の中に放置されてしまったら、確実に野たれ死にだ。

じわじわと瞳が熱くなり涙の出そうな気配がしたが、私はそれを気合いで止めた。

泣き落しなんか自分の趣味じゃないし、逆に面倒な相手だと彼に

認識されても困る。

「いくら何でも、この状況で見捨てたりしねえよ。」

呟くような小さな声だったが、その言葉はハッキリと私の耳に届いた。

ハツとして意識を向ければ、男は微妙な苦笑いを含ませた表情をしていた。

それから、彼は私を安心させるようにポンポンと頭を叩く。

落ち着いた気分で息を吐きだせば、今度は少しばかり眉間に皺を寄せた男が忠告してきた。

「それよりなあ、嬢ちゃん。

余計なお世話かもしれねえが、あんまり簡単に何でもするなんて言うもんじゃねえぞ。

世の中じゃあ、タチの悪い人間がいくらでもいるんだからな。」

彼しか頼れる者がいない現状だからこそその言葉だったのだが、余程、考えなしにでも見えたのだろうか。

言っている事に間違いはないので素直にこくりと頷いた私に、男は満足そうに微笑んだ。

この時、私はこっそり『笑顔の方が怖いな』とか『顔に似合わずお人好しなんだな』とか、そんな失礼なことを考えていた。

Bランク以上のモンスターが数多く生息する魔の森で、討伐依頼のあったAランクモンスター5体を難なく狩り終わり、売却できる

部位を回収して太陽の位置を確かめようと空を見上げた。

そこでふと、遙か上空から何かが落下してきていることに気が付く。

それが何なのか確認しようと思いを凝し、その正体を理解した瞬間、俺は驚きに目を見開いた。

人だ。

意識があるのか無いのかは分からないが、落下中のその人間はピクリとも動かない。

さすがに見殺しにすることも出来ないので、俺は素早く竜形態を取り空へと飛び立った。

無事にその人間を受け止め、静かに森に降り立って人形態に戻る。落ちてきたのは何ともひ弱そうな少女だった。

かなり身体が冷えてしまっていたので、近場の木の下に腰を下ろして腕の中に抱え込み、魔法で火を焚いた。

体勢が定まったところで、腕の中の少女をじっくりと観察する。

容姿はパツとしないが、この辺りでは珍しい黒髪に、少し黄みがかかった肌。

非常に縫製の細かい奇妙なデザインの服に、そこから伸びた華奢でマメひとつない手足。

見れば見るほど厄介事に関わってしまった気がして、俺は軽く頭を抱えた。

1時間ほど経ったあたりで、少女の体温が正常に戻ったので流し

ていた魔力を絶つて火を消す。

彼女が目覚めたのは、それからさらに1時間ほど過ぎた頃だった。

~~~~~

「生き…てる…？」

小さな音量ながらしっかりと聞こえたその声は、思ったよりも低く落ち着いた雰囲気がある。

見た目よりも、もう少し年齢が上なのかもしれない。

声をかけると、少女はスツと俺を見上げた。

そして、俺の顔を視認した瞬間に息を飲んで固まってしまった。

自分の顔事情を思い出した俺は失敗したと後悔しつつ、少女から視線を外した。

己の迂闊さに辟易する。

反省して謝れば、少女は思わずと言った風に疑問の声を発した。

言い訳がましい言葉を並べたる俺をどう思ったのか、彼女はこちらを見つめたまま徐々に身体の強張りを解いていく。

はて、初対面の女の反応は泣き叫ぶか気絶と相場が決まっていたんだが…。

早くも平静を取り戻したらしい彼女は、俺がその身を助けた事を確認すると丁寧な頭を下げ、再び見上げてくる。

何という肝の据わった少女だ。

俺の顔を眺め続けていられる事もそうだが、何より礼を言う彼女

の声に怯えが含まれていない事に内心でかなり驚いていた。

次いで、少女は俺に抱えられている理由を尋ねてくる。

問いかけに答えてやれば、彼女はその内容を疑う事も無く、また同じように頭を下げつつ礼を述べた。

普段に無い態度を取られて気恥ずかしくなった俺は少女の言葉を否定し、誤魔化しついでに質問を投げかける。

「お前さん靴すら履いて無いその軽装備でどうやってここまで来た？」

それを聞いた途端に、彼女は顔を曇らせて俯いてしまった。

何だか嫌な予感がする…。

懲りずに別の質問を試してみるが、やはり答えはない。

どうしたもんかと考えつつ後ろ頭をかいた。

それまでの態度を見るに、俺に恐怖して答えられないというワケではないだろう。

だとすれば、やはり厄介な事情を抱えているのかもしれない。

少しでも判断材料が欲しいので、せめて言えないのか分からないのか聞いてみる。

すると、今度は少しばかり思索するような気配がした後、ようやく彼女の口から質問の答えが返ってきた。

「……………後者、です。」

分からないと来た。

誰ぞに誘拐でもされたか、何かの事件にでも巻き込まれたか、は



たまたまモンスターに攫われでもしたのか、まさかの記憶喪失か…。  
アテはあるのかと尋ねれば、当然のごとく少女は首を横に振った。  
その答えに軽いため息をつく、彼女は俺の服を掴んで見上げてくる。

なるほど現状を正確に把握しているらしい少女は、何でもするか  
ら一緒に連れて行って欲しいと頼みこんできた。

だが、彼女の言葉尻に震えが混じっている。

それでも、流れそうになる涙をぐつと堪えて強い眼差しを向けてくるのだから感心もする。

存外、勝気な性格なんだな。

見捨てないと、そう告げた俺を驚いたように見上げる少女に軽く  
苦笑いをした。

彼女の頭をポンポンと叩いてみれば、その唐突な行動を怖がりも  
せずに小さく安堵の息を吐く。

そのあと、あまり不用意な言葉を発することのないよう忠告する  
と、少女はこくりと頷いた。

素直な反応を微笑ましく思うも、一方で初対面かつ凶悪な面の俺  
にろくな警戒心も抱かない彼女の行く末が少し心配になった。

## 第二話〜甘い罠〜

「後は歩きながら話すか。いつまでもこんな森の中にいるもんじゃねえ。」

そう言うと、男は私のお腹に巻きつけていた腕を腿の下に移動させ、予備動作も無く立ち上がった。

その勢いでバランスを崩しそうになった私は、咄嗟に彼の肩に手を置いて事無きを得る。

「大丈夫か？動くから、落ちないようにしっかりと捕まっとけよ。」

「はい。」

きちんと聞いてくる辺り、顔と違ってそれなりに気遣いの出来る人なのだろう。

返事をする、男は軽快な足取りで森を進み出した。

現在の状態を簡単に説明すると、私は折り曲げた彼の腕にちよこんと座らせられており、俗にいう子供抱きのような体勢になっている。

正直、良い大人が子供のごとく抱えられている図というのは恥ずかしくもあつたが、素足で森を歩ける自信は無かったので、黙って彼の好意に甘える事にした。

それにしても、視界がものすごく高い。

おそらくだが、彼の身長は3メートル近いのではないだろうか。

丸太のように太く硬い彼の腕は、座り方さえ定まってしまうえば中々に安定感があった。

歩きながら、ふと何かに気がついたような仕草をした後、男は軽く視線だけをこちらに向け口を開く。

「…そっぴやまだ名乗ってなかつたな。

俺はマーシャルト。マサでいいぞ。」

「マサさん、ですね。」

「あゝ、スマンが敬称は止めてくれ。むず痒い。

…一応、モンスター専門の狩士をやってる。

各地を転々と旅しながら生きてる根無し草だ。」

マサと聞いて、任侠ものの登場人物みたいで、ある意味ピッタリだと思ってしまったのは内緒だ。

狩士というのは初めて聞いたが、要は狩人とかゲーム風に言うならハンターのようなものと判断して間違いないだろう。

それにしても、職業として成り立つほどモンスターがいるとは…。いくらファンタジーに憧れていたからと言って、魔物や魔族がいる世界など希望するんじゃないじゃあ無かったと今更ながら後悔した。

「で、お前さんは？さすがに自分の名前も分かんねえってこたあねえんだろ？」

問われて一瞬偽名を使うかどうか迷ったが、結局本名を名乗ることにした。

相手も言っていないかったし、とりあえず名字は黙っていてもいい

だろう。

「亜美です。」

「ふむ、アミな。ちなみに、ちょっと聞きてえんだが…」

「お前さん、旅の経験は？野宿とかやったことあるか？」

「いえ、無いです。1度も。」

「まあ、見るからにそんな感じだよな。」

「…すみません。」

「別に謝ることちゃんえよ。…しかし、どうすっかなあ。」

そう言つと、彼は思案顔で首を捻つた。

私はそんな彼の顔をじつと眺めながら、次にかけられる言葉を待つ。

……。

……。

……。

「……あゝ、アミ。」

「はい。」

「いや、その。…あまり見ねえでくれると助かるんだが。」

「はい？」

言われた意味が分からずに首を傾げて聞き返すと、彼は立ち止まって呻くような声を発しながら空いている方の手で自分の顔をこし

ごしと擦った。

それを止めると指の隙間からチラリと私の方を見て、その次の瞬間には顔を真反対に逸らしていた。

「…マサ？」

「あゝ。えゝ…と、だな。

なんつーか…、あの、…慣れてねえんだ。

大抵の人間は俺を見つと即行で顔を逸らすからよ。

そうやって長いこと見られてつと、妙に居たたまれねえつーか。その…。」

要約すると『恥ずかしいから、あんまり見ないで』ということだろうか。

よく見ると、彼の耳は朱色に染まっていた。

その敵つい見目に全くもってそぐわない反応を妙に可愛らしく感じて、私は思わずクスクスと笑ってしまった。

急に笑い出した私を不思議に思ったのか、彼は逸らしていた顔を戻して怪訝な顔を見せる。

パツと見、ものすごく不機嫌で今にも誰かを手にかけてそうな禍々しい表情にも見えるが、彼の纏う空気は戸惑いの色が濃い。

私は笑いを止めて深呼吸で息を整えた。

「はーっ。…ごめんなさい、マサ。何でも無いから気にしないで下さい。」

それと、先ほどおっしやられた件ですけど、善処しますね。

ただ…、話を聞く時は相手の顔を見るようにと言われて育ったので、無意識に見過ぎてしまうかもしれません。

だから、その時は遠慮なく注意しちゃって下さいね。」

さすがに本人に向かって可愛いなどと言えるはずもないので、軽く誤魔化してみる。

「……………そうか。」

何となく釈然としないものを感じているような顔をしてはいたが、特に理由を聞かれる事は無かった。

無言で森を歩き出した彼は、しばらくしてふと何かを考えるような仕草を見せた後で、私にある事を聞いて来た。

「なあ、アミよ。お前さん、俺にどうして欲しい。」

「どうというの？」

「そうだな…。どこまで面倒を見て欲しいかってこった。

例えば、どつかの村に着きやもうそれで終いで構わねえとか。

大きめの町までは行って貰いてえとか。

はたまた、住む場所が見つかるまで世話になりてえとか。

後は、故郷が見つかるまで一緒に旅をしてえとか。何かそういう色々だよ。色々。

まあ、俺も金に困ったりはしてねえからよ。言やあその通りにしてやる。

元々あての無い旅だし、乗りかかった船だからな。…で、どうだ？」

「そ、うですね。えっと…、ちょっとすぐには答えが出そうにないです。」

少し考える時間をいただいてもよろしいでしょうか。」

美味しすぎる話には裏があるとはよく言ったものだ。

けれど、会って間もないとは言え、彼がそういった裏のある人間であるようには思えなかった。（顔はともかく）

現状から言って一切頼らないという選択肢は無いが、どこまでと問われるとやはり難しいものがあり、私はその日、一日中思考の海に沈んでいたのだった。

「後は歩きながら話すか。」

そう告げて、少女を抱え立ち上がった。

勢いよく立ちすぎたのか、バランスを崩した少女が俺の肩に手をつく。

注意を促せば、彼女は素直に頷いた。

特に了承も得なかったが、俺に抱えられた状態で移動することに異論は無いようだ。

少女が体勢を立て直したのを確認して、森から1番近い村のある方向へと足を進めた。

途中、ふと彼女の名を聞いていなかった事に気がついたので、話しかけてみる。

先に自分の名を告げると、想像通りというか敬称をつけて呼んできたので止めるように促した。

狩士である事、旅人である事を説明すると、少女は無言でこくこくと頷く。

だが、その表情からは何を考えているか読み取ることができない。



それから彼女の名を尋ねてみると、なぜか少し間を置いてから返事があった。

どうやら彼女の名前はアミというらしい。

これから一緒に旅をするにあたって、確認までに野宿の経験などの有無について聞いてみたのだが、やはり無いようだった。

無駄に丁寧な話し方に、低い身体能力、鈍い反射神経。

おそらく、このアミという少女は人に傳かれる立場にある人間だったのだろう。

そんな彼女が旅続きの生活に耐えられるだろうか。

そこで、軽く思考を上昇させると、すぐ真隣から強い視線を感じた。

……。

……。

……。

何だか知らないが、すごく見られている。

少女のつぶらな瞳がまっすぐに俺を見つめている。

何となく寄る辺ない気分になって、どうにか止めてもらおうとアミに声をかけた。

「あまり見ねえでくれると助かるんだが。」

俺の台詞に対し、何を言っているのか分からないといった風に彼女は首を傾げる。

その眼は未だに俺の顔を捕えたままだ。

歩む足を止めて、羞恥から熱の上がつてきた顔を手で擦る。

指の隙間からチラリとアミを見ると、その真っ直ぐな瞳と視線が合ってしまった慌てて顔を逸らした。

それから訝しげに名を呼んできた彼女に、しどろもどろに言い訳をする。

これが、大の大人が子供相手を取る態度か…。くそっ。

自虐的な気分には陥っていると、すぐ隣からクスクスと音がして俺は逸らしていた顔を戻した。

見れば、アミが口に手を当てて楽しそうに笑っている。

その反応が理解できずに困惑し眉間に皺を寄せると、彼女は笑いを止めて深呼吸をした。

落ち着いて深く息を吐いたところで、楽しげな表情のまま話しかけてくる。

はて、話相手の顔を見ないといけないような躰を受けるなど、一体どこの土地の習慣だろうか。

自分の知識の中の貴族たちは、各々の位によっては正面から見つめる事を不躰だとしていたはずだ。

特に女ともなれば、逆に男と顔を合わせて会話するのははしたない事であるという感覚だった気がするのだが…。

しかし『何でも無い』と、そう言っただけで首をちょこんと傾けながら微笑むアミに、それ以上つっこんで聞くことが出来なかった。

様々な疑問を飲み込んだ末に何とか一言を返し、俺は再び森を歩

き出す。

……………それにしても。

まだ出会って数時間も経っていないのに、なぜ彼女はこうも平気で俺に笑いかけることが出来るのだろう。

屈強な傭兵や狩士、その中でも旧知の仲であるはずの奴らですら、俺の顔を見ながら話しを出来る人間は1人としていなかった。

だと言つのに、まだ子供で、さらに女であるアミが平然としているのが不思議でしようがない。

しかし……………。

人に正面から笑いかけられるというのはこうも心地の良いものだったんだな。

どことなくすぐつたいような…、温かいような…、何とも浮ついた気分がする。

…だが、彼女がいなくなれば、再び誰もかれもに怯えられるだけの日々に戻ってしまうだろう。

では、どうすればいい…。

どうすれば、彼女とより長く一緒にいられる？

どうすれば、アミにずっと隣にいてもらえるんだ？

「なあ、アミよ。お前さん、俺にどうして欲しい。」

自然と口が開いていた。

それだけの台詞で意味が通じるはずもなく、アミは、そのまま言葉返して来る。

例えば…と、これからについていくつか提案していった。

自分でもほぼ無意識の内に、段々と願望を反映する例えになっていったようだが、途中でその事実が気がついて1番告げたかった『ずっと一緒にいないか』という言葉だけは何とか飲み込んだ。

それを言っ、彼女が俺を拒絶するようになったら元も子もない。

こちらの提案に対し、考える時間が欲しいという返しは中々賢明な判断だったと思う。

何ともしっかりした少女だ。同年代でこれだけ落ち着いている者もいまい。

その日、アミは1日中難しい顔をしたまま黙り込んでいた。

俺はそんな彼女の様子を酷く頼りない気持ちで何度も盗み見していた。

### 第三話〜月夜にて〜

結局、その日は答えが出ないまま夜を迎えた。

静かな湖のほとりに2人で腰を下ろす。

目視で直径50メートルほどのサイズのこの湖には精霊が住んでいるらしい。

私には見ることは叶わなかったけれど、その恩恵で常に水がキレイなんだそうだ。

地球よりも大きな月の明るい光が水面をキラキラと照らしていた。

「疲れてねえか？」

「私は抱えられていただけですから。マサこそ腕は大丈夫ですか？」

「この程度でどうこうなるほどヤワじゃねえさ。」

何となく納得して私は軽く頷いた。

彼はその屈強な見た目に相応しい体力を持っているらしい。

背中下げられた大きな2本の斧は、私の体重よりも重そうに見える。

「…そう言えば、この森は随分静かなんですね。」

「俺がいるからな。」

「え？」

「本来、ここは魔の森と呼ばれるモンスターの温床の地だ。

普通の人間が入れば、まず生きては帰れないと言われている。」

「でも、モンスターなんて全然…。」

「奴らも格上の存在に手を出すほど馬鹿じゃねえってこった。

意識して気配を殺さない限り、この森のモンスターは俺の前にや姿を現さねえ。」

「それって…。」

「ああ。隠すような事でも無えから言うが、俺の狩士階級はSだ。

そういうこったから、この森ではなるべく俺から離れんようにしろよ。」

その言葉に対して、私は神妙な顔で頷いた。

私の持っているファンタジー知識から当てはめても、彼が相当に高い階級である事は間違いないだろう。

この人に助けられたのは本当に幸運だったのだと改めて気付かされた。

携帯用の簡易食である干し肉は、薄味のサラミのような味がした。

食べられるだけでも充分ありがたいのに、なぜか彼はものすごく申し訳なさそうな顔で謝りながらそれを渡してきて、私が食べている間も何度も大丈夫かと声をかけてくる。

そこまで気遣われる意味が分からず、私は1人首を捻っていた。

食事が終わって、特に何をするでもなくボーっとなっていた時。

私は半分無意識の状態でポツリと願望を口にしてしまった。

「…お風呂、入りたいなあ。」  
「風呂？」

静かな空間にいたためか、ごく小さな咳きであったにも関わらずしつかりと私の声はあちらの耳に届いてしまったらしい。

何でも無いと首を振ったが、彼は錆色のモツサリとした顎髭を扱いながら思案顔でこう言った。

「どうしてもつつーんなら、出来んことは無いと思うが…。」  
「へ…。」

思っても無い台詞を聞かされて間の抜けた声が出る。

1人ポカンとしていると、彼はのそのそと湖の方へ歩いて行った。何となくその姿が見えなくなる事に不安を覚えて、私は急いでマサの後を追う。

再び視界に入った彼は、湖のすぐ傍に片膝をついているところだった。

直後、地鳴りのような音がおよそ2秒ほど響いたかと思うと、彼のすぐ前方に深さ50センチ、直径1メートルほどの若干いびつな穴がポツカリと口を開いていた。

彼は穴の中をあちこち触って納得したように頷いた次に、湖に近い側面の上部に拳を当てて振り抜き、穴と湖との間に道を開通させる。

そこから湖の水が流れ込み、それが40センチ程度まで達した頃に再び道を埋め直して流れて来る水を塞ぎ止めた。

それから、パンパンと手を叩いて土を払いながら立ち上がると、今度は水面にひとさし指を向ける。

次の瞬間、ボン！と音を立てて水中から火柱が上がった。

「……………えっ？」

あまりの展開の早さについて行けずに、1人唾然としてしまった私を誰が責められるだろう。

完成だと言って満足そうにしている彼に、私は乾いた笑いしか返せなかった。

くくくくくくくくくくくく

ほこほここと身体から湯気を出しながら、私は斧の手入れをしているマサに話しかける。

「聞いてもいいでしょうか。」

「何だ？」

「水から火柱があがったのはマサがやったんですよね？」

「ああ、俺の魔法だ。つつても俺あ火しか使えねえんだが…ま、旅には便利だぞ。」

「それじゃあ、次。穴の中がどこもカチカチだったんですけど、ア  
レは？」

「殴り固めたからだな。掘ったんじゃ無く。」

「そ、そうですか。」



あのたった2秒の間にそんな事を…。

「あのう、こんな事を聞くのは失礼かもしれませんが…。

マサは……………人間、ですよ？」

「いや…。俺は亜人だ。」

「えっ！そんなんですか！？…えっと、何の？」

「竜。」

「えええっ！！」

……………私、亜人つてもっと半人半獣みたいな見た目なのかと思  
ってました。」

「いや、ほとんどの奴らはそうだろう。俺はちょっと特殊だからな。」

「特殊？」

そう聞き返すと、彼は途端に黙り込んでしまった。

何か複雑な事情でもあるのだろうか。

しばらく沈黙が続いた後、マサは軽いため息をついて手に持って  
いた斧を収めた。

そして、道具入れから外套を出して私に手渡しながら言う。

「…もう寝ろ。明日中には森を抜けてえから、早めに起こすぞ。」

「あ、はい。……………あの。」

「どうした？」

「え、その。お恥ずかしい話ながら、私は枕が無いと眠れない質  
です…。」

大変申し訳ないのですが、腕か膝をお貸しいただけないでしょうか。

そう告げた時の彼の呆気にとられた顔は、しばらく忘れられそうにないと思った。

夜。俺は森を進む足を止めて、ある湖のほとりに腰を下ろした。

アミは俺の正面にあった手ごろな大きさの岩に座っている。

疲れていないかと問いかければ、彼女は逆に俺を気遣う言葉を投げかけてきた。

こんな人間らしい扱いを受けたのはいつぶりだろうか。  
浮かれそうになる心を落ち着けながら口を開く。

「この程度でどうこうなるほどヤワじゃねえさ。」

そう返事をすれば、納得したらしい彼女は小さく頷きを返した。  
下手に気を使われすぎても面倒臭いので、その態度に少しホッと  
する。

それから、アミは辺りをゆっくり見回しながら少し思案気な顔で  
随分静かな森だと言った。

どうやら、彼女はここが魔の森だと知らないらしい。

まあ、どうしてここにいるのかすら分からないというのだから、  
それも当然かもしれないが。

安全な森だと勘違いして勝手に動き回ることはないよう、俺は釘  
を刺しておくことにした。

この場所が魔の森であると教えると、アミは小さく目を見開き、次いで怪訝な顔をして小首を傾げる。

これだけでは納得できていないようだ。

モンスターの生存本能について簡単に説明するついでに、自分の狩士階級を教えておいた。

すると、わずかに恐れ of 混じる顔でアミは大きく頷く。

状況を正しく理解できたらしい。

これでこの森にいる間は俺から離れようとはしないだろうが、その恐れの中に自分という存在が含まれていたらと少し不安になった。

~~~~~

いざとなったらモンスターの肉を生で食べる事すら出来る半身が竜である俺は、ろくな食料を持っていなかった。

しかし、目の前の少女はきっと丁寧に調理された食事しか口にした事が無いに違いない。

そんな彼女に簡素な携帯食しか与えられない事に罪悪感を覚えた。文句の1つも零さずに大人しく干し肉を口に運ぶアミに、俺は幾度となく声をかけずにはいられなかった。

食事も終わり、お互い特に話をするでもなく休んでいると、ふと彼女が独り言を呟く。

「…お風呂、入りたいなあ。」

思いもよらない内容に、反射的に聞き返してしまった。  
アミはしまったという顔をして何でもないと首を横に振る。

町の規模がそれなりに大きければ大衆浴場の1つや2つ存在もしているが、小さな村ではまだ湯につかるという発想すら浸透していない所もある。

だが、それ以上にアミの言っている風呂というのは、おそらく貴族たちが所有するような個人単位のものなのだろう。

やはり、彼女は高貴な身の上なのだと言認識しつつ、どうにか願いを叶えてやりたいと考えを巡らせた。

「どうしてもつつーんなら、出来んことは無いと思うが……。」

それを聞いて彼女は気の抜けるような声を出したが、ある方法をおもいついた俺は、そのままアミの返事も聞かずに湖の傍へと移動する。

適当な場所を見つけて片膝をついた時、彼女が姿を見せた。

どうやら後を追ってきたらしい。

その後、時間にして2分にも満たない間に風呂を作ってしまった俺に、アミは目を白黒させていた。

完成だと報告すると、彼女はどこか脱力したように力無く笑った。

~~~~~

武器の手入れをしていると、風呂上がりのアミがポソポソと話しかけて来る。

何かと思えば、俺の使った魔法や作った穴について詳しく聞いたかったようだ。

階級も教えているし、隠す事でもないだろうと正直に答えると、彼女は小さく口を引き攣らせた。

そして、若干目を泳がせた後、再び俺に視線を戻してアミは不安げに問う。

「マサは……人間、ですよ？」

その表情に一瞬そうだと嘘の肯定をしそうになったが、ギルドにも亜人として登録しているだけに隠しておけることでもないだろうとすぐに思い直した。

それに、人間の身でこのような体躯と力を持つなどあり得ない話だ。

まあ、それでも俺が亜人だという事実には彼女が驚くのも無理はない。

一般的な竜の亜人というのは、ドラゴンがそのまま人の形を成したような半竜族が主だ。

人間形態と竜形態に化け変わる竜人族は、数も少ないが何より秘された種族で世間には知られていない。

俺が竜になれるということは、旧知の間柄の人間たちにすら隠している。

彼らは単純に竜族の血が極端に薄い亜人なのだろうという認識でいたはずだ。

そんなことを考えていると、彼女はどこか感心するような口調で

こんなことを言ってきた。

「私、亜人つてもっと半人半獣みたいな見た目なのかと思ってました。」

大昔と違い今は亜人などそれこそどこにでもいるはずだが、アミはまるで見たことが無いような口ぶりをする。

少々訝しく思うも、彼女の生れを思い出して納得した。

人間の貴族の中には、亜人を畜生だ何だと見下す奴も少なくない。そのような狭い世界の中で生活しては、実際に亜人を目にする機会が無かったのだろう。

自分の姿が特殊なのだと言えば、彼女はきょんととして聞き返してきた。

自ら嘘をつく気にもなれず、また真実を話す事もできず、俺はその問いに口を噤んだ。

誤魔化すように就寝を促せば、アミはこちらが聞かれない事を悟ったのか素直に頷きを返してくる。

と、思うと小さく俯いて視線を彷徨させた後、再び小声で話しかけて来た。

「……………あの。」

「どうした？」

いつになく言い辛そうに口を開閉する彼女に、亜人と知って嫌われてしまったのだらうかと邪推し、どこか憂鬱な気分で告げられるであろう言葉を待つ。

だが、次の瞬間。予想の遙か斜め上に行く申し出を受けて俺は自分の耳を疑った。

「大変申し訳ないのですが、腕か膝をお貸しいただけないでしょうか。」

この時の俺は、おそらく人生の中で一番マヌケな面を晒していたに違いない。

アミという少女がいつそ笑えるほど無防備な存在であるという事を思い知らされた夜だった。



### 第三話〜月夜にて〜（後書き）

作中でマサが「2分」という単位を使用している場面がありますが、これは読みやすくするために日本語的表現に直しているだけで、実際に彼がそう言っているわけではありません。

一応、この世界オリジナルの単位が存在し、彼もそれを使っています。

今後も単位や単語等につきまして様々な場面で同様の処置を取らせていただく所存です。

読者の皆様方には何卒ご理解いただきますよう、宜しくお願い申し上げます。

## 第四話　兆候

夢を見た。

中学生の頃に飼っていた犬が死んでしまった時の夢だ。

当時、毎朝の餌やりは私の仕事だった。

いつものようにドッグフードを手に小屋まで行くと、だらりと倒れピクリとも動かない犬の様子が目に飛び込んできた。

死んでしまったのだとすぐに理解した私は、そのまま踵を返し両親に報告に行った。

学校があるからきつとしない間に処分されてしまっただろうかとボンヤリ考えていた。

同時に、とても可愛がっていたのにどうしてこんなに冷静なんだろう、悲しんであげられないんだろう、私は酷い人間なんだろうかとも思ったものだが、それは違った。

両親と共に犬の元へ行き、父がその死体に触れ「死んでいる」と口にした瞬間、私の胸に怒涛のように悲しみが訪れて、止めどなく涙が流れた。

自分でも知らないうちに、私の心は犬の死という辛い現実から目を背けていたらしい。

それが第3者にハッキリと事実を告げられたことによって、認めざるを得なくなった。

そして、閉じ込められた感情が決壊した心から一気に溢れ出したのだ。

この1件で、私は自分の心の脆弱さを知った。

考えるに、あの頃から私は何1つ成長していない。

現に、異世界に飛ばされてしまったというのに私の心は至って平静だ。

思考だけは現状を見据えてああだこうだと小賢しく動くが、反面、その心が異世界という存在に惑う事も、見えようもない未来を悲観する事も、地球に2度と戻れないと嘆く事も無い。

それだけに怖い。

今回、心の奥底に閉じ込められた負の感情群。  
もし、それらが放出された時、私は正気でいられるだろうか。

いつそ、この状態のまま安定した生活を手に入れる事が出来れば、負の感情を表に出すことなく昇華させることができるかもしれない。  
心の一部が凍結されているとは言え、表面上の簡単な感情なら普通に機能している。

喜怒哀楽は失っていない。

逃避から戻ってこなくても何1つ問題は無いのだ。

故に、私はこの先の人生において、現実を認めざるを得ない状況が訪れない事を切に願う。

~~~~~

意識を浮上させスツと目を開くと、ナマハゲも泣いて土下座しそうな恐ろしい顔面が視界に飛び込んできた。

思わず叫び声を上げそうになったが、それがマサだと気が付いた私は咄嗟に両手で口を塞いで事無きを得る。

それから、ゆっくり上半身を起こして額の冷や汗を拭い、息を吐き出した。

野宿の際は座って就寝していると言われ、彼の左膝を借りて眠りについた事を思い出す。

「どうした？悪夢でも見たか？」

私の様子を見て心配したのか、マサが話しかけて来た。

パツと頭に『悪夢ではなく、悪魔を…』などと失礼極まりない返答が浮かんだけれど、それを口に出せるはずもないので私は首を横に振った。

「いえ、大丈夫です。」

「おはようございます、マサ。」

「…ああ。」

当然、正直に『貴方の顔に驚きました』とも言えるはずがないので、適当に誤魔化しておく。

興味が無いのか、気遣いなのか、それとも返す言葉で自分の事について尋ねられるのを恐れているのか、彼は濁した事柄に対しては追及して来ない。

理由が何にせよ、これにはかなり助かっていると思う。

とりあえず湖に顔を洗いに行こうと思いついたところ、マサに呼び止められた。

「これ巻いとけ。少なくとも裸足よりはマシだろう。」

そう言つて渡されたのは、包帯のように細長く裂かれた元は手拭いだった2つの布。

軽くお礼を言つて受け取り、湖で足を綺麗に洗つてからそれらを巻きつけた。

昨夜、入浴後にまたすぐ土にまみれる羽目になった足に眉を顰めた私としては、彼の心遣いに大いに感謝した。

朝食も食べ終わり、出発前に荷物の整理をしているマサに話しかける。

「あの、昨日の話…今いいですか？」

「……………おう。」

返事をしつつも、彼はこちらを一切見ずに作業を続けている。それが、緊張している私には少しありがたかった。

「とりあえず…私、故郷の事は忘れようと思います。

理由は…えっと、どこにあるのか分からないって言うのと、戻らなくても私の家族には支障がないから、です。

だから、どこか平和な国に定住出来たらと思います。

ただ、私はすごく世間知らずなので、いきなり見知らぬ村や町に置いて行かれても生きていける自信が無くて…ですね…。

その…、出来れば生活の目途が立つくらいまで一緒に…って…いい…ですかね？

勿論、旅の最中は自分で出来る事はやりますし、必要な事は覚えます。

それと、私が稼げるようになったら、それまでにかかった費用は全額お返しします。

そういうことで…えーっと、どう、でしょうか。」

私は、嘘にならない範囲で自分の状況を説明しつつ希望を述べた。散々悩んだけれど、この世界の常識を何一つ知らない私は、結局誰かを頼らなければ生きていけないという事になる。

ならば、その相手は彼がいい。どうせ彼がいなければ失っていた命だ。

もし、裏があっても他の誰かよりはきつと諦められる。そう思った。

ただ、口に出すとやはり都合の良いことを言っているなと再認識させられ、断られないかと不安になった私は、自分の声が段々小さくなっていくのを止められなかった。

そんな私の気持ちを知ってか知らずか、彼は微妙に口の端を上げて呟くようにこう告げた。

「……分かった。」

それが何を思っただの表情だったのか私には分からないが、傍目には千人切りを終えた後の戦鬼のような壮絶な笑みに見えた。

「……………己の判断が間違っていなかったと信じたい。」

月も緩やかに下降を始めた真夜中。

時たまグリグリと動く膝の上の温もりに意識を取られて、俺は未だ眠れずにいた。

だからと言って、眠れない事自体に問題は無い。

睡眠など3日に1時間程度も取れば充分に事足りる身だ。

…しかし、慣れない。

今までこれ程近くに、それもこんな風に警戒もされずに誰かが傍に居た事など無かった。



俺はいつになく穏やかな気持ちで顔に笑みを作る。

これから俺は彼女のために何をしてやれる？そんな事を考えながら長い夜を過ごした。

そろそろ夜も明けるだろうという頃になって、アミが急にうなざれだした。

何かに酷く傷ついて嘆いているような、そんな表情をしてポロポロと涙を流す。

慌てて、名前を呼んでみたり泣き濡れる顔を拭いてみたりしたが、彼女は一向に目を覚まさない。

しかし、その反対で、やはり彼女は平気なフリをしていただけだったのかと少しばかり納得している自分もいた。

夢の中でしかその不安を表に出すことが出来ないのならば、今敢えて無理に起こす必要も無いだろう。

涙を流すというのは必ずしも悪いことばかりではないはずだ。

そう判断して、俺は彼女が落ち着くまで優しく側頭を撫で続けた。

~~~~~

目を覚ました途端、アミは青褪めた顔をして口を手で押さえ起き上がった。

その後、深く息を吐きながら腕で顔を拭う彼女に、俺はなるべく静かな声で話しかけた。

「どうした？悪夢でも見たか？」

昨夜の様子から、彼女の夢見が悪かった事は知っている。

話す事で少しでも気晴らしになればと思っただが、アミは困ったような顔で首を横に振ってそれを否定した。

大丈夫だと本人に言われてしまえば、こちらからそれ以上追及するわけにもいかない。

俺は諦めてアミの挨拶に応えた。

起きている時のアミは本当に気丈だ。

見知らぬ場所で、見知った者もないこの状況で、弱音1つ吐かない少女が他にいるだろうか。

少なくとも俺は今までそんな子供には会ったことが無い。

これが彼女元来の性質なのか、それとも環境で形作られたものなのかは分からないが、何とも痛ましく思えた俺は、彼女に気づかないように小さなため息をついた。

ふと、アミが湖を見ながら立ち上がる。

顔でも洗いに行くのだろうか。

俺はそれを呼び止めて、眠れない夜の手慰みに作った細長い布を彼女に渡した。

「これ巻いとけ。少なくとも裸足よりはマシだろう。」

少し言葉が足りなかっただろうか。

最初はきよとんとした様子だったが、アミはすぐに顔を綻ばせて

礼を言ってきた。

…ああ、これだ。この反応だ。

これが他の人間だったら、何を企んでいると訝しんだ目で見られたり、金は無いと怯えられたり、そもそも手を差し出した時点で悲鳴を上げて逃げられたりするものだ。

なのに、彼女は当たり前のように俺に感謝を向けて来る。笑顔をを見せてくれる。

この心地の良い存在を手放したくないと、そう強く思った。

食事も終わり荷物の整理をしていると、1メートルほど先の木の根元に座っているアミが躊躇いがちに話しかけて来る。

「あの、昨日の話…今いいですか？」

そう言われて、己の体に緊張が走るのが分かった。

ついに来たと内心ビクつきながらも、動揺を悟られないように作業を続ける。

アミはどんな結論を出したのだろう。

聞きたいような聞きたくないような、俺の心はそんな矛盾した感情に囚われていた。

他人にこれほど動揺させられたのはいつぶりになるか…。

「とりあえず…私、故郷の事は忘れようと思います。」

思い切り想像の範疇外にあつた言葉が聞こえてきて、俺は俯いたまま目を見開く。

そんな俺に気が付かないまま、アミはつらつらと己の考えを述べていった。

話すうちにどんどん声が弱弱しくなっていく、終わるころには非常に申し訳なさそうな顔をしていた。

自分の出した結論を言い終わったアミは、不安気な様子でこちらを窺っている。

そんな彼女に対して、俺は簡潔に了承の意を返した。

「…分かった。」

本当なら『家族に支障がないとはどういう意味だ』とか、『別に金なんか返さなくて良い』とか、『そんな風に不安そうにせずとも、叶えると言っただろっ』とか、とにかく聞きたい事や言いたい事はそれなりにあつた。

だが、だらしなく上がりそうになる口角を抑えるのに必死で、それを口に出すことは叶わなかった。

彼女の考える生活の目途が立つまでというのが具体的にどこまで

を指すのかは分からないが、少なくとも月単位、長ければ年単位で共に旅をすることになるだろう。

何と言う願ったりかなったりな状況だ。

…とりあえず、その先の別れについて今は考えないようにして、胸の内で喜びを噛みしめた。

実は口角の制御が微妙に出来ておらず、それを見たアミが顔を引きつけていたという事実を知ったのは、それからずっと後の話になる。

## 第五話〜コンタクト〜

昨日までは普通の森にしか見えなかったけれど、モンスターが住んでいるのだと教えられただけで、同じ場所だということにどことなく不気味に感じるようになった。

出て来ないと言われていてもやはり不安は拭えないもので、私は彼に捕まる手に知らずうち力を込めてしまう。

そんな感情を察してくれたのかどうかは知らないが、マサはポンと私の肩を叩いてこう言った。

「アミ、こっからちょっと飛ばすぞ。」

今のペースだと食糧が確実に手に入る町まで保つか微妙だ。」

…その食糧難の原因は間違いなく、いきなり増えた私にあるのだろっ。

だからと言って、『私のせいでごめんなさい』なんて卑屈になつて謝ったりはしないけれど。

そんな思考は建設的じゃあないし、何より彼の親切心に水を差す行為だと思っ。

「舌あ噛まねえように、しっかり口閉じてるよ。」

不穏な言葉に疑問を抱いたのも束の間、彼は風の如くものすごい

スピードで森を駆け出した。

肩より少し上くらいのそう長くは無い私の髪が後方にバツサバツサと流れる。

具体的な速さは分からないが、肌にはぶち当たる風と薄目の先の捕えては消え行く木々の姿から見て、少なくとも時速80キロは出ているような気がした。

行く手を遮る障害物を避けながら走るので、当然のごとく右に左に体が揺れる。

幸い三半規管は強い方なので（その昔、絶叫マシンに連続で20回乗った時もケロリとしていた）酔いこそしなかったが、そんな状態が30分も続くとしがみつくと腕に力が入らなくなってきた。

それがマサにも分かったのか、彼は徐々にスピードを落として最終的に最初と同じ速度で歩き出した。

「スマン、飛ばしすぎたか？大丈夫か？」

「あ、大丈夫です。捕まる手が疲れてしまっただけで、速度に問題は無いです。」

「…そうか。まあ、こんな細っこい腕じゃ無理ねえやな。」

安心しろ、このままあと30分も歩きゃあ森を抜けられるはずだ。

あと30分？昨夜は1日かかりそうな事を言っていたのに…？

私の体感でしかないので実際とは異なるだろうが、時速80キロで30分進んだのなら、その距離は40キロだ。

一般的な歩行速度を時速5キロと仮定した場合、40キロ歩くのに8時間かかる。

さらに、今からの歩行時間30分とトイレ休憩など諸々を挟んだ計1時間をプラスして、全行程にかかるのはおよそ9時間…。

(トイレ事情については私の自尊心が激しく傷ついてしまうので、詳しく聞かないで欲しい。)

なるほど、本来それだけ時間がかかるというのなら昨日の発言がおかしいわけではない。

しかし、9時間を1時間に短縮するとは…、マサと同じ階級の間は全員こんな人外な能力を持っているのだろうか。

そんな事を考えると、この世界を生き抜く自信が少し無くなった。

森を抜けて初めて見る異世界の風景は、何とも荒野然としていた。目の端にところどころ草や木が生えているだけの、あまり生命の息吹を感じない寂しい土地だ。

呆然と地平線を眺めていると、マサがある方向を指さしながら言った。

「あの山に向かって進めば、規模は小せえが村がある。

ちよつとばかり早歩きで行きゃあ、月の出たあたりには到着できるだろう。」

私は彼の指した遙か遠くに見えるなだらかな山を見ながら、こくりと頷きを返した。

~~~~~



村に到着したのは、日が落ちてから3時間ほど経過した頃だった。日本のように街灯は無いが、月の光がとても明るいので視界はそれほど悪くない。

まるで砂漠の中のオアシスのように、村の周囲にだけ緑が広がっていた。

木で作られた簡単な柵に囲まれたその村は、祖母の住んでいた田舎を彷彿とさせる素朴さがあつた。

夜のためか、外に出ている村人は1人もいない。

それをいい事に、私は無遠慮に初めての村を観察した。

至る所に畑があつたり、あちらの世界と似たような家畜が飼われていたり、何ともどかな雰囲気漂う村だ。

少しばかり臭うのが難点だけれど、我慢できないほどでもない。

ポツポツと建てられた家々は、どれもログハウスのような風体をしており、その傍を通ると時折中から笑い声が聞こえた。

窓から漏れる光は淡く柔らかい。おそらくランプのようなものを使っているのだろう。

マサは村の中でも一際大きな家に向かっていているようだった。

扉の前に立つたマサを見て、私はある重大な事実気が付く。

その扉のサイズは目視で横が1メートル、縦が2メートルと20センチくらいだ。

日本でよく目にするそれよりは大きい、ハッキリ言ってマサと比較すると一回り小さい。

つまり、彼ほど高い身長を持つ人間はそうそういないという結論に達する。

扉のサイズから推測するに、高くても2メートル程度、平均は大体180センチで、女性ならもう少し低い175センチと言ったところではないだろうか。

私の身長は166センチで、日本人女性としては高い方だった。

こちらでは低く見られるかもしれないが、それでも140センチ台の女性みたいなものでありえないサイズでは無いだろう。

そう思うと、これまでにない安心感が私を包んだ。

考えに耽っている間に、マサがノックでもしたのか、客人の存在に気が付いた家人が中から声を響かせた。

「はいはい、こんな時間にどなたかな。」

ギイと音をさせて扉から出てきたのは、人のよさそうな壮年の男性だった。

「っひいっひい!!」

男性はマサを一目見た瞬間に、恐怖に顔を歪ませてその色を蒼白に変えた。

そして、彼は叫び声を上げると同時にその場に倒れるようにしりもちをついていた。

昨夜、モンスターの話をしたのは失敗だったかもしれない。  
おかげで、今アミは風で揺れる草木にすら怯えた反応を見せてい

る。

顔には出さないので分かり辛い、何かと俺を掴む手に力がこもる様子から、それを察することが出来た。

俺はその負担を軽くしてやるために、少しでも早く森を抜けてやるうと思、彼女の肩を軽く叩いて言った。

「アミ、こっからちょっと飛ばすぞ。」

今のペースだと食糧が確実に手に入る町まで保つか微妙だ。」

理由については適当だ。

全くの嘘といったわけではないが、アミのような小さな少女が消費する量などたかが知れている。

それに、何日も飲まず食わずでモンスターの討伐にかかったことも幾度かある。

そんな事より彼女の服や靴、その他諸々を早く何とかしてやりた、いという思いの方が強かった。

自然と気持ちも逸る。

かなり抑えて走ってはいたが、俺の首に回されていた彼女の腕が緩んだ事に気が付き速度を落とした。

歩きながらチラリと視線を落とすと、アミがホツとした様子で腕を外し、手を軽く振っているところだった。

こんな短時間で疲れるほど強くしがみついているなければならなかったのなら、問題がないとは言わないと思うが、アミがあまりにあっさりした口調で言うので、それを口に出す事は叶わなかった。

だから、俺は心の内でこっそり、走って移動するのはしばらく控えようと決めた。

30分も歩けば森から出られるだろうと告げると、なぜかアミは急に思案顔になって黙り込んだ。

何を考える事があるのか分からないが、とりあえず俺は風でめちやくちやになった彼女の頭を手櫛で梳いておいた。

俺のゴワゴワとした硬い髪とは全く違って、サラリと柔らかく触り心地が良い。

整え終わった後も少し撫で続けてみたのだが、彼女は自分の思考に浸っていて俺の一連の行動には一切気が付いていないようだった。

…本当にアミは無防備すぎる。

森を抜けた先で、アミはこの地を見て何か思うことがあったのか、遠い目をして地平を眺めていた。

これから向かう方向だと指した山に視線を移して、こくりと頷いた彼女はどこまでも無表情だった。

歩き出して間もなく、外套を貸して欲しいと言われて、俺は彼女に請われるまま袋からブーツを取り出し手渡した。

アミはそれを受け取ると、頭先から足の先まで余す所なくスツポリと全身を覆った。

寒いのかと心配したら、日に焼けるのが嫌だからと返される。

長く旅をしてきたが、そんな事を言い出す人間にはほとんど会ったことが無い。

それとも俺が知らないだけで、貴族の間で肌を焼かない習慣でもあったのだろうか。

彼女の感覚が理解できずに1人首を傾げつつも、アミがそう言うなら気を付けてやらなければとその情報を頭に刻んだ。

~~~~~

結局、当初の予定よりも少し遅く村に到着した。

ちなみに、この村を訪れたのは今日が初めてだ。

不必要に人を恐怖に陥れる事もないだろうと、普段は宿のある町以外には寄らないようにしている。

荒れた土地の中で村の周辺にだけ草木が青々と生い茂っていた。

この国の現国王は民を大事にする事で有名で、どんなに小さな集落にも定期的に王宮魔法師を派遣して大気の清浄化や水源の確保に努め、また、そこで何か問題が発覚すれば騎士や文官の派遣も行われるという至れり尽くせりな制度を作っていた事を思い出す。

この村の井戸にも、おそらく地下水が枯れないような特殊な魔法がかかけられているのだろう。

村を囲う柵は随分とお粗末なものだった。

この辺りにはろくに水源も無いため、人を襲うような大きな生き物は生息していない。

また、野盗の類ももっと実入りの良い土地がいくらでもあるので、わざわざこんな辺境の村まで襲いに来ることは無い。

だから、必要の無い物に労力を割かないという判断は分からない

でもないのだが…。

それでも、夜に見張りの1人もいないというのはあまりにも油断が過ぎるのではないだろうか。

今まで何も起こらなかつたからと、これからもそうであるという保障は無い。

そんな事を思いながら俺は村に足を踏み入れた。

アミは小さな村が珍しいのか、興味深げな様子で視線をキヨロキヨロと忙しく動かしている。

その口がゆるく開いているのが、なかなか微笑ましかった。

初めて彼女の年相応の反応を見た気がする。

俺はこの村の村長が住んでいるであろう家を訪ねた。

一応の目的は今夜の寝床の確保だ。

自分はともかく、最悪彼女だけでも屋根のある場所で寝かせてやりたかった。

ついでに、アミの装備関係やまともな食糧を分けてもらえれば御の字なんだが…。

木でできた扉を壊さないように慎重に叩くと、そう間も置かず応答があつた。

家の中から出てきたのは気の弱そうな白髪交じりの男だ。

俺を見て男は尻からすつ転げたが、まあ、こんな反応はいつもの事で今更驚きもない。

ここから、まともに話を聞いてもらえる状態に持っていくのが毎

回一苦勞なのだ、と俺はウンザリした気持ちで軽く息を吐いた。



## 第六話 処世術

男性の悲鳴を聞きつけたのか、年若い男女と壮年の女性がバタバタと駆けつけてくる。

私の想像通り、彼らは皆、私よりかなり身長が高いようだ。

壮年の男性が村長と仮定して、彼と同じくらいの年齢に見える女性はその奥様、若い男女は2人に面差しが似ていることから息子と娘だろうと推測した。

マサを見て息子は村長と全く同じように悲鳴を上げて腰を抜かし、娘は声を引き攣らせて気絶、奥様は青褪めつつも自分の子らを守るように手を軽く広げて前に出た。

…いくらマサの人相が悪いからと、これはあまりに大げさでは？  
私が彼らの反応に呆れていると、村長が涙を流しながら悲鳴のよ  
うな声で言った。

「いつ、命ばかりは！村の物は何でも差し上げますから！たっ、助けてー！」

家族であろう人達を前にして、何とも情けない姿を晒すものである。

何でも差し上げますなどと軽々しく言って、マサが後ろで倒れている彼の娘を要求したらどうするつもりなのだろう。

マサが村長の言葉に返事をしようとしたので、私は彼の肩を叩い

てそれを止めた。

今、この状態の村長にマサのあの地獄の底から響いてくるかのごとく重低音の声を聞かせれば、ほぼ確実に逆効果になる。

視線を私に移したマサの耳に顔を近づけて、ヒソヒソと提案してみた。

「マサ。私から話してみますから、降ろして貰っていいですか？」  
「……………頼む。」

マサは自分の顔の威力を理解しているのか、案外すんなりと意見を通してくれた。

それから、彼はゆっくりと腰を屈め私を床に降ろす。

地に降りた私は、マサと村長の視界の間に立つことで、村長の意識を私に向けさせた。

そこでようやく私の存在を認めたとようで、村長は戸惑いの表情を浮かべる。

そんな彼に微笑みかけながら、子供に言い聞かせるような穏やかな声で話しかけた。

「私たちにあなた方を害する意思はありません。

まずは落ち着いて話を聞いていただけませんか？」

「…え……………あ、お、お嬢さん…は？」

「私はアミ。つい先日ですが、そちらの彼…えっと、マーシャルトさんに命の危機を救って貰いまして、その流れで今は一緒に旅をさせていただいております。」

この村には一夜の宿をお願いしたく、立ち寄った次第です。」

「……………や……………ど？」

「はい。きちんとした寢床が無くても構いません。  
どこか、屋根のある場所をお貸しいただけないでしょうか？」

私の言葉に返事したのは目の前の彼では無く、後方にいた奥様だった。

「それは構いませんけれど…。」  
「お前！？…っ！」

驚いて振り向いた村長に、彼女は冷ややかな視線を向けて口を噤ませた。

そして、打って変わって優しげな表情を浮かべた奥様は私に近づいて言う。

「ところで、お嬢さん…。その恰好は？靴はどうしたの？」

「…あの、彼に保護される前に、今着ている服以外は全て失ってしまいました。」

保護されてからは、こちらが初めての村になりますから、まだその…。」

あまり詳しく事情を聞かれないように、視線を落とし『辛すぎて思いついたくもない』というような悲痛な表情を浮かべるよう心がけながら、弱弱しく言った。

ついでに、両手を震わせながら握り込むという動作も忘れていない。

…私の知り合いには絶対に見せられない演技だ。まあ、もうどこにもいないわけだけれど。

少しあざといかなとは思うが、下手に事情を話し過ぎると私の心が決壊するきっかけになってしまいかもしれないし、目の前に村がありながら野宿というのも佻しい。

「あらあら、まあまあ。それは大変だったでしょう。」

奥様は同情的な視線を向けて頭を撫でて来る。

私は彼女に大人しく撫でられながら、『かなり適当な説明しかしていないというのに、どう見ても怪しい2人組を簡単に信用してしまつとは危うい人だ』と思った。

しかし、見方を変えれば度胸があつて懐が広い、とても素敵な人でもある。

未だ無意味に床を温めつつ、阿呆みたいに口を開いて私と奥様のやり取りを見ている村長には、少々勿体ない気がした。

その後、彼女に誘われるまま、村長宅で夕食をごちそうになった。内容は、村で作られたと予想される見慣れない色形をした野菜や鶏肉と思わしきものが入ったやたら薄い塩味の具沢山スープに、手作り感満載の少し固めのパン。

マサの食べ方を観察した限りでは、見慣れない作法があるわけでは無いようだったので安心して口を付けることが出来た。

ところで、食器類が全て木製だったけれど、金属や陶器はそこまで普及していないのだろうか？

それとも、日本にも文明から隔絶されたような田舎があるように、ここもそうなのだろうか。

何となく後者のように思えた。

ちなみに、この時相手をしてくれたのは奥様だけで、村長もその子供たちもそそくさと自室にこもっていた。

せめて、息子くらい母を守るために見張りとして残る程度の気概はないのかと、微妙な気分になった。

そして夕食後、私とマサは別々の客室に通された。

：なぜか、奥様はやたらと私に良くしてくれる。

体を拭いたいだろうと水を用意してくれたり、娘さんのお下がりの服だの靴だのをいくつかくれたり、彼女が愛用していた木の櫛や手鏡をくれたり、裁縫セットも分けてもらった。

本当に至れり尽くせりで、逆に申し訳なく思ってしまったのは日本人の性かもしれない。

ついでに、生理時の処置の仕方を聞いておいたのだが、途端に頬に手を当てて『あらあら』と言いつつ慈しむような眼差しを向けられたのは何だったのだろうか。

花びらの入った匂い袋の良い香りに包まれて、私は久方ぶりのベッドでゆっくりと横になった。

男の家族が悲鳴を聞いて駆けつけてきた。

とは言え、結局二次的・三次的に被害が広がっただけに終わったが  
…。

俺にとっては見慣れた光景だが、そうでなければ充分異常に映るはずだ。

アミはどうかだろうかと思っただけ動かし視線をやると、彼女は眉を八の字にさせて困ったような表情をしていた。

おそろくだが、状況が呑み込めなくて困惑しているのだろう。

彼女の為にも早く収束させなくてはと考えていると、足元に転がっている男が余計な事を口走った。

「いつ、命ばかりは！村の物は何でも差し上げますから！たっ、助けて！！」

っ止めてくれ。

誰がいつそんな事を望んだと言うのだ。

アミの俺に対する心象が悪くなったらどうしてくれる。

このような言われ方は日常茶飯事だと言うのに、たったそれだけの理由で俺はいつになく不愉快な気分になった。

眉間に皺が寄りそうになるのを堪えて、とにかく男を黙らせようと口を開く。

だが、言葉を発する前に、アミに肩を叩かれ止められた。

彼女が俺を見る目はいつものようにまっすぐだ。

杞憂で済んで良かったと安堵していると、アミは俺の耳に顔を寄せた。

ぎょっとして固まる俺に、彼女は小声で自分が男と話す提案し

てくる。

怯えた人間は何をするか分からないという点では彼女が傷つけられないか些か心配ではあったが、確かに、この状況を作った原因である俺よりは、彼らから見ても無害そうな少女から話しかけられた方が遥かに早く片が付くに違いない。

そう判断した俺はその申し出を受けて、彼女をゆっくりと床に降りした。

彼女の存在を認識した男は、それまでの態度を変化させ、戸惑いの色を濃く見せる。

一瞬で話を聞いてもらえそうな情勢になった事に何となく理不尽な思いに捕らわれないでも無かったが、本当に今更だと1つ息を吐いて諦めた。

それにしても、アミの話しぶりはとても少女のものとは思えない。これが貴族の子供というものなのか？

きちんと告げてもないのに、この家を訪ねた目的も正確に理解しているようだ。

旅をしたことは無いと言っていたが、では、その判断材料はどこから来たものなのだろうか。

しかし、これだけ立派な子供がいなくなって支障が無い家族とやらは一体…。

後から後から湧いてくる疑問について考えている間に、アミは男ではなく先ほどまで後方にいた白髪交じりの女と話をしていた。



「保護されてからは、こちらが初めての村になりますから、まだその…。」

背後にいたので表情は分からないが、少し俯き加減で震える両手を握り込みながらそう告げるアミは酷く痛々し…。

…待て。ちよっと、待て。

これは誰だ？

昨日、出会ったばかりの俺が言うのも何だが、こんな彼女は知らない。

眠りながら涙を流していた時ともまた違う、今にも壊れてしまいそうな儂げなアミの様子に、俺は驚きを隠せなかった。

数分も話していない相手にこつも無力な姿を晒すとは…。

女の態度に自らの母親でも重ねたのだろうか。

それとも、やはり俺では彼女の心の拠り所には成り得ないと、そういう事なのだろうか。

女に頭を撫でられながら安心しきったような顔を見せるアミを、俺は複雑な気持ちで眺めていた。

それから間もなく、アミの説得のおかげですんなりと客室を提供してもらえる事になった。

夕食をふるまわれたのだが、アミは目の前に置かれた食事を見て、少しだけ戸惑うような様子を見せる。

彼女の故郷では見慣れない食べ物だったりするのだろうか。それとも、普段口にしていないものと比べ、あまりに質素で驚いたのかもしれない。

俺が食べ始めたのを見て、彼女は恐る恐るといった風にスープを口に含み、一瞬、眉を下げて残念そうな顔をした。

…やはり舌が肥えているのだな。

女に気を使ったのか、彼女はすぐに笑顔を浮かべて美味しいと返していたが…。

俺はそれを、何とも子供らしくない気遣いだと思った。

別々の部屋に案内された時、気の弱っているアミを1人にして大丈夫かと少しばかり不安を覚えた。

しかし、すぐに『どうせ俺がいたところで彼女が弱音を吐ける訳では無い』と自嘲した。

まあ、この家の者が彼女を害することも無いだろう。

部屋に入る前に、『明日は村人が起き出すよりも前に出発したい』と告げると、アミは真面目な顔で『それがいいでしょうね』と深く頷いた。

細かく話す前に納得されてしまったことに軽く落ち込んだが、ここを訪ねた際の家族の反応を覚えていればそれも仕方がないのだろう。

鬱屈とした感情を振り切るように、俺はこの日さっさと就寝した。

翌朝、アミは見覚えのない簡素な茶色いワンピース姿で俺の前に姿を現した。

どうやら、昨夜はこの家の女に色々融通してもらったらしい。

容姿が派手でない分、こういった服装の方が似合うなと思った事は胸の内に留めておいた。

服や靴は俺が預かり、小物等に関しては彼女がいつでも使えるよう小さめの皮袋を渡して自分で持つように勧めた。

その際、なぜか『マサ、もしかして女慣れしてます？』などと俺に限って在り得ない事を聞かれる。

きっぱりと否定はしておいたが、アミの思考回路は全くワケが分からない。

見送りに起きてきた女に大量の野菜を持たされつつ、2人で村を去った。

靴を貰ったことと荷物が増えたことから、アミは俺の隣を自分の脚で歩いている。

それを何となく残念に思いながら、彼女に合わせてのんびりと歩を進めるのだった。

## 第七話〜旧交〜

マサと旅をするようになってから半月が経過した。

今では人目の無い移動時は彼に抱えられることがすっかり定着している。

そうなった理由は色々あるが、簡単に言うなら私が1人で歩くことに限界を感じたからだ。

元々、特にスポーツや運動をしていたわけでも無い。

履きなれない靴で整備もされていない道を歩けば、半日も経たないうちに靴擦れや筋肉痛を起こして、移動速度は鈍り休憩回数が増えていった。

だから、旅の効率的な意味でもお互いの精神的な意味でも、この形が1番いいだろうという事になったのだ。

それはそうと、彼と旅を続ける間に1つ分かったことがある。

それは、マサがどこまでも不憫な人であるということだ。

道中、村で宿を頼もうと思っても、扉も窓も閉め切って居留守を使われたり、村中がパニックになって話しを聞いてもらうどころじやなくなったり、中には襲いかかって来られたりしたこともあった。結局、泊めてもらうどころか話しを聞いてくれる人も滅多にいないというのが現状だ。

1度、私が先に交渉して了承を得た後にマサを連れていくという方法を取ったら、やっぱり無理だと言って固く扉を閉ざされた事が

あつて、それ以来、彼は『アミ1人で泊つて来い』と村に入らなくなった。

さすがに、1人で寢床を確保するのも気が引けるので、何か事情が無い限りは彼に付き合つて野宿をしている。

境遇にそぐわない彼の穏やかな性質が、なぜか私にはもどかしく思えた。

~~~~~

さて、私たちは現在、ある大きな町に来ている。

深い堀と石造りの高い堀に囲まれた、草原の中に佇む町だ。

ぐるりと回つた反対側には、王都まで続く石畳の道があるらしい。

検問等は無いが入町料があるとのこと、入り口でマサが衛兵らしき年若い男にお金を渡していた。

男は傍目に分かりやすいほどプルプルにふるえていて、上手くお金を受け取れず落としてしまい、悲鳴を上げ、泣いて謝りながらそれを拾っていた。

周囲の人間はこぞつて男に同情の眼差しを向けていたが、この場合、真に可哀相なのは男なのかマサなのか…。

町の中に入って最初に目に飛び込んできたのは、道沿いにずらっ

と連なる露天商だった。

それぞれ、地面に薄い絨毯を引き、その上に商品を並べて声高らかに口上を述べている。

人々が多く行き交い、中には例の半人半獣な亜人の姿も見ることが出来た。

背丈は一般的な人間と変わらないが、見た目はほとんど獣がそのまま2足歩行を始めたような者ばかりで、確かにマサは特殊な部類であるのだろうと理解した。

ちなみに、この町に来た目的はマサがモンスター討伐の依頼の達成報告と剥ぎ取った素材の換金をするためらしい。

何となくゲーム等でお馴染みの冒険者と呼ばれる者が集うギルドを思い浮かべたが、さすがに全くそのままの施設という事は無いだろう。

まずは宿の確保ということで、宿泊施設が軒を連ねる区画へと続く石畳の大通りを2人並んで歩いた。

周囲にはセメントで作られたような、薄い灰色の角ばった箱型の家々が建ち並んでいる。

それにしても…、モーセの十戒もかくやという人の波の割れっぷりである。

割れた波の影から時折聞こえてくる、彼への悪意交じりの囁きが妙に悔しかった。

どこに行ってもこんな扱いじゃあ、彼が根無し草でいるのも当然じゃないか。

マサの馴染みだという比較的小さな宿屋に入ると、カランとベルが鳴った。

扉のすぐ右側に木でできたカウンターがあり、その向こうに2メートル程の身長と厳つい体躯を持つ偏屈そうな年の頃は60程に見える丸坊主の男がいた。

男は目を瞑り、踏ん反り返るような姿勢で椅子に座っている。

だが、ベルの音に反応してこちらに視線を向けると、途端に立ち上がって腰に下げていたマチェット（山刀）を抜き、振り回しながらこう叫んだ。

「テメエ討ち入りか！ワシの宿に手え出そつたあ良い度胸じゃあ！」

マサはそれをあっさりと左手の人差し指と中指で挟んで受け止める。

まるで漫画のような技巧に感激した私は心の中で拍手を送っていた。

「落ちつけ、カウガン。俺だ。」

「あん？…おう、何だマサじゃねえか！」

相変わらず凶悪な面してんなあ！ガハハ！」

カウガンと呼ばれた男は襲いかかった事を悪びれもせず、マサの腕をバシバシと叩きながら豪快に笑った。

マサも全く気にしていない様子で話を進める。

「そんなことより、部屋を2つ頼む。」

「…えつ。いいですよ、マサ。わざわざ2つも取らなくて。」

反射的に否定すると、彼は首を傾げて私を見て来た。

マサにつられる様に私を見たカウガンは、眉間に皺を寄せて渋い顔をする。

「おおいおい…。マサ、何だこの女は。どっから攫って来やがった。」

「…人聞きの悪い。迷子を保護しただけだ。」

それよりアミ。本当に俺と同室で大丈夫なのか？

「私1人じゃ何かあった時に対処できないし、必要な物がある度に部屋を訪ねないといけなくなるし、何よりお金が勿体ないでしょう？」

「別に金の心配なんか…。」

「おおいおいおい！マサと顔を合わせて会話する女だとお！？前代未聞だな！明日の天気は槍か！？」

会話を遮られたせいか、言われように気を悪くしたのか、マサは鬱陶しそうな表情をして深くため息を吐いたのだった。



最初の村を発って、半日としない内にアミは足を痛めたようだった。

想像以上のか弱さだ。

こんな身体で旅を続けて本当に大丈夫なのかと心配になる。  
だと言つのに、それを押して必死に歩こうとする彼女の健気さには心を打たれた。

まあ、とてもじゃないが見ていられなかったので、翌日からは有無を言わず抱え上げたのだが…。

嫌がられはしなかったものの、アミは『ご迷惑お掛けして申し訳ありません。』と言って頂垂れてしまった。

別に迷惑だなどと思った事も無いのだが、それを俺が口にするとうんざりそうである。『嘘臭くなりそうである。』

旅を続ける半月の間に、いくつかの村を訪ねた。

…が、結果はどれも散々だった。

半ば予想は出来ていたとは言え、それでアミまで割を食う羽目になつてしまうのが心苦しい。

1人で泊つて来いと言つても、逆に気を使われて野宿に付き添われる始末だ。

情けない。

~~~~~

とりあえず、依頼の期限が近いという事で、俺たちはギルドの支部がある町までやって来た。

ここは北の国の都と河でつながっており、それを伝って盛んに交

易が行われているので様々な物資や人種が集っている。

せっかくだから、アミに何か買ってやればいいのだが…、彼女の性格的に遠慮されそうだ。

どうせ俺1人じゃ溜まった金を使う場所など無いのだから、色々ねだってくれて構わないんだがな。

アミはあまり露店の商品には興味が無いのか、町の風景を観察することに一生懸命のようだった。

ちなみに、交易の盛んなこの町からは、王都へ向かう魔獣車の定期便が出ている。

アミにはまだ言っていないが、この町を出たら次はそこへ向かうつもりだ。

この国の王都は現王の意向で大陸中の物資が集められている大交易都市、かつ、難攻不落と名高い城壁に守られている大城塞都市だ。その分、物価も高く、定住しようと思えば様々な審査をクリアしなければならぬが、治安も良いし条件としては悪くない。

そもそも、身分のある身であった彼女が少しでも不自由なく暮らすには田舎よりも都会の方が都合が良いはずだ。

何より、いずれ別れなければならぬのなら、彼女には安全でいつでも会える場所にいて欲しい…。

ギルドに行く前に不要な荷物を置いて行こうと、俺は知り合いの宿へ向かった。

普段は人でごった返している大通りだが、俺が歩けばいつもあつという間に道がひらかれる。

それはどんな場所でも、そこにどれだけ人がいようと同じだ。

俺にとっては日常です。に何も思う所は無いが、隣を歩くアミはかなり居心地が悪そうにしていた。

とは言え、こればかりは俺がどう頑張ろうと変える事が出来ない現象だ。

これが原因で『もう一緒に旅は出来ない』等言われでもしたらと考えると、恐ろしくて身震いがしてくる。

昔馴染みのカウガンの宿に入ると、初っ端から手厚い歓迎を受けた。

昔から、このオヤジはしょっちゅう寝ぼけちゃあ俺に襲いかかって来る。

別に、実際怪我をした事も無いし怒ったりはしないが、そもそも営業中に居眠りをするのはどうなんだと思わなくもない。

ちなみに、カウガンは俺が出会うよりも以前、かなり名の売れた狩士だったそうだ。

気立ての良い美人の嫁さんを貰ったことがきっかけで引退し、今の宿を始めたらしい。

ハッキリ言って、ここが潰れないのは全て嫁のナーエさんのお陰だろう。

幾度も利用しているが、俺はカウガンが暇そうに受付をしているか、食堂で客と飲んだくれてるか、外で誰かと楽しそうに喧嘩をしているか、ナーエさんに怒られて土下座しているか、そのあと落ち込んで部屋の隅で小さくなっているかという姿しか見た事が無い。

離婚されないのが本当に不思議だ。

この男のどこが良くてナーエさんは結婚に踏み切ったのだろうか。確かに、案外世話好きで俺のような男を平気で受け止める器のデカさはあるかもしれない。

しかし、それを補って余りあるセコイ悪行？の数々を知っている俺としては非常に理解に苦しむ。

ともかく、昔から反省という言葉が右から左なカウガンに、今さら襲って来た事をどうこう言つつもりも無いので、俺は端的に目的を告げた。

だが、俺の言葉に応えたのは、カウガンではなくアミだった。

…『わざわざ』とはどういう意味だ？

アミの真意が分からずに無意識に首を捻る。

彼女の方に目を移すと、俺の視線を追ってカウガンも顔をそちらに向けた。

そして、アミの存在を確認した瞬間、カウガンは訝しがるような表情で彼女をジロジロと観察した後、とんでもない発言をした。

事もあるうちにこのオヤジ、俺が彼女を攫ったなどとのたまったのだ。

カウガンの場合、7割がた本気で言っているのだから余計腹立たしい。

しかし、今はこいつよりもアミだ。適当に流して、俺は彼女に話しかける。

「本当に俺と同室で大丈夫なのか？」

僅かな期待を入り混じらせた俺の問いは、思った以上に合理的な思考で返された。

それにしても、お金が勿体ないとはまるで貴族らしくない台詞だな。

そもそも、宿代程度を節約しなければならぬほど稼ぎが少ないと思われているのか、俺は？

…まあ、どちらかと言えば遠慮しているという部分が大きいのだろう。

そんな考えは不要だと伝えるために口を開いたのだが、その途中でカウガンに邪魔された。

いい年をした客商売を営む男が空気のひとつも読めないのか、と呆れて思わずため息が漏れたのは仕方のない事だったろう。

## 第八話〜ギルド〜

マサの知り合いの宿屋は厳つい主人と品の良い奥さんが『ガンちゃん』『ナツちゃん』と呼び合うイチャラブ空間だった。

ちよつと待てそのこの60代と思わなくもなかったが、その年齢まで買っているのだったらもういつそ讚えるべきなのかもしれない。

部屋は古びた外観と違い綺麗に整えられていて、淡い色のカーテンとテーブルに飾られた1輪の楚々とした花が何とも優しく落ち着ける雰囲気醸し出していた。

マサの纏う空気とは合わないようで、思い切り不協和音を奏でていたけれども…まあ、それは気にするまい。

~~~~~

マサに連れられて、私はギルドと呼ばれる施設に来た。

3階建てのコの字型をしたレンガ造りの建物で、大きく開かれた入口の傍に施設内部の案内板が設置されていた。

中に入ると、中央をカウンターで仕切った外側と内側の2空間に分けられており、忙しなく動き回る職員や順番待ちで混雑する利用者たちの様子はどことなく元の世界の役所を彷彿とさせる。

「あれ？マサ、報告と換金なら方向が違いますよ。」

「いや、先にアミのギルド登録を済まそうと思ってな。」

「ギルド登録…ですか？」

「ああ。仕事を受けるかどうかは別として、身分証のひとつもねえと他国に入れんからな。」

「要は、登録用紙の控えか何かが身分証の変わりになるという事だろうか？」

「登録自体に身分を証明するものは必要ないのですか？」

「あん？何だ、アミ。知らねえのか？」

「お抱えの魔法師や学者が、ギルド専用の技術を今までに幾つも開発して来たのはさすがに知ってるよな？」

「俺も詳しくはねえが、その中に一滴の血で個人を判別する方法みたいなのがあつてだな…。」

「ああ、成程。それなら確かに身分証は必要無いかもしれませんが、確実に個人を特定できる以上、登録後は名を偽る事も出来なければ、軌跡も容易に調べられる。」

「情報の管理体制にもよるけれど、2重に登録されることも防げるし、犯罪の抑止力にも繋がるでしょうね。」

「っお、おお。そうだな………？」

「ちなみに、判別するためにかかる時間はどれくらいになるのでしょうか。」

「あゝ、…大体5分くらいだったか。」

「…早い。これで正確性が低いなんてオチさえ無ければ、元の世界のDNA鑑定よりも優秀かもしれない。」

「これも魔法の成せる技なのだろうか？それとも全く未知の科学技



術？あるいはその両方？

文明の程度はそう高くなさそうに見えたけれど、実は中々に侮れない世界のようなだ。

「おっと、何とか言ってるうちに目的地だぞ。アミ、あそこが新規登録専用の受付窓口だ。」

俺はここで待ってるから、登録用紙をもらって来るといい。」

受付の方に目をやると、気弱そうな三十路男性が絶望的な表情でこちらをチラチラと見ていた。

なるほど、これ以上マサが近づいたらショック死でもしそうな気配だ。

1人で行っても多少ビクつかれたが、問題なく用紙を貰えたのですぐにマサの元へ戻った。

この用紙、正式には『組合契約労働員登録書兼誓約書』という名前らしい。

灰色で少々目の粗い紙だが、この世界ではこれが普通なのだろう。羊皮紙じゃないだけマシだ。

前書きにギルドについての説明書きがあったので、飛ばさずに読んでみた。

『商人組合、通称ギルド。』

複数の有力商人による情報交換の場として発足される。

その後、急激な成長を遂げ各国に支部を置くようになったギルドは、その機能を多岐に渡り展開させて行き、現在では銀行・郵便・

新聞発行・職業斡旋・物資斡旋・有益資材の買取・新技術の研究開発・不毛地域の開拓 e t c . をその一手に担う様になった。

ギルドの職業斡旋所にて労働員登録した際に発行されるドッグタグは、大陸全土で通用する身分証となるため、一般の商人はもちろん多くの旅人たちに重宝されている。』

…うん。どうやら、この大陸は商人に支配されているらしい。

ギルド専用の技術とやらも多くあるようだし、この組織にかかれは国の1つや2つは容易に潰せそうだ。

登録用紙と一緒に渡されたもう1枚の用紙には契約事項や注意事項が書かれていた。

依頼を受ける予定の無い今は関係のない項目ばかりなので、軽く目を通して終わる。

ふむとひとつ頷いて、使い慣れない羽ペンにインクを含ませ空欄を埋めていった。

ぎこちなくも順調にペンを進めていたのだが、ある項目に辿り着き私はピタリと手を止めた。

「どうした？分からないところでもあったか？」

「いや…。あの、マサ。今更な質問をしてもいいですか。」

「ん？何だ？」

「マサは私のことをいくつくらいだと思ってます？」

子供に見える相手に不埒な真似はしないだろうと、敢えてマサの勘違いを訂正をして来なかったが、彼がそうだった輩では無いと理解した今、あからさまなソレ扱いは成人した女として少し堪える。だから、これを機に実年齢を教えておこうと思ったのだけれど…。

「んん？そうだな、13くらいに見えるが、声質や考え方から判断してもっと上の15くらいか？」

まさかの中学生扱いだったことに愕然とした。

40過ぎ（おそらく）の男からすれば、高校生くらいの女は子供にしか見えないのだろう、などと考えていた過去の私を張り倒したい。

それから、私は自分でもどこから出しているのかと不思議に思うほど低い声で彼の名を呼んだ。

「……………マサ。」

「お、おう。」

マサは私から発せられる不穏な空気を感じ取ったのか、微妙に動揺を見せる。

そんな彼に黒い笑みを浮かべながら、私はゆっくりと口を開いた。

結局、アミの言う通り2人部屋を1室借りた。

カウガンにカギを渡されて、俺はアミと部屋へ向かう。

その途中でナーエさんに会ったのだが、目があった瞬間に驚いて飛び上がられてしまった。

まとめられた亜麻色の髪には以前よりも少しだけ白髪が増えてはいたが、相変わらずカウガンより10も年上には見えない若々しさだ。

床に散らばったりネン類を拾って渡すと、彼女に苦笑いで謝られたので首を横に振る。

「うん？マサ坊、隣りにいるお嬢さんはどなた？」

「ああ。この子はアミと言って、ある事情から一緒に旅をしている。」

「…あの、初めまして。アミと申します。いつもマサにはお世話になっております。」

スツと丁寧にお辞儀をしたアミに目を白黒させた後、彼女は感心したように頷きながら言った。

「へええ。何とも礼儀正しい娘さんだこと。アミちゃん、私はナエ。」

主人のカウガンと一緒にこの宿を経営しているの。よろしくね。」

互いに挨拶を交わし世間話に入ろうとしたところで、カウガンに呼ばれてナエさんは慌ただしく駆けて行った。

~~~~~

ギルドの支部は各地に存在しているが、町の規模によって運営される内容が異なる。

1 番小規模な支部では、一部機能を除いた郵便と職業幹旋、一般的なものに限定された物資幹旋と資材の買取といった事しかやっていない。

この町のギルドはかなり大きい方で、研究と開拓を除く全ての施設が揃っていたはずだ。

大体、どのギルドも内部の作りは同じになっているので、慣れている人間は迷うことがない。

この町で言うなら、1階が組合員以外の一般市民も利用できる銀行と郵便施設。

2階が商人が多く利用する物資幹旋と新聞発行施設。

3階が健康な労働者たちが集う職業幹旋と資材の買取施設。

研究や開拓のある支部なら組合員でも限られた人間のみが入れる4階が存在するだろう。

ついでに、中庭は緑や噴水等が設置された憩いの場になっており、親子連れの利用度が高い。

また、各施設の窓口は内容別に利用者数や場所を考慮し分けられていて、中々機能的だ。

初めてギルドを訪れたというアミは、なぜか目を細め懐かしむような眼をしていた。

それが過去を想う老年の人間の姿を彷彿とさせて、これが少女のする表情だろうかと疑問に思った。

職業幹旋施設は新規労働員・依頼人登録、タグ更新・再発行、依

頼受付、仕事受注、依頼報告・階級確認、報酬、定期本人確認、ト  
ラブル相談など多くの窓口に分割されている。

比較的、混雑の少ない新規登録窓口は自然と1番奥に設置される  
ようになっていた。

アミの質問に答えながら歩いていたのだが、そこでまたも彼女は  
俺を驚かせた。

ただ『血で判別する方法がある』という情報を与えただけで、彼  
女はギルド登録に自己証明が不要である理由を簡単に導き出したの  
だ。

しかも、それ以上に俺が考えつきもしない利点まで上げてみせた。  
流れて肯定はしたものの、どうすればそのような結論に至るのか、  
学の無い俺には全く理解不能だ。

…もしや、アミは貴族じゃあなくて、どこか優秀な研究員の子供  
だったのだろうか。

功績のある研究系魔法師や学者はそれこそ稼ぎも大したもので、  
貴族並みの生活をしている者も多いと聞く。

一般的な知識の少なさに相反する子供らしからぬ理解力の高さ  
と落ち着きも、そう考えれば納得できる。

そして、研究に人生を捧げているような両親なのだとしたら、己  
の子供を顧みない性格であった可能性も高く、これも彼女の話と辻  
褻が合う。

だとすれば、アミが知らぬ間に魔の森の上空を落下していたのは、  
研究成果を盗もうとした輩や功績を妬む輩の仕業か、あるいは、実  
の両親に何らかの実験体として扱われた結果かもしれない。

何にせよろくな理由じゃあない。

ならば、彼女がそこに到るまでの記憶を持っていなかったのは、

逆に幸運だったのではと思えた。

登録用紙を貰い、小走りで戻って来たアミを机のある場所へ促す。背の小さなアミは椅子に座る際、少々手こずっていた。

何とか無事に腰を下ろすと、彼女は満足そうにフツと息をつく。

微笑ましい限りだ。

しかし、書類に目を通し始めた彼女は、先ほどまでと打って変わって大人びた雰囲気醸し出す。

アミのそういった姿に、俺はいつも言い知れぬ違和感を覚えるのだが、その原因には未だ至らない。

文章を読み終わったアミは、納得したようにひとつ頷いてからペンを取った。

その後、淀みなく書き進めていた手を唐突に止めた彼女を不思議に思って声をかけると、良く分からない質問をされた。

「マサは私のことをいくつくらいだと思ってます？」

なぜ今聞く?と思ったが、俺は素直にその問いに答えた。

すると、彼女はまるで衝撃的な事実でも聞いたかのようにビシリと固まり、直後、感じた事のない種類の威圧感を発しながら俺の名を呼んだ。



その声があまりにいつもの彼女のものとかけ離れていて、情けなくも気<sup>け</sup>圧<sup>あ</sup>されてしまった俺は動揺して返事を上擦らせた。

一体、何が起こっているのだろうか…。

小さな身体からは想像もつかない程の迫力を携えたアミに、知らず冷や汗が流れる。

そして、彼女は壮絶な笑みを浮かべながら、その桜色の唇をゆっくりと動かした。

## 第九話　騒動

「ご期待に沿えず申し訳ないですけど、私の年齢は23ですよ。」  
「へえ、にじゆ……………って、ハア!? にっ、23!?!  
バカな!俺と5つしか違わないってのか!?!」

「い……………っえ?ちよっ、待つ、え?  
5つって、あの5つよね?えっと、しい、ごお……………っ28い!?!  
嘘でしょ!いくらなんでも老けすぎ!……………っ、あつ。」

自分の失言に気が付いて慌てて口を両手で覆う。

チラリとマサを見ると、彼は怪訝な顔をしてこちらを指さした状態  
で固まっていた。

どうにも動く様子がないので、椅子の上に立ち、手をいっぱい  
伸ばして彼の目の前で軽く振ってみる。

その途端、マサは「うわっ!」という声と共に、背後の椅子を引  
き倒しながら大きく1歩後ずさった。

戦々恐々と遠目からこちらを窺っていた人間たちは、慌てて机の  
下に隠れたり悲鳴を上げて逃げ出したりと、いつものように失礼な  
態度を取っている。

もっとも、今の彼にはそんな周囲の様子など全く目に入っていな  
いようだが…。

「…マサ?」

「い、いや!違っ!…!」

前後に全く繋がっていない意味不明な言葉を叫びながら、彼は焦ったように何度も頭を振った。

「マサ、ちょっと落ち着いて。違うつて、一体何の話？」

「えっ、いやその、……………何でもねえ。スマン、取り乱した。」

「…まあ、何でもないって言うならいいけど。」

気まずい空気の中、しばらくお互い沈黙していたのだが、何かに気付いたマサがおや？と首を捻る。

「アミ。…お前、そのしゃべり方は？」

「え？しゃべり方って…あっ。」

驚きすぎて敬語で話すのを忘れていたようだ。

失敗したと思いつつも、今さらやり直せるわけもないので私は正直に言った。

「ごめんなさい。本当はこっちの話し方が普通なの。」

拾ってもらった恩もあるし、マサは年上だから敬語で話さないといけないような気がして…。」

「…別にそれなら謝ることちゃんえだる。」

まあ、俺としては変に畏まられるより、そっちの方がいいかな。」

後ろ頭をガシガシと掻きながら、微妙に眉を下げたマサは言う。  
そんな彼の服の裾を掴んで、私は上目遣いに問いかける。

「本当？怒ってない？年増だし、もう面倒見ないって思って無い？」  
「…っ。」

マサは私を見てギシリと固まり、カツと顔を赤く染めた後、片手で口元を覆った。

……………何だろう、この反応。

人慣れしていないせいで直視されると羞恥を覚えるっていう、いつものアレ？

それとも…もしかして、大人だと知って女として意識された？つて、まさかね。

彼の大きな手の隙間からくぐもった声が聞こえる。

「…俺は、何があったってアミを見捨てたりしねえ。」

一見キザな台詞のようだが、それが何とも情けなく上擦っていて、私は思わず嘔き出してしまった。

マサの金色の瞳がまるで捨てられた子犬のように哀愁を帯びており、余計に笑いが止まらなくなる。

…ああ、もう。相も変わらず可愛い人だ。

~~~~~

あれから、お互い落ちつくまでに少しばかり時間を要したが、ようやく当初の目的である登録手続きを終わらせる事が出来た。

ドッグタグの発行までに30分ほどかかるそうなので、私はマサに今の内に用を済まして来るように促す。

私を置いて行く事を心配そうにしていたが、最終的に納得したようで1人頷きながら何か呟いていた。

マサを見送ってから間もなく、ニヤニヤした笑顔を貼り付けた20代と思わしき金髪男が話しかけて来た。

「よう。俺の事、知ってる？」  
「知りません。」

趣味の悪い派手な紫色の外套からチラリと覗く肉体は、無駄のないしなやかな筋肉に覆われている。

また、背に使い込まれた2本の剣を背負っているところから、マサの同業者もしくは傭兵といった類の人間なのだろうと推測する。

多少、顔は整っているかもしれないが、私はこういう頭の軽そうな男は好きになれない。

迷惑そうに顔を背け冷たくあしらってはみたが、全く堪えない様子で男は再び口を開いた。

「そう？傭兵階級Aのヴェルスつつたら、ちまたじゃ結構有名なんだけどなあ。」

「本当に知らねえ？」

「本当に知りません。暇つぶしなら他所でして下さい。」

「冷たいねえ。あの悪魔とは楽しそうに話してたじゃねえか。」

「……………誰のことでしょう。」

「とぼけんなよ。どうせアンタ、アイツに金で買われた娼婦か何かなんだから？」

「はい？」

「顔は地味だし、背もやたら低くて色気ねえし、あんな奴くらいしか客がつかなかったのかも知れないけどさあ。」

「自棄は良くねえぜえ？何なら、俺が買ってやるか？」

「…ああ、私に力があれば、すぐにでもこのヴェルスとか言う男を拳で黙らせてやるのに。」

きつと、こいつは今、頭の中で『娼婦にまで優しくしてやる俺力ツコいい』などと自画自賛しまくっているに違いない。

もう言葉を返すのも億劫だと口を閉ざせば、ヴェルスは気分を害したように眉間に皺を寄せる。

「おい、無視してんじゃねえよ。この俺が買ってやるつつつてんだ。」

そう言って、手首を掴まれた。…マズイ。この男、思った以上に短気だ。

咄嗟に痴漢撃退講座で習った技でヴェルスの手を外してしまった

のだが、私はその行動をすぐに後悔した。

これでもし相手がキレて暴力を振るってきたら…。

案の定、ヴェルスは信じられないといった表情をした後、グシャリと顔を歪ませて私を睨んできた。

…もしかして、ピンチというやつだろうか。

アミに実の年齢を聞かされた俺は、かつてないほど混乱していた。

23?23?そもそも23って何だ?23?年齢?誰の?アミの  
.....アミの?

アミが23?俺の5つ年下?子供でもなんでもない成人した女?  
誰が?アミが?

...ああ、でも確かに。

滅多に視線を合わせないから分からなかったが、よくよく見ると  
彼女の顔に思っていたような幼さは見られない。

だとすると、俺は今までその大人の女を相手に抱きかかえたり、  
頭を撫でたり、膝枕をしたり、風呂を作...つつつ!

どっ、なっ、ええええっ!?!うっ、嘘だろう!?!誰か嘘だと言っ  
てくれ!!

その時、フツと何かが視線を遮ったことで意識を戻した。

すると、いつの間にかアミが目の前にいて、それに仰天した俺は  
倒れるように後ずさった。

きょとんと首を傾げる彼女を見ていて、さらに重大な問題があっ



たことを思い出す。

…そういえば、今日は同じ部屋を取ったんじゃないか？

そんな事を考えた矢先にアミに名前を呼ばれて、俺は思わずこつ返していた。

「い、いや！違う！！」

そんなつもりだったんじゃない！断じて下心なんか無いんだ！俺はあくまでアミを子供だと思っていて、本当にやましい気持ちなんか全然これっぽっちも！

嘘じゃない！そりゃあ一緒にいたいとは思っていたが、それはそういう意味じゃあなくて、もっと別のっ…。

泥沼の思考から抜け出せない俺に、助け舟を出したのもまたアミだった。

少し頭を冷やせば、彼女が俺にそんな疑いを持っていないのは明白だ。

俺を男として意識なんかしていないし、ともしれば大きくて便利な生き物程度にしか思われていないかもしれない。

ならば、慌てることなど何もない。

逆に、下手なことを言つて、今さら俺という存在に危機意識を持たれても困る。

だから、俺は何でもないと首を横に振り、取り乱したことを謝っ

た。

そこでふと、先ほどのアミとのやりとりの中に違和感があったよ  
うな気がして、それが何かを考えた。

そして、気付く。

「アミ。…お前、そのしゃべり方は？」

…どうやら、アミは俺に気を使って、ずっとあんな堅苦しい話し  
方をしていたらしい。

あまりに違和感なく敬語を使うものだから、それが彼女の普段か  
らのしゃべり方なのかと思っていた。

が、普通に考えれば、いくら上層の人間でも、それが当たり前で  
あるはずがない。

彼女という存在に浮かれて、俺も大概まともな思考が出来ていな  
かったようだ。

なぜか、謝ってきたアミに気にしていない事を告げると、彼女は  
俺の服を掴んでこう言った。

「本当？怒ってない？年増だし、もう面倒見ないって思って無い？」

バツ、おま。そんな目で見てくるなっ。

ほんの少し眉尻を下げて、俺を不安そうに見上げてくるアミ。

彼女を少女だと思っていた頃ならまだしも、大人の女なのだと分かった今、そんな縋る様な瞳を向けられると妙に煽られているような気分になる。

耳慣れた敬語ではない言葉使いが、さらにそれを増長させた。

ならば、アミの顔を見なければ良いのかもしれないが、どうにも視線を逸らすことが出来ない。

己の顔にもすごい勢いで血が昇ってくるのが分かる。

早く何か返さなければと焦る俺の口から出た言葉は、自分自身でも意味の分からないものだった。

それをどう受け止めたのかは知らないが、アミは一瞬の間の後、急に大笑いを始めた。

もう俺には何が何だか…。

苦しいのか腹を抱えて蹲りつつも笑いの収まらない様子のアミを、俺は呆然と眺めているしかできなかった。

~~~~~

書類を提出して待ち合い用の長椅子に腰かけたアミは、自分はこので待っているから今の内に用事を済まして来てはどうかと提案してきた。

報告と換金の窓口はここから少し離れた場所にある。

こんな人の多い所に彼女を1人残して行くことは躊躇われたが、連れて行ったとしても結局待たせることに変わりはないのだから、性質の悪い人間もいるあちらよりはマシかと思いついた。

早く戻りたいのは山々だが、せっかくキレイに並んでいる人々の列を乱すのも気が咎めるので、俺は気配を消して最後尾に立った。これをやると人に気付かれにくくはなるが、至近距離で唐突に俺を直視する羽目になった人間が腰を抜かしたり気絶したりと、面倒な事に陥りやすいため普段は控えている。

依頼報告を終えて振り向いた人間たちが、いちいち小さく悲鳴を上げ走り去るのを少し煩わしく思いながら順番を待つ。

そこでふと横を通り過ぎる2人の男の会話が耳に入ってきた。

「ヴェルスの奴、また女に絡んでたぜ。」

「嫌だねえ、なまじっか顔が良くて実力がある奴ってのはさ。」

「つまみ食いし放題ってか？」

「しかし、随分と小さい女だったな。」

いつもはもつところ、出るところ出てるタイプばっか相手にしてるのによ。」

「たまには珍味もつまんでみようってんじゃないの？あー、ヤダヤダ。」

ヴェルスという名は聞いたことがある。

奴は実力はあるが、偏った正義感を持つ自己中心的で快樂主義な傭兵だったはずだ。

まさかとは思ったが、『小さい女』という単語が気になった俺は矢も盾もたまらず走り出した。

辿り着いた先で見たものは、ヴェルスという男が殺気を漲らせて

アミを睨み付けている姿だった。

## 第十話　ズレ

顔を醜く歪ませたヴェルスは、私を睨みギリギリと歯ぎしりをする。

「このアマ…。恥かせてくれやがって。」

次の瞬間、ガツという音がしたかと思うと、私の首を掴もうとするヴェルスの右手が目の前に迫っていた。

だが、それは私に触れる直前で止められている。ヴェルスの手首を掴んでいる見慣れた大きな手を見て、私はホッと息をついた。

「…貴様、何をしている。」

いつもより数段迫力のある、地を這うようなマサの声が響く。息をついたのもつかの間、自分に向けられていないはずの彼の敵意に中てられて、私は身体を強張らせた。だが、当のヴェルスはそれに怯まずふてぶてしく笑うと、「こう言っただ。」

「別に何もしてねえけど？」

「…では、この手は何だ。」  
「さあ？」

ギリ、とマサの手に力が入り、ヴェルスは痛みに顔を顰めた。

一段と張り詰める空気に冷や汗が流れる。

ヴェルスの頭を空いている方の手でガシリと掴んで捻り、無理やり自分と視線を合わせたマサは皮肉気な笑みを浮かべて唸るような声を出した。

「とぼけてんじゃねえぞ、若造。…俺の噂あ、知らねえワケじゃねえんだろっ？」

今回は見逃してやるが…、2度目は無え。分かつたら、行きやがれ。」

顔が無表情に変えたマサがそう言って手を放すと、若干青褪めたヴェルスはチツとひとつ舌打ちをして身を翻し足早しるがえに去って行った。その姿が見えなくなると、マサは私の前に膝をつき先ほどとは打って変わって心配げな顔を見せる。

「アミ、大丈夫だったか？スマン、俺が目を離したばかりに…。」

…ああ、いつもの彼だ。

それに安心した私は、深く息を吐いて緊張した身体を解した。

「うん、大丈夫。助けてくれて、ありがとう。」  
「…そうか。無事で良かった。」

特に何もなかった事を悟って、マサも安堵の表情を浮かべる。

「でも、マサ。さっきの台詞…。」

そう話しかけると、マサは途端にその大きな身体をビクリと跳ねさせた。

何かを恐れるような彼の仕草を不思議に思いつつも、私は口を開く。

「ヴェルス相手に若造だなんて、マサだってまだ20代でしょうに。」

「…っそこかよ。」

私の言葉に即座に反応してみせたマサは、脱力したように項垂れて深く息を吐いた。

~~~~~

ギルドでの用事が済んだ私たちは、これまたマサの馴染みだという食堂のカウンターで注文表を眺めていた。



店内はイスが5つ並んだカウンター席に、4人掛けのテーブル席が1つと至極こじんまりした作りになっていて、昼食時を少し過ぎた今の時間は私たちの他にお客はいなかった。

この食堂の主は身長210センチほどのこげ茶色の体毛を持つ牛の亜人で、その姿はまさに伝説のミノタウロスといった風情だ。

名前をヤシユロツツと言い、マサは彼の事をヤスと呼んでいた。年齢は39歳で独身とのこと。

冗談が好きなタイプのように、私を口説いてマサに小突かれていた。

路地裏のお店なので繁盛はあまりしていないけれど、腕は確からしい。

「ヤスさん。このお店はお米を使った料理ってありますか？

もしくは、味噌やお醤油を使った料理とか。」

「…米え？無い無い。そりゃ、もっと東の国に行かんと無理だろ。

ま、どうしてもってんなら、王都に行きゃあ売ってない事もないだろうぜ。

スツゲエ高値がついてると思うがよ。」

「そうですか。」

日本食に近いものは、この国では扱っていないらしい。

少し落ち込んでいると、隣で会話を聞いていたマサが話しかけて来た。

「何だ？アミは米を食いたいのか？」

「ん。えっと、私の住んでいた所ではパンよりもお米の方が主に食べられていたの。」

だから、ちよつと故郷の味が懐かしくなつちやつたというか。」

「そうか。じゃあ次は米を買いに王都へ行くか。」

「ええ！？何言ってるのマサ！そんなお金の勿体ない！」

東の国に行けば良いじゃない。それまで食べられなくなつて別に大丈夫よ？」

「…アミは金の心配なんかなくて良い。元々、王都には行く予定だつたんだ。」

俺も米つてヤツに興味が出たし、ついでに買うのも悪くねえだろ  
う。」

「でもつ。」

「まあまあ。いいじゃねえの、アミちゃん。いい女は買がせてナンボつてな！グハハハ！」

結局、ヤスの意味不明な押しもあつて、お米を買うために王都へ向かうことになった。

旅に掛かつた費用はいずれ全額返済する予定だから、あまり無駄使ひして欲しくないのに…。

初めに返すと口にした以上、それを違えるのは私の主義に反する。最終的にどれだけ受け取り拒否されようと、無理やりにも押し付けるつもりだ。

そんな私の考えを知るはずもないマサは、楽しみだな等と言いつつ運ばれたヤスの料理に口をつける。

私はそれを横目に、軽く肩を落としてハアと息を吐き出した。

ちなみに、私が注文したのは『ロールパン』『香草のサラダ』『川魚の塩焼き』『鶏ガラだしの野菜スープ』の4品。

久しぶりのマトモな食事だという理由もあるだろうが、それは繊細な味のとても美味しい料理だった。

色彩を考慮した上品な盛り付けは、ヤスのおちゃらけた言動からは想像もつかない。

…人は見かけによらないとは良く言ったものだ。

その後は、町の商業区で旅に必要と思われる物を色々と購入して回った。

店に入るたび、露店を覗くたびにマサの容姿のおかげで一苦勞あったのだけれど、それはもう仕様だと思って諦めることにした。

ヴェルスがアミの首に向かって手を伸ばしたので、それが彼女に届く前に掴み止めた。

およそアミに反応できるはずもない速度で行動を起こしたところに、この男の本性が垣間見える。

俺は牽制の意味も込めて、少しばかり殺気を含ませてヴェルスに声をかけた。

…だが、返ってきたのは嘲りを含んだ笑いとふざけた答え。  
アミを傷つけようとしておいて全く悪びれもしないヴェルスの態度に、久しく忘れかけていた怒りという感情が胸の奥底からフツフツと湧いてきた。

か弱い女をいたぶる為に使われる手など、いっそ無い方がスッキリするんじゃないか？

そんな物騒な考えが頭をよぎり、己でも意識しない内にヴェルスを掴む手に力がこもる。

しかし、視界の端に血の気の引いた顔をしているアミを捉えたことで、自分のやるうとしていた事に気が付いた。

無闇に人を傷つけまいと固く誓ったはずが、これしきの事で破りかけるとは何という体たらく…。

とは言え、このまま帰して再びアミにちよっかいを掛けられでもしたら、今度こそ怒りに飲まれて暴力的な行為に及んでしまうかもしれない。

そう思った俺は、自身の顔とそこから発生した根も葉もない非道な噂を利用して、ヴェルスに釘を刺しておくことにした。

これで懲りてくれたのなら良いが。  
去り際に聞こえた奴の舌打ちがやけに長く耳に残った…。

それから俺は、アミがヴェルスにどこかしら傷つけられてはいないか確認しようと膝をついた。

同時にアミ自身にも問いかけてみたが、どうやら問題は無かったらしい。

しかし、常に大人しく周囲に気を使っただけの優しいアミが、たった数分で奴に殺気を出させるほどの何をしたというのだろうか。とてもじゃないが、想像がつかない。

それとも、その大人しさが逆に気に食わなかったのか？……何と傲慢な奴だ。

そんな事を考えていると、今度はアミの方から俺に話しかけて来た。

…さっきの台詞?………って!

あああ!アミの前で何て姿を見せてしまったんだ、俺は!

怖がられたのか?恐れられたのか?怯えられたのか?嫌われたのか?

そもそも、アミは何について話すつもりなんだ。

事実無根の残虐な噂の数々についてか?それとも2度目は無いなどという悪辣な物言いの事か?

ダメだ。どこをどう聞かれても上手く弁解できる気がしない。くそ、どうすればいいんだ!

「ヴェルス相手に若造だなんて、マサだってまだ20代でしょうに。」

焦りが頂点に達していたところに心底どうでもいい言葉をかけられて、反射的に本音が口をついた。

その後、脱力し傾いでいく身体を引き留める気力は、もう俺の中に残っていないかった。

~~~~~

ギルドを出て、俺たちは遅い昼食にありつくため昔馴染みのしょぼくれた食堂を訪れた。

「いらっしやぎゃあああああああああ……あ………マサ？」

「…よう。」

「おおおっ！何だ、マサじゃねえか！久しぶりだな！というか驚かすんじゃないよ！」

「お前が勝手に驚いたんだろうが。」

厨房から顔を出した途端、1人騒ぎ出すヤス。

俺はそれを半ば無視するようにして、アミをカウンター席へ促した。

「うお！何だ、その小さいの！ひょっとしてマサの嫁か！？そんなのか！？」

まさか俺はマサに先を越されてしまったというのか！？なんてこつたー！

「楽しそうに勘違いしてるとこ悪いが、嫁じゃねえぞ。」

アミ、これがメニューだ。好きなものを頼んでいいぞ。」

「あ、うん。」

「何だ違うのかよ！じゃあ、アミちゃん！俺どう、俺！嫁に来ねえ？いやあ、小さくて庇護欲をそそられ……ごふあっ！」

調子に乗ってアミの肩を抱こうとしたので、軽く殴り飛ばしておいた。

全く油断も隙もない牛野郎だ。誰が貴様なんぞにアミを渡すか。その後もギヤーギヤーと姦しかったが、注文をするとヤスは不満気にしつつも大人しくカウンター向こうの厨房へ入っていった。こいつは料理をしている時だけは静かだ。落ち着いたところで、俺はアミにヤスの事を簡単に話しておいた。アレで腕は確かだと言うと、彼女はそれは楽しみですねと微笑んだ。…何となく面白くないな。

その後の会話でアミの欲する物を知り、都合良く王都へ向かう理由が出来た。

米と味噌と醤油…か。東の国に赴いた事もあるが、わざわざ食べはしなかったな。

しかし、米を日常的に食べていたとなると、彼女はそちらの方の出身かもしれない。

黒髪黒目という特徴から、西の国から来たのではと思っていたがどうも違うようだ。

アミは自分の話をあまりしたがらず、俺は未だに彼女の生れがどこなのかを知らなかった。

まあ、故郷を捨てる時まで言っていたのだから、黙秘するにはそれなりの理由があるのだろう。

それにしても、ようやくアミに何か買い与える事が出来そうだと俺はここに来て初めてヤスという存在に感謝したのだった。

食後に商業区を回ったのだが、アミが積極的に混乱の收拾に努めてくれたおかげで、いつもより数段楽に物を買う事が出来た。

実はアミは意外と値切り上手だったようで、商人と交渉をしている時の彼女はいつになく生き生きとしていた。

得をしたと満面の笑みを浮かべるアミはとても大人には見えず、



無邪気で可愛らしい。

が、売り物をかなりの安値で買い叩かれ燃え尽きたように頂垂れる商人達を、他人事ながら哀れに思わずにはいられなかった。

知れば知るほど、確実にアミの事が分からなくなっていつている

…。

俺が彼女の思考を完全に理解できる日はやって来るのだろうか。

## 第十一話　思う所

この町には銭湯のような施設があるらしい。

これからは公衆浴場を使う機会が増えるだろうというマサの気遣いで、夕食後ナーエさんと一緒に作法を学びがてら行って来る事になった。

浴場は男女別々の場所に設置されているらしく、宿を出るとマサは反対の方向へ歩いて行った。

女性用の公衆浴場は高い木の扉に囲まれた石造りの建物で、天井は湯気を逃がすためか存在していなかった。

建物内に足を踏み入れてすぐ、脱衣所と浴場の間に仕切りが見当たらないことに驚いた。

ナーエさんに聞くと、脱衣所である板の間と浴場である石の床の間に、仕切り変わりに風魔法がかけられているらしい。

だから、浴場の熱気は脱衣所には入ってこないのだそうだ。

しかもこの魔法、浴場から脱衣所に戻る際に一瞬で身体の水滴を飛ばして乾かしてくれるとか。

浴槽はどれも井戸のような形をしていて、ツルツルとした触り心地の黒っぽい石を重ねて作られていた。

中央にある薄水色の大きな丸い固まりが、時折発光しながら湯を吐きだしている。

それは『水の魔法石』という名の特殊な加工石で、貯められた魔力を完全に消費するまで作用し続けるらしい。

かと言って使い捨てではなく、石が破壊されない限り外部から魔力を注ぎ込むことで繰り返し使用が可能なのだそうだ。

作法と言っても、最初に身体を洗えだとか走るなどが、そんな元の世界では当たり前なものばかりだったので新たに覚えるべきことは無かった。

強いて挙げるなら、『人間用』『毛の多い獣系亜人用』『体温の低い爬虫類系亜人用』など人種によって浸かれる湯船が決まっていた事くらいだろう。

入場時に貸し出される風呂桶は、日本のものとほぼ同じ形状の木製の物が使われていて、特に不便さは感じなかった。

シャワーや水道は存在しないようで、身体を洗う際は専用の長い水路を流れるお湯を汲むようになっていた。

桶以外の腰かけ等の使用は別途料金がかかるらしく、ほとんどの人は家から持ち込んでいるらしい。

まあ、最初から色々と備え付けられている至れり尽くせりな日本がオカシイのだと思う。

今後也使うだろうことを考えて、石鹸とボディタオル代わりのヘチマのような植物を買っておいた。

コインロッカー等は当然無く、大事なものは受付の人が安値で預かってくれるとのことだった。

人間用の湯の温度は、大体38 くらいに感じた。

何でも、お風呂が出来た当時に逆上せる人が大量に出たとかで、低い温度にされたらしい。

4 1 で15分浸かるといふ習慣のあった私には完全にぬる過ぎ

た。逆に風邪を引いてしまいそうだ。

のんびり宿に帰ると、すでにマサが部屋に戻っていた。

彼は、昼に購入して増えた荷物の整理をしているようだった。

前から思っていたが、マサは顔に似合わず非常に細かな性格をしているらしい。

武器や道具の手入れは欠かさず、食糧の鮮度にも気を配り、服や靴に少しでも解れがあれば器用に繕って、荷物袋なども定期的に洗ったり日に干したりしている。

あえて言おう。私には無理だ。

私が黒髪でいる1番の理由が『1度染めると後が面倒臭いからだ』という時点で、それは疑いようもないだろう。

きっと、元の世界にいたのならマサはA型に違いない。

ベッドに腰掛けて、作業を進めるマサを見ながらそんなどうでもいい事を考えていると、ふと彼が顔を上げて私を見た。

それから、マサはなぜか難しい顔をしてため息をつくときこう言った。

「この町での用も済んだし、明日には王都へ発つぞ。

歩くにしろ魔獣車を利用するにしろ、また数日は野宿続きの生活になるだろう。」

やる事が無いのなら、今日はもうゆっっくり寝たらどうだ?」

もつともな提案なので、私はそれに素直に頷いて床に就いた。  
久方ぶりのマトモな寢床は大層心地良く、私の意識はあつという  
間に闇に沈んだ。

~~~~~

次の日。たつぷりと睡眠をとることのできた私は、爽快な気分で  
目を覚ました。

身体を起こして伸びをすると、その気配を感じたのかマサも目を  
覚ます。

のっそりと起き上った彼は……………半裸だった。

え…と、さすがに下はズボンを穿いているみたいだし、上半身を  
見たくらいで騒ぐような初心さは持っていないけれど、これはどう  
捉えれば良いのだろう。

…今まで同じ部屋で寝起きをした事が無かったから知らないだけ  
で、彼は宿などでは半裸派なのだろうか。

そう言えば、野宿の時だって彼は外套すら身につけずに寝ている。  
もしや、服と布団の両方を着ると暑くて眠れないのでは…？

それなら私がいるから気を使ってくれただけで、本来は全裸派と  
いう可能性もある。

彼には本当に窮屈な思いをさせてしまっているな、と私は改めて  
思わずにいられなかった。

しかし…、意外と体毛が薄いというか、絶対あると思っていた胸  
毛なんか皆無じゃないか。

顔はモミアゲからヒゲまでもっさり生えているというのに、どう  
いう事なのだろう。

剃ってはいないはずだ。野宿続きで四六時中一緒にいたが見たこ  
とが無い。

ふと、下半身はどうなのだろうという考えが頭をよぎったが、自  
分は痴女では無いとその思考をすぐに打ち消した。

怪しい視線を感じ取ったのかマサが訝しげな瞳を向けてきたが、  
私はそれを日本人特有の曖昧な笑みでかわし、その後は何事も無か  
ったかのように振る舞うことで煙に巻いたのだった。

いきなりアミを1人で公衆浴場に放り込んでしまうのは不安だったので、ナーエさんに頼んで一緒に行ってもらおうようにした。せつかくなので、俺も久しぶりに湯に浸かりに行く。

さて、公衆浴場では、常に気配を絶つていなければならない。なぜなら以前行った時に、逃げ惑って足を滑らせた人間が大怪我を負ったり、全裸で町中を疾走する人間が続出したりと、大問題になったからだ。

存在感を極限まで消すことで、少なくとも俺がフォローできる範囲での混乱に留まってくれる。

そこまでするぐらいなら行くなと言われそうだが、今の俺にはアミがいる。

無いとは思いが、匂いひとつで嫌われてしまつては目も当てられない。

それでも悪戯に他者を畏怖させることも無いだろうと、俺はなる

べく短時間で風呂を済ませた。

宿に戻るとやはりというか、アミはまだいないようだった。

まあ、男よりも女の方が長風呂であるというのは良く聞く話だ。そうでなくとも、公衆浴場は初めてなのだ。時間がかかって当然だろう。

.....。

何となく、これ以上は余計な事を考えそうだったので、俺は軽く頭を振った後、気を紛らわすために荷の整理を始めた。

しばらくするとアミが戻ってきたが、俺は顔を上げずに軽く声をかけるにとどめた。

それを気にした様子も無く、彼女は俺の横を通り自分のベッドへ腰かける。

数回足をブラつかせた後、暇なのか俺のやることをジッと見つめてくるアミ。

無駄に視線を向けて来るなど何度も言っているのに、彼女のその癖は一向に直らない。

...やり辛い。



仕方なく、俺は何度目かになる同じ台詞を口にしようと思顔を上げた。

そして、後悔した。

なんだその薄着は！

今まで生地の薄い寝巻用の1枚服を着ていた事など無かったはずだ。

しかも、子供用の膝上文じゃないか。なぜ彼女は平気で着ていられるんだ。

今日、俺の知らない間に買ったのか？それとも、実は前から持っていたのか？

だとすれば、野宿だから着るのを自重していたのか？

いや、そんなことよりも…、その服で外を歩いて帰ってきたのか！？

ピッタリと身体のラインに沿って張り付く薄布が、確かに大人を感じさせる彼女の肢体を浮き彫りにさせていた。

さらに、湯上りのせいかな、ほんの少しばかり上気した頬が何とも扇情的に見える。

…だが、どうせアミの事だ。

自分の姿が他人にどう見えているのかなど、欠片も意識していないに違いない。

そもそも、23にもなっただけその無防備さはおかしいだろう。

いくら金持ちの箱入り娘だと言ったって、もう少し警戒心というものがあつて然るべきじゃないか。

ああ、くそ。本当の年齢なんか聞くんじゃなかった。

アミを少女だと思つていた頃の自分なら、何も思う事など無かつたはずだ。

これから先、無意識のアミに振り回されて気苦労の多い旅になるであろう事が窺い知れて、俺はげんなりとした気分で口を開いた。

「やる事が無いのなら、今日はもうゆっくり寝たらどうだ。」

寝てさえくれれば、アミに見つめられることも、俺が彼女の姿を視界に入れることも無くなる。

俺の提案にあつさりと言ひくれたアミは、それからすぐ横になった。

1分と経たずに寢息を立て始めたところから、元氣そつに振る舞つていてもやはり疲れていたのでと理解する。

ようやく落ち着ける環境になつた事にやれやれと息をついて、俺は再び手を動かした。

最初に整理を始めた目的を忘れたわけではないが、やるからには徹底すべきだろう。

いつの間にか興の乗つてしまつた俺は、今行つた必要の全くない鍋磨きに精を出していた。

仕上がりを確認している段階で、ようやくその事実が気が付く。

「何やってんだ、俺…。」

自分で自分に呆れながら、軽く首を振って鍋を片付け部屋の明かりを落とした。

宿で就寝する際のいつもの流れで上着を脱ぎ、ズボンに手をかけたところでハツとする。

隣りのベッドで寝息を立てている彼女を見て、軽く後ろ頭を掻いた。

さすがにアミの前で下着1枚になるのはマズイか…。

布を重ねる数が多くなれば、それだけ周囲の動向を察知する感覚が鈍ってしまう。

故に、本来は就寝時あまり重ね着等を好まないのだが、この場合はそれも仕方がないだろう。

今日は俺を退治しようなどと勘違いした人間が襲ってきそうな兆候もない。

フツと息をひとつ吐いて、そのまま布団の中にもぐりこんだ。

~~~~~

翌朝。

人の動き出す気配に反応して、俺は目を覚ました。

アミが起きたのか、とガシガシと頭を掻き欠伸をしながら上体を

起こす。

それから軽く腕を回していると、隣から不穏な空気を感じてチラと目をやった。

……………何だ？

上半身だけを起こした状態のまま、今までにない目つきをしたアミがじつと俺を見ていた。

その視線の意味が分からず黙って享受していると、突如背筋に正体不明の悪寒が走る。

理解できない現象に眉を顰めて、俺は原因と思われるアミに今度はしっかりと顔を向けた。

すると、アミは一瞬バツの悪そうな表情をした後、苦笑いにも似た笑みを浮かべて顔を逸らした。

その後は完全にいつもどおりのアミに戻ってしまったため、何となく意味を聞きそびれる。

どこか腑に落ちないような気持ちを抱えたまま、俺は彼女とともに宿を後にしたのだった。

## 第十二話 選択

魔獣車の利用を支配人に土下座で断られた私たちは、徒歩で王都へ向かった。

多くの人が利用する石畳の道は、平坦で安全である事を重視されて作られているため少しばかり遠回りになっている。

私たちは、様々な理由からその道を外れ最短距離を行く事にした。

町を発ってから1週間。

途中、特に障害物も無い場所で久方ぶりにマサに走ってもらって時間短縮しつつ、ようやく王都に辿り着いた。

さすが、大国の中心都市ただけあって、そのスケールは今までの比ではない。

不思議な素材で出来た端の見えないクリーム色の分厚い城壁。様々な形をとっている真っ白な家々。

中央にそびえ立つサグラダ・ファミリアを思い起こさせるようなデザインの絢爛な城。

常に清掃員が入っているらしい清潔感のある街並みは、中々に好印象だ。

広場は情報板や旅の一座の芸に群がる人々で溢れ、すぐ傍の通りでは屋台が所狭しと並び良い香りを漂わせている。

巡回の兵士がやたらとうるついているのは堅苦しいが、その分治安も良いらしいので苦言を呈する者はあまりいないそうだ。

マサは、なぜか敷地内に専用の風呂が作られている高級な宿の1

室を借りた。

これが他の男なら『何ぞ不埒な事を企んでいるのでは』と勘繰るところだが、相手はマサなので『人も多いし、安い宿は埋まっているなど何かしらの理由があるのだろう』と一人で納得していた。

それから、再び外へ繰り出した私たちは、お米を探すべく商業区へと足を運んだ。

すると、案外あっさり見つかったそれは、ヤスの言っていたように非常識な値段がついていた。

やはり無理にここで買わずとも良いのではないかとマサに進言してみたのだが、彼は折れるつもりは無いようだった。

それでも必死に主張を続け、何とか最低限の量だけ購入するように話をつけた。

何だかんだ言いつつも、久しぶりに対面したソウルフードに心躍らずにはられない。

手に入れた米はそう多くないので、希望して私が持たせてもらうようにした。

落とさないように縛り紐を手首に括りつけて、私はさらに両腕で大事に抱え込んだ。

揺れる麻袋から時折聞こえて来るシャラシャラという音が愛しい。

様々な国の人間が集まるらしい王都では、元の世界のように看板に同じ内容の事柄が数種類の文字を使って書かれていた。

おかげで、付与された言語能力がこの世界ほぼ全種族のものをカバーしているのだと認識することができた。

…少し与えられ過ぎな気もしたが、それならそれで通訳や翻訳の

仕事などに利用しても良い。

元手もかからないし、マサがいれば悪いようにはならないだろう。そうでなくとも、そろそろお金を稼ぐ方法を探し始めるべきだ。

そんな事を思った私は、何か必要な物はあるかと聞いてくれたマサに頼んで、ギルドへ連れて来てもらった。

巨大な4角錐の白い建物に、見渡す限りの人、人、人。

前の町で見たギルドとは比べ物にならないほどの規模の大きさに驚きながら、これならば私に出来る仕事も幾らかあるかもしれないと期待して足を踏み入れた。

マサがついているので、当然私たちに混雑など関係無かった。

…確かに、彼は尋常ではない顔をしているし、実力も相当に高い。おそらく、引き金に指をかけた状態の拳銃を額に押し当てられているような気分がするのだろう。

私はそれに弾が入っていないと知っているから恐れもしないが、そうでなければ避けるのも道理だ。

しかし、町中と違い彼程では無いにしろ強面や厳つい体躯を持った人間も少なからずいるというのに、揃いも揃って軟弱な…。

ギルドの登録労働者において、実は明確な職業というものは存在しない。

受けた依頼の内容によって、それに見合った業種のポイントが溜まる仕組みになっているからだ。

例えば、狩士や傭兵、他にも採集士、加工師、教鞭士、裁縫師、家事雑用士などにかく多種多様な業種が設定されていた。

階級以外に受注条件は定められていないので、誰でもどんな職の

仕事でも請け負う事が出来るようになってる。

掛け持ちの多い人間などは、各業種のドッグタグをジャラジャラと鳴らしながら歩いているそうさ。

ちなみに、そういった人間が名乗る際は、一番高い階級の職業を告げるのが一般的らしい。

壁一面に貼りだされた職業一覧表を眺めていると、その中に翻訳師というものを見つけたのでマサに聞いてみた。

「マサ。この翻訳師っていう職の具体的な仕事内容が分かれば教えて欲しいんだけど…。」

「翻訳師？…あゝ、っと、そうだな。」

書物の別言語版作成だろ。あと、別種族間の相互通訳。遺跡に刻まれた古代言語の解析…。

まだあんだらうが、すぐ思い出せるのはこのぐれえだな。

…何だ、アミは翻訳師の仕事がしてえのか？」

「んゝ、したいというか…。今のところ、一番堅実に稼げそうなのはそれかな、と。」

力や専門の知識が必要な職業はまず除外。

かと言って、生活に特化した文明の利器の無さそうなこの世界で、家事や裁縫などの仕事が私に可能だとは思えない。

自ら学んで得たものではないが、今一番有望な能力は間違いなく言語だ。それを使わない手は無いだらう。

「ほおゝ、スゲエな。俺だって大陸公用語以外は片言程度にしか分



かんねえんだぞ。」

「まあ、逆を言えば私はそれしか出来ないって感じなんだけど。あはは。」

感心するような眼を向けて来るマサに、私は苦笑いで回答を濁したのだった。

…また、俺のせいでアミに苦勞をかける羽目になってしまった。  
自分で歩いたほうが早いという理由から1度も魔獣車を利用した  
ことは無かったが、まさか断られるとは思わなかった。  
スマンと一言謝れば、アミは俺の背中をポンポンと叩きながら『  
マサは何も悪くないでしょう』と微笑んだ。

…彼女の前ではとことん恰好がつかない。  
何でも与えてやりたいと思いつながら、逆に与えられてばかりいる  
という事実のため息が漏れる。

自らの無力を嘆きながら、俺はアミと共に町を発った。  
人目も無くなり、いつもどおり彼女を抱えようとした際、23と  
いう年齢を思い出して無駄に緊張してしまった。  
本人に気づかれていなければいいが…。

道中、彼女に強く乞われて断り切れず、久々に走ってみた。  
以前と違い、障害物が無かったせいか特に辛そうな様子は見せず、  
逆に楽しそうに声をあげてはしゃいでいた。  
…え、と、23。…あ。俺、騙されてねえよな？

王都に到着して、まず最初に宿を取った。俺も初めて泊まるような、かなりランクの高い宿だ。

敷地内に宿泊客専用の風呂があるという理由だけで、俺はここを選んだ。

前のように公衆浴場を利用したアミが薄着で外を歩いてしまうかもしれない可能性を考えると、他に選択肢は無かった。

幸い、彼女は反対することも理由を聞いてくれることもなく、俺は下手な言い訳をしなくて済んだとホッと胸を撫で下ろした。

商業区で早速アミの言う米とやらを購入してみたのだが、俺にはあまり美味そうには見えなかった。

だが、それを大事そうに抱える彼女の顔は恍惚としている。

一体、この穀物の何がそんなに彼女を惹きつけるのだろうか。

それより、そこまで好いているのなら、多少の不便があったとしても住むには東の方が都合が良いかもしれない。

あちらで1番好条件の町はどこだったか、と俺は記憶を手繰り寄せた。

そろそろ稼ぐ手段を考えたいと言うアミに頼まれて、俺たち2人はギルドを訪れた。

個人的には、稼ぐ手段を見つけれればそれだけ早く別れが来てしまうのもつとゆっくり考えてもらいたいが、そんな一方的な望みを表に出すわけにもいかない。

大人しく彼女について歩いていると、アミは急にムウと唸って不機嫌そうな顔を見せた。

それから、俺の手を取ってグイグイと引っ張りつつ通路を足早に

進んで行く。

お、おいっ。何だ、いきなり。どうしたんだ？何で手を…。

彼女の方から触れられた事に気恥ずかしさと嬉しさを感じて、顔が火照ってくる。

が、人目もあるので空いている方の手で軽く頬を叩いて、気を取り直した。

それにしても、ただ機嫌が悪いというだけなら間違はなく俺が原因だろうと思うところだが、それなら手など繋いでこないはずだ。

一体、どこの何が彼女の気に喰わなかったのだろうか。

目的の場所に到着して足を止めたアミの背に、俺は戸惑いがちに問いかけた。

「…ええ。アミ、何かあったのか？」

その声に反応して振り向いたアミに、掴まれている手を持ち上げて見せる。

すると、彼女はきよとした表情をした後、肩を竦めながら苦笑げに言った。

「あー、無意識に…。ごめんなさい。何でもないわ。」

アッサリと手を離れたアミは、本当に何事も無かったかのように

壁の職種一覧に目を通し始めた。

いや、あの。もう少しくう、無意識だったら無意識だったで慌てるのかそういう…。

別に何を期待していたわけでもなかったが、こつも無反応だとちよつとばかり寂しいものがある。

まあ、普段から抱えられたり膝枕で寝たりしているから、彼女にとっては今さらなのだろうな。

それにしても、結局不機嫌の理由は何だったのか。

どうにもスッキリしない心情で頭を搔いて、俺は真剣な顔をしているアミを横目で見た。

そこでふと、何かに気付いたような彼女が俺を見上げる。

……………翻訳師か。

俺には全く縁のない職業だ。

雇ったところでわざわざ俺と話したがるような酔狂な輩がいるわけでなし、そもそも雇われてくれる人間がいるはずもない。

逆に仕事を受けたところで、俺を歓迎する依頼主など存在しないだろう。

故に、詳しくは無いがそれでも分かる範囲でアミには説明しておいた。

大陸公用語を使うアミしか見た事は無いが、彼女が言うからにはそれなりに話せるに違いない。

絶対数が少なく、腕の良い翻訳師は重宝がられるものだ。職業と

して悪くは無い。

雑用系の仕事をこなすよりは、余程の稼ぎになる。

しかし、通訳の場では顧客同士のイザコザに巻き込まれる事もあると聞く。

出来れば、そういった方向の依頼は受けずにいてくれると助かるのだが…。

さて、俺がそこまで口を挟んで大丈夫なのかどうなのか。

そういえば、他言語を操ることが出来る割に、翻訳師について何も知らないとは不思議な話だ。

そもそも金のある家に生まれた人間ならある程度の教養は身につけているはずで、ならば教鞭士だってやれないこともない。

ギルドの仕事に拘らずとも、貴族の家の使用人として雇われる事も可能だろう。

だと言うのに、なぜそれしか出来ないなどと思う？

…いい加減、アミには不可解な言動が多すぎる気がする。

だからと言って手放そうとは思わないが、知らない事で不測の事態に対処できない状況が起こらないとも限らない。

いつか詳しい話を聞きだすべきなのだろうか。

### 第十三話　望まぬ客

確認までに、最低階級で受けられる翻訳師の依頼を漁ってみた。異国へ送る手紙の代筆。たった1行の外字翻訳。友人に出された暗号の解読などという訳の分からないものもあった。

報酬はどれも子供の小遣い程度の金額だ。

中には階級フリー特殊依頼で古代文字の研究助手などもあったが、ほぼ地元民の依頼で埋まっており、他の町や国をまたぐような仕事は無いようだった。

手慣らしということでも幾つか受けてもいいが、本格的に始めるのなら住む場所が決まってからにしたい。

下手にお得意様なんかできて土地を離れにくくなるし、こんな物価の高い都に滞在し続ければ赤字もいところだ。

顎に指を当てて思案していると、隣で私の様子を見守っていたマサが頭にポンと手を置いた。

「…マサ？」

「階級が上がりゃあ、下位の依頼は受けられなくなっちゃうぞ。

上位階級の人間が仕事を独占して問題になった事があってな。規則が変わったんだ。

どんな仕事も上の階級になればなるほど、一般市民からの依頼は少なくなる。

人付き合いを大事にしたきゃ、住む場所が決まってから仕事を始めた方が良くないじゃねえか。

周りに溶け込むなら、そいつらの役に立つの事をするのが一番手っ取り早えらしいし。

…まあ、俺は違ったから断言できねえけどよ。」

「そっかあ。確かにそうだよな。うん。ありがとう、マサ。そうする。」

最後の悲しい一言は聞かなかった事にしておく。

おそらく、マサは役に立とうとして拒絶されたか、曲解されたかしたのでらう。

…いちいち不憫すぎる。そう思いながら、寄って来そうになる眉間の皺を指で伸ばした。

彼の助言をありがたく受け取って、私は依頼を受ける事なくギルドを後にした。

~~~~~

高級宿の20畳はありそうな広く質の良い部屋で、非常に満ち足りた気分で就寝していた真夜中の事。

「…アミ。アミ、起きろ。」

切羽詰まったような声で名を呼ばれて、私は意識を浮上させる。寝ぼけ眼まゆめを手で擦り、薄暗い部屋の中の人影に目を凝らす。



「ん？マサ？」

「アミ。目的は分かんが、殺気をみなぎらせた集団がこの部屋に向かっている。」

「いつでも出られるように用意しておけ。」

「っへ。…ええ！？」

「問答している暇は無い。急げ。」

「わ、分かった。」

訳が分からないまま彼の言う通り急いで着替えを済ませ、自分の荷物を纏める。

それから、斧の柄に軽く手を置いた状態で扉を睨んでいるマサの背後に移動した。

「…ね、逃げないの？」

「場合による。とりあえずは迎え撃つ。」

「アミ。危ねえから、そこから動くなよ。」

「う、うん。」

緊張はするが、恐怖心は薄い。こういう時だけは、心が半分麻痺している事に感謝する。

間もなく、廊下からガシャガシャと音が響いたかと思うと、壊れそうなほど勢いよく部屋の扉が開いた。

そこから姿を現したのは、仰々しい白銀の甲冑に身を包んだ十数人の集団だった。

その中の1人、胸元に青いペイントが施された甲冑を着こんでい

る男がマサに剣の切っ先を向けながら叫ぶ。

「ようやく貴様の悪事の現場を押さえる事が出来たようだな！もう逃げられんぞ！

神妙に縛につけ、鮮血の悪魔マーシャルト・グリーンストーン！」

「ああ？夜中に無断で人の部屋に押しかけといて、意味分かんねえこと喚いてんじゃねえよ。」

マサに全面同意だ。

せっかくのフカフカ布団での眠りを妨げておいて、ありもしない悪事の現場がどうか全く理解不能だ。

そもそも鮮血の悪魔って何だ。ダサい。言い回しもウザい。

男の言葉に眉を顰めていると、その背後にいた一回り小さい甲冑から若そつな男の声が響いた。

「そこのお嬢さん！我々、王国騎士団が来たからにはもう安心です！すぐに助けてさしあげますからね！」

「…はい？」

言われた内容があまりに想定外すぎて、無意識に眉が下がり口の端が引き攣る。

……………おーけー。何となくだけど、現状を把握した。

要は、あちらさんは私が囚われの身になっているかのような誤解をして、マサを捕まえに来たわけだ。

今までの悪事は証拠が無くて煮え湯を飲まされたから、これ幸いと出張って来たってワケね。

まあ、実際は全部ただの噂なんだろうから、証拠も何もあつたものじゃないと思うけど…。

わざわざ騎士団が派遣されたのは、マサの実力的に普通の兵士じゃ敵わないから、かな。

後方にへっぴり腰でカタカタ甲冑を鳴らしている人間が複数いる事から、力量はピンキリなのだろうと予想する。

状況を理解したところで、聞いてもらえるかどうか分からないが一応反論してみた。

「あの、騎士様には無駄骨を折らせてしまったようで申し訳ありませんが、私は自分の意思で彼と一緒に居るので、出来ればこのまま帰っていただきたいのですが。」

「ああ、そう言うように脅されているのですね。大丈夫、必ず助けますよ。我々を信じて下さい。」

はい、ダメ。通じない。言えば言うほど逆効果になるパターン。さて、どうしたものか。

と、暢気に考えている間に前方で火花が散った。

あのペイント付き甲冑男がマサに攻撃を仕掛けたらしい。

「っ化け物め！貴様など生れて来た事自体が間違いなのだ！」

そう罵った後、男は後方の騎士たちに指示を出して扇形の陣形を取った。

今の一撃で単独ではマサに勝てそうにないとしても判断したのか、連携攻撃に切り替えてきたようだ。

うん。何て言うか、そろそろアレだ。キレそうだ。…マサじゃなくて、私が。

一通り翻訳師の依頼書に目を通したアミは、難しい顔をして黙り込んだ。

どれを受けるかで悩んでいるのだろうか。

そんな彼女に、俺はアドバイスがてら依頼受注の先延ばしを勧めた。

嘘こそ吐いていないが、そこに手前勝手な願望も少なからず含まれていたため、つい饒舌になってしまう。

だから、あまりにもあっさりアミにその助言を受け入れられた事に心が軋んだ。

案外しっかりしているアミだけに、言われるがまま頷いたのでは無くきちんと自分で考えた上で出した結論なのだろうとは思う。

それでも、何となく彼女を騙しているような、そんな罪悪感が俺を苛さいなんでいた。

~~~~~

夜。

柔らかすぎる布団に慣れずどうにも寝つけずにいたのだが、ふいにこちらへ向けられている微かな殺気を感じ取って身体を起こした。殺気を辿ってみれば、宿から1キロほど先、王城から延びる中央道を進む集団の存在を感知することができた。

さらに深く意識を集中させて、正体を予測する。

傭兵階級Sに相当する人間が2とBが4、残りは全員A：か。

どうやらかなり手練てだれの集団であるらしい。

彼らは足音もろくに消さずに堂々と道を進んでいるようだった。

とすれば、裏稼業の人間ではありえない。

だが、そこまで戦闘能力の高い集団が公にあったか、と考えたところで1つの結論に至る。

この国が所有する兵力の中でも、国王直属の徹底した実力主義で有名な『銀の騎士団』。

それしか考えられなかった。

入団試験の厳しさ故に通常の5分の1以下の団員しかいない少数精鋭となっではいるが、その功績は突出しており他に追従を許さない。

特に、王弟でもある騎士団長はあらゆる武器の扱いに長け、さらに宮廷魔法師顔負けの技術で水と風の2属性の魔法を操り、且つ、型に囚われない臨機応変な戦闘スタイルで個人・集団に関わらず常勝を続け、名実共に王国最強の名を頂く男だと聞く。

そんな騎士団に殺気を向けられなければならない理由は分からないが、相手が相手だけに逃げ出すというのは得策ではなさそうだ。自分1人ならともかく、アミを連れた状態で彼らから逃れるのは至難の業だろう。

ここから探った限りでは俺に敵うような実力は無さそうだが…、一応油断は禁物だと気を引き締める。

ただ数が多いだけなら歯牙にも掛けないが、優れた連携を取られれば個でしか対応の出来ない俺には非常に厄介な相手になる。

とりあえず、アミに怪我を負わせないことを第1に置いて、俺は騎士団を迎え撃つ準備を始めた。

彼らの目的が分からない以上、彼女から離れた場所に移動するというのも憚られる。

これまでになく気持ちよさそうに眠っているアミに一瞬躊躇いながらも、俺は彼女を目覚めさせた。

普段と違い、こういった場面での彼女は敏い。

寝起きに突然告げられた言葉に狼狽えはしていたが、すぐに置かれている状況を理解できたらしく、俺の言葉通り何も聞くことも無くアミは行動を開始した。

自らの命が危機に晒される可能性もあるというのに、平静を崩さず素早く荷を整えた彼女に俺は内心で感嘆する。

実感が湧かない、もしくは単なる強がりだという可能性もあるが…、それでも大したものだ。

アミの準備が出来て間もなく、予想に違わず銀の騎士団の面々が姿を現した。

団長だと思われる男が、開口一番、俺の悪事がどつのと身に覚えのない事を言ってくる。

素直にそれを口にしてみたが、飛ばされる殺気が増したただけで全く相手にはされなかった。

これもまたいつもの事だが…。

団長以外で唯一S階級に相当する小柄な騎士がアミに呼びかける。おかげで彼らの襲撃理由を知る事が出来た。

どうやら、俺の良からぬ噂のせいで彼女にまた余計な迷惑を掛ける羽目になってしまったらしい。

その騎士の勘違いも甚だしい発言に顔を引き攣らせるも、アミはすぐに気を取り直して彼らの間違いを訂正すべく口を開いた。

こんな場面にも関わらず、彼女の『自分の意志で俺という』という発言に1人浮かれそうになる己を胸の内でも嘲笑する。

かなり信頼されている事は感じるし、嫌われないのは確かだろう。

だが、そこに特別な感情など込められていないのは分かり切った事実だ。

そもそも、同じ人として見られているかどうかも怪しい。

彼女の言葉も、思い込みにとらわれた騎士たちの前には意味を成さなかったらしい。

冷静な目で見れば、アミが脅されているかどうかなど態度ひとつで分かりそうなものだ。

…逆を言えば、それだけ強く俺という存在が他者の精神を取り乱させてしまうという事か。



「卑劣な…。」

目の前で剣を構えていた団長は不愉快そうに呟くと、急激に距離を詰めてその刃を俺に突き立てんと襲いかかって来た。

それを斧で難なく受け止めると、彼は吐き捨てるように俺をなじってきた。

「っ化け物め！貴様など生れて来た事自体が間違いなのだ！」

…これはまた、何とも懐かしい台詞を聞かされたものだ。

竜人族の隠れ里に住んでいた幼少期にはしょっちゅう耳にしていたな、と記憶の奥底で風化しかけていた過去を思い出した。

同時にその後に来た悲惨の記憶も掘り起こされて、俺は自分の心身が急速に冷めていくのを感じた。

## 第十四話くトランスく

多勢に無勢だけれど、素人目にもマサが完全に押ししているように見えた。

そのせいなのかは分からないが、騎士たちが度々彼を罵倒する言葉を放っている。

下手な口出しをしてマサに隙が生まれでもしたらマズイと思い黙っていたが、いいかげん我慢ができなくなった私はその心のままに行動を起こした。

食糧袋から手の平大の硬い芋を取り出し、1番腹の立つ発言の多いペイント付き甲冑男を目掛けて乱暴に投げつける。

「なっ!?!」

さすがに避けられてしまったが、私の行動が意外だったのかマサを含む全員がこちらを向き、戦闘が一時中断された。

騎士たちはフルフェイスの面を着用しているため表情は分からないが、マサは心配顔で私を見ている。

普通の人には、ご機嫌斜めでどう気を晴らすかと物騒な考えを巡らせているような顔にしか見えないかもしれないが…。

とにかく、自分に注目が集まったのを良いことに、私は渦巻く感情を吐露し始めた。

「…ツタマきた。アゝツタマきた。貴方たち一体何様のつもり？  
たかだか噂を真に受けて彼を極悪人と勘違いするなんて、王国騎  
士ってヤツが聞いて呆れるわね。」

誰か、マサが実際に人を害する姿を見たことあるの？ねえ、偏見  
なしに彼と接してみたことある？

まさか1度も無くそんな人を人とも思わないような罵詈雑言吐  
いているわけじゃないわよねえ？

お国を、背負う、お偉い、騎士様が、ま・さ・か、事実も調べず  
に想像だけで人を罵るなんて真似するわけないわよねえ？

どうなの？ねえ。……ど・う・な・の・か・つて聞いているのよ！」

ダン！と右足で床を大きく踏み鳴らす。

だが、誰1人として問いかけに答える者はおらず、部屋の中はシ  
ンと静まりかえった。

それがさらに私の怒りを増長させる。

「ああっ、そう！答えられないんだ？否定しないんだ？

へえ、そうなの！騎士様ともあるうものがね！ふうん、そ・う・  
な・の・！

今だって、彼は自分が無実の罪で襲われているにも関わらず、貴  
方たちを傷つけないように気を付けて戦っていたのにな！？

全くの素人にだって分かる事が、どうしてプロである貴方たちに  
分からないのかな！？

はっ！バツカみたい！変な思い込みに囚われているから簡単な真  
実にも気付けないんじゃない！

何が鮮血の悪魔よ！趣味の悪いあだ名付けて喜んじゃって、子供  
じゃあるまいし！

大体ねえ！最初に言ったように私は私の意志で彼の傍にいるの！  
なのに、勝手に助けるだなんだって…、貴方たち正義って言葉に  
酔いでもしてるのかしら！？

それに振り回されるこっちはホンットいい迷惑よ！  
誰に何吹き込まれたんだか知らないけど、話ひとつで簡単に踊ら  
されちゃってさ！

それで何が王国騎士！？笑わせんじやないってーの！自分の頭で  
考えるってことを知らないわけ！？

「あ、あ…アミ。その…も、もうその辺で。俺は別に…。」

なぜか、顔を真っ青にさせたマサが拳動不審に弱弱しい声で話し  
かけて来た。

私は、そんな彼をギンと睨み付けて言った。

「マサもマサよ！！」

「っ！」

途端に、驚きに目を見開いてザツと音を鳴らしながら大きく後ず  
さるマサ。

そんな彼の反応お構いなしにツカツカと距離を詰めて、人差し指  
を向けながら口を開く。

「何、黙って悪人認定受けちゃってるわけ？ちゃんと否定しなさい  
よ、否定を！」

その結果がどうか、どうでもいいのよ！否定したって事実が  
大事なのよ！分かる！？

沈黙しちゃうとね！無意識に自分の中でもソレが肯定されていっちゃうんだから！

だから、違うことは違う、嫌なことは嫌ってちゃんとやわなきやダメなの！

どうせくだなんて言い訳して、自分の事を諦めてるんじゃない！いちいち私にスマンだ何だ謝る暇があったら、どう改善したらいいのか考えなさい！

そりゃね？否定を続けるってのはとっても大変で気力のいることよ！？

でも、だったら、その時は周りの人を頼りなさい！1人で何とかしようとしなくていいの！

黙ってたら、こっちだって助けていいのかどうか分かんないですよ！

分かった！？分かったら、返事は！返事！」

「…えっ、あ、お…おお。」

思わず、といった風にマサはコクコクと首を縦に振った。

彼が頷いたことに満足したのか、私の激情はそれから急速に萎んでいった。

そして、ふと正氣に戻った頭で己の所業を顧みて一氣に顔から血の気が引く。

う…あ…。わ、私、何てことっ…。

この世界に当てはまるのかわからないけど、騎士って確かある程度身分がないと就けない職業だったような…。

だとしたら、身元もろくに分からない私なんか向こうの気分ひと

つで処分…なんて…。ひええ！

恐る恐る騎士たちの様子を窺うと、未だ微動だにしない彼らの姿が目に入った。

マサの服をクイクイと引っぱり屈ませて、私は彼に向き直り小声で話しかける。

「どっ、どっ、どうしよう。興奮しすぎて内容あまり覚えてないけど、とんでもないこと言っちゃった気がするっ。」

あつ。ま、マサも…ごめんなさい。私、怒りすぎると見境なく説教しちゃう癖があるみたいで、その…。」

「え。あゝ、そうか。…いや、俺は別に構わんのだが。」

問題は…と2人で騎士たちへ顔を向けた。

すると、ペイント甲冑の男が口だと思わしき場所を手で押さえ力タカタと震え出した。

小娘に好き勝手言われて激昂してしまったのだろうか…。

私は非常に不安な気持ちでマサの服に縋りついた。

里の者が俺を責める声が頭の中で幾重にも響いていた。

団長の指示で熟練した連携を見せる騎士たちを、俺は無感動に眺める。

同時に向かって来た3人を反射的に斧で薙ぎ払おうとして、それが当たるギリギリのところまで正気に返った。

咄嗟に太刀筋を変えて各々の獲物を飛ばすに留める。

あのまま振り抜いていたら、全員胴から真つ二つになっていたことだろう。

過去に引きずられて、取り返しのつかないあやまちを犯すところだった。

平常心を取り戻した俺は、背後のアミと前方の騎士たち、それから可能な限り宿も壊さないように細心の注意を払いつつ、次々と繰り出される攻撃を時に受け止め、時に受け流した。

彼らが疲れに膝をつくのが早いか、攻めるだけ無駄なことを悟るのが早いかは分からないが、どちらにせよすぐに片が付くはずだ。

そう考えて防御に徹していたのだが、突如、真後ろから見覚えのある塊が团长を目掛けて飛んでいった。

以前、町で買った日持ちのする芋だ。

そして、俺の後ろにいてそんな事ができるのはたった1人。…そう、アミだけだ。

驚いて振り向くと、いつだったかの黒い空気を纏ったアミが投擲の形を取ったまま醒めた目つきでこちらを見ていた。

止める、アミ。ヘタに手を出すと、お前まで悪だと勘違いされるかも知れないんだぞ。

こんなことで間違っただけで投獄でもされようものなら、悔やんでも悔やみきれん。

当然、そんな俺の気持ちを通じるはずも無く、彼女は姿勢を正し



眉間に皺を刻んで静かに口を開いた。

その内容によると、どうやら今回の怒りは俺が騎士たちに言われ  
の無い中傷を受けたことに起因しているらしい。

アミは俺に付き纏う聞くに堪えない噂をありえない話だと一蹴す  
る。

それが俺にとってどれだけ嬉しいことか、彼女には分かるまい。

こんな『立てば死神、座れば悪魔、歩く姿に人が死す』などと囁  
かれる俺を、ほとんど無条件で信用してくれる者など他にはいない。  
少しは仲が良いと思っていた奴らにしたって、いちいち真偽の程  
を尋ねてくる始末だ。

「冗談混じりならまだしも、真剣な顔で聞かれてしまうのだから救  
いようが無い。」

これまでも彼女という人間は俺の心の大部分を占めていたが、こ  
の一件で何者にも代えがたい唯一の存在になった。

……………のだが。

正直、今のお前は怖すぎるぞ、アミ。

視線をやれば、あの精鋭揃いの騎士たちが一切の反論も出来ずに  
棒立ちになっている。

…さもありません。

怒りの矛先が自分に向けられている訳でもない俺ですら、心身が  
委縮するのを止められないのだ。

動けば死ぬと言われれば納得しそうなほど極限まで張りつめられ  
た緊張状態に、あぶら汗が流れる。

まるで瘴気でも纏っているかのような、何とも重苦しい空気に窒

息してしまいそうだ。

前ははすぐにいつもの彼女に戻ったから分らなかったが、そうでなければ俺もこんな風に責められていたのだろうか？

それを考えると身震いがした。

だが、何と言っても今彼女が睨みつけているのは王弟だ。

横暴な人物だとは聞かないが、それでも機嫌を損ねれば不敬罪で処分される事だつてあり得る。

今のアミに声をかけるのはかなりの度胸が必要だが、いい加減に止めなければ彼女の身が危ないかもしれない。

乱れる呼吸を整え、俺はなけなしの勇気を振り絞って彼女に話しかけた。

「あ、あ…アミ。その…も、もうその辺で。」

自分自身のこんなにもった声を聞いたのは初めてだった。

直後、アミに鋭い目を向けられてギョツとする。

反射的に身を引くと、完全に意識を騎士から俺に向けた彼女が指をさしながら間近に迫ってきた。

彼女の迫力に気圧されてあまり話が耳に入っではいなかったが、返事はと言われつい頷いてしまう。

感情を出し切って満足したのか、アミはそれから緩やかにいつもの表情に戻っていった。

かと思えば、いきなり顔を蒼白にして、先ほどまでとは打って変わって怯えた様子を見せる。

どうした、と聞く前に彼女は俺を屈ませて小声で言った。

「どうしよう。内容あまり覚えてないけど、とんでもないこと言っちゃった気がする。」

正気に返って、騎士相手に暴言を吐く事の危険さを理解したらしい。

しかし、ほんの少し前の記憶も残っていないとは、どんな怒り方だ。

と、考えたところで説教された内容を今さら思い出して、心の内で苦笑いが漏れた。

騎士相手になっていた時のような容赦ない責めとは違い、むしろ子を心配する母親のような風情だったな、と思う。

しかし、自分を諦めるなどは痛いところを突かれたものだ…。

彼女の言うように、人を頼る事を覚えれば少しは何かが変わるのだろうか。

思考に耽っていると、今にも泣きだしそうな顔をしたアミが俺に謝って来た。

「ごめんなさい。私、怒りすぎると見境なく説教しちゃう癖があるみたいで…。」

俯きがちになるアミに、気にしていない旨を告げる。

そんな事より問題は…と言葉を途中で切って視線を上げると、团长はシヨックを受けているのか口に手を当てて震えていた。

もし、こいつが怒り任せにアミを捕えようとしてもしたら、庇ってくれた彼女には悪いが、俺は自分の持てる力を全て使っても騎士たちを止めるだろう。

アミを失うくらいなら、例え一国を敵に回したとしても後悔はない。

弱々しく服に縋りついて来る彼女を前に、強くそう思った。

## 第十五話　誇り

勢いよく片膝をついて、ペイント甲冑の男は言った。

「あ…貴女の言う通りだ…。私はっ、私は自分が情けない！」

「へ？」

「ああ？」

「団長？」

男はもどかしげに面を取って床に投げ捨てると、その赤茶色をした切れ長の瞳を己の右腕で覆った。

震えていたのは、どうやら泣いていたせいらしい。

瞳と同色の短髪と丁寧に揃えられた口髭。年の頃は30半ば程に見えるそれなりに整った容姿の男は、人目も憚らずに声を上げ、顔を涙でグシャグシャに濡らしている。

滂沱とか号泣とか、そんな表現が相応しいドン引き必死の豪快な泣きっぷりだ。

普段の彼にはあり得ない事なのか、私とマサのみならず騎士たちまでオロオロと困惑した様子を見せる。

結局、彼が落ち着くまで私たちは全員その場に立ち尽くしていた。

しばらくして平静を取り戻した男は、真偽も確かめずにマサを罪人扱ったことを深く詫びた。

己の間違いに気が付いた時、それを素直に認め頭を下げられる人

間は案外少ない…と思う。

先ほど見せられた醜態で下降した好感度が、大幅に上方修正された。

それから、実は団長かつ王弟といつとんでもない権力持ちだった彼は、自分の名を使ってマサの無実を周知させようと一方的に約束して帰って行った。

おそらく無駄骨に終わるのだろうとこっそり思いつつ、騎士たちが引き上げて再び静まり返った部屋でマサと顔を合わせる。

「…疲れたな。」

「うん。」

「寝るか。」

「…うん。」

色々なことがありすぎて気力をこっそり削られた私たちは、何もかもを後回しにして早々に眠りについた。

~~~~~

翌朝。

可能な限り入室時のキレイな状態に戻してから、私たちはその部屋を後にした。

律儀にも昨夜壊れた調度品等の代金を支払うからと、マサがカウ  
ンターへ向かう。

邪魔にならないよう一足先に宿から外に出ると、いきなり左腕を  
誰かに強く掴まれた。

「っ痛!……っ、あなたは。」

そこにいたのは、以前町のギルドで絡んで来たヴェルスという傭  
兵。

彼は以前と変わらずワザとらしい軽薄な笑みを貼り付けて、私を  
見下ろしていた。

自然と嫌悪の表情が浮かぶが、だからと言ってこの男相手に取り  
繕おうとは思わない。

「…何の用。」

「くつく。相変わらず、冷てえなあ。知らねえ仲じゃねえだろう?」

「ほとんど他人でしょう。何の用だと聞いているんです。」

「あの悪魔がいなくなつて寂しい思ひしてんじやねえかなあゝなあ  
んで、親切にも慰めに来てやつたんだよ。」

全然堪えてなさそうなたこ見ると、やっぱりアイツとは金だけの関  
係だつたみてえだな。」

「いなくなつてっ、まさかアンタ!」

「喜べ。俺が、次のご主人様になってやるよ。すぐに金づるが見つ  
かつて良かったな?」

「冗談!

放してよ!自分じゃ敵わないからって、デマを流して彼を捕まえ  
させようとするなんて最低!」

「どうした、アミ!?」  
「マサ!」

私の叫びに反応したマサが宿から姿を現すと、ヴェルスは驚愕に目を見開いて固まった。

その態度に、やはり己の推測は間違っていないのだと確信する。

マサはヴェルスとその彼に掴まれている私の腕を見て、顔を顰め怒りを露わにした。

「…テメエ。アミに何してやがる。」

「嘘だろ、何で!」

「ああ?」

「マサ、昨夜のアレはこいつの仕業だったみたいなの。」

「っほお?…成程なあ。」

その一言だけですぐにピンと来たのか、マサは皮肉気に笑うと動揺を見せるヴェルスへ1歩近づく。

「随分と、ナメた真似してくれてんじゃねえか。俺はあの時、2度目は無えと言ったはずだぜ?」

「っく。」

怯んだ拍子に手が若干緩んだので、そのチャンスを逃さずに素早く掴まれていた腕を外した。



そのままの流れで、今度は逆にヴェルスの腕を掴んで背面に回りつつ捻り上げる。

痴漢撃退講座の捕獲編で習った関節技だ。失敗さえしていなければ動くほど腕が痛むはずなので、もうヴェルスは逃げられない。

「つつつ！…つのアマ！」

見下していた相手に取り押さえられてプライドでも傷ついたのか、憎々しげに言い放つヴェルス。

それを完璧に無視して、私は啞然とするマサに問いかけた。

「マサ。この国では悪質な嘘を意図的に広めたり、婦女に暴力行為を働いたりした人間は捕縛対象になる？」

「っえ？…あ、ああ。なるぞ。」

「だったら、お願い。衛兵でも騎士でもいいから、ここに連れて来て。」

少なくとも暴行に関しては、私の腕にくっつきり跡が残っているから現行犯で捕まえられると思う。」

「な！？テメエ！」

「馬鹿野郎、こいつは階級Aだぞ！？俺が押さえとくから、アミが呼んで来…。」

「何を言ってるの！」

この男が一芝居うつて被害者面でもしようものなら、初めて会った他人がどっちを信用するかなんて分かりきった事でしょう！？」

「そっ…！」

「どうしました!？」

突然降って湧いた第3者の声に反応して目を向けると、昨夜の騎士団の中にいた小柄な甲冑男がガチャガチャと音を立てながら走って来るのが見えた。

何というタイミングの良さ。

彼なら、一方的にマサを悪と決め付けずに話を聞いてくれるだろう。

ある意味、当事者でもあるから余計な説明も省ける。

さらに、無駄に階級の高いこの男を連行途中で逃がしてしまう可能性も低い。

至れり尽くせりだ。

ヴェルスとの確執が終末に向かっているのを感じて、私はフツと安堵の息を吐いた。

攻撃に備えて警戒体勢を取っていたというのに、いきなり団長が膝をついて無防備な姿を曝す。

意図が分からず眉間に皺を寄せていると、彼は『アミの言つとおりだ』と嘆くように言った。

さらに、面を外して豪快に声をあげて泣き出したというのだから、焦りもする。

こんな反応は全く想定外だ。

それに、恐怖に泣き叫ばれることはあっても、自分情けなさに涙

を流す男を目の前にした経験など皆無だ。

こういった場面でするべきなのかなど、俺に分かるはずもない。

ただ、誰一人動かないところを見ると、他の者も同様に戸惑っているのではないかと思われた。

噂に聞く銀の騎士団の王弟団長というのは、正義感で努力家、自分にも他人にも厳しいが面倒見は良く懐が広い、そんな人物であったと記憶している。

騎士たちも信じられない思いなのだろう。

その後、気を取り直した団長は噂通り潔くも凜とした態度で俺に謝罪すると、未だどこか呆然としている団員を連れて颯爽と帰って行った。

…体力的には全然だが、精神的にかなり疲れた。

それはアミも同じだったらしく、俺たちはその後すぐに床とこにつき泥のように眠った。

~~~~~

翌朝。宿を発つ前に、2人がかりで荒れた部屋を片付けた。

この宿の代金は前払いで、さらに最近開発された暗号入力式開閉扉を導入しているため、出立時の煩わしい手続きが必要無い。

が、昨夜の騒ぎで置物や絨毯などに傷がついてしまったので、その弁償をしようとカウンターへ向かった。

俺が直接やった事ではないが、結局のところ自分が泊まったせい

でこの宿は余計な被害を被る羽目になったのだ。  
素知らぬ顔で放っては行けない。要は迷惑料だ。

受付の男は俺を見て慌てるような様子を見せていたが、すぐに気を持ち直して丁寧に頭を下げた。

さすがに高級宿の従業員だけあって、教育が行き届いているらしい。

支払いしたい旨を伝えると男はパチパチと瞬きした後、僅かに眉尻を下げて言った。

「その客室の件でしたら、銀の騎士団へ請求するように申しつかっておりますが…。」

「そうなのか？」

「はい。もうじきいらっしやる騎士様の立会いの下、破損の程度を確認する手筈になっております。」

確かに、実際に傷をつけたのは彼らなのだから、金を払うに1番筋が通っていると言えば通っているのか。

しかし、それならそれで俺達にも伝えておけば良いものを…と若干の憤りを覚えなくてもない。

だが、すぐにそれも仕方のない事かと考え直した。

彼らも、自分の落ち度でもないのにわざわざ金を払おうとする人間がいるとは夢にも思わなかったのだろう。

「…そうか。分かった、手間をかけさせたな。」

「いいえ、とんでもないことでございます。」

お客様の疑問にお答え致しますのも、正しく我々の務めでござい  
ますれば…。

過分なるお気遣いを賜り、ありがとうございます。」

深々とお辞儀をする従業員に、何とも言えない気持で後ろ頭を搔  
いた。

<sup>かす</sup>傳かれる事に慣れていないせいか、ここまで恭しく出られると逆  
に慇懃無礼に感じてしまう。

と、そこで外からアミの怒鳴る様な声が聞こえて、俺は反射的に  
身を翻し走り出した。

宿を出てすぐの場所にいた彼女は、助けを求めるように俺の名を  
呼ぶ。

見れば、いつかの町でアミに手を出そうとしたヴェルスという男  
が、また性懲りもなく絡んできているようだった。

それに驚くより先に『少しの間だからと、油断して彼女から目を  
離すのでは無かった』という後悔の念が浮かぶ。

ふと、ヴェルスがアミの細腕を強く掴んでいる事に気付き、心が  
一気に煮え滾った。

…っの野郎。折れたらどうしてくれる。

凄みながらヴェルスに話しかけるが、なぜかこいつは信じられな  
いものを見たような目をして懐疑的な声を上げる。

その様子をいぶかしんでいると、未だ捕まったままのアミが吐き  
捨てるように言った。

「マサ、昨夜のアレはこいつの仕業だったみたいなの。」

彼女のその一言で合点がいった。

俺が、騎士に捕縛されも殺されもせず、この場に現れたことに驚いていたのだろう。

そして、自分の手を汚さずに邪魔な俺を排除したこいつは、アミを使って憂さを晴らそうと宿の前で待ち伏せをしていた、と言っわけだ。

…とことん性根が腐ってやがる。

先ほどより数段殺気を込めて1歩足を踏み出せば、ヴェルスは息をのんで軽く身を引いた。

次の瞬間、アミが素早く腕を振りヤツの手から逃れる。

彼女から一先ずの危険が去った事にホツとしていると、何を思ったのか今度はアミがヴェルスを不思議な技で拘束した。

抜け出そうとして走る痛みに呻き、動きを止め顔を顰めるヴェルス。

非力なアミが階級Aの傭兵を押さえつけているという、信じ難い光景に思考が混乱する。

そんな俺と対照的に、冷静な態度でアミはヴェルスがこの国で捕獲対象になるという事実を確認すると、兵を呼んでくるように指示を出してきた。

危険だからと役が変わるよう提案すると、俺に強い眼差しを向けた彼女に浅慮せんりょを窺うかがめられてしまう。

ツラがマズいのは事実かもしれないが、アミのキツパリとした言いようには少し凹んだ。

と、そこで俺たちの会話を遮る何者かの声が響く。

チラと視線をやると、昨夜の小柄な騎士が走って近づいて来ていた。

そういえば宿の従業員が言っていたな、と思い出しながら俺は再び視線をアミに戻す。

すると、ヴェルスがこっさり仕込みナイフを取り出し彼女を傷つけんとする様が入り、俺は急いで腕を伸ばした。



## 第十六話　渴望

それは一瞬の出来事だった。

目の前で滾々（こんこん）と流れ落ちてゆく根源の赤。

鼻をつく錆びたような鉄の匂い。

ピチャピチャと音を立てて地面を跳ねるその液体は、激しく自己を主張するように石畳を染め上げる。

茫然と傷口に触れてみれば、生温かくヌルリとしたソレは簡単に私の手に付着した。

怖い、と思った。ただ怖いと思った。

傷が痛々しいから？

こんなにも大量の血が流れるのを見たのは初めてだから？  
もしかしたら死んでしまいかもしれないから？

…否。違う。もう逃げられないからだ。

もうこれ以上逃げられないと、心が悟ってしまったからだ。

この世界が夢でも幻でも無い現実のものであると、五感の全てで理解してしまったからだ。

突如、激しい頭痛に襲われた。

呼応するように起こった大きな耳鳴りは、さらに頭部の痛みを増長させる。

視界はまるでテレビの砂嵐を見ているかのように灰色に乱れ、もはや何も映しはしない。

上手く呼吸ができず、口内が渴く。

心臓は破れそうなほどの鼓動を繰り返し、体中から汗が噴き出した。

四肢は痺れ、今自分が立てているのかどうかすら分からない。

苦しい。ただ、苦しい。

灰色の視界が黒に変わったのは、それから間もなくの事だった。

~~~~~

…どこか遠くで、子供が泣いている。

ゆっくりと意識を浮上させてみれば、私は辺り一面闇に覆われた空間に佇んでいた。

霞みがかった思考は、この状況に何の疑問も抱くことは無い。

緩慢な動作で辺りを見回し、声のする方向へと足を踏み出した。

何日も歩いていたような気もするし、あっという間だったような気もする。

ようやく辿り着いたそこで、1人の少女が小さく蹲って泣いてい

た。

「こんなところで、どうしたの？」

声をかけると少女はビクリと身体をふるわせ、次いで、恐る恐る私を見上げて来た。

少女の顔を確認してギョツとする。

これ…は…5歳くらいの時の…私？

「お…おねえさん、だあれ？」

「あ、えつと。私は亜美。中島亜美。」

「あみ？あみもあみだよ。いつしょだね。」

少女は、自分と同じ名前であることに安心したのか、無邪気な笑顔を見せてきた。

私は彼女のすぐ横に屈んで、濡れた頬を指で拭いながら尋ねる。

「アミちゃんは、どうしてこんな所にいるの？」

「だって、こわいんだもんっ。」

パパとママもいないし。おともだちもいないし。

あみね。あみ、ぜんぜん知らないセカイにかっつてにつれてこられちゃったの。

だあれもしらないし、なんにもわかんないの。ひとりぼっちなのでも、そんなのこわいでしょ、かなしいでしょ。

だから、あみはずっとココにいるの。おそとになんかいかないの。

「ココにいたら、こわいことなんにもないから。」

「…そっか。」

「ちよつとさびしかつたけど…。でも、おねえさんがきてくれたし、もうへいきー！」

そう言つて、子供の私は満面の笑みを浮かべてギュッと抱きついて来た。

「ねえ、おねえさん。ずっとココにいてよ。」

あみとずーっとずーっといっしょにいて！ね、おねがい。」

「アミちゃん、それは…。」

彼女と一緒にいること自体に問題は無い。

元々、私と彼女は同じものなのだ。むしろ、その方が良いとも言える。

けれど、この場所に2人で残れば現実にいる私の肉体はどうなる。良くて植物状態、悪くて死？…そんなのはダメだ。

何とか彼女を説得して、一緒にここを出ないと。

「…あれ？ちよつと、待つて。何か聞こえない？」

「なあに？」

2人揃つて耳をすますと、かなり上空の方から私の名を呼ぶ声が聞こえた。

耳慣れたそれに、少女は嬉々とした表情を見せる。

「まさだ！」

「…そうみたい。でも、この感じ…泣いてる？」

「ほんとだ。まさないてるー。なんで？」

「もしかして…私とアミちゃんが2人でここにいるから…かな。」

「ええー。なんで、なんでえ？んんん？あつ、そーいえばっ！

まさのおともだちのがんちゃんもなっちゃんもやすも、ちゃんと  
まさのお力おみておハナシしてなかったよね。」

「え…っと、そう言われればそうだったような。」

「もしかして、まさもあみといっしょでひとりぼっちなのかな。  
だから、かなしくてないてるのかな。」

「アミちゃんがそう思うのなら、そうかも知れないね。」

「あみ、まさがかなしのヤだな。だってね。だって、あみまさの  
ことスキだもん。」

「……………好き？」

「うんっ。あのね、あみね、まさのことだあいスキなのっ。  
まさはとーってもやさしくって、とーってもつよくって、とーっ  
てもかわいいんだよ。

でも、とーってもよわいところもあってね。あみ、まさをまもっ  
てあげなきゃーっておもうの。

だからね、まさがあみといっしょでひとりぼっちなら、あみがい  
なくなったらないちゃうなら…」

「あみ、がんばっておそといっってみる！」

「え…あ…、そ、そう。うん、そうね。一緒にマサのところに戻る  
っか。」

「うん！かえろー！」

そうして、私と小さなアミは手をつないで暗闇を歩きだした。

それにしても、私がマサの事を好きだったとは初耳だ。

親切な人だという意味である程度の好意は持っていたが、それだけだったはずだ。

しかし、この子もあれだけ外は怖いと主張していたのに、彼が泣いているという理由であっさり自分から出ようとするとは。

それだけで、私の中でマサがどれほど大きな存在になっているのか分かったような気がした。

同時に、このまま目を覚ました時、自分の身に起きるであろう気持ちの変化が怖くなった。

ギリギリのところでは何とか彼女を守る事が出来た。

そのかわり己の腕に靱帯まで届く深い傷を追い、夥おびただしい量の血が流れた。

が、この程度なら包帯でも巻いておけば、5日程度で完治するの  
で特に慌てはしない。

多少痛みはするが、無視できる範囲だ。

逃げようとしたヴェルスはすぐに騎士に取り押さえられ、一方的  
な殺傷行為による牢送りが決定した。

それを黙って見ていると、腕の中に匿っていたアミがなぜか傷口  
に触れて来る。

視線をやれば、どこか蒼白い顔をした彼女が俺の血のついた掌を  
じっと眺めていた。

そして、全身をブルリとふるわせた後、彼女は唐突に気を失った。  
倒れないように支えてはみたが、尋常でない量の汗が流れている  
のを見て焦ってしまう。

「おっ、おいっ！アミ！アミ！？」

「待って下さい、マーシャルトさん。あまり揺すらない方が良い。」

騎士の助言に少しだけ冷静さを取り戻した俺は、腕の良い医師を呼んでもらえるように懇願した。

血が苦手で見れば気絶してしまうといった人間も知っているが、それにしても様子がおかしい。

俺の言葉に頷いて、騎士は拘束したヴェルスを肩に担いで走って行った。

待つ間に自分の怪我の処置をして、その後、汚してしまった石畳を手持ちの布で拭う。

店の前での事だからか、途中から宿の清掃員がその作業を引き継いだ。

また、客が入らなくなるからと従業員用の部屋のベッドへ寝かせるよう促された。

こちらとしても、ありがたい提案だったのですぐに首を縦に振る。極力揺らさないよう慎重にアミを運び込みながら、確かに俺が宿の前に居座ればそれだけで立派な営業妨害だなと自嘲した。

20分程で再び姿を現した騎士は、何と王宮専属医師を伴って帰ってきた。

アミの額に手を置いて水魔法の応用で容体を確認した医師は、精神的な負荷からくる昏睡状態だろうと診断する。

また、肉体的な疾患ではないため治療法が存在せず、今の状態ではこのまま目覚めるかどうか分からないとも言われた。



咄嗟には理解出来なかった。頭が理解することを拒否した。  
アミが2度と起きない可能性があるなど、考えたくも無かった。

~~~~~

宿に部屋を借りて、俺はひたすらアミの看病を続けた。  
と言っても、できることなどほとんど無いに等しい。

ただ、馬鹿みたいにベッドの横に突っ立って昏々と眠り続ける彼女を見ていた。

血の気の引いた白い肌をして、ピクリとも動かないアミをまるで人形のようにだと思った。

その夜は一睡もしないまま次の日の朝を迎える。

食欲も全くわかず、ただアミの目覚める瞬間を今か今かと待ち続けていた。

昼前に昨日の騎士と医師が揃って訪ねてきた。

医師は、血液に栄養がどうか良く分からない事を言っ、アミに特殊な魔法を施す。

騎士は、牢で目覚めたヴェルスが自棄になり自分があの日の噂を流したという事実を暴露したそうで、その報告と確認を取るためにここまで来たそうだ。

詳しいことは彼女にしか分からないと、それだけを告げて俺は口を噤んだ。

あまり人と会話する気にはなれなかった。

医師がそんな俺を痛ましげに見ていたが、何も言わずにまだ話を聞きたそうにしていた騎士を連れて去って行った。

その日の夜。

そういえば、彼女は風呂が好きだったなという事を思い出して、女の従業員に身体を拭ってもらうように頼んだ。

ほんの数分とは言えアミから目を離すのは辛かったが、さすがにそれに立ち会うほど無神経ではない。

何も変わらないまま翌日が来た。未だアミは眠り続けている。

今日も昼ごろに医師が訪れて、彼女に同様の魔法を施す。

俺が食事を摂っていないことを見抜いて釘を刺して来たが、黙ってアミを見ていると諦めたようにため息を吐いて帰って行った。

夜。俺は悶々と彼女が目覚めない理由を考えていた。

彼女が昏睡してしまうほど、拒絶したいのは何なのだろうか。

血に何かしらの強いトラウマでもあったのか？

平気そうに振る舞っていたが、実は故郷を失った事が悲しかったのか？

それともまさか、俺と一緒に旅をすることが本当は辛かったのか？

なあ。俺は2度とお前に名を呼んでもらうことは…、微笑んでもらうことは出来ないのか？

ふいに目頭が熱くなり、1粒の涙が零れた。

今までどれだけ理不尽な暴力を受けようが蔑み罵倒されようが、1度たりとも流れなかった涙があっさりと零れ落ちた。

それに驚くと同時に納得する。

俺の心をこつも簡単に揺さぶることが出来るのは彼女だけだ、と。彼女だけが、俺を化け物では無く、ただの人にしてくれる。そしてその逆も、だ。

彼女だけが、俺をただの亜人ではなく、真の悪魔に変えることができる。

膝を折って腰を屈め、アミの華奢な肩に額をつけて、嗚咽まじりに名を連呼した。

彼女という温もりを知った今、ひたすら孤独だった昔にはもう戻れない。

…頼むから、目を覚ましてくれ。

お前が望むなら何だって叶えてやるから、だからっ。

その時ふと誰かの手が髪を緩やかに撫でつけた気がして、俺は信じられない思いで身を起こした。

「っアミ!？」

「…………マ…サ…。泣か…ないで…」

大丈夫…夫、…あみ…ずうっと…そばに…いる…よ。」

かすれる声でそう言ったアミは小さく笑み、ぎこちない動きで再び俺の髪を撫でる。

自分に都合の良い夢でも見ているのだろうか。

…だが、もうそれでも構わない。俺は彼女に縋りついて、一晩中

無様に泣き続けた。

## 第十七話　リスタート

息苦しさに目を覚ますと、マサが私の腹部にうつ伏せに頭を乗せて眠っていた。

原因はこれかと思いつつ、起こさないように慎重に枕と身体を入れ替える。

ベッドの側面から上半身だけが乗っかっている体勢を見て、おそらく気絶した私を看病していて疲れてそのまま寝てしまったのだろうと推測した。

よく見れば、マサの瞼は腫れて赤みがさしている。

顔の迫力は増していたが、それほど心配されていたのかと思うと胸の内にジワリと染入るような愛しさが募った。

と、そこで自分の中に湧いた感情に驚いて、やはりあの小さな私との出来事は単なる夢ではなかったのだと理解する。

静かにベッドから降りると、身体の節々が痛んだ。

今が朝である事から考えると、私は昨日から丸1日近く眠っていたらしい。

全身を順番に軽く動かして凝り固まった身体をほぐす。最後に首を一回回して、息をついた。

落ち着いて周囲を見渡せば、どうもまた同じ宿に部屋を取ったらしいことが分かった。

自分のせいで無駄なお金を使わしてしまったと思うと、眉が下がる。

けれど、おかげで無事に心を取り戻す事ができたし、これでもやく前へ進む事ができる。

勿論、今までにない不安や恐怖も感じているけれど、少なくともマサが隣りにいる間は大丈夫じゃないかという漠然とした安心感があつた。

「アミツ!？」

目が覚めたらしいマサが、ガバツと勢いよく起き上がった。

ベッドに私がないことを確認し、焦ったように辺りを見回している。

そんな彼の姿を見て、私は苦笑い交じりに声をかけた。

「おはよう、マサ。」

「っアミ!ほ、本物か?夢じゃ…ねえよな?」

「うん。何か私、長く眠ってたみたいで、迷惑掛けてごめんね。」

「いい。起きてくれただけで…。本当に、それだけで…。」

首を緩やかに横に振りながら、感極まったように涙を滲ませるマサに疑問を抱く。

1日眠っていただけにしては、ヤケに大げさな反応だ。

いつもより少し力の入らない手足を眺めて、まさか…と口を開いた。

「ま、マサ。私、どのくらい眠っていたの…?」

「ん？ああ、お前が倒れてから今日で4日目だ。  
このまま起きねえんじゃねえかと心配したぞ。」  
「4日ああ！？」

その後、マサに詳しい説明を聞いた私は絶叫しすぎて立ちくらみを起こし、ベッドへ強制移動させられたのだった。

~~~~~

「アミ、起きたばかりなんだから無理はするな。」  
「別にこのくらいどうってことないって。さっきから、マサは心配しすぎ。」

昼に顔を出した医師から異常無しと診断を受け、食事は消化に優しいものにするよう助言をもらったので、厨房の一部を借りてお粥を作ることにした。

作業を進める私の傍で、大丈夫かと周りをウロチョロするマサは図体の大きさも手伝って少々鬱陶しい。

今回の件で、彼から結構な好意を持たれているらしい事は分かった。何せ泣かれるくらいだ。

けれど、私にはその方向がどうも父性愛ではないかという気がしてならない。

彼には今も私が中学生くらいに見えているんじゃないだろうか。いかんせん、態度がその頃のやたら溺愛ぎみだった自分の父親そ

つくりなのだ。

以前はそれでも問題なかったけれど、今となってはもどかしいというか何というか…。

かと言って、私が好きだ何だと告白したところで、マサを困らせるだけだろう。

それに、まだ立場だって対等じゃあない。

こんなおんぶにだっこの状態で、1人前の人間として見て欲しいなどと言うのは甘えだ。

だから、気持ちを伝えるなら、私がきちんと1人で生計を立てられるようになってからが良い。

…が、それまで何のアプローチもしないという愚行を犯すつもりは勿論ない。

告白の成功率を上げるためには、少しずつでもアクションを起こさなければ。

放っておいて、鳶に油揚げなんて状況に陥るのも避けたい。

こっちの人間に比べたら極端に地味顔で身体も凹凸が少なく色気もへったくれも無いかもしれないが、そんな事は百も承知だ。

私の持てる全てのスキルを使って、女を意識させてみせようじゃないか。

うん。目標があると、何事にもやる気が湧いて来る。良い事づくめだ。

とりあえず、亜人や同性しか恋愛対象にならないという可能性については、現状目をつぶることにした。

内容が内容だけに直接聞くのも憚られる。



そうと決まれば、まずはさりげないスキンシップを増やすことから始めよう。

いきなり態度を変えて警戒させてもいけないので、こつこつことは慎重に進めたい。

それと、服は基本カッチリと着こむ。無駄に露出を多くするより、普段は隠しておいて時折わずかに肌を見せるといった方が効果的だったはずだ。

髪を結びあげてうなじアピールは、短くて無理だから保留。

あと思いつくのは、なるべく笑顔を心がけるくらいかな？

ちなみに、こつこつた作戦を考えたり、ましてや実行するというのは初めてだったりする。

今までは大抵告白された流れで付き合っていただけで、自分から何かをした事は無かったし、しようとも思わなかった。

…そう考えると、ある意味これが私の初恋なのかもしれない。

そんなことが頭をよぎったせいか、急に気恥ずかしくなって無駄にガシャガシャと鍋をかきまわしてしまった。

平常心、平常心。

それから完成したお粥と一緒に食べて、今後の話をしようという場面で意識的に最初の第1歩を踏み出してみる。

ここからが私の本当の異世界生活の始まりなのだ、内心で秘かに気合を入れるのだった。

気がつけば朝だった。  
やはり願望が見せた夢だったのかと一瞬落胆したが、ふいに視線

を落とせばそこにいるはずのアミがベッドから姿を消している。

彼女が起きたのではという期待と誰かに攫われてしまったのではという不安から、慌てて部屋を見回していると背後からずっと聞きたくてたまらなかった声がした。

「おはよう、マサ。」

振り向いた先にいたのは、拍子抜けするほどいつもどおりのアミ。嬉しさに涙を滲ませれば、彼女は首を傾げて自分の手足に視線をやる。

話を聞けば、どうもアミには長く眠っていたという感覚がなかったらしい。

そして、昨夜の出来事は彼女の記憶に無いということも分かった。現実だろうが夢だろうが、かなり恥ずかしい事をしていた自覚があるので逆に助かった気分だ。

倒れてから今までの経緯を説明すると、アミには珍しく大げさな反応を見せてくる。

立ちくらみを起こしてしまった彼女を、俺は無理やり抱きかかえてベッドへ運んだ。

降ろして腕を引き抜く際に、そこに巻かれている包帯に気付いて、アミは痛ましそうな顔をする。

それから、手を伸ばしてきて傷にひびかないよう包帯の上から腕を優しくさすり、とどめに瞳を潤ませつつ上目遣いに謝ってきた。

そんな彼女の一連の行動に、思わず抱きしめたい衝動に駆られる。必死に理性を働かせて何とか堪えたが、どうも久しぶりに動いているアミを前にして箸が外れやすくなっているようだ。

気を付けなければ。

ちょうど、話が終わった頃にいつもの医師が部屋を訪れた。起きているアミを見て驚いていたが、すぐに立ち直り丁寧な挨拶をしてくる。

そしてなぜか、そのあと俺だけ部屋を追い出された。

まあ、普通に考えれば精神的な昏睡だったのだから、他に聞かせられない繊細な話をするためなのだろうが…。

どうも、それだけでなく俺が一切食事をしていなかった事を告げ口する目的もあつたらしい。

そのせいで、医師が帰った後、アミに食べる事の大切さとやらを懇々と諭されてしまった。

王宮専属の身分ある医師のくせに、何ともいらぬお節介をやってくれたものだ。

~~~~~

故郷の伝統的な病人食を作ると言っつて、彼女は今、宿の厨房に立っている。

さすが高級宿だけあつて、ギルド発の最新式調理用魔法機械が揃っていた。

使い方が分からないというアミに、1つ1つ動かしながら教えてやったのだが…。

たった1度で、それら全てを簡単に使いこなして見せるのだから敵わない。

本当は前から使い方を知っていたのではないかと思うほどの手際の良さだ。

右へ左へ動き回るアミに無理をするなど声をかければ、彼女は心配し過ぎだと苦笑する。

朝、身体をフラつかせる姿を見せられた俺としては、今日1日ベッドへ括りつけておきたいのが本音なのだが、本人の意思を無視するわけにもいかない。

しばらくして、いきなりアミが激しく鍋をかき回し始めた。

どうしたのかと聞くと彼女はピタリと動きを止め、またいつもの曖昧な笑みで何でもないと首を横に振る。

その笑みの向こうで考えていることを、いつか教えてもらえる日は来るのだろうか。

アミに出されたお粥という名の白い食べ物、あまり味を感じられなかった。

変にトロミのある食感にも慣れず、首を捻りながら後ろ頭を掻く。本当に、なぜ彼女がこの米という穀物に執着するのか理解できない。

反応を恐れながらも正直に感想を言うと、彼女は病人食だからこんなものだと笑っていた。

いずれもつと美味しい米料理を作ってくれるらしい。

気を悪くされなかったことにホッとする。

食事が終わり、今後の予定について話をしようとベッドに腰かけると、アミがすぐ隣りに座って来た。

驚いて仰け反ると、彼女はきょんとした顔で首を傾げる。

いや、首を傾げたいのは俺の方なんだが…。

いつもなら正面の自分のベッドに座るところだろうと思いつつ、

わざわざそれを口にするのも墓穴を掘る行為のような気がして言えなかった。

結局、王都を発つのは、俺の怪我と彼女の体調を考慮して2日後にしようという話になった。

あれだけの深い傷がどうしてそんなに早く治るのかと怪訝な顔をされたが、そういう体質だと言えばアミはへえと感嘆の声を出しつつ頷いていた。

随分簡単に納得するんだなと聞けば、『普通の人間ならともかく、マサだしねえ』と朗らかに笑って返される。

…腑に落ちん。

何だかこのまま実は竜になれるんだぞと告白しても、全然動じなさそうな雰囲気だと思った。

無論、言わないが。

竜は古来より忌み嫌われる存在だ。

個体数が少ない上、自然の奥深くに生息しているため滅多に遭遇することは無いが、ろくに知性を持たず凶暴で圧倒的な力を有する竜を人は災害と同等の存在として忌避<sup>きひ</sup>する。

アミの前で竜形態をとるつもりは毛頭ないし、だとすればわざわざリスクを冒してまで話す必要もないだろう。

それにしても…、彼女は少し変わったか？

何となくだが、以前よりも表情が豊かになったような…。

ついでに、微妙に彼女から触れられる事が多くなった気がする。

俺には経験が無いから分からないが、病み上がりは往々にして人恋しくなるものなのだと聞く。

アミもそういった類たぐいの感情から近寄って来ているのかもしれない。

変に勘違いして理性を崩壊させるなよ、と俺は心の内で密かに自分を叱咤するのだった。

## 第十八話 裏と表

私が目覚めた日の夕方、騎士が事情聴取に訪れた。

細かく話をすれば、彼はヴェルスの性質の悪さを認め簡単に釈放しないよう進言すると神妙な顔で頷いてくれる。

そうでなくても、マサに深い傷を負わせた事実があるので、少なくとも1年は強制労働に従事させられるらしい。

まずは一安心といったところだ。

次の日の朝、ふと目を覚ますとマサがベッドの真横に立って私を見下ろしていた。

それに驚いて反射的に『わっ』と小さく声をあげると、彼はホツとしたような顔をする。

「お、おはよう。…あの、何かあった？」

「…ああ、いや。また眠りっぱなしになるんじゃないかと、つい…。」

「そつか。でも、もう全然大丈夫だから、そんなに心配しないで？」

「そうだな…。スマン。」

「やだ、謝らないでよ。心配してくれる誰かがいるって嬉しいもの。ありがとう、マサ。」

「っお、おう。」

にっこり微笑んでお礼を言うと、マサは顔を大きく逸らし、ほの



かに耳を赤く染めて頬をかいた。

前々から彼のこういう所はかわいらしく思っていたが、今そんな風に照れられると頭をギョッとかき抱いて頬擦りしつつ撫でまわしたい衝動に駆られる。

現実になんか事をすればドン引きされてしまいかもしれないので我慢するが…。

というか、その危険な思考に自分でも少し引いた。発見したくなかった己の新たな一面に心の内項垂れる。

それから後の2日間は、眠り続けて減った体力を取り戻すために部屋で軽い運動をしていた。

本当は外に出て散歩をしたり、走り込みをしたりする予定だったのだけれど、マサに止められてしまった。

押さえつけるような物言いをされたのなら断ることもできるのだが、悲壮な顔（傍目にはヤクザが因縁をつけてくる時のような無駄に迫力のある顔）で懇願して来られてはこちらが折れるしかない。

惚れた男の必死の頼みを無下<sup>むげ</sup>にできる女も少ないだろう。

少々過保護すぎる気もするけれど、私が本気で嫌がる事に対して無理強いはしてこないのと言われて嫌だとは感じない。

むしろ、それだけ大事だと思ってくれているのだとすれば、嬉しくもある。

どうせなので、運動をする前にストレッチと称してマサに背中を押してもらったり腕を引っぱってもらったりしてみた。

最初は壊れそうなの何だのの意味不明な理由で渋るマサだったが、落ち込むような表情を作って『やっぱり迷惑だよね。ごめんなさい。』

』と言ってみたら、すぐに了承してくれた。

あまりに彼がお人好しすぎて、変な人間に騙されやしないかと心配になったのはここだけの話だ。

良くも悪くも凶器的な顔面は人を寄せつけないが、本来は相当の実力があってお人好しな人間なんて欲にまみれた亡者にとってカモ以外の何ものでもない。

隣りにいる内はしっかり見張っていなければ、と拳を強く握りこんだ。

~~~~~

そんなこんなで、あっという間に2日が経過した。

次に目指す東の国の主たる都はここから少し遠く、マサ曰く急ぎのペースでも1ヶ月はかかるだろうとの事だった。

最短距離で行けばもっと早いらしいが、食糧等の物資調達のためにはある程度発展した町を経由する必要がある。

期限が定められている訳でもないし、小さな村があてにならない事はすでに充分すぎるほど知っているので特に異論は無かった。

道を歩く際、いつものように人々はマサを避けていたけれど、1つだけ違うことがあった。

通りかかった巡回の兵士が必ずと言っていいほど深々と頭を下げてくるのだ。

そして、私たち2人が通り過ぎるまでずっとその姿勢を保っている。

おそらく王弟の仕業なのだろうが、それを目の当たりにした周囲の人々は顔を青褪めさせていた。

王が悪魔に屈服したのだとか、この国はもう終わりだとか、そんな囁きが聞こえてくる。

当然、私の中の王弟の株はダダ下がりした。

戦闘時の判断能力は高いし、潔い性格で正しく物事を見ようとす  
る姿勢は買うが、民草の心を理解し纏める資質というものは持ち合  
わせていないらしい。

だから、政治に携わらずに騎士などやっているのだなと1人で納  
得してしまった。

王とやらも弟1人御すことが出来ずにこの先やっていけるのだろ  
うか…と完全に余計なお世話ながら国の行く末を案じつつ、私は王  
都を発ったのだった。

心が解放されたせいかわ、これまでずっと旅をしていて気付かなか  
った様々な事に目がいった。

よくよく見れば、太陽は元の世界のものよりも少しばかり色が濃  
いことが分かる。

草花も似ているようでどこか違和感のある作りをしているし、吹  
いてくる風には時たま生臭さが混じっていた。

最初の頃はそれらが新鮮に思えて楽しくもなったものだが、その  
内『ああ、本当に異世界なんだな』と今さらながら実感し、何とも  
言えない物悲しさを覚えた。

特に夜は望郷の念に駆られて、堪らない気持ちになる。

そんな時は、作戦がどうか関係なしにひたすらマサにくっつい

ていた。

私の不安に気付いているのかいないのか、彼はただ黙ってそれを享受してくれた。

人肌の温かさや彼の穏やかな空気に触れることで、私の心がゆっくりと風いでいく。

いずれ1人前になった暁には彼を失ってしまう可能性があるのだと考えると、先に進むのが少しだけ怖くなった。

東の国の国境へは20日程度で到着した。

夕方だったので関所手前の町で宿を取ることにしたのだが、その選択が思わぬ悲劇を生んでしまう事になるとは、その時の私たちに知る由も無かった…。

医師から聞いたのか、夕方に騎士がアミを訪ねて来た。  
彼女は私的な感情を一切交えず、事実とそれに基づいた推測のみ  
を真摯に語る。

その姿はとても年若い娘のものだとは思えない。  
後で尋ねれば、公正な判断を必要とする騎士相手に愚痴のように  
話をする、それだけ情報の信頼度が下がってしまうからというこ  
とだった。

本当に、どという育ち方をしたのだから…。

明くる日。

早朝に目を覚ました俺は『昨日、アミが起きたのは単なる夢だっ  
たのでは』という不安に駆られて、彼女の眠るベッドへ足を向けた。  
彼女の血色の良い肌と安らかな寝息に安堵するも、払拭しきれな  
い焦燥感にその場を離れることができない。

眺め出して2時間も経った頃、アミはゆっくりと覚醒した。

そして、寝起きざまに視界に入った俺の存在に驚き、短く声を発する。

状況を確認したアミは少々恥ずかしそうな顔をして、身体を起こしながら挨拶してきた。

それから、軽く眉を寄せて何かあったのかと尋ねてくる。

まあ、確かに最近の傾向から言って、そう考えても無理はない。

首を小さく横に振り気持ちを口にすると、彼女は苦笑い交じりに大丈夫だと言った。

俺はこの時ようやく自分の中にある執着心が異常性を帯びてきていることに気がついた。

アミとの約束を果たした後は、適当に会いたくなかった時にでも顔を見ることが出来れば満足するだろうと思っていたが…。

それが、今の自分に当てはまるかは正直分らない。

彼女が目に見える範囲にいなければ酷く焦りを感じるし、いたとしても自分よりそばに他人がいると意味もなく苛立ちが募る。

こんな状況で、俺は本当に彼女と離れることに耐えられるのか？

…ただ、自分が一番恐れているのはアミに拒絶されてしまうことだ。

ならば、彼女に無理を強いるような真似は俺には出来ないだろう。

それでも無意識に目で追っていたり、やたらと構ったりはしてしまいかもしれない。

いずれ気味悪がらねなければいいが…。

複雑な感情を込めて一言謝ると、アミはその心配が嬉しいと言って微笑んだ。

ああ、くそ。そんなだからお前は無防備だと言っただ。  
おかげで、ろくでもない男に執着されちまって…。

身体が鈍っているから外に出て運動したいと言っアミに、脳を介さずして口が否を唱えた。

自分で言っ、信じられなかった。制御のままならない心に戦慄を覚える。

不思議そうに理由を尋ねる彼女に返す言葉が見つからず、俺は絞り出すように『頼む』とだけ口にした。

すると、少しの間をおいてアミは困ったように笑いながら頷き、了承の意を示す。

しかし、それからすぐに俺は自分のしたことを後悔した。

彼女はスト何とかというものをするために、手を貸してほしいと言っ。

聞けば、それは本格的な運動をする前の準備のようなものらしい。1度は断つたのだが、悲しそうな表情をして俯く彼女を前にそれ以上拒むことは出来なかった。

実際に始めてみれば、力加減に対してはアミが細かく指示をくれたので案外すぐに慣れた。

逆に、最後まで慣れなかったのは彼女に触れることだ。動きやすさを重視して常より若干の薄着をしているアミに言われるまま手をやれば、はつきりとその下の肉の感触が伝わってくる。

終わりまで己を律するのに、どれだけ苦労したか…。

旅に出れば完全に2人きりの状態が続くことになる。

今回のようにアミに触れる機会があったとして、果たして自分は最後まで理性を保てるのだろうか。

……いや、無理にでも保たなければ。彼女は俺の唯一なのだ。

一時の劣情に負けて、その存在を永遠に失ってしまうなどあつてはならない。

~~~~~

何だかんだで、すぐに出立の日は訪れた。

それまでに以前のアミに戻るだろうと思っていたが、むしろ日が経つにつれ距離感が詰まって来ているように感じる。

一体、彼女にどういう心境の変化があったのだろうか。

服の裾をツイと引っばられて思考の海から意識を浮上させれば、いつの間にか王都を抜けて郊外を歩いていた。

下方へ目を向けると、アミが気遣わしげな表情をして俺を見上げている。

そして、『気分が悪いのか』とか『腕がまだ痛むのではないか』とか『これから数日は自分の足で歩く』だとか、そんな事を次々と言ってきた。

……もしかすると、微妙な態度の変化は俺に怪我を負わせた事による罪悪感から来ているのかもしれない。

とすれば、あまり嬉しいものではないな……と心の中で若干不愉快に思いながら彼女を無言で抱え上げた。

暴れこそしないうが抗議の声をあげる彼女を、珍しく無視して歩を進める。



間もなく無駄を悟ったアミは、謝罪と感謝の言葉を述べて、ため息を吐きつつ俺の肩に顔を埋めた。

旅立ちから数日の間、夜になるとほぼ毎回のようアミは情緒不安定に陥った。

彼女は、どこか虚ろな瞳をして何かを堪えるように力の限り俺の腕にしがみついてくる。

その表情は酷く辛そうで痛ましい。

相変わらず涙を流したり分かりやすく取り乱したりはしない彼女だが、下手に接触すれば脆く崩れてしまいそうな危うさがそこにあつた。

声をかけることも、まして抱き寄せることもできなかったが、それでも彼女は俺の隣で段々と平静を取り戻していく。

不謹慎だが、ようやく自分に弱さを晒してくれるようになったことを嬉しくも思った。

そのおかげと言っては何だが、己の中の劣悪な感情が現れることはついぞ無く、久しぶりに落ち着いた気持ちで旅をすることができた。

## 第十九話 欲求

レンガ造りの家が建ち並ぶ町の赤土まじりの道を踏み進んでいると、正面から茶色のローブに身を包んだ壮年の男性が分厚い本をブツブツと読みながら歩いてきた。

すれ違ふ際、ローブから手帳のようなものが音もなく落ちたのを見て、それをほとんど反射的に拾い上げた私は振り向いて男性に声をかけた。

「が、本に夢中になっているのか、男性は気付かずにスタスタと歩いて行ってしまふ。」

仕方が無いのでマサにその場で待つてもらって、小走りで追いかけて肩を叩いて呼びかけた。

「すみません、日記帳落とされましたよ。」

その言葉に男性は足を止めて首から上だけをこちらに向ける。

私の顔と日記帳とに何度も視線をやった後、彼は目を大きく見開いて言った。

「お、お嬢さん。今、何と?」

「え?ですから、日記帳落とされましたよ…?」

「なぜ、これが日記帳だと思われた?」

「なぜって、表紙に日記って書いてあるから…ですが…あの?」

男性は目をギンギンに輝かせて身を震わせたと思うと、日記帳を持つ私の手を両手で強く握って来た。

先ほどまで読んでいた本がバサリと地面に落ちて土にまみれる。

「素晴らしい！貴女のような方をずっと探し求めていた！

お嬢さん、どうかこの私と一緒に西南の国の研究所へ来てはいただけませんか！？」

無論、高待遇はお約束します！報酬もお望みのまま！必要な物は何でも揃えましょう！

どうしても、貴女のその知識をお貸りしたいのです！ぜひ！ぜひ、お願いします！」

「え？え？」

グイグイと迫って来る男性に戸惑っていると、背後から誰かに抱きすくめられた。

同時に、その誰かは男性の両手に手刀を落として私の手から外させる。

まあ、『誰か』と言っても普通の人間より一回り大きな各々のパーツで丸分かりだけれど…。

肩から腰にかけて回された腕と彼の身体に隙間なくくっついた背に、心臓の鼓動が少し速まる。

「西南の国だあ？馬鹿も休み休み言いやがれ。

あんな、しょっちゅう魔族の被害にあってるような危険な国に誰がやるかよ。」

「なっ、何だ貴様は！私の邪魔をするなっ！」

「俺あ、こいつの連れだ。人の旅の邪魔しようとしてんのはダメエだろうが。」

研究だか何だか知らねえが、んなこたあ1人でやりやがれ。無関係の他人を巻き込むじゃねえ。」

「何だと、貴様！私の研究が完全なものとなれば、どれほど素晴らしく世界が変わるか！それを、分かつての台詞なんだろうな！」

私はこの偉大なる研究に人生の全てを捧げ…おい、どこへ行く！」  
「うるせーな。そっちの事情なんざ知ったこっちゃねえ。」

とにかく、こいつはダメだ。諦める。」

そう言っつて、マサは男性を睨み付けると、私の背を押しながら足早にその場を立ち去る。

チラリと振り返った先に、悔しそうに地団駄を踏む男性の姿が目に入った。

それにしても、マサに正面から食ってかかれる人間がいるとは思わなかった。

おそらく、余程の興奮状態にあったせいだろうが、ある意味では大したものだと思う。

正直、マサがきつぱり断ってくれて助かった。

話も胡散臭いし、一方向からしか物事を捉えられないのに自分を正しいと頑ななまでに信じ込める彼のような人種は苦手と言うより他無い。

ああいったタイプは変な所で感情のスイッチが切り替わる上に、その振れ幅が激しいから傍に居るだけで無駄に精神を消耗してしまう。

できれば、あまり関わり合いになりたくない。

再び絡まれないように明日の朝1番に町を出たいとマサに頼んでみると、彼は『元よりそのつもりだ』と頷いた後、顔を正面に向けて不愉快そうに眉を顰め1人何かを呟いていた。その際、背中を押していた腕が肩に回され軽く身を引き寄せられる。

突然の行為に恥ずかしさと嬉しさと、少しばかりの悔しさに頬を薄く染めて俯いた。

彼の無意識の行動に翻弄される自分の情けなさにため息がこぼれる。これじゃ、ミイラ取りがミイラだ…。

~~~~~

ようやく日が昇ろうとする早朝。

ふと目を覚ましてマサのベッドへ視線をやると、そこはもぬけの殻だった。

始めはトイレかなと思っていたけれど、5分10分と時間が経つ内に言いようのない不安が胸中に広がる。

いてもたってもいられなくなつて、私は簡単に身なりを整えて彼を探すために部屋から出た。

まずは、フロントでマサが外に出て行ったかどうか尋ねようと下り階段へ足を向ける。

そこで突如、背後から伸びた手に何かの薬品がしみ込んだ布で鼻と口を被われた。

抵抗する間もなく、急激に意識が遠退いていく。

私は気力を振り絞って、腰に下げている残り一掴み程度の米が入

った袋を逆さに持ち上げた。

軽く開いた袋の口からパラパラと米の落ちて行く音を聞き、ほんの少し安堵する。

東の国は目前とは言え、まだこの町にも米は普及していない。

マサが発見する前に宿の人間に掃除されてしまう可能性もあるけれど、何もしないよりは良い。

まあ、見たからと言ってマサが助け出してくれるのかと問われたら、彼には私を探す方法が無さそうだから可能性は低いと思う。

けれど、少なくとも私が自分の意思で彼の前から消えたのでは無いことだけは理解してくれるだろう。

彼を騙して貢がせていたような、そんな誤解だけは受けたくない。思考が途切れる寸前、死の可能性すら視野に入れておきながら、

最後に浮かんだのはそんな慎ましくも浅ましい思いだった。

国境越えを明日に回して、俺たちはその手前にある小さな町を訪れた。

夜間は警備人員が減ってしまう事、また比較的凶暴性の高い夜行性モンスターが徘徊する事から、関所の扉は閉ざされる。

一方の国で発生した問題が飛び火し、両国に無駄な軋轢が生まれないようにしているらしい。

そのため、関所の周囲には旅人が一夜を過ごすための町がほぼ当たり前前に存在する。

こういった町は人や物が忙しく行き交うためか喧騒に包まれがちだ。

性質の悪い人間も多いからはぐれるなよと一言注意すれば、アミは俺の手をキュッと握ってきた。

それに一瞬身を強張らせる俺を知ってか知らずか『たまに思考に耽る癖があるから、出来れば離さないで欲しい』と上目遣いに頼んでくるアミ。

内心で彼女の手の温もりと柔らかさに酷く動揺しながら、それを

表に出さないよう必死に平静を装って1つ頷きを返した。

適当に宿を探しながら道を歩いていると、すれ違ったローブの男が何かを落とした。

親切にもそれを拾ったアミが声をかけるが、本に夢中になっていたらしい男はそのまま去って行く。

アミは俺を見上げて『ちょっと待ってて』と言うと小走りで行って行った。

そう遠くない視界の先で、彼女が男の肩に手をやり落し物を差し出すのが見える。

すぐに戻って来るだろうと思っていたのだが、どうも様子がおかしい。

何やら会話をした後、突然アミの手が男に握り込まれるのを見て頭で考えるより先に足が地面を蹴っていた。

近づく事で聞こえて来た声によると、男は何かの研究のためにアミを西南の国へ連れて行くとうとしているようだった。

魔族領からすぐの西南の国というだけでも反対するに充分だといふのに、甘言で釣ろうとしている所なんぞはいかにも怪しい。

そんな男が彼女の手を取っている事に苛立ちを覚え、少々強引に引き剥がしてやった。

男は憤慨して己の研究で世界がどうのと与太話としか思えないような発言をしてくるが、相手にせずにとささとその場を後にする。

本気にしる虚言にしる、そんな訳の分からない研究にアミを関わらせてたまるか。

~~~~~



あれから、いつもどおり適当な宿に部屋を1つ取り、さっさと就寝した。

夜明け間近だと思われる時間に部屋のドアの閉まる音が聞こえて、俺はぼんやりと目を覚ました。

内に向かつて歩いてくる小さな足音からアミだと分かり、トイレにでも行っていたのだろうと再び眠りにつこうと瞳を閉じる。

その次の瞬間。フワリと布団が持ち上がり、身体の上にか何か大きなものが落ちて来た。

驚いて目を開き顔を向けると、そこにはうつ伏せの体勢でスヤスヤと寝息を立てるアミがいた。

咄嗟のことに声を出しそうになり、慌てて口を片手で押さえる。おそらく、寝ぼけてベッドを間違えたのだろうが…これは……。

就寝時、俺は上半身に何も身に着けていない。おかげで、彼女の薄い寝間着を隔てた先の肉の感触と温もりが細かに伝わって来る。緊張でピクリとも動けずにいると、胸板を枕にしたアミが小さく吐息を洩らしながら頬を摺り寄せてきた。

…っ何の拷問だ。

不埒な行為に及ぼうとする本能を理性で必死に抑え込む。

朝までこのまま放っておくというのは色んな意味で危険だと判断し、俺は彼女の肩を軽く叩きながら呼びかけた。

「アミ、起きろ。寝ぼけてねえで、自分の寢床に戻れ。」

運んでやる事も考えたが、今の自分がそれをすると逆に煽られてしまいそうだ。

できれば本人に移動してもらいたい。

呼びかけが届いたのか、小さく意味の無い声を発しながら、ゆるゆると脛を上げるアミ。

未だ寝ぼけているのか、彼女は焦点の定まらない目で俺の顔を見上げると『マサだあ』と嬉しそうに名を呼んでふにやりと笑った。

いつものアミなら絶対にしないだろう気の抜けるような笑顔に、俺は心臓を鷲掴みにされたような感覚を覚えた。

先ほど抑え込んだはずの本能が再び暴れ出そうとしている。…これは、マズイ。

「ん〜？あれえ？アミ、お布団間違っちゃった？」

一人で葛藤している内に、アミはキョロキョロと辺りを見回したあと、自分から布団を出て行った。

少しの間後、再びアミの寝息が聞こえてくる。

……………助かった。

俺は額に手を置いて、安堵から深く深く息を吐いた。

そんなこんなで完全に目が冴えてしまった俺は、頭を冷やす意味も込めて宿の屋上へと足を運んだ。

ゆるやかな風を受けながら夜が明ける様を眺めていると、次第に気持ちも落ち着いてくる。

1時間も経った頃、さすがにもう大丈夫だろうと踵を返し部屋に戻った。

アミの不在はすぐに分かった。

いくら何でも、この短時間で再びトイレに行ったりなどはしないと思うが…。

軽く室内を見渡せば、彼女の手荷物がいくつか無くなっていることに気がつく。

どうにも嫌な予感がして、俺は部屋を飛び出した。

下り階段の前で不満げな顔をして掃除をしている従業員がいたの話を聞こうと近付いたのだが、そこに集められたゴミにハッとする。

米だ。量から言ってもアミが持っていたものに違いないだろう。

だが、もし彼女が散らかしたのなら、人を使わずに自分で片付けるはずだ。

アミにはやたらと律儀なところがあつた。従業員に頼むにしても、この場にはない事はない。

そもそも袋の口は閉じられていたはずで、例え誰かとぶつかろうと1人転ぼうと簡単に中身が出るものではない。

とすれば、それは故意に放たれたという事になる。

…そこまで考えて、俺はある1つの結論に思い至った。

彼女は何者かに攫われてしまったのだ。



## 第二十話 他が為に

身体を打ちつける強い衝撃に意識を取り戻した。

動かない手足に一瞬混乱するも、すぐに宿で襲われた事を思い出す。

状況から考えるに、どうやら私は攫われてしまったようだ。

体育座りに近い体勢で狭い場所に押し込められているらしく、体のあちこちが痛む。

うつ伏せの状態になっていることから、先ほどの衝撃は私が入れている箱か何かの前向きに倒れでもしたのだろうと推測した。

しかし、身体を縛るだけに飽き足らず、目や口まで布で塞がれているため、周囲の状況を把握することも難しい。

ガタガタと振動が続いているのは、馬車か何かで移動しているからだろうか？

それにしても、私は何の目的で捕えられたのだろう。

私自身には身分も特殊な能力も無いし、何の利用価値もないはずだ。

そりゃあ、性的な意味でなら価値が無いとも限らないのだろうが、それでは不自然な点が多すぎる。

そもそも、この世界に来てまだ1度も奴隷らしき存在を目にした事がない。

人間が人間である以上、それに相当する者が全くないという事はないと思うのだが、だからといって様々なリスクを無視して私のような微妙な女を宿から攫う意味は無いと思う。

あの宿が実は人身売買組織の隠れ蓑だったというオチなら分から

ないでもないけれど、さすがにこれは少々突飛すぎる考えだ。しかし、そうすると目標を私に定めた理由があるはずで、さらに言うなら計画的犯行であった可能性も…。

ああ…、ダメだ…薬の影響がまだ続いているらし…また…意識…が…遠…く…。

次に目を覚ました時、私は簡素なベッドに横たえられていた。

無意識に顔に手をやる。

その拍子に拘束が解かれていることに気がついた私は、勢いよく身を起こした。

まずは自らの状態を確認。多少、手首や足首に縄の痕が残っていたが、特に身体に異常は見られない。

服もそのままだ。こんなことになるのなら、ナイフの1本でも隠し持っていていれば良かった。

次に部屋を見回す。窓が無いらしい石造りの部屋はかなり暗かった。

小さな木の机の上に淡い光を放つ魔法石と思わしきものが置いてあるが、それが唯一の光源のようだ。

窓さえあれば時間の経過も分かるし、うる覚えとはいえ星を見て大まかな現在地を推測したり、太陽の軌跡から部屋の方角を予想したり、外の様子を観察して逃走ルートを脳内シミュレートすることだって出来たはずなのだが…。

それを防ぐためのこの部屋なのだとしたら、これは人を攫う事に慣れた人間の仕業なのだろうか。

せめて、コメディチックな漫画や小説のキャラクターのように、

お腹の具合で時間が分かる特殊機能でもついていたれば良かったのに。

納戸か何かと想像していた扉を開けると、そこにはむき出しになった地面に深い、しかし底の見える程度の穴が空けられていた。

現代人としてはこの穴の用途を理解することを拒否したいところだが、…どうやらトイレのようだ。

町の宿は大抵が水の魔法石を使った水洗に近い作りになっていたので、そう不満もなかったのだけれど、このトイレは色々な意味でダメージが大きい。

一応、木蓋があるようなので普段はそれを被せておけば良いのだろう。

とりあえず、これでこの部屋が1階もしくは地下ではないかという予測が立った。

わざわざ2階以上に土を運んだり、深い穴が掘れるような作りの部屋を設計したりはしないだろう。

壁の側面にある1センチほどの穴から水がチョロチョロと流れており、その下にある水受けと思わしきでっばりに少量の水が溜まっていた。

確実に飲み水で無いソレはどうにもカビっぽく、触れる事さえ若干躊躇してしまう。

部屋に戻り、外へつながっているであろう扉を観察してみた。

パツと見は木できていているようだが、どうも叩いて調べた感じでは鉄板か何か仕込まれている様子があり、壊して脱出というのも不可能そうだ。

その後、壁や床に隠し通路や脆そうな箇所はないかと調べてみたが、普通に無かった。

外につながっている確率が高いが、トイレの土を掘るのだけは拒

否したいところ。

汚泥には塗れても、糞尿には塗れたくない。人として大切な何かを失ってしまう気がする。

一通り見終わって、現状打つ手無しとの判断を下した私はベッドにドサリと倒れ込んだ。

後は相手の出方を待つより他無い。

ここまで連れてきておいて飢え死にさせることはないと思うので、とりあえず今は体力温存の意味も込めて大人しくしておくことにする。

やることもないので、暇つぶしもかねて犯人の目的についてうだうだ考えていた。

そして、その内に1つの大きな可能性に思い至る。

そう。例えば…マサに対する人質…とか…。

ああ、ありそうだ。噂1つで騎士団が出張してくるほど人に疎まれている彼のこと。

その中には本気で排除を望む輩も少なからずいるだろう。

彼は優しいから、私の命を盾にされたら抵抗も何も出来ないに違いない。

そうになったら恩に報いるどころか、完全に仇で返すことになってしまう。

それだけはダメだ。

自分1人なら泥水を啜つても生き延びようとするかもしれないけれど、彼の命がかかっていれば話は別だ。

いざとなったら、自ら死ぬ覚悟もしておかなければ…。



物騒な考えに至ったところで、扉の向こうから小さく足音が聞こえてきた。

段々と近づいてきているようだ。この部屋に来るのかもしれない。だとしたら、寝たふりをするか、起きて待っているか、扉の横に待機して開いた隙に脱出を謀るか。

一瞬で浮かんだ3つの選択肢。最良の結果を得るためには、どれを選ぶべきなのだろうか…。

とにかく、情報が欲しい。

そう思った俺は、従業員の男に気配を消して近づき、逃げられないように腕を掴んで声をかけた。

「おい、話がある。」

振り向いて俺の顔を視界に収めた瞬間に、男が悲鳴を上げようとしたので素早く空いている方の手で口を塞いだ。

こんな朝早くに大声を出せば他の客の迷惑になるし、それで起き出して来られたらまた変な誤解を受けかねない。

すると、男は顔に絶望の色を混じらせ、それに呼応するように身体を小さく震わせた。

その反応に『頼むからここで気を失うことだけはしてくれなよ』と内心でため息をつく。

「まあ、落ち着け。ちょいと質問があるだけだ。危害を加えるつもりはねえ。」

分かつたらいいか、…騒ぐなよ？」

男がガクガクと頷くのを見て、俺はゆっくりと口から手を外した。瞳に涙を滲ませながら小刻みに呼吸を繰り返す姿に、こんな状態でまともに質問に答えられるのかと懸念する。

だが、今はこの男の心情を慮るおもんはかような余裕はない。

怯えて落ち着かない様子の男を前に、俺は容赦なく質問を投げかけた。

男の口からたどたどしく綴られる情報を取捨選択し、また質問を繰り返す。

そうやって聞き出した話を頭の中でまとめていった。

米をばらまいたのは30分ほど前に宿を発った客で、謝罪と共に掃除を頼まれた。

その客はやたらと大きな荷物を持っていた。

部屋を取ったのは夜も遅くなった頃で、その時はそんな荷物を持つてはいなかった。

茶色のローブを目深にかぶっていたが、声からしてそう若く無い男だという印象。

また、身長は少し低く180に届かない程度であつたらしい。

何ともあからさまで分かりやすい。

米を撒いたのが女だと言つのならアミが自分で出て行った可能性もあったが、これで完全に彼女が攫われたであろうことが確定した。特徴から察するに、昨日出会った研究どつとか言っていた男が犯

人だろう。

手口に粗が目立つのは、そういったことに慣れていないせいか。それにしても、自分の研究とやらにどれだけ熱心なのかは知らないが、そのためなら犯罪に走ることも厭わないとは狂気じみている。

とりあえず、ここを離れたのが30分前ならまだ自身の捜索の範囲内にいるかもしれない。

俺は急ぎ荷物を纏め、宿を出て町の出口へ走りつつ慎重に気配を探った。

しかし、希望とは裏腹にどれだけ探してもアミは見つけられなかった。

俺たちが宿を決めたのが夕方過ぎの時間で、後を追ってきたはずの男が夜遅くの入りだったことを考えると、周到に用意をしていたのかもしれない。

移動の手段も事前に手配していたのだろう。

アミを攫ったのがあの男だとすれば、行き先は西南の国で間違いないはずだ。

とは言え、ルートは1本ではないため、追おうにもどの道を行けば良いのか分からない。

一応、西南の国に向かうつもりではいるが、1人で探して回るには国1つという範囲は広すぎる。

ジレンマを感じつつ道を走っていて、ふと前にアミからもっと人を頼れと言われた事を思い出した。

そういえば、カウガンの嫁のナーエさんは昔腕利きの情報屋だったという話を聞いた事がある。

結婚と同時に引退したらしいが、それでも現役の人間に顔を繋いでもらうくらいはできるかもしれない。

単身で闇雲に探し回るよりは効率も良いはずだ。

そう思った俺は、踵を返すとともに一気に駆ける足を速めた。

~~~~~

「そういうわけで力を貸して欲しい。」

あれからわずか2日で俺はカウガンの宿に到着していた。

いつになく必死な様子の俺に、珍しくカウガンも真剣な態度で接して来る。

アミが攫われた事を告げると、カウガンはそれだけで心得たとはかりに頷いてナーエさん呼びに行った。

それからすぐに現れたナーエさんは、今まで見た事のない鋭利な空気を纏っていた。

おそらくこれが情報屋としての彼女の姿なのだろう。

ひとまず深呼吸で気を落ち着けて、俺はアミが消えた経緯を口にした。

「いいわ。そういった情報に強い知り合いがいるから紹介してあげる。」

至極あっさりとした承の意を示したナーエさんは、そこからさらに情報屋に接触するための詳しい手順や相場、タブーとされている言

動などを説明してくれる。

一通り話を聞き終わった後、教えられたことを忘れないように頭の中で反芻した。

「ああ、そういうえば失念していたな。ナーエさん、貴女に払う紹介料はいくらぐらいになる？」

「いやあね、いらないわよ！これは仕事じゃなくて個人的なし・ん・せ・つ。

そんな事考える暇があつたら、アミちゃんと再会した時に何て言うかでも考えてなさい。」

ナーエさんは先ほどまでの空気を一転させ、朗らかに笑いながら背中をバシバシと叩いてくる。

俺はそれに苦笑いで返して、起立し深く深く頭を下げた。

「スマン、恩にきる。今後、俺の力が必要になった時は遠慮なく呼んでくれて構わない。」

「もうマサ坊ったら。別にいいのよ。私ね、アミちゃんに感謝してるの。」

だって、ようやく貴方が人を頼る事を覚えたんですもの。こんなに嬉しいことは無いわ。

今まで頑なに1人であろうとしていたマサ坊をずっと心配していたのよ。」

「ナーエさん……。」

「さ、急ぐんでしよう。こんなところでモタモタしてないで、さっさとあなたの女神を助けて来なさい！」

その言葉にもう一度深く頭を下げ、俺は身をひるがえ返し外へと駆け出すのだった。

第二十話 他が為に (後書き)

マサが本気で走ったら新幹線並みのスピードが出ます。



## 第二十一話　接触

結局、ベッドの脇に腰掛けて待つことにした。

寝たふりをしていると相手の顔が見えないし、いきなり襲いかかって来られた場合に対処が遅れる。

扉が開いた隙に脱出を謀るのも、外の様子が全く分からない状況じゃあすぐに捕まってしまうのがオチだ。

体力も知恵も人並みだし、戦えるわけでも特技があるわけでもない。急いては事をし損じる。

まずすべきは情報収集だ。

元の世界での私の1番の趣味は読書だった。

色々と読んだ本の中には、今回のような場面が出てくることも少なからずあった。

ほとんどフィクションとはいえ、そこから得た緊急時の対処方法は現実に基づいて作られたものだし、役に立たないという事は無いだろう。

それに、問題の想定範囲は同じ年齢の一般女性より広いと思う。

まあ、逆に固定概念に囚われて本質を見誤る可能性もあるのだが、それに関してはどうにもならないので捨て置くしかない。

考えているうちに、足音の主が部屋の扉の錠をガチャガチャと扱いはじめた。

いよいよ犯人とご対面らしい。

私は緊張から無意識に両手を強く握りこんだ。

ゆっくりと開いた扉から見覚えのある人間が姿を現した。  
国境の町で日記を落とした壮年の男性だ。

と、いうことは……どうやら人攫いの目的は私自身だったらしい。  
ならば、マサに対しての枷かせとなるような使われ方をすることはないだろうと、表情に出さずに少しだけ安堵した。

一方、男性は私を視界に収めると、それは嬉しそうに笑みを浮かべた。

状況にそぐわない反応に思わず眉を顰めてしまう。

それを受けて男性はコホンとひとつ咳払いをしたあと、姿勢を正して口を開いた。

「失礼。私はチヨウデルク・ダウニード。どうぞ、チヨウと呼んで下さい。

此度はようこそお越し下さいました。」

そう言って、男性は再び笑むと深々と頭を下げた。

勝手に攫って来ておいて、この態度。厚顔無恥にも程がある。

理不尽に軟禁されていることに私が怒らないと、その上で何のわけだかまりもなく研究に協力すると、本気でそう信じているのだろうか？

だとすれば、なんとというオメデタイ思考回路だ。

しかし、ここで癩癢かんしゃくを起こしたところで私の利になることは無い。心の中の不快感を悟られないように、私は慎重に話しかけた。

「あの、チヨウウさん。少々、お聞きしてもよろしいでしょうか。」

「はい。何なりと。」

「ここは、先日言っておられた西南の国なのでしょうか？」

「ええ、その通りです。」

「私が気を失ってから今日で何日になります？」

「まだ1日しか経っておりませんよ。」

「え？でも、あの町からこの国まで到着するのに魔獣車を使っただとしても、半月はかかったと思うのですが……。」

「ふふ、驚かれるのも無理はありません。これも研究の賜物ですよ。」

「研究の……。そういえば、まだ伺っておりませんでした。チヨウさんは何の研究をしていらっしゃるのでしょうか。」

「おお、私としたことがウツカリしておりましたな。」

私は幻の地下帝国イエンバーについて研究をさせていただいております。

その名は貴女もお聞きになったことがあるでしょう。

現在よりも遥かに高度な文明を誇っていたとされる、あの伝説の国ですよ。

私はそのイエンバーの技術を現世に復活させることを目的に活動を続けています。」

勿論、異世界からの来訪者である私がそんな帝国の名を知っているはずがない。

とりあえず、聞いた限りでは元の世界で言うムーやアトランティスといった眉唾もの存在と同種のものなのだろう。

友人の中にもこういった超古代文明やオーパーツに魅入られた人間がいたな、と頭の片隅で懐かしく思った。

「では、研究の賜物というのは……。」

「はい。公けにはされておりませんが、私は長年の搜索の末、今から5年前に帝国の遺跡を発見致しました。

その場所が、この西南の国の地下というわけです。

規模の大きさと発展の具合から主要都市のひとつではないかと推測しているのですが、色々調べておるうちにさらに地下通路を発見致しましたな。

後に分かったのですが、この通路なんと大陸中に張り巡らされておるようなんです。

現在では残念にもそのほとんどが土に埋もれてしまっておりすが、それでもいくつかは無事に残っていました。

そして、そこで発見した不可思議な物体。あちこち調べていて、それが帝国の民の乗り物であったのだと理解したのは半年が過ぎた頃でした。

さらに、そこからさきこちなくでも動かせるようになるまでに3年半。

未だにその構造の全てを理解しているわけではないので運行も手探り状態ですが、それでも魔獣車よりも何倍も速く、乗り心地もずつと良い。全く、帝国文明の技術は素晴らしいの一言に尽きます。

そもそも、イエーパーという存在には謎が多く〜。」

「ち、チヨウさん？お話の途中で申し訳ありません。

そんな高度な文明を持った帝国の研究に、私のような素人が一体何のお役に立てるといえるのでしょうか？

皆目見当もつかないのですが…。」

放っておいたら、いつまでも語り続けそうなチヨウの説明を遮って再び質問を投げかける。

聞いている限り、研究に必要そうなのは優秀な技術者や歴史学者といった人種のように思えた。

この世界に無知な自分などどうせ役に立たないんだから帰して欲

しいという気持ちを込めての言葉だったのだが…。

これがまさか藪をつついて蛇を出す結果になるとは、さしもの私でも全く予想することが出来なかった。

後悔先に立たずとはよく言ったものだ…。

とある酒場の薄暗い個室で、俺は淡々と語る男の言葉に耳を傾けていた。

「そいつの名前はチョウデルク・ダウニード。57歳。元北西の国の王宮お抱えだった崇高な歴史学者だ。

きっかけは分からないが30歳の時分に幻の地下帝国イエンバーの研究にとりつかれ、その1年後地位も名誉もかなぐり捨てて遺跡を探す旅に出る。

以後は各国を転々としていたが、当の遺跡を発見したとかで現在は西南の国に腰を落ち着けている。

が、ここ半年で再び各所で目撃情報上がるようになった。

しかも、南東の国にいたと思えばその数日後には北の国に現れたりという、ありえない早さで、だ。

その移動方法は分かっているが、どれも本人であるとの確認は取れている。

肝心の研究所の場所だが…実はこれも分かっている。」

「分からねえ…だと？」

何より聞いたかった情報が得られない事に苛立って、知らず内に唸るような声が出てしまう。

だが、情報屋は右手を前に突き出して制止のポーズを取ると、至

極冷静にこう言った。

「まあ、待て。全く分からないわけじゃあない。大体の場所の推測はついているんだ。」

「あん？推測できているなら、なぜ人をやらねえ。怠慢か？」

「まさか。人はやったさ。誰も帰って来なかったただけだ。」

「…そりゃ、どういこうった。」

そう問い詰めた俺に、情報屋はしばしの間押し黙った。

それから深く息を吐き、ゆっくりと口を開く。

「どうやら、チヨウデルクはその発見した遺跡に居を構えているらしい。」

西南の国のある町で食糧を買い込む姿を幾度も目撃されている事から、その近くに入り口か何かがあるのだろうと当たりをつけている。

何度か奴の後をつけさせたり町の周辺を搜索させたりしたのだが、ある地点へ足を踏み入れた人間は誰一人戻らなかった。

その後、どれだけ優秀な人材を送っても同じ結果しか出ず、これ以上は無駄だと判断して調査は打ち切られた。

……………さて。

命が惜しくないというのなら、その場所を教えてもいいが…どうする？」

~~~~~

チヨウデルクが買い出しに出る間隔は大体10日に1度。

確実に場所を探し当てたいなら奴が町に出て来た所で後をつけた方が良いとは言われたが、こうしている間にもアミが理不尽な扱いを受けている可能性もある。

あの時の態度からして殺されてはいないと思うが、救出するなら早いに越した事は無いだろう。

そう思った俺は、すぐに町を出て情報屋から教えられた地点へ向かった。

あまり深くは無い森の中、唐突に草木の1本も生えていないむき出しの地面が広がっていた。

その茶色の土に1歩足を踏み出すと、途端に地面から何かが浸み出して来た。

あまり良くないモノのような気がして素早く足を引いて観察していると、それは徐々に形を成し、1分も経たない内に半透明な薄黄色の楕円形をした生物に変わった。

鋼鉄すら、ものの数秒で溶かしてしまうというAランクモンスターの強酸スライムだ。

その生態の多くは謎に包まれており、ギルドで正体不明魔物に分類されている。

それがむき出しの地面中から何体も何体も浸み出しては形成されていく。

たまたま上にいた野ネズミが、ジュウジュウと嫌な音を立てて骨も残さず溶かされていた。

なるほど、最初で気付かずに奥まで歩いて行ってしまった人間はもれなく命を落とした事だろう。



しばらく見ていたが、どうやら奴らのいる範囲内に侵入さえしなければ襲われることは無いらしい。

5分ほどすると、スライム達は地面に吸い込まれる様に消えていった。

魔法で炎を出して蒸発させながら進んでもいいが、それよりも1つ気になる事があったので先にそちらを試してみることにする。

上手くいけば、苦も無く足をつけることが出来るだろう。

東側のとある場所へ迂回して、試しに土を踏んでみる。

……………やはり。

特定の場所を歩けば、強酸スライムは発生しないらしい。

先ほど、浸み込んで行く際に全面が薄黄色に染まる中、僅かに隙間があったのを俺は見逃さなかった。

記憶の中の30センチ程の幅から足がはみ出さないように注意深く進んで行く。

むき出しの地面の丁度中央辺りに差し掛かった時、不自然な盛り上がりのある部分を見つけて、その場に膝をつけてしゃがみこんだ。土を払うと、そこには透明な硝子のような何かにスッポリと覆われた2つの押しボタン。

覆いを外し、指を伸ばす。片方はすでに押されて凹んでいたのもう1つの方を起動させる。

押してから間もなく、スルスルという極小さな音がしたかと思うと、すぐ傍らに地下へと続く階段が出現した。

ここから先も即死級の罠が多く仕掛けられていることは容易く想像できたが、俺は構わず地下へと降りて行った。

どんな道程になるのが、アミの存在と天秤にかけられるものではない。

地下は光源が無く、完全な暗闇に包まれていた。松明代わりに自身の指先に小さく火をともす。

元々夜目は利く方なので、ごくわずかな光さえあれば行動するに充分だ。

何より、畏やモンスター等の危険な気配を察知するには視界に頼りすぎない方が良い。

さっと周囲を見渡して、眉を顰める。

宝石のように艶めく白さを持った継ぎ目1つ無い平らで固い床。壁面には人の手で施されたとは思えない細かな模様がどこまでも刻まれていた。

まるで全く別の世界に迷い込んでしまったかのような違和感に、言い知れない気味の悪さを覚える。

幸い1本道のようにだったので、俺は軽く頭を振り気持ちを切り換えてから慎重に歩を進めて行った。

## 第二十二話く恐れく

「とんでもない！貴女の知識は役に立つどころの話じゃありませんよ！」

「知識？」

「そうですね！ご自覚がおりにならないので？」

遺跡から持ち出したあの手帳が日記であると言つ事を、すぐにそつだと看破した貴女のような有能な方をどれだけ探し求めているか！」

「遺跡から…持ち出した…？」

「ええ。保存状態が良かったのか、劣化が少なく比較的荒く扱つても壊れそうにない丈夫な本だったので、補強を施した上で日々持ち歩いて解読を進めておりました。」

様々な歴史書を漁つたり、大陸中の言語と照らし合わせてみたり、実在した古代文明の遺跡を巡り少しでも近いところがないかと探すことも致しましたが成果は思わしくなく、文字の研究に関して後回しにしようかと思つていた矢先に貴女が現れたのです！

この時の私の興奮がお分かりでしょうか！？」

瞳を興奮に輝かせながら、グイグイと身を乗り出してくるチヨウ。目の前が真っ白になりそうだった。

それは、つまり…私は現代ではすでに知る者のいない失われた古代文字を解読できる唯一の存在であるということだ。

あああ。あの美少年神様、なんて余計な事を！

これじゃ、何のために魔法のある世界で一般人を希望したのか分かつたものじゃあない。

かと言って、今さら言い逃れが出来る空気でもないし、つれなく拒否したら誘拐なんてかましてくれたこの御仁が今度はどんな暴挙に出るのか想像もつかない。

八方塞がりだ。

無事に解放されるには大人しく彼の望むようにするしかないのだろうか…。

~~~~~

私に用意されたこの部屋は遺跡の中の住居の1つを改造して作ったものだそうだ。

考古学者は基本的にその研究対象を弄る事を好まないと思っていたのだけれど、先ほどの本と言い、この部屋と言い、チヨウにはあまりそういった感覚が無いらしい。

他の遺跡でもこの態度でいて問題が起きなかったのだとすれば、これがこの世界での過去の遺産に対する扱いなのかもしれない。

それはそうと、私は今チヨウに連れられて遺跡の中の主たる建物を巡らされていた。

都市の中心部にそびえ立つ細長い塔の天辺に、まるで人工太陽のように燦々と輝く光の魔法石が鎮座しており、そのおかげで地下だというのに遺跡の中は昼間のごとく明るかった。

一体、どこからそんな膨大な魔力が供給されているのだろうか。

なるほど主要都市だという彼の見解の通り、広大で優美な白い建

建築物が燦然と建ち並んでいる。

全体的に、何となくギリシャをイメージさせるような造形が多いように思った。

まあ、行った事も無ければ詳しくもないので、あくまでイメージだけだ……。

キレイに整備された道のいたる場所に大なり小なり芸術的な彫像が飾られている。

また、地上から運んで来られたと思われる木々が大通りに沿って点々と植えられていた。

そこかしこから、今は無き帝国の文明の高さが見て取れる。

とりあえず、1人でこの無駄に広い地下遺跡を脱出するのは難しそうだ。

無暗に飛び出して、遭難して餓死というお粗末な結果だけは避けたい。

都市を見回って、もう1つ分かったことがある。

それは、自分が入れられていたのはこの都市の中でもヒエラルキーの最底辺に位置する人間の住居か、もしくは牢獄か何かではないかということだ。

あんなただの石造りの不衛生極まりない建物など他には見当たらない。

周囲の建物も石造りでこそないが比較的規模が小さく作りも簡素で薄汚れていて、まるで貧民街のような雰囲気醸し出している。

こんな場所を用意しておきながら、よくもまあ最初に会った時にあれだけ待遇がどうか言えたものだと思しばかり呆れた。

そこでふと気になってチヨウの部屋の場所を聞けば、彼は寝袋を持ち歩いてその日の研究対象を前に眠りについており、特定の拠点というものを持っていないということだった。

逆に効率が悪い様な気がするのは私だけだろうか。

「そう言えば、ここまで来るのに何か乗り物を使ったとのことですが…。」

「そちらの修繕はチヨウさんお1人で？」

「いえ、そういった作業はさすがに私1人では手に負えませんでな。専門の者を幾人が雇ったのですが、完成後に得た技術を使って商売にしようなどと私利私欲に走ろうとしましてね。」

「全く、今思い出しても忌々しい。」

「イエンバーの文明を穢す様な卑小矮小な輩は、残らず人工モンスターの餌にしてやりましたよ。」

「じ、…人工…モンス…ター？」

ゾツとした。

人を殺しておいて、さもそれが当然だと言わんばかりの態度を取る目の前の男に恐怖を覚える。

「一見まともそうに見えるこの男は、正しく研究狂いであるらしい。言動に気を付けなければ、私も例外なく同じ末路を辿ることになるだろう。」

私の顔から血の気が引いたことになど気が付きもせず、チヨウは楽しそうに話を続けた。

「人工モンスターとは、その名の通り人の手によって作られるモンスターの事です。」

「詳しいことはまだ私にも分かりませんが、何でもモンスターは大気中の何らかの成分を体内で効率的に魔力に変換する事ができるそうです、それを利用して生活の役に立てていたと…。」

「いやはや、イエンバーの民の叡智えいちには感心するより他ありません。」

な。

ああ、丁度あそこに見える建物がその施設ですよ。行ってみましようか。」

軽快な足取りで国会議事堂の様な風貌をした建物へと向かうチヨウ。

このまま逃げ出したい衝動に駆られながらも、私は大人しく彼の後を追って行くのだった。

「くっそ！キリがねえ！」

地下通路を歩いて半日ほど経った辺りで、超音波にも似た不思議な音が響いたかと思うと、突如床や壁、天井から次々とモンスター現れた。

地上で見た強酸スライムを始め、猛毒を含む鋼鉄よりも固い殻に被われた甲毒虫<sup>こうどくちゅう</sup>、傭兵階級Bに相当する戦闘力を持ちながらその身を粉々に砕くまで再生を繰り返す骸戦士<sup>むくせんし</sup>、高速で空を舞い触れるだけで死を招く大病を患うという翼鼠<sup>よくねずみ</sup>に高い戦闘知能と腕力と素早さを兼ね備えた4本腕の凶暴な三面猿<sup>さんめんざる</sup>など、いずれもAランク以上のバラエティに富んだモンスター達だ。

それらが大量に湧き出て、休む間もなく襲い掛かってくる。

魔の森ですら有り得ない熱烈な歓迎ぶりに、思わず舌打ちが出た。そもそも、気配を消してもいないのに向かって来られるなど初めてだ。

大体、不定形なスライムのみならずまだしも、その他の魔物が壁をすり抜けて出現するなど有り得ないだろう。



この場所の何もかもが異様すぎる…。

アミがここにいるのだとしたら、あの男の裁量以前に何らかの理由で命の危機に瀕している可能性もあるかもしれない。

心配で逸る気持ちと裏腹に、どれだけ倒しても一向に減らないモンスター達に行く手を遮られ、ろくに歩を進める事が出来ずにいたならばと炎で一帯を焼き尽くしても、すぐに次の一団が現れるためあまり意味が無い。

むしろ、無駄に魔力を消費してしまう結果になるのだから完全な悪手と言えるだろう。

俺は苛立つ心をぶつけるように乱暴な拳動でモンスター達を延々と屠<sup>ほひ</sup>っていった。

~~~~~

あれから、丸1日は経つただろうか。

一瞬たりとも途切れない猛攻に、俺はいつにない疲労を感じていた。

普段なら3日3晩戦い続けた所で息のひとつも乱れはしないのだが…。

とは言え、原因は分かっている。

未だにアミを助けられないという焦りから来る激しい精神の消耗と、それゆえに持久戦を想定せずに全力で戦い続けてしまったという明らかな配分ミスのせいだ。

未だ攻撃を喰らう程の隙は生じていないが、少しずつ返り血を浴びるようになってしまった。

幾重にも積み重なったモンスター達の醜悪な死骸から立ちのぼる死臭に眉を顰める。

おそらく自身にもその臭いは染みついてしまっているだろう。

無事に再会できたとして、返り血をそこかしこに浴びた俺をアミは怖がりはいしないだろうか。

他の人間と同じように、化け物でも見る様な怯えた目を向けられてしまったら…。

早く会いたいという気持ちに偽りは無いが、それを考えると臆病にも先に進む事に躊躇<sup>ためら</sup>いを覚えた。

地下なので正確な時間を知る術は無いが、それからさらに半日が過ぎた頃だったように思う。

道の先にようやく出口のようなものを見つけ、少しばかり気力が上昇した。

一斉に跳びかかって来る三面猿たちを斧で薙ぎ払うついでに扉を破壊し、中へと踏み込む。

直径で200メートルはありそうな広い円形の空間。

その空間の最も上部に光の魔法石が埋め込まれており、どこから魔力を得ているのか未だ輝きを失わずに部屋を明るく照らしていた。地下であるにも関わらず、ところどころむき出しになった地面からは青々とした木々が生い茂っている。

部屋の中央には精巧な模様と女性型の像で彩られた豪華な噴水が鎮座していた。

すでに水は枯れており、一部が欠けて若干みすばらしくはなっちはいたが、それでも機能していた当時の美しさが窺える。

癒しの空間とでも言うのだろうか。

こんな時でさえなければ、何とも静謐せいひつなひと時を過ごせたことだろう。

そして、なぜかモンスター達はこの部屋には入って来なかった。しばらく破壊した扉の向こうからこちらを見ていたようだが、やがて潮が引くように姿を消していった。

首を捻りながらも、考えてもどうしようもないことだと思考を切り替える。

ちょうど直線上に見える反対側の壁に巨大な扉が見えたので、警戒しつつも歩を進めた。

噴水の横を通り過ぎようとした時、モンスターが現れる前に聞いたあの超音波のような音が再び激しく鳴り響く。

何か弾けたようなバチンという音と共に、部屋が一瞬にして闇に包まれた。

同時に背後から風を切る音がして、咄嗟とつさに身を掀よじる。

直後、先端の鋭く尖った杭のようなものが脇腹の肉を容赦なく抉えくり取っていった。

その痛みに小さく呻き顔を顰めつつも、振り向きざまに杭の飛んできた方向へと灼熱の炎を放つ。

だが、その炎が捉えたのは木々と壁のみ。ならばと部屋中の気配を探るも、何も掴めはしなかった。

しかし、その理由はすぐに分かった。燃え盛る壁からジワジワと杭が生えてきたかと思うと、次の瞬間には俺を目掛けてものすごいスピードで飛んできたのだ。

今度は躲すことが出来たのだが、それを合図にしたかのように壁中から杭が放たれて、思わず息を呑んだ。

何とか急所だけは避けたものの、至る所を貫かれ大量に血が流れたおかげで次第に意識が朦朧としてくる。

…心臓が熱い。

どうやら生命力の低下に伴い、強制的に竜形態に変わろうとしているようだ。

心の奥深くに封印したはずの破壊衝動が暴走しようとしている。だが、それを抑え込むだけの精神力はもう残っていない。

また、あの悪夢を繰り返そうというのか…。

そんな絶望的な気分を抱いた時には、すでに俺の身体は巨大な赤竜へと変化していた。

怒りに満ちた地を震わせるほどの咆哮を、深く沈み込もうとする意識の狭間で聞いていた。

## 第二十二話〈恐れ〉（後書き）

チヨウが国境の町で口にしていた研究所というのは、実際には存在しません。

地上でイエンバーの名を出すわけにいかないのです、その仮称として使用していました。

## 第二十三話くシェイクく

施設に足を踏み入れた瞬間、ゾワリと全身に鳥肌が立った。

理由は自分でも分からない。

別段、靈感があるとか勘が鋭いとかそういった事実は無かったはずなんだけど…。

案内された先の施設の制御中枢には、SFばりの巨大で複雑な作りの機械が鎮座していた。

幾筋ものコードが複雑な軌道を描いて接続されている。

チヨウ自身もたまたま起動スイッチを押しただけのようで、動かせるわけではないらしい。

そもそも、これがさういった機械であるという認識すらしていないさそうだ。

次に連れて行かれたのは、バイオカプセルらしき円柱の容器がズラリと並ぶ部屋。

透明な液体の中にさらに色つきの液体が入れられたかと思うと、その色つき液体が段々と形を成して行く。

完全に液体がモンスターの形へと変化すると、どこからか伸びて来たチューブがその身体に埋め込まれた。

幾重にも並んだ容器を眺めながら歩を進めれば、干からびてミイラのような容貌をしたモンスターが再び液化する姿が目に入る。

どうやら、繋げたチューブでモンスターの体内で作られる魔力を搾り取っているらしい。

それらが苦しげに蠢く姿に吐き気を催したが、チヨウに弱みを見せなくなかったので何とか踏みとどまった。

その後も遺跡の様々な場所を案内された。

実は時計を持っていたらしいチヨウに、遅い時間だからと最後に部屋に戻される。

扉を前にして軽く顔を顰め、私は彼に振り返りこう言った。

「あの、私できれば他のもう少しきれいな部屋で寝泊まりを…。」「  
いいえ、なりません。こちらでお休みください。」

間髪入れずに笑顔できっぱりと拒絶を口にしたチヨウのその眼にはほの暗い狂気が宿っていた。

小さく喉を引き攣らせて、それ以上続ける言葉を無くす。

仕方なく部屋の中に入ると、すぐに扉は閉ざされ外から錠のかけられる音がした。

：チヨウは、本当は私がここから逃げ出したがっているのを分かっているのかもしれない。

だとしたら、それを感じさせる素振りを見せるのは危険だろうか。彼の瞳の奥に見える底知れない闇を思い出して身震いする。

その恐れに耐えるように、私は冷たい布団にくるまりギュっと目を固く閉じた。

~~~~~

それから5日が経過した。

書物の翻訳をさせられることもあれば、遺跡の壁面に刻まれた文字を解読させられることもあった。

現在のこの世界の人間達にはあまりに過ぎた遺産だと思われるものや、大量殺戮破壊兵器になりそうだと判断したものは、読めないフリをしたり別の意味を捏造したりしてやり過ごした。

歴史を混乱に招くような真似はしなくなかった。

正直、こんな場所に何年も居続けたチヨウが狂気に侵されるのも無理はないと思う。

連日研究に付き合わされている私の精神疲労は半端じゃあない。部屋も不衛生でお風呂も無いし、着替えも自前のもの以外は薄汚れたワンピースが1着だけ。食事も日持ちのする簡素な携帯食ばかり。

いい加減、外に出て太陽の光を浴びたい。健康で文化的な最低限度の生活を営む権利が欲しい。

ああ、だけど……。今のこの小汚い姿をした不安定な精神状態の私を誰にも見られたくない。

この日、どうも中から変な音がするからと、チヨウに再び人工モンスターを作る施設へと連れて来られた。

制御機械の置いてある部屋へと向かう途中で、突然アラート音のようなものが鳴り響いたかと思うと、次いで平淡な機械音声が流れた。



『乙地区より不明物体が侵入しています。3分後に各連絡通路間に防御壁を展開。住民の方は速やかにシェルターへ避難して下さい。』  
『クリーチャーが不足しています。生成に必要なエネルギーを注入して下さい。』

『残存魔力量が1割を切りました。中央魔光石発光量を温存モードに移行します。』

直後、都市を照らしていた光の魔法石がその輝きを淡いものへと変化させた。

施設内も一気にその照明を落とし、ぎりぎり周囲が見えるか見えないかの光量だけが残った。

そこかしこから一斉に上がる音声が同じ台詞を幾度も繰り返している。

アラート音も一向に鳴りやまず、それに恐怖心を煽られた私はたまらず地面にへたり込んだ。

チヨウモこういった事態は初めてらしく、落ち着かない様子で周囲を見回している。

それでも平静を保っているのは、彼には機械音声は何を言っているか理解できないからだろうか。

『館内に作業員の不在を確認。自動管理モードに移行。』

『第4区画にエネルギー固体を発見。自己供給を開始します。』

「え？」

突如、天井からまるで触手のようなコード群が現れて、私たちに向かって伸びてきた。

背筋に言い知れぬ悪寒が走り、気がつけば私はその場から全力で

駆け出していた。

チヨウはあっさりコードに捕まってしまったらしい。背後から断末魔のような悲鳴が聞こえてきた。

咄嗟に耳を塞いで頭を振る。

「やあつ！もつ、やだつ！こんなとこやだあつ！

誰か…、誰か助けてっ！助けてっ！助けてえええっ！！」

あり得ない事だと分かっているながら、それでも継るモノを求めずにはいられなかった。

間近に迫る死の恐怖に怯え涙しつつも、必死に足を動かす。

何とかコードに捕まらず出口へと辿り着き、それでも安心できずに都市内を闇雲に走り続けていると、遠くに見える都市の壁面の一部が爆発でもしたかのように激しく弾け飛んだ。

予想外の出来事に、思わずその場に立ち尽くす。

粉塵の中からのっそりと姿を現したそれは、血のような深紅の鱗を持つ体長10メートルはあろうかという巨大なドラゴンだった。

固い鱗に被われた竜の身体は、襲いかかって来る何百何千という杭を容易にはね返した。

怒り任せに口から吐き出した業火により、壁が焼けただれて杭の放出が止まる。

すでに己の意識など無いに等しい竜形態の俺はしゃにむに暴れ出した。

爪で引き裂き、尾を振り回し、頭を打ち付け、翼で疾風を巻き起こし、口から炎を吐く。

それを思考の奥深くからぼんやりと眺めている内に、いつの間にか過去に想いを馳せていた。

~~~~~

「お前なんかが生まれたせいであ…！」

そう言っつて、父は幼い俺の身体を容赦無く打ち続けた。

母体の健康を脅かす程に貪欲にその生命力を吸収し、さらに胎児として大きくなりすぎた俺は母の腹を内から破って誕生した。

0歳にして俺は2歳児並みの体格を持っていた。

竜人族の自己治癒能力は亜人の中でも比較的高いが、それ故か回復魔法を会得している者はいない。

それまでに体力が限界まで低下していたこともあり、母はあっけなく死んだ。

そして、父は俺を憎んだ。

狭く暗い納戸に閉じ込められ、少ない飯と実父の暴力にひたすら耐える日々。

痩せ細りはしたが身長だけは異常な程の伸びを見せた。

悪鬼のような顔に長くガリガリに痩せ細った身体はまるで亡者のよう。

そんな俺を、父は本物の悪魔だと信じて疑わなかった。

本来生まれるはずだった子を殺して入れ替わったに違いないと尋問紛いの事までしてきた。

今思えば、この時すでに父は正気を失っていたのかもしれない。

そんな毎日が異常なのだと気がついたのは、里長が俺を引き取った後の事だった。

長の家族には忌み子だと言われ邪険にされはしたが、暴力はけして振るわれなかったし、まともな食事と寢床に加え最低限の教育も施された。

当時はその環境に安心すると同時に、またいつ父に連れ戻されるかと気が気で無かった。

外を歩けば大人たちからは遠巻きにされ、子供からは侮蔑の言葉と共に石を投げられる。

幼子の投げる小石が当たったところで大きな怪我を負うわけでもないし、生れ出でてよりのち父に暴行を加えられ続けた事を思えば、むしろそれが普通だと信じていた。

逆に、俺のいない場所で彼らが笑いながら遊び回っている姿が不思議でならなかった。

教育の中でその関係に友という名がついていることを知ったのはいつの頃だったか。

自分に限っては有り得ない事だと望みはしなかったが、どこかで憧れていたのは確かだ。

この時、俺はまだ笑うことも泣くことも怒ることも何も知らなかった。

周囲の人間にはさぞ不気味に映っていただろう。

月日は流れ、俺が10歳になった頃の事だ。

すでに身長は180を越し、恐れからか同年代の子供から石を投げられる事は無くなっていた。

長く離れていて、その存在すら記憶の片隅に埋もれかけていた父が唐突に俺の前に現れた。

そのきっかけが何だったのかは未だに分からない。

けれど、相変わらず父はその瞳に憎悪を湛<sup>たた</sup>えて、俺の頬へ躊躇い無く拳を振り下ろした。

その日の父は執拗だった。

ついには、狩り用の槍まで持ち出す始末だ。

いつもなら避けもせずにされるがままになっている俺も、この時ばかりは必死に逃げ出した。

それでもすぐに追いつかれ、幾度も身体を貫かれる。

そうして命の危機に瀕した俺は、生存本能から竜へと身体を変化させた。

竜となった俺は父をその鋭い爪であっけなく引き裂いた。

ぐちゃぐちゃの肉塊に変わった父を、何の感慨を抱くことも無く醒めた目で見降ろす。

空虚な心にも知らず内に悪感情が溜まっていたのか、俺の破壊衝動はそこで終わらなかった。

幸いと言っているのか、すぐに事態を把握した里の大人達が総出で竜化し殺しにかかってくれたおかげで、重傷者は大勢出たが父以外に人が死ぬことはなかった。

完全に瀕死状態になった俺は、彼らの手によってそのままどこかの山の奥深くに捨てられた。

放っておけば勝手に死ぬだろうと判断されての廃棄であり、自身それで構わないと思っていたのだが、忌み子である俺の肉体が生を諦める事を許さなかった。

雨に曝され雪に埋もれつつも少しずつ肉体は修復されていき、2か月も経つ頃にはほぼ完治していた。

それから色々な事があった。

正体不明の老人に拾われ、自身の力の使い方を覚えた。

やがて老人は寿命を迎え、死の悲しみと命の尊さを知った。

大病を患い村を追われて森で一人暮らしをする盲目の女性と出会い、俺は人の情について学んだ。

半年もせずに女性は息を引き取ったが、その頃には顔に表情がつかないようになっていた。

その後、目的も無く旅を続けていると、ほんの僅かばかりでも友や仲間と呼べる存在ができるようになった。

いつしか冗談すら口にできるようになっていた。

だが、埋まらない。

感情を覚えていくほど、人と接していくほど、身体を中心に隙間風が吹き抜ける。

何かが足りないのだと、今でも孤独なのだ、その虚しさに心が慟哭する。

そして、あの日。俺は唯一を手に入れた。

全てが満たされ、幸福を知り、愛することを覚え、俺はようやく人になった。

~~~~~

ふと声が聞こえたような気がした。

何より大切だった誰かが、必死に助けを呼ぶ声が。

もう意識が沈みきった自分にはその名を思い出すことすらできないが、本能がそれを求めた。

体当たりで壁を突き破る。

ガラガラと崩れ落ちる瓦礫を越えて進んだ先に、見たことも無いような巨大な都市が広がっていた。



## 第二十四話 再会

その巨大なドラゴンは胡乱ごんごんな表情でゆっくりと都市を見回した後、少なくとも1キロは離れているであろう場所にいる私へとその瞳を向けてきた。

最初はたまたまかと思ったが、いつまでも視線を逸らさないところを見ると私の存在に気が付いているらしい。

：熊に出会った時は死んだふりをするよりも、視線を合わせたまま背を向けず後ろ歩きでゆっくり逃げると聞いた覚えがあるけども、ドラゴンにも通じるだろうか。

まあ、それすらも単なる通説でしかないことは知っているけれど、不確かなものにだって時には縋りたくなるものだ。

そんな事を考えていると、こちらを見ていたドラゴンが大きく翼をはばたかせた。

太く硬そうな4本の足がふわりと宙へ浮く。

頭の中では逃げなければいけないと思うのに、足が地面に縫い付けられてでもいるかのようにその場から1歩も動く事が出来ない。

真っ直ぐにこちらへ飛んできたドラゴンは、浮いた時と同じように静かに地へ足をつけた。

その際に起こった風で、髪が後方へ軽く舞う。

意外な事に目の前で私をじっと見下ろしている雄大な生き物からは、何の敵意も感じられなかった。

少しだけ安堵して小さく息をつく。

ふと、その聡明そうな金の瞳を見ていて何とも言えぬ既視感を覚えた。

それが何か思い出そうとして見つめていると、なぜかドラゴンの瞳孔が不安げに揺れる。

ものすごく見覚えのあるその動きにハツとした。

「……………マサ？」

呼んだ途端に、ドラゴンは目を大きく見開いて1歩後ずさった。デジャヴを感じる反応に、ますますマサであるという思いが強くなる。

普通に考えればこの巨大なドラゴンが彼と同一の存在であるなどありえない事かもしれない。

けれど、ここは魔法があるようなファンタジーの世界だ。元の世界の常識に当てはめて考えるのは馬鹿げている。

でも、もし本当にマサだとしたら、どうしても言ってくれないのだろうか？

「あ…の…。マサじゃ…ない…の？」

おそろおそろ尋ねてみるも、相手は身動き1つしない。

やはり突飛な考えだったのかと不安になりだした頃、急にドラゴンが淡い光を纏った。

そして、次の瞬間。目の前にいたはずのドラゴンの姿が消え、そのかわりに見慣れた修羅が立っていた。

「マサ！」

嬉しさから駆け寄って抱きつこうとして、直前で足を止める。

久しぶりに会った彼は全身ボロボロで、血に塗れていない個所を探す方が難しいというような凄惨な状態になっていた。

高揚した気分が一気に下降して、顔からサツと血の気が引く。小刻みに震える手で口を覆って、絞り出すように言葉を発した。

「……………っ酷い。どうして…こんな…。」

「そうだ、手当てっ。すぐ手当てしないと！」

オロオロと周囲を見回す姿に何を思ったのか、マサは両手で私の身体をつかみ持ち上げた。

そして、まるで子供がぬいぐるみを抱きしめるかのように、マサはその大きな懐の内に私をかき抱いた。

突然の事に一瞬思考が停止する。

「……………えっ。なっ！」

「あっ。だ、ダメ。マサ、離してっ。傷にばい菌入っちゃっ！」  
「んなもん、とっくに塞がってる。」

「そんな事より、……………無事で……………良かった。…アミ。」

頭上から聞こえる掠れた声に胸がじんと熱くなる。

私はそっと彼の首まわりに腕を回して強く抱きしめ返した。

こびりついている血はもう乾いているようだったけれど、首筋に顔を埋めれば錆びた鉄の臭いが鼻につく。

身体中に傷を負いながら、それでもここまで私を助けに来てくれたのだと思うと目頭が熱くなった。

「ごめんなさい、私のせいで。…でも、来てくれてありがとう。」

「……………会いたかった。」  
「アミ…。」

気が弱っていた事もあって、言うつもりはなかった気持ちまで素直に口にしてしまう。

気恥ずかしさから、寄せた頭を左右に小さく動かした。

瞬間、どこからか耳が痛くなるほどの爆音が轟き、私は反射的に顔を上げる。

音の発生元だと思われる方向へ首を回せば、私が逃げ出してきた施設の一部がグシャグシャに倒壊しているのが目に入った。

驚いて固まっていると、その内に中から何かが飛び出してくる。

隣の建物の屋上に着地したその何かはそれから緩慢に視線を彷徨わせていたが、ふとこちらを向いて動きを止めた。

そして、コウモリのような翼を広げて飛び立つとフラフラとこちらに向かってくる。

その姿を確認して、私は恐怖から喉を引き攣らせた。

まるで何体ものモンスターとチヨウが融合でもしたかのような…、  
とんでもなく気味の悪い化け物がそこにいた。

真つ青な皮膚。鱗に覆われた異様に太い腕と足。その先の鋭く巨大な黒い爪。

背後からは大量の尾が伸びており、そのほとんどはミミズのような見目と質感をしていたが、中には毛の生えた細長いものやトカゲのような根の太いものも混ざっていた。

胸元から腹部にかけてはモンスターの顔らしきものが折り重なるようにボコボコと張り付いている。

首から上部分にはチヨウの面影が多分に含まれていたが、窪んだ眼球はうつろで焦点があつておらず、大きく裂けた口からは薄黄色で粘りのある涎が流れっぱなしになっている。

耳と思わしきものは魚のヒレのような形をしており、太い血管の浮き上がった頭に生える髪は無理やり引き抜かれたかのようにまばらにしか残っていない。

そして、右側頭から赤黒い脳みそのような物体が突き出していた。

よく吐かなかつたものだ…とは、後になって思った事だ。

これがあの幻の地下帝国イエンバーか。まさか本当に存在していたとは…。

地面の下にこれほど大規模の都市があるなど、この目で見なければ到底信じられるものではない。

軽く全体を見渡していて、ふと目に入った影に視線が釘づけになった。

ア……ミ……？

彼女を認識した途端、急速に意識が引き上げられ身体の制御が自

分に戻って来るのを感じる。

それと同時に胸の内に強く歓喜と畏怖の念を抱いた。

アミと再び会えた事に対する喜びと、竜の姿に怯えられてしまう可能性に対する恐れだ。

今すぐ傍に行って抱きしめたい。このまま踵を返し逃げてしまいたい。

そんな、相反する気持ちが俺を動けなくする。

だが、視線の先のアミがあまりにも真っ直ぐこちらを見てくるので、俺はその瞳に引き寄せられるように空を翔けていた。

気が付けば、すぐ目の前にアミがいる。

：ああ。少し、痩せたか？

髪の毛のツヤも失われているし、目の下には薄らとクマができていて、全体にどこことなく疲れが見える。

どうやらあまり良い環境で過ごせてはいなかったようだ。何とも痛ましい。

それにしても、俺を見上げたまま動く様子が無いアミは今何を考えているのだろうか。

胸の内にじわじわと憂いが広がる。

それから彼女はほんの少し首を傾げたあと、ポツリと俺の名を口にした。

っ…！？

あまりに衝撃が大きすぎて、無意識に身を引いていた。

まさか。信じられない。彼女は俺が竜人族だということなど知らないはずだ。

当然、2つの形態を持つ種族が存在するということも。だったら、なぜ。どうして、彼女は俺を俺だと認識したというのだ。

そんな事、奇跡でだって有り得ない。

…そうだ、有り得ない。もしかすると、意味を勘違いしているのかもしれない。

一旦、冷静になってみればすぐに正しい結論は出た。

単に色合いが似ているから、竜に俺の存在を重ねて思わず名が口をついたのだろう。

あまりにも都合の良い勘違いをする愚かな自分を、心の中で嘲笑した。

しかし、次に発せられた彼女の言葉で俺は驚愕に身を固める。

「あの…。マサじゃ…ない…の？」

困ったように眉尻を下げたアミは、自分でも半信半疑といった風情で弱々しく聞いてきた。

あるはずのない事だと思っていたが、やはり彼女は竜と俺を同一の存在として認めた上で名を呼んできたようだ。

では、俺はどうしたらいい。どうするべきだ。

幸い、こちらを見上げる彼女の瞳には困惑以外に恐れや嫌悪といった悪い方向の感情は見られない。

一応助けに来た身としては、このままというわけにもいかないだろう。

ならば…と、俺は意を決して人の姿に戻る事にした。



人形態に戻った俺を視界に入れたアミは、それはもう嬉しそうな花の如き笑みを浮かべて駆け寄って来た。

名を呼ぶ声も先程までと違い歓喜に満ちており、その事実に関心臓が大きく跳ねる。

あとほんの少しで彼女の身に触れる事が出来るという位置まで来て、アミは急にピタリと動きを止めた。

俺の身体に視線を這わせて、悲壮な表情を見せる。

ああ、そういえばあちこち杭に貫かれて見るに堪えない状態になっていたんだつたな、と他人事のように思った。

竜形態は、人のそれよりも自己治癒能力が何倍も優れている。

致命傷と呼ぶほどの怪我がなかったのもあって、完治とまではいかないがすでに身体の傷はある程度塞がっていた。

まるで我が事のように辛そうな顔をして、アミは手当てをと慌てた様子で辺りを見回す。

俺のために必死になるその姿を前に、心が求めるまま彼女に向かって伸びていく自分の腕を止めることが出来なかった。

わずかに残った理性で、力を込めすぎて壊してしまわないように調整する。

すぐそこにあるアミのぬくもりに、俺の心が何かで満たされているのを感じた。

身の内にすっぽりと収まった彼女は突然の行動に動揺していたが、なおもこちらの心配をしてくれる。

そんなアミの変わらぬ気遣いに触れて、ようやくその身をこの手に取り戻せたのだと実感することができた。

溢れる感情に任せて名を呼べば、彼女はそっと首に腕を回して顔を押し付けてくる。

そして、呟くように小さな声で謝罪と感謝を口に寄せ、最後に『

会いたかった』と言葉を添えた。

彼女の言動ひとつひとつに、身の内に流れる血潮が熱く滾る。

俺という存在を求める声を聞いたのは人生で初めてだった。

それはそうだろう。例え親しい間柄であつても、誰もが視線を逸らすような強面の男を相手に積極的に会いたいなどとは思えまい。

だというのに、お前はそんなにも容易く…。

一体、俺をどこまで溺れさせれば気が済むんだ、アミ。

これじゃあ…、本当に本気で離れられなくなっちまう。

俺の苦悩を知ってか知らずか、アミは甘えるように押し付けた頭をぐりぐりと動かす。

昂ぶる感情を抑えきれず、いよいよ彼女に襲い掛かってしまいそうになった瞬間、突然後方の建物の一部が激しい音と共に粉々に吹き飛んだ。

助かったような残念なような気持ちを抱きながら、一気に警戒を強める。

そこから姿を現したのは、これ以上は無いというほど不気味なモンスターだった。

そのあまりの醜悪な見目に、一瞬思考が停止する。

すぐ傍でアミが息を呑む音がして、正気に返った。

探れば今まで出会ったどのモンスターよりも上位の気配を感じる。

体力も魔力も半分以下で装備はボロボロ、さらに相手の攻撃手段も不明とくれば、不安にもなる。

この状況で俺は彼女を無事守りきる事が出来るだろうか…？

## 第二十五話〜ジレンマ〜

私たちのいる場所から数メートル先に着地したチヨウらしき化物。

その口から流れている粘着質の薄黄色い涎が地面に落ちると、途端にそこから焼けるようなジュウという音と共に白い煙が上がった。ありえない出来事を目の当たりにして、唇の端がピクピクと引き攣る。

えー…？何その濃硫酸みたいな反応。いや、実際に扱った事は無いからあくまで素人のイメージだけだ。

何にせよ、そんな凶悪な液体が垂れ流しになっているなんてタチが悪すぎる。

しかし、それで焼け爛れない彼の皮膚は一体どうなっているのだろうか。

マサはチヨウから視線を外さないまま、私を地面に降ろしてその広い背中に庇った。

彼には珍しく額からツツと汗を流しながら、緊張した面持ちで口を開く。

「アミ。悪いがここに来るまでに色々消耗しちゃって、アイツを確実に倒せる自信が無え。

最悪でも相討ちには持ち込んでやるから、できればこのまま一人で逃げてくれ。」

一瞬、耳を疑った。

どれだけお人好しだったら、こんな義理もない他人のために命を賭けることができるというのだろう。

多分、マサ1人ならわざわざアレを相手にしなくても、いくらでも逃げる事ができるはずだ。

私というお荷物さえいなければ、こんな訳の分からない場所どこまでボロボロに傷つく事も無かった。

…歯がゆい。自分で自分の身も守れない脆弱さが。彼の重荷にか成り得ない事実が。

それに、私が命の恩人である彼を放って逃げる様な薄情な真似が出来る人間だと思われているのも悔しい。

苦々しげに告げられたマサの言葉に内心で鬱屈とした気分になりながらも、それを表に出さずに笑って答えた。

「1人で逃げるってというのは無理…かな。

まあ、邪魔になりたくないから、この場に残るっていう選択肢は無いけど。

そもそも逃げ道だって分からないし、そうしたところで助かることも限らないでしょ？

だったら、私はマサが勝つのを信じて待つよ。

というか、今の私はマサがいないと生きていけないから、死ぬ時は一緒ね？」

「…は？」

マサは一瞬呆けた顔で私を見たが、すぐに視線を前方へ戻した。

それまでただボーっと立ちっぱなしだったチヨウが、こちらへ向かって1歩足を踏み出して来たからだ。

焦点の定まっていないう瞳でいかにして私たちを認識しているのかは分からないけれど、アレの意識は確実にこちらを向いているのが肌で感じられた。

それからカクリと顔を天井に向けたチョウは、甲高い雄叫びをあげて空気を激しく揺さぶる。

たまらず両手で自分の耳を塞いだ。

たっぷり10秒は続いた声がようやく止まったかと思うと、チョウはゆっくりと顔を戻して今度は明白な敵意を飛ばしてくる。

常人の私にも分かる程、空気が冷たく変化していた。

マサがあちこち欠けてしまっている斧を構える。

緊迫した場を壊さないように、私は小声で彼の背中に声をかけた。

「じゃあ、マサ。私、足手まといにならないように離れてるから。」

言い終わると同時に後方へ駆け出す。

直後、なぜか金属が交わるような音が連続で響いてきた。

その音を背に、私はマサの無事を祈りながら必死で足を動かしかけた。

~~~~~

「確か、この建物だったと思うけど……。」

荒い息を整えることもせず、ある施設の扉を開いて奥へと進む。目的の部屋はどこだったか、と記憶を巡らせながら広々とした廊

下を足早に過ぎて行く。

私にただ隠れてマサを待つ等というつもりは毛頭無かった。

「チヨウがなぜあんな姿になったのか、その理屈は私には分からない。」

けれど、あの恐ろしいコード群に捕まった後で彼がモンスターと融合してしまった事実だけは理解できた。

おそらく、もうまともな思考回路は残っていないのだろう。

彼の虚ろな瞳には一切の知性も感じられなかった。

だから、私はマサに彼が元は人間だったという事を敢えて教えなかったのだ。

それでマサがチヨウを手にかけるのを躊躇して、逆にやられてしまったら困る。

もはやあれはただのモンスターで、襲ってきたからには身を守る為に反撃しないといけない。それだけだ。

「あつた、この部屋！」

なかば体当たりするように、勢いよくドアを開けて中に入った。

部屋の左右には天井まで伸びた大きな本棚が隙間無く設置されており、正面には机と機械がひとつになったような奇妙な物体が鎮座している。

本棚に並べられた蔵書には見向きもせずには私はその机へと足を向けた。

たどり着いてすぐ、正面右側に取り付けられている引出の1番下をガラリと開ける。

その中から1冊の分厚い本を取り出して机の上に置き、表紙に手

をかけた。

それから、気を落ち着けるように数回深呼吸した後、おもむろにページをめくった。

「…え、と。魔光石の発明により魔力エネルギーの需要が急激に増大し帝国研究部の…ここじゃない。

帝国歴305年頃になると本来の目的と他に愛玩用として…あ、この辺かな。

…あつた！全て、クリーチャーには軛くびきがかけられており、種毎に定められた封呪ふうじゆを唱える事によりその活動を強制的に停止状態にさせることが出来る。封呪については巻末の資料一覧に記載！」

魔力とモンスターについて書かれた教科書と思わしき本。

チヨウに教えてやる気になれず、すぐ机の中に戻したが…万一に備えて在り処を覚えていて良かった。

私はひとつ息をついてから慎重に一覧表を破いて懐にしまい、再びマサの元へと駆け出した。



今のところ敵意は感じられないが、油断は出来ない。

上位のモンスターは特異な攻撃方法や体質を持っている場合が多い。

相手の情報が何一つ分からない今の状況で戦闘に入るのはかなり不利だ。

本来ならここまで近づかれる前にアミを安全な場所へ逃がしたかったが、ヤツが動く獲物に反射的に遠距離攻撃を仕掛けてこないとも限らない。

それよりもモンスターと俺の直線上に庇いながら逃がした方が確実だ。

正面に降り立ったモンスターの一挙一動に注目しながら、俺は腰を落としてアミを降ろした。

腕で軽く彼女の肩を押して背後へ移動するように促す。

大人しく俺の背に庇われたアミに、正面を見据えたまま小声で話しかけた。

下手に希望を持たせて俺と残る等と言い出さないように、正直に勝てる自信が無い事を告げた。

逃げろという言葉聞いて、彼女は少しの間沈黙する。

それからフツと笑う様な気配がしたかと思うと、こう返された。

「一人で逃げるっていうのは無理…かな。」

案の定かと説得するために口を開けば、それよりも前に彼女が次の台詞を紡いだ。

その相変わらず合理的な思考によって導き出されたであろう内容に、思わず苦笑いが漏れる。

だが、最後の一言に虚を突かれた俺はあっさりモンスターから意識を外してしまった。

「今の私はマサがないと生きていけないから、死ぬ時は一緒ね？」

一瞬で頭の中に大量の疑問が湧いて、嵐のように吹き荒れた。

何だそれは。どういう意味なんだ。

まるでどこその物語の告白のような台詞だが、それにしてもあまりにもあっさりとした口調だ。

職も無く完全に養われている状態であるという事実をただ述べているだけなのか？

だが、それなら死ぬ時は一緒などという言い方をするだろうか。

それとも、1人では遺跡から出られないという自虐から？

俺がいなくても生きていける時というのが、過去と未来どちらの方向にかかっているのかでも意味は変わってくるだろう。

もし…。もし、お前の中に少しでも俺と同じ気持ちがあるんだったら…。俺は…。

混乱する思考のままに口を開こうとした瞬間、モンスターが足を踏み出す音が聞こえて慌てて前方に顔を戻した。

すっかり現在の状況を忘れていた自分に決まりの悪さを覚える。

視線の先でモンスターが興奮したように雄たけびを上げた。

そして、まるで今までの愚鈍さが嘘だったかのように、鋭い殺気を飛ばしてくる。

背後にいるアミもそれに気が付いたのか、ゴクリと喉を鳴らしていた。

モンスターに警戒態勢を取ったまま、少しだけ彼女に意識を向ける。

しかし…だ。

例えばそこに恋情が込められていなくとも、十二分じふふんに心地の良い台詞ではあった。

まるで俺という存在が彼女の全てであるかのような、そんな勘違いをしたくなる。

厭う言葉ならいくらでも耳にした。途切れる事なく悪意を受け続けた。

だからこそ、それはどこまでも甘美で…。

ならば、もう意味などなんだっていいんじゃないかと思えた。

何より、後でいくらでも本人に確かめられる事だ。

現状大事なのは、俺の誰より大切な存在である彼女を無傷で守りきるという1点のみだろう。

今はそれだけに集中すればいい。

アミが俺の勝利を信じると言うのなら、万一の時には俺と共に果てるつもりであると言うのなら、どんな相手だろうと負ける事などあつてはならない。

そこまで考えて、俺はゆっくりと斧を構えてモンスターに殺意を返した。

これから繰り広げられるであろう戦いに対して、いつになく集中力が高まっていく。

一触即発の空気を感じ取ったのか、アミが小声でこの場から離脱する旨を宣言して真っ直ぐ後方に走り去って行った。

偶然なのか考えた末での行動なのかは分からないが、伝えてもいないのに示そうと思っていた方向へ駆けてくれたのはありがたい。

急に動き出したアミに反応したモンスターはグツと膝を落として彼女の元へ跳躍しようとする。

そんな行動を読み取った俺は、それを防ぐために素早く駆け出し右手側の斧を振り上げた。

身の危険を感じたのか、相手は跳躍の方向を変えて俺に向かい砲弾のように飛び出してくる。

左手側の斧を心臓の上に盾にするように構えるとほぼ同時にモン

スターの黒い爪と衝突して金属同士がぶつかり合ったような高い音が鳴り響いた。

避ければまだそう離れていないアミにも被害が及ぶことは明白だったので、斧の限界ギリギリまで衝撃を逸らさずに受け止める。その激しさに足元の白い床にピシリとヒビが入った。

止められたのが気に食わなかったのか、モンスターはそれから執拗に爪での攻撃を繰り返してくる。

驚くべき力とスピードを持っていてるようだが、その動きは実に単調だ。

どうやら見た目の通りあまり知能は高くないらしい。

油断しなければ勝てるか？と思った瞬間、脇腹に鈍い痛みが走り軽く身体のバランスを崩した。

一瞬だけ下方に目をやれば、トカゲ型の尾が戻っていくのが見えた。

どうも、爪に意識をやっている隙に視界の外から打ち付けられてしまったようだ。

おそらく狙ってやったというよりも、モンスターの持つ戦闘本能から来る行動だろう。

考えた先から油断してどうするのかと気を引き締めながら、向かってくる爪を弾きその勢いで距離を取ろうと斜め後方へ跳ぶ。

だが、ヤツは俺が着地するよりも早く、例の薄黄色の唾液を飛ばしてきた。

咄嗟の判断で炎を放ち蒸発させ、何とか無事に地面に足をつける。

間違いなく今までで1番の強敵だと理解させられた瞬間だった。

## 第二十六話 終息

封呪でモンスターの動きを制限できると言っても、音の届かない位置にいたのではどうしようもない。

欲を言えば拡声器のひとつでも欲しいところだが、存在するかどうかも分からない物を探すなど時間の無駄もいところだ。

あつたところで、電池代わりになる魔力がなければ使えないだろうし…。

やはり、目をつけられるのを覚悟で声が聞こえるであろう距離まで近付くしかないか。

そういえば、あれだけ色々なモンスターがくっついた状態のチョウは何の種に属する事になるのだろう。

1 番体積の多い種族？それとも該当する部分ごとに効く？

人間の身体がベースだと認識されていれば、どれも効果が無いという結果も有り得る。

まあ、すっかり変わり果てたあの身体を見る限り、さすがにその可能性は低いとは思っけれど。

もっとも、一覧表に記してある名前だけ見たところで姿形など想像がつかないので、結局は上から順に読み上げていくしかないのだが…。

不安なのが、相手に聴覚が存在しているかどうかだ。

見た目にはそれらしいヒレがついていたけれど、本当にあれは耳なのだろうか。

聴覚の存在しないモンスターに対して使用する封呪代わりの首輪のようなものもあるらしい。

万が一を考えたらそちらを用意した方がいいのかも知れないが、その在り処や使い方が明確になっていない以上、頼りにはできない。まず懐の一覧表を試してみても、ダメならまたどうするか考えよう。とりあえず、現場でマサの邪魔にならなければいいけれど…そんな風に考えつつ私は駆ける足を速めた。

~~~~~

地面や建物が広範囲に渡って焼け焦げていたり倒壊していたりしたけれど、そこにチヨウとマサは見当たらなかった。

耳を澄ましてもそれらしい音は聞こえてこない。仕方がないので、一先ずの案として封呪を唱えながらこの辺りを練り歩くことにした。

近くに居るのならチヨウかマサ、どちらかが必ず反応してくるだろう。

なるべく周囲にも気を配りながら、大声で一覧表を読み上げつつポロポロの道を歩く。

上から半分ほど読み終わったところで、突如前方に見えていた建物が内側から爆発を起こした。

粉塵の中から奇声を発しながらチヨウが姿を現す。その視線は真っ直ぐに私を捉えていた。

マズイ…と思った瞬間、ボンという音と共にその背が大きく燃え盛り、チヨウは雄たけびを上げて苦しんだ。

直後、彼は身体をくの字に曲げて、ものすごい勢いで吹っ飛んで

行った。

ふと見れば、先ほどまでチヨウがいた場所にマサが立っている。あちらも私の存在に気が付いたようで、驚愕に目を見開いた後100メートルはあろうかという距離を一瞬で詰めて来た。

瞬間移動しながらの速さに驚き固まった私に、切羽詰まったような表情のマサが怒鳴りつけてくる。

「バカ野郎、アミ！何で戻って来やがった！」

「…つごめんなさい！」

モンスターの行動を封じるっていう呪文が書かれた紙を見つけてマサの助けになりたくて…。」

「俺の…？そんな事のために、テメエの命を危険に曝したってのか！？」

「そんな事なんかじゃないっ！」

そもそも私のせいでマサが死ぬかもしれないって時に、黙って見てるだけなんて出来るわけじゃないじゃない！」

「…つくそ！俺だつてなあ！お前がいなきゃ、この先まともに生きてなんかいらねえんだぞ！」

そんな理由で無茶がまかり通ると思ったら大間違いだからな！」

「え…。」

「チツ、もう動き出しやがった。」

どうやらアミの言う呪文とやらが効いたみてえで、あの野郎、動きが鈍ってやがる。

即行で片あ付けてやつから、今度は余計な真似せずそこで大人しくしてるんだぞ！いいいな！」

ちよ、待っ！マサ、さっきの台詞どついで…！」



突然放たれた言葉に唾然とする私には目もくれず、マサは再び戦いに身を投じていた。

彼が言ったように封呪の効果はちゃんとあつたようで、危なげなくチヨウの攻撃を捌いている様子にホツとする。

物陰からそれを眺めていると、段々怖さとは別の意味で心臓の動悸が激しくなつていった。

いくらなんでも、子供扱いしている相手にあんな台詞言わない……よね？

ええ、何つ。じゃあ、期待していいの？実は両想い！？

そんな簡単な話があつていいものなの！？

そ、それとも私を探すために利用した黒い組織の偉い人に突きつけられた条件が、助けた後の私の身柄を引き渡す事で、生かして連れて帰らないと今度はマサの命がその組織に狙われて……って、有り得ないから！

咄嗟の発想としてどうなのよ！どれだけ小説に毒されてるの自分！

……ダメだ。混乱して思考がまともに働いていないらしい。何とか気を落ち着けなければ。

それから、少しだけ冷静さを取り戻した私は改めて思考を巡らせた。

とにかく、マサの本音がどうとか今はそんな気楽な事を言っている場合じゃあない。

ただでさえ、彼が1人で戦ってくれている最中だと言つのに不謹慎だ。

そんなことは地上に戻った後でいくらでも確認すればいい。

結論が出たと同時に、遺跡中に轟くほど大きなチヨウの断末魔が響き渡った。

それは、彼が人間だった時とは比べ物にならないくらい醜悪で…そして、悲痛な叫びだった。

耐えきれず、その場にしゃがみ込んで懸命に己の耳をふさぐ。

現実にその叫びが途切れた後も、いつまでもいつまでも彼の声が耳の奥で再生され続けた。

脳が侵されるような感覚と同時に罪の意識が私を襲う。

私は私の為に1度ならず2度までもチヨウを…、人間を見殺しにしたのだ。

そんな自分自身の汚さに吐き気がした。

一進一退の攻防が続いていた。

激しく動き回ったおかげで、塞がっていた傷がいくつか開き少なくな量の血が流れている。

相手に疲れらしきものが見られない事や例の唾液を防ぐために1つ斧を使えなくしてしまった事から考えて、状況は激しく不利と言えるだろう。

叩きつけられて壊れた天井の穴から、俺を追ってモンスターが建物内へ侵入してくる。

迎撃しようとして瓦礫から飛び出せば、血を失い過ぎたせいか、ほんの一瞬だけ視界がかすんだ。

それが相手には大きな隙となったようで、気が付いた時にはその凶悪な爪が脳天に振り下ろされるところだった。

防御も回避も間に合いそうにない。

咄嗟に死を覚悟したのだが、そこでなぜか急にモンスターの動きが僅か鈍った。

おかげで回避行動が間に合い、こめかみに浅い切り傷がつく程度で済む。

俺から軽く距離を取った相手は、明らかに動きがぎこちなくなっていた。

理由が分からず困惑するも、視線を逸らさずに油断なく体勢を整える。

だが、当の本人は俺から意識を離して、殺気とはまた違った憎悪の気配をまき散らしながら明後日の方向を睨みつけ唸りだした。

そのまま壁に全ての尾を叩きつけて一面崩壊させたかと思うと、雄叫びをあげながら外へ歩いて行く。

踏みつける瓦礫の崩れる音にハツとして、慌ててモンスターに追従するように炎を放った。

炎は至極あっさりとその背に命中し、モンスターは悲鳴を上げ歩みを止める。

間を置かず、一気に駆け寄って腹部に全力の回し蹴りを見舞った。瞬間、そこから浮き出ている顔のいくつかがグチャリと潰れて、

そのあまりの感触の悪さに眉を顰める。

家屋を倒壊させながら吹っ飛んでいく相手を追おうとして、目の端に入った存在に思わず動きを止めた。

…な……んで…アミが、ここに？

邪魔にならないようにと、安全な場所に避難していたのではなかったのか。

もし、俺が横向きでなく正面にモンスターを飛ばしていたら間違  
いなくアミは巻き込まれていた。

そうなれば、まず彼女は生きていなかっただろう。

考えてゾツとした。

彼女の無謀な行いに対して、理不尽な怒りが込み上げてくる。

俺はそれに我を忘れて、モンスターを追いもせず彼女の元へと  
駆けつけ、開口一番怒鳴りつけた。

話を聞けば、どうやらアミは俺を助けるために危険を承知で戻っ  
て来たようだった。

しかし、モンスターの行動を封じる呪文とは…。

ということは、先程アイツの動きが鈍ったのは少なからずその呪  
文とやらが効いたから…か。

合点がいった。

つまり…俺はあの時、図らずも彼女に命を救われたらしい。

それに報いるためにも、絶対にあのモンスターを仕留めなければ  
と思った。

だが、これはこれ、それはそれだ。

気持ちは嬉しいが、俺なんかのために自分の命を粗末に扱うんじ  
ゃない。

心配が過ぎてつい口調が厳しくなってしまったが、そんな俺に恐  
れる事無く言葉を返してくるアミを素直に凄と思う。

過去、人間相手に怒鳴った記憶はないが、ほとんどは少々声を低  
くするだけで顔色を悪くし喉を引き攣らせていた。

だからこそ、稀有な存在である彼女を失う事にこれほどの恐怖を  
感じるのだろう。

しかし、売り言葉に買い言葉というか。途中、流れでとんでもな

いことを口走ってしまったような気がする。

アミが呆気にとられたような顔で見上げてくるのに耐えきれず、俺はモンスターが動き出した事を理由に誤魔化すように指示を出してその場から走り去った。

そう高くない建物の屋上へと飛び乗って、意識を切り替えて集中力を高める。

視界の先の倒壊した家屋の中から、怒りの波動をまき散らしつつモンスターが勢いよく空へと舞い上がった。

こちらの存在を確認したモンスターは、最初に目にした不安定な飛び方が嘘のように風の如き速さで真っ直ぐ下降してくる。

徐々に速度を増していることから、そのまま突っ込んでくるつもりなのだと理解した。

まともに喰らえばただでは済まないだろう攻撃を、残っていたもう一本の斧を使い受け流す。

すでに限界が近かったのか、その後こちらも修復不可能なほど粉々に壊れてしまった。

斧だったものを捨てて、格闘術の構えに移行する。

それから、モンスターはまるで全ての力を使い切るように我武者羅に襲いかかって来た。

やはり動きは鈍くなっているようで、余裕を持ってそれらを捌いていく。

とは言え、その身の耐久性まで落ちたわけではないだろう。

生半可な攻撃ではコイツを死に至らしめることはできないはずだ。そう考えた俺はモンスターの攻撃の合間を縫って腹部にある傷か

ら手を体内にめり込ませた。

そして、残っていた全魔力を炎に変換し、その体内で一気に爆発させた。

モンスターは身体中の穴と言う穴から炎を吹きつつ、悲鳴らしき甲高い声を轟かす。

普通なら肉体がバラバラになってもおかしくない威力があったのだが、五体満足なのはさすがと言うべきか…。

膝からゆっくりと地面に伏したモンスターは、しばらくビクビクと痙攣したのち…やがて、事切れた。

念のため、死亡したモンスターの肉体を細かく潰しておく。

無いと思うが、万が一にも再生されたら厄介だ。

血液に相当するのであろう紫色の体液がそこかしこに飛び散った。

集中力が途切れて、急に全身を重く感じる。

それでも、大きな問題が片付いたおかげか、頭はスッキリしていた。

安堵から深く息を吐き、俺はゆっくりとアミの待っているであろう場所へと足を向けた。

## 第二十六話 終息 (後書き)

家屋等が簡単に倒壊するのは、年数が経って比較的モロくなっているからです。



## 第二十七話 咎

相手は犯罪者で、ある意味では自業自得で因果応報と言えなくもない。

けれど、私は命の危険なんか無い平和な国で育った日本人で、咄嗟に己が助かる事しか考えられなかったという事実が酷く罪深い所業の様な気がしてならなかった。

例えば、満員の救命ボートにさらに人が継りつこうとして来たのを自分たちが助かる為に無視あるいは蹴落とした時のような、そんな罪悪感に近いと思う。

後になつていくら『あの時は必死だった』『仕方なかった』と言いつつ、い訳をしたところで、後ろめたい気持ちが無くなるものじゃあない。私は、一生癒える事の無い心の闇を1つ背負ってしまったのだ。

「アミ！？どうした!？」

上手く呼吸が出来ずに蹲ったまま粗く息を吐いていると、マサが心配そうに駆けてきた。

傷が開いたのか新たにこさえたのか、彼の通った場所に赤い足跡がつく。

それに余計に罪の意識を刺激されて、私は自分を抱きしめながらひたすら謝り続けた。

「っごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい…。」

「はあ？なんだ、急に。何で謝るんだ？」

「…っ。わ、私…のせいで…マサ……チヨウが…。」

「チヨウ？お前を攫ったっつー、チヨウデルクって男か？

そっついや、見ねえな。ヤツはどこに行ったんだ？」

冷静になった後から思えば、何日も軟禁状態が続いて精神がかなりまいっていたせいなのかもしれない。

この時の私は酷く自虐的な気分になっていて、いつそ全てを吐露してマサに嫌われたり軽蔑されたりすれば少しは罪悪感も薄れるんじゃないかとか、そんな馬鹿な事を考えていた。

心のまま、ここであったことを話し尽くすと、マサは呆れたような顔をしてため息をついた。

「別に、そりゃアミのせいでも何でもねえだろう。むしろ、逃げて正解だ。」

あのモンスターがチヨウデルクだと知っていたところで、俺もやるこたあ変わらなかつただろうしな。

大体、見殺しにしただけで罪になるなら、人相手に立ち回る傭兵なんか今頃全員檻の中だぞ？

どっから、そんな突飛な考えが浮かぶんだ。」

「どっ……から？…今…どこからって…聞いた？」

責めてもらえなかったことに対して自分勝手にも不満を覚えた私は、何もかもがどうでもいよいよな気持ちで今まで頑なに秘密にしていたこの世界に至るまでの経緯をペラペラと口にしていった。

どうせ信じてもらえるわけがないとタカをくくっていたところも

あるかもしれない。

でも、マサはそんな私を疑うでもなく、神妙な顔つきをして黙ったまま最後まで話を聞いてくれた。

隠していた事を出し切って口を噤み俯いた私を前に、マサは少し困ったような顔をして自分の後ろ頭を搔く。

「俺は…学がねえからよ、異世界なんて言われても正直よく分かんねえ。」

とりあえず、この大陸の常識が全く通じねえような、かなり遠い場所から来たんだっつーことだけは分かった。

それで、これまで持ってた疑問にも色々と納得がいった。

…で、だ。お返しっつーのも変だが…まあ、今度は俺の話をしてやろつ。」

そう言っつて、マサはポツポツと自分自身の過去について語りだした。

その内容は想像の範疇を遥かに超えるほど壮絶で…、私はただ茫然と彼の話の話を聞く事しか出来なかった。

すでに過去の事だと割り切っているのか、淡々と語るその姿が逆に痛々しく目に映る。

それを見ていて、些細な出来事で自棄になっつてしまった自分を愚かしく思った。

「ま。要は、俺は親殺しの最低の化け物だっつたつてワケだ。」

「アミ、お前はこんな俺を…：…軽蔑…するか？」

「そんなんっ！だつて、それはっ…：。」

「仕方ない事だつたつてか？」

確かに親父は殺らなきゃ殺られてたし、母親に至っては不可抗力かもしれない。

だが、アミがチヨウを見殺しにしたつてのが罪になるんなら、自分の手で人を殺した俺は当然それ以上の悪つて事になるだろう。

それこそ、誰に蔑まれても殺されても当然なくらいの…。」  
「…っ！」

返す言葉が無かった。

私が自分を責めることが、そのまま彼を責めることに繋がるのだ。なのに、彼は私のために今それすらも受け止めようとしている。

マサの自嘲にも似た苦い笑みから、その心の傷がけて浅くない事が分かるのに…。」

「ごめん…なさい、貴方にそこまで言わせてしまって。辛いのに。マサだつて苦しいのにつ。」

私、いつだつて自分のことばかりで…。何で…こんなに子供なんだらう。

情けなくつて、嫌になる…。」  
「別に、アミは情けなくなんかねえよ。

たつた1人で全く知らねえ土地に放り出されて、最初から余裕のある奴なんかいるわけねえだろ。

だつっーのに、お前はしょっぱなから俺に遠慮はしまくるわ、他人にもやたらと気い使うわ。

本当に自分の事しか見えてねえ人間に出来る芸当じゃねえよ。

…お前はよくやつてるさ。ずっと一緒にいた俺が保証してやる。」

そう言つて、マサは優しい眼差しを向けてそつと頭を撫でてくる。

その大きな手に撫でられる度に胸の内にあたたかいものが広がって、目の奥がジワリと熱くなった。

「っマサ。…マサあ。」

私はさらなるぬくもりを求めて、彼の大きな身体に力一杯しがみついた。

我慢していた涙が頬をつたう。堪え切れずに嗚咽が漏れる。

マサは頭に置いていた手を今度は背中に移動させて、慰めるようにゆっくりとさすってくれていた。

それがあまりにも心地良くて、この場の状況も何もかも忘れて安心しきった私は、いつの間にか深い眠りに落ちていた。

戻ってみれば、建物の隅で小さく蹲って苦しそうに呻いているアミの姿が目に入った。

慌てて駆け寄ると、彼女は辛そうな表情で幾度も謝ってくる。

突然の事に面喰らいつつも、その理由を尋ねた。

アミは何かに耐える様な顔をして、つたなく言葉を発する。

その中でチヨウウという単語を聞いて、そういえばそんな男がいたんだったと今さらながら思い出した。

彼女を見つけた事とモンスターを相手にしていた事で、今回の誘拐の元凶という重大な存在についてすっかり忘れてしまっていた。

さらに事情を聞いたところによると、なんとあのモンスターの正体がチヨウデルクだったらしい。

にわかには信じられない話だが、アミが言うのなら本当なんだろう。

彼女は俺にそれを教えなかった事と、まだ人だったチヨウデルクを助けられなかった事を酷く悔いているようだった。

なぜそんな程度のことかと思ひ悩む必要があるのか理解に苦しむが、それならそれで沈んだ心を晴らしてやりたい。

そう思った俺は彼女を慰めるために言葉を紡ぐ。

が、その中の何か気が障ったようで、今にも泣きだしそうな笑みを浮かべた彼女はほの暗い声でこう言った。

「どこ………から？…今…どこからって…聞いた？」

アミは急に睨みつけるような目つきをして、息継ぎを忘れたかのように滔々（とうとう）と語り出した。

それは先程聞いたチヨウの事なんかよりも余程信じがたい内容で、今まで彼女がなぜ頑ななまでに自らの出自について話そうとしなかったのか、俺は痛いほど理解する。

アミの説明は学者が使うような専門用語らしき単語が多く、難しくすぎて半分くらいは何を言っているのか分からなかった。

けれど、ようやく彼女の過去について知る事ができるとあって、1つの言葉も聞き洩らしたくなかった俺は、ひたすら黙ってそれを記憶するに努めた。

こことは違う世界なのだとか、魔法が存在しないかわりに発達した機械文明がどうか、普通ならまず本人の精神状態を疑われてもおかしくないだろう。

病気だと言われてしまいかもしれない。

だが、俺は不思議と彼女のそれを虚言だとは感じなかった。

いや、他ならぬアミの言葉を疑う余地など俺の中には無かったと

というのが正しいのかもしれない。

俺なんかを普通の人間のように扱ってくれる奇跡のような存在の  
アミが、こんな事で嘘なんかつくはずがない。

全てを話し終わって悲痛な表情で俯いたアミに、俺は何と言葉を  
かけていいのか分からなかった。

とりあえず、素直に思った事を口にしてみる。

そして、彼女の罪の意識が少しでも軽くなるのならばと、今まで  
誰にも話さなかった子供時代に起こした苦いあやまちについて余す  
ことなく語って聞かせた。

彼女から告白された内容が、己の隠してきたそれに相当する重さ  
のものであると判断したからでもある。

…ただ、自分を攫った人間にすら慈悲の心を向けるアミのことだ。  
自らの命を惜しんでメエの親すら殺した事実を話せば、嫌悪し  
避けられてしまう可能性もあるかもしれない。

そうならなかったで、自分の犯した罪に対する罰として甘んじ  
て受け入れるつもりだった。

けれど、アミはやはりアミで…。

嫌悪どころか、俺の話を聞く彼女は自分のこと以上に辛そうな顔  
をして気遣わしげな瞳を向けてきた。

それが何とも面映ゆく、自然と上がりそうになる己の口角を意識  
して引き締める。

長い話が終わり、俺はある問いを彼女に投げかけた。

「アミ、お前はこんな俺を………軽蔑…するか？」



表情を見れば彼女がそれを否定するであろうことは予想できていたが、それでも『もし、肯定されてしまったら』と考えると怖くて声が震えた。

諦める事には慣れていないが、期待する事にはそう慣れていない。想像通り即座に首を横に振ったアミに対し、俺自身を卑下する事で彼女に悩む必要の無い事なのだと思えられればと思った。

上手いやり方では無いかもしれないが、人間との交流経験に乏しい俺にはこれが精いっぱいだ。

ハッと目を見開いたアミは何とも痛ましい表情をして、か細い声で謝ってきた。

その上、自分の事ばかり考えていて情けないなどと彼女に限ってありもしない事を言っただけで落ち込んでいた。

いつだって人の事情ばかり気にして、遠慮しがちで我がまま1つろくに口にしないアミのどこをどうすればそんな結論に至るといのか…。

否定して、励まして、彼女から貰った慈愛のほんの一欠けらでもいいから返したくて、その頭を丁寧にゆっくりと撫でつけた。

すると、アミは顔をくしゃりと歪ませて涙を滲ませながら、縋るように俺の名を呼び抱きついてくる。

ずっと気を張っていたのだろう。

彼女は、それからしばらく子供のように声をあげて泣きじゃくっていた。

懐の内ですごい間にか深く眠りについてたアミを腕に抱え立ちあがる。

彼女から聞いた話に間違いが無ければ、行きがけと同じあの通路

を使ったとしてもエネルギー不足とやらで大量のモンスターに襲われる事はないだろう。

無残な状態の死骸が積み重なった光景など見せたくは無いが、他を知らないのでは通らないわけにもいかない。

ならば、彼女の意識が無い今の状況は願ったり叶ったりだ。

懸念事項もあるにはあるが、傷も魔力も少しは回復しているし、何よりいつまでもアミをこんな所に置いておきたくないという思いもあった。

それから、俺は腕の中の存在を万一にも傷つけられないように最大限注意を払いつつ、慎重に帰路へとついたのであった。

## 第二十八話 限界突破

「…っもついいい。」

マサの馬鹿、ヘタレ、チキン、意気地なし、臆病者、朴念仁、木偶の棒、腰抜け、腑抜け、弱虫毛虫っ。

そっちがそのつもりなら、私にだって考えがあるんだからね！」

~~~~~

あの誘拐劇から3ヶ月が経過した。

西南の国の宿屋で目を覚まし、体調を整えるために数日過ごした後、マサの武器を新調することと南の国へと赴き、特注の斧の作製が済むまでまた数日を過ごす。

そして、1ヶ月前によく目的地であった東の国の土を踏んだ。今は、その国のとある町に永住を視野に入れつつ住んでいる。翻訳師の仕事をしながらマサと2人、小さな借家で生活していた。

数ヶ月分の借家の代金を立て替えてくれた時点で、彼はお金を置いて出て行こうとしたけれど、まだ1人でやっていくことに不安があるからと言って何とか引き止めた。

ちなみに、マサとの関係は現在までに何1つ進展していなかったりする。

自分も仕事があるし、彼もギルドの依頼を受けて1人で狩りに出かけることが増えた。

部屋も別々なので、むしろ旅をしていた時より新密度が下がっているかもしれない。

この町は規模も治安もそれなりで、仕事を貰うにも女が1人で出歩くのにも困らないし、住民も活発で情に厚い人が多い。

何より、ここにはお米も味噌も醤油もある。

その味や料理の内容に多少の差異はあるものの、これらが精神に与える安らぎは非常に大きい。

どうやら、無事にこの世界で生きていく事が出来そうだと私は少なからず安堵していた。

そんな平穏が続いたある日の夜中。

喉が渴いたので月明かりを頼りに台所まで水を飲みに行った帰り、自分の部屋へ戻ろうと廊下に出ると、その先に足音をさせずに歩いているマサの姿が目に入った。

「…マサ？こんな時間に何してるの？」

言ったとたん、彼はギクリと身体を固まらせ、手に持っていた何かを落とす。

それは、とても見慣れた旅道具の詰まった袋だった。

改めて観察してみると、その背や腰には斧や沢山の荷が下げられている。

私は眉を顰めて背を向けたままの彼に問いかけた。

「…ねえ、その荷物なあに？それに、その格好も外着よね？  
何だかまるで、私に内緒でここから出て行くことでもしているみたい？」

疑問形にはしているが、この推測が正しい事は火を見るより明らかだ。

おかげで、不機嫌さが混じった低い声が出てしまい、そのせいでマサはしどろもどろに答えを返してきた。

「あ…、と、一人で暮らせるようになるまでっつー約束だっ…でっ…そのっ。」

それで…もう、大丈夫だと判断した…から…え…っ。」

言っている事は間違っていない。

町の人ともそれなりに仲良くなれたし、仕事も順調だ。

今のままなら一人で生活するに問題はないだろう。

だけど、それは普通に出て行くこととした場合のみに通じる言い訳じゃないかと思う。

「それで挨拶の1つもさせてくれずに、夜逃げするみたいに出て行くこととしたって？」

「いやっ、その…っ。」

「違うの？」

だったらどうして、こんな時間にそんな大げさな荷物を持ってこそこそ廊下を歩いていたのかしら。

教えてくれない？」

「う…。」

言いよどむ彼にたまりかねて、私は声を荒げた。  
それが、冒頭の台詞である。

マサが私をちゃんと女として見てくれている事にはもう随分前に  
気が付いていた。

例の発言から彼のこれまでの言動を思い返し、さらにその後の態  
度を見ていて確信した。

相手にも気持ちがあるのなら焦って告白するよりは、一緒にいる  
ことが当たり前前の流れを作った上で、いずれ深い関係に持つていけ  
ればなあなんて思っていたのに…。

だ・と・言・う・の・に！

よりもよつてこの男、惚れた女を前にして怖気づいて逃げよう  
としたのだ！

これが怒りを感じずにいられようか！否<sup>いな</sup>！！

人に侮蔑され続けて臆病になるのは分かるけど、だからって据え  
膳食わずに逃亡だなんて全くもって有り得ないったら有り得ない！

マサが振り向こうとした瞬間を狙って、私は彼の足に思い切りタ  
ツクルした。

重心移動中だった彼の不安定な足元がグラついて、そのまま2人  
で床に倒れ込む。

咄嗟に私の身体を持ち上げて下に敷かないよう庇うマサに、悔し  
くも胸をときめかせてしまった。

「…アミ？大丈夫か？」

困惑気味に呼びかけるマサを敢えて無視して、私は彼の身体に両手をつけてガバリと起き上がる。

無言のまま、のびっぱなしの髪を纏めていた紐を解き、次いで、その紐を使い素早くマサの両腕を縛りつけた。

「あ？」

思考が追いつかないのか、マサは私のされるがままになっている。両腕を頭の上に移動させ、今度は服の腰部分についていた飾り紐を解き、すぐ傍の柱と彼の腕を固く結びつけて軽い拘束状態にする。それから、のしりとお腹の上に跨ってマサの上着のボタンを1つずつ外し始めると、そこでようやく彼は慌てた様子で言葉を発した。

「って、ちょっ！待て待て待て！アミ！おまつ、一体何をっ！？」

「…襲っ。」

「おそっ……………はあ！？」

これ以上は無いというほど目を大きく見開き絶句するマサに、私は脱がせる手を止めないままにっこり笑って教えてあげた。

「マサを襲って、既成事実を作るの。そうしたら、責任感の強いマサの事だもの。」

もう逃げようなんて思わないでしょう?」

聞いた途端、信じられないと言った表情で固まるマサ。

私はクスクスと黒い笑いをこぼしながら、彼の頬に左手を添えゆつくりと顔を寄せていった。



アミは地上に帰ってきてから、夢にうなされ飛び起きることが増えた。

そうになると、何となくその原因であろう遺跡での出来事について話すことが躊躇われて、結局、あの時の言葉の意味を聞けないまま日々が過ぎて行った。

~~~~~

東の国の町でアミと暮らし始めてから3週間ほどが経とうとしていた。

始めは、俺と一緒にいれば彼女も人から遠巻きにされてしまうだろうという理由と、いい加減自分の理性に限界が近づいてきているという理由から、当分の間生活できそうなだけの金を置いて出て行くつもりだったのだが…。

去ろうとした俺に彼女は『まだ1人は不安だから行かないで欲しい』だとか『事情を知っているマサしか頼れない』などと縋りついてきて、どうにも断り切れずにしばらく共に生活することとなった。…己の意思の薄弱さに反吐が出る。

アミも最初の内は慣れない家事に戸惑っていたが、日々考察を重

ね、1週間も経つ頃にはすっかり彼女なりのやり方というものを掴んでいようだった。

また、積極的に町の間人とも交流を深めているようで、夕食時にはその日に仕入れた情報などを楽しそうに話してくる。

一体、何をどうやったのか。彼女と2人の時はもちろん、1人で町を歩いている時にまで俺を避けずに挨拶をしてくる人間が増えていった。

それはすごく嬉しい事のはずなのに、同時に彼女がどんどん俺を必要としなくなっているようで、胸の内に鬱屈とした感情が溜まっていく。

いつか本人にそのドス黒い感情を吐きだしてしまうのではないかと恐れた俺は、狩士の仕事を理由に頻繁に外出するようになっていった。

幾度目かになる依頼を終え、2日ぶりに戻った家で笑顔のアミに出迎えて貰い、久々に晴々とした気分彼女と過ごしていた、そんなある日の事。

夕方頃になって商人見習いの青年が米の配達に来たのだが、その男とアミが楽しそうに会話を弾ませている姿を目撃して、どうしようもないほどの嫉妬に駆られた。

無理だと思った。もうこれ以上、彼女の傍にいたことはできな  
と思つた。

だから、今夜にでもアミに内緒でこの家から出て行こうと決めた。もしまた引き止められてしまったら同じ轍を踏みかねないし、逆にあっさり承諾されでもしたら身の内の劣悪な独占欲が発露してしまわれないとも限らない。

満月が地上に向かい傾きだした真夜中。

自室の机に謝罪の手紙と手持ちの金すべてを置いて、静かに部屋を後にする。

足音を殺し、荷が音を漏らさないよう慎重に廊下を進んでいると、突如背後から声をかけられた。

「マサ？こんな時間に何してるの？」

飛び出さんばかりの勢いで肩が跳ねあがり、それから全身が固まった。

拍子に、緩んだ手から道具袋を落としてしまう。

しまった、と思った時にはもう遅かった。

俺の出で立ちを見てすぐに状況を察したのだろう。

彼女のいるであろう位置からジワジワと冷気が漂ってきて、額からあぶら汗が流れ落ちた。

「…ねえ、その荷物なあに？」

そんな一言から始まった詰問紛いの問いかけに、俺は背を向けたまま口を開く。

彼女の顔を正面から見る勇氣は無かった。

何とかまともに返答しようとするも、舌が上手く動いてくれず動揺を隠すことができない。

拙い言い訳の末、ついには言葉を詰まらせた俺に、彼女はとうとう痺れを切らしたようで、珍しく声を荒げ、まるで子供の

ようにこちらを誹<sup>そし</sup>ってくる。

ただ、その内容を聞いてみると、もしかして彼女は俺が出て行くとした理由を知っているんじゃないかと思えてきた。

そうでなければ、臆病だの朴念仁だのといった言葉を使われる意味が分からない。

しかし、そうだとすると、彼女の言う考えとは一体何なのだろうか。

いったん話を聞いてみようと思えば、腰を低く落としたアミがものすごい勢いで足に向かい突っ込んで来た。

まさかの行動に驚きながら、そのままバランスを崩し倒れていく。巨体に巻き込まないよう、彼女を身体の上に抱え上げたのはもうほとんど反射に近かった。

背負っていた斧に打ちつけられて地味に痛かったが、それよりもアミに怪我がなかったかどうかの方が気になったので、自分のことは二の次で先に彼女に声をかける。

返事はしてもらえなかったが、勢いよく起き上って何やら慌ただしげに動いている様子を見る限りでは大丈夫そうだと言っ胸を撫で下ろした。

そして、気がつけば両腕を紐で縛られている。

彼女の奇行に対する理解が追いつかず呆けていると、いつの間にかその腕は柱に繋ぎ止められ、腹の上に跨ったアミが俺の服に手をかけていた。

混乱どころの騒ぎじゃない。

慌てて制止し理由を尋ねれば、さらに『襲う』などという意味不明な回答が返ってきた。

いや、状況を考えれば意味は分かるが…まさか、という思いが強すぎて脳が受け止める事を拒否していた。

普段の彼女からは全く想像もつかないほど妖艶に笑むアミ。

俺がまともな思考できていない事を見て取ったのか、彼女はその表情に相応しい色のある声で今度はハッキリと目的を口にした。

「マサを襲って、既成事実を作るの。」

自分の耳がおかしくなったのかと思った。もしくは、夢でも見ているのではないかと。

だが、その考えは口に当たってきた生々しい感触によって一瞬にして払拭される。

その後、停止した脳の奥深くに響いたブツリという音は、果たして腕の拘束を引き千切った音だったのか、それとも理性の切れた音だったのか…。

## エピソード

5年の月日が経った。

俺たちは今、最初に2人が出会った魔の森でひっそりと生活している。

件の精霊の住む湖のすぐ傍らに自らの手で家を建てた。

大金をはたいて購入した結界の魔法石を常に発動させているので、悪意のある存在がこの家の周辺に近づくことはない。

「今、帰った。」

「あつ、マサ。おかえりなさい。」

扉を開けると、アミが家の奥からパタパタと姿を現した。

3日ぶりに見た彼女の微笑みに、ホッと息をつく。

そのまま感情に任せて抱きしめると、彼女は俺の背に腕を回しながら見上げてきた。

「報酬、どうだった？」

「ん、アミの翻訳書は随分と売れているらしい。

結構な額が手に入ったから、ついでに東の国に寄って米と醤油を買っておいたぞ。」

「そっか。良かった。お米と醤油もありがとう。」

「町の連中がまだ体調が戻らねえのかと心配していたぞ。」

早く元気になって帰って来いとき。」

「うーん、私も皆に会いたいの山々なんだけどねえ。」

「こればかりはな…。」

ああ、そうだ。帰りに熊を狩って捌いておいたから使ってくれ。」

「分かった。じゃあ、今晚は熊鍋にしてシメに雑炊ね。」

金鳥卵が残ってたから、溶いて絡めるといいかも。」

「ふむ、美味そうだな。」

「あーっ、パパだ！おかえりなさいーっ！」

家の中を走り回っていた娘が俺の存在に気がついて満面の笑みを浮かべる。

そのまま勢いよく走ってきたので、アミをそっと放し腰を屈めて抱きとめた。

「おう、帰ったぞ。イイ子にしてたか？」

「シャロンはいつでもイイコだもんー！」

「ははは。そうか。」

言っつて、頭を撫でてやると、娘は気持ちよさそうに目を細めて笑った。

そう、全てはこの子のためだ。

アミと同じ柔らかな黒髪を持つまだ幼い娘は、上手く人形態と竜形態を使い分ける事が出来ない。

だから、それが可能になるまでは人目につかない場所で生活しようと思った。

東の国の町の間人には、妊娠出産に伴って著しく体調を崩したアミの療養のため、医術の発達した他国に一時的に移り住んでいると

説明している。

娘が2形態の使い分けと人相手に対する力加減を覚えれば、家族でまたあの町の世話になるつもりだ。

…ふと思う。

長い間、忌み子と蔑まれ、悪魔と罵られ、全てを諦めてただ流れる時の中を無為に生きていた。

強すぎる力に絶望した日もあった。醜悪な容姿を憎悪した日もあった。

だが、あの日。

如何なる神の采配か、天は俺にアミという奇跡を与えた。

絶望するほどの力は大切な存在を守るための希望へと変わった。憎悪するほどの容姿も今になってみれば、真の悪意を遠ざけ、本当の意味での善人を選別する効果があったように思う。

もし、あの不幸な毎日が彼女に出会うための布石であったというのなら、俺はその全てに感謝したい。

「…マサ？どうかした？」

「パパあー？」

「ん？ああ、いや。」



ただ、ちよつと…幸せを噛みしめてたつっか…。」

「ええ？なあに、ソレ？」

「ふふ、変なパパですねー？」

「ねーっ。」

「つて、おいおい。ヒデエな。」

人の踏み入らぬ魔の森の奥深くに、柔らかな笑い声がこだまする。凄惨な運命に翻弄され続けた1匹の若い竜は、今、愛する妻と娘の笑顔に包まれ満ち足りた日々を送っていた…。

## エピソード（後書き）

幸せの赤い竜、これにて完結です。  
最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

## 登場人物メモ

中島亜美…アミ

年齢23歳。身長166センチ。Dカップ。O型。

面倒臭がり屋のリアリスト。寝ぼけると子供口調になる。

座右の銘は、情けは人のためならず。

趣味は読書。何でも読むが、ドロドロの愛憎劇系は少し苦手。

大学を卒業し、中流企業の経理部で新入社員として働いていた。化粧をすると別人のようにキレイになるという無駄設定がある。

マーシャルト・グリンストン…マサ

年齢28歳。身長278センチ。

竜形態の時の身長？は9メートル56センチ。人形態と違い竜の姿は優美。

怖い顔を少しでも隠すためにヒゲや髪を伸ばしているが、何の意味も為していない。

狩士報酬にはほとんど手を付けておらず、実は一生遊んで暮らせるだけの額がギルドの銀行に預けられているお金持ちさん。

アミの妊娠発覚後は率先して家事をこなしていたが、過保護すぎて生まれるものも生まれないと怒られてしまった。シヨンボリである。

シャロン…サツちゃん

黒髪、金眼。マサ程ではないが、それなりに強力な竜の力を宿している。

しょせんマサとアミの子なので特別カワイイ容姿をしているという事実はない。並み。

むしろ、マサに似なくて良かったね。おめでとつ。

名付けたのはアミ。マーシャルトの「シャ」と竜という意味の「ロン」をくつつけただけ。

カウガン…ガンちゃん

愛妻ナツちゃん至上主義。若いころ一目惚れして、ストーカーばりに付きまとった。

ナツちゃんへのプロポーズ回数、実に49回。酒に酔うとノロケが止まらなくなる。

細見えこたあいいんだよ、な筋肉馬鹿。ケンカ大好き。楽天的で都合の悪い事はすぐ忘れる。

その昔、名の売れた狩士だった。

ナーエ…ナツちゃん

穏やかで包容力のある大人の女性。化け物レベルの若作り。

出会ったころはガンちゃんを毛嫌いしていたが、あまりの必死さにいつしか絆されてしまった。

元優秀な情報屋。ガンちゃんにも内緒にしているが、実は暗器使い。

孤児院育ちで、10代の頃はヤンチャしていた。その時代の事は黒歴史扱いしている。

ヤシユロツツ…ヤス

年齢39歳。普段はおちゃらけた性格をしているが、料理に関してだけは真摯。

若いころは新たな食材や調理法を求めて大陸中を旅していた。

Sランクモンスター虹トカゲの肉を手に入れようとして返り討ちに合い、死にそうになっていたところをたまたま通りがかったマサに助けられる。

只今、お嫁さん募集中。ノリの良い人かツツコミ上手な人が望ま

しいとのこと。

ヴェルス…スーさん

なまじつか実力があるため、大人になっても中二病から抜け出せなかったという、ある意味では可哀相な人。

ボンキュボンなオネーチャンを連れて歩くのが好き。目立ちたがり屋。

元貴族。子供のころに親が不正を働いて貴族位・領地を没収された。家出中。

ギルドの新規登録窓口受付員…ヨツちゃん（ヨーディケ）

仕事に関しては文句なく優秀だが、人見知りで臆病な草食系男性。イジられキャラで、同じギルド所属のお姉さま方から羨ましくない方向の可愛がられ方をしている。

本来は窓口担当ではなく裏の事務方。なんで窓口にいたのかは…察してやって下さい。

王弟団長…ヤマさん（ハンヤマアッズ）

独身。世の中の全ては正義と悪に分ける事が出来ると信じている。良く言えば純粹、悪く言えば単純。戦いに関する事にしか頭が上手く回らない。

体育会系。顔は整っているが、その豪快な性格ゆえモテない。部下には慕われている。

一応、王族として躰けられているため、仕草は洗練されている。

小柄な騎士…ユウくん（ユウバード）

銀の騎士団の優秀な副団長。幼少の頃、住んでいた村が魔物の大群に襲われた。

その時、助けに来たのが王弟率いる銀の騎士団。後は…分かるな？団長リスペクト。普段は好青年。容姿は平均より少し整っている

ような気がしないでも無い程度。

城の下働きの女性と付き合っている。団長が独身なため結婚に踏み切れない。

高級宿の懇勤従業員：セイくん（アレクセイ）

総支配人の息子。現在は正体を隠して修行中。仕事に対し、高いプライドを持っている。

性格の裏表が激しい。そこそこイケメン。

恋愛禁止にされているが、こっそり従業員の女の子と交際中。

国境の宿の従業員：キンさん（ウォールキン）

恋人いない歴〃年齢。もうすぐ中年。何事にも要領が悪く、常に小者臭が漂う。

幸薄そうな顔つき。厄年なのか、今年に入ってからはいつにも増してロクな事が無い。

その中でも、早朝の米掃除 マサの尋問？のコンボは最悪の出来事だった。

チヨウデルク・ダウニード…チヨウさん

イエンバー狂いの壮年男性。1に研究。2に研究。

小さなころから勉強一筋で、それゆえか一般常識に欠ける。

北西の国の伯爵家の生まれ。3男坊。

美少年神様：キー坊

正確には彼は神ではなく無限に近い多重世界をつなぐ次元間の管理者である。

各世界の理に介入する力を持っているので、とりあえず人間の概念に当てはめたら神という名前が一番近いだろうという事でそう名乗っていただけにすぎない。

通称ゲートキーパー。このネーミングは臭えーッ、中二病以下の

臭いがプンプンするぜえーッ。とは思っけども、他に考えつかないかな。つたんだからしょうがない。

プロローグで言っていた神一同というのは、各世界ごとに定められている管理者たちの事。

性格はいろいろ。

各々の世界が崩壊しないように見守っていたり、時に介入したりするのが仕事。

こちらの通称はウォッチャー。

ドキッ セリフだらけの番外編集〜ポロリは無しよ〜（前書き）

番外編その1目次

- 1 ・ロマンチストは報われない（プロポーズ的なアレ）。
- 2 ・お前は…誰だ…（結婚式直前の2人）。
- 3 ・看板に偽りなし（新婚ノロケ話）。
- 4 ・出産・子育て編はまたの機会に（妊娠中の話）。
- 5 ・アレ、なんか男女逆じゃねっていう（みんな大好き！朝チュンチュン！）。



ドキッ セリフだらけの番外編集〜ポロリは無しよ〜

ロマンチストは報われない

朝食後に熱いお茶を飲みながら、軽く今日の予定などを2人で話し合っていた時の事。

「ねえ、マサ。ちょっと前から思ってたんだけど…。」

私達そろそろ結婚しない？」

「ゴホッ！おまっゲホッゲホッアミ…いきなり何カハッ…。」

「大丈夫？そんなに咽ちやうようなこと言った？」

ほら、先日ようやく旅に掛かった費用を全額マサに返済できたでしょ。

私としては、それでちょっとしたケジメがついたというか。

で、まあ。仕事も結構順調だし、そろそろいいかかって…マサはまだイヤだった？」

「コホッ、あゝ。こっちはいつでも…じゃなくて、アミ。」

何っーか、そういう事は俺からちゃんと言いたかったんだが…。」

「えーっと。もしかして、マサはシチュエーションにこだわりたいタイプ…だったり？」

アレなら無かった事にして、もう1度やり直してくれてもいいけど。」

「いや…、もう…いい。」

「あー。えっと、…なんか、ごめんね。」

まあ、じゃあ早速具体的な話をしましょうか。

こっちの世界では戸籍とかってそこまで細かく管理されていないんだけど、婚姻に関しての定義ってどうなってるのかな。むこう

では婚姻届っていうのを提出すれば結婚が成立するんだけど、この世界ではどうしてる？そういえば、マサのグリンストンって日本みたいに名字ってワケじゃないんだよね？だったら、名前が変わったりはしないのかな？法律ではどうなってる？夫婦になることで課せられる義務はある？式とか挙げる習慣はあるとしたら場所は？作法は？費用は？招く人は？日付とかも決めないとだね？予約とか準備ってどのくらい前からするものなのかな。」

「とりあえず、待て。落ち着け。そんな一気に言われても分かんねえよ。」

「あ、ごめんね。じゃあ順番に行こうか。えーっと、まずは…。」  
アミは夢も希望もないどこまでもリアリストな人だった、というお話。

お前は…誰だ…

結婚式当日のこと。

「アミ、そろそろ時間だぞ。準備はどう…？っと、すまねえ。人違いだ。」

「やだつ。何言ってるの、マサ。」

「こんなちよつとの間に自分の花嫁の顔も忘れちゃったの？」

「…は？」

「って、その声…まさか、アミ！？」

「そつよ？ふふ…、お化粧ひとつで結構雰囲気変わるでしょう。」

「雰囲気ってか、別人じゃねえか！」

「あはは。私の場合、元が平凡顔だからすつごく化粧映えるのよね。」

ね、ね。どう？これなら年相応に見える？キレイ？」

この町の結婚式では、花嫁は薄緑のワンピースを着て自ら編んだ花輪を頭に乗せるのが一般的だ。

だが、本人の希望でアミは今ドレス仕立ての白いワンピースを着ている。

裾を軽く持ち上げながら微笑み小首を傾げる彼女を見て、マサは眩しそつに目を細めた。

「…ああ。なんつーか、美人すぎて隣に立つのが申し訳ねえな。」

「えー、もう。何、言ってるの。やあねえ。」

「…なあ、アミ。」

「なあに？」

「今さら聞くのもどうかと思うが…。」

本当に、俺なんかが相手に良かったのか？」

「ばか。俺なんかなんて言わないで。」

…マサじゃなきゃ、ダメなの。」

「そ、そうか。そりゃ、えーと、良かった。うん。」

「ねえ、マサ。」

「おっ、おっつ。何だ？」

「私たち…。一緒に、幸せになろうね。」

「……………そうだな。」

小さく頷きあって、マサとアミはお互いの腕を絡ませた。

すっかりとした足取りで、2人は式が行われる町の広場へ向かう。

外には、彼らの未来を示唆するような、どこまでもどこまでも清涼な青空が広がっていた。

看板に偽り無し

「恐妻家の会？別にアミは恐妻でも何でもねえんだが…。」  
「そんなにお固いアレじゃないって。」  
普段は言えないような、ちょっとした愚痴を言い合おうってだけの会さ。

最近メンバーが決まっちゃまってて、つまらないんだよ。  
とりあえず試しに1回だけ参加してみようぜ、な？な？」  
「…あゝ、まあ。1回ぐれえなら。」  
「よおし！決まりだ！」

そのまま隣人に連れられて、マサは会場である町外れの一軒家へと足を運んだ。

そこには、己の妻への愚痴を肴に酒盛りをする男たちの姿があった。

すでにかなりできあがっているようで、その様子にマサは小さくため息を吐きつつ、適当な場所へと腰を下ろした。

「毎日毎日、食っちゃ寝、食っちゃ寝！ブクブク太りやがって！」

俺が嫁にしたのは豚じゃねえぞおー！」

「そつだそつだー！女扱いして欲しかったら、もっとそれらしく振る舞えー！」

「稼ぎが悪いのうだつが上がらねえのと罵る前に、たまには自分で稼いできてみるってんだ！」

「おおー！分かるぜ、その気持ちー！こつちの苦勞も知らないで、イイ気なもんだよなあ！」

「言葉より先に暴力で訴えるのは止めてくれえーっ！年々威力が鋭くなつてつて、このままじゃ絶対いつか死ぬうー！」

「切実だな！頑張れ！生きろ！」

「よし！新入り、お前も何か言え！」

「えっ。いや、俺は……」

「何でもいいんだよ！新婚とは言え、愚痴の1つや2つあるだろ！ほら！早く！」

「あ……、アミへの愚痴……か。」

「そうだな……。もつと頼つて欲しい……とかか？」

「どこが愚痴か分からん！詳しく！」

「え、せつかく結婚したつてのに、俺の稼ぎなんかでアテにもしねえで生活費は完全折半……」

「それならそれでプレゼントの1つでもと思つて聞けば、自分で買うから必要ねえと断られるし。」

「家事だつて、これも妻としての勤めだとか何とか言つて俺にはろくに手伝わせてもくれねえ。」

「いいじゃねえか、俺が何かしてやりてえつてんだから素直に甘えてくれりゃあよお。」

「それを言やあ、俺がいるだけで充分幸せだから他に何もいらねえんだとかつてつて、笑いやがって。」

「そんな風に返されたら、それ以上なんにも言えねえだろうが！アミのバカヤロー！」

「なんだオイ！結局ノロケじゃねえか、コンチクショウ！羨ましい！」

「カアツ！これだから、新婚はいけねえや！酒の肴にもなりやしねえ！次、次！」

「よし！俺に任せろ！いい加減、毎月の小遣い上げてくれえー！俺がいない間に自分ばかり美味しいもん喰つてるの知つてんだぞ、コノヤロー！」

「いいぞー！もつと言えー！！！」

「ああら。随分と楽しそうだねえ、あ・ん・た？」

「ぎゃあつ！カカア！？なつ、なんでここに！？」

「いやさ？」

旦那の帰りがちよいと遅いつてんで心配になって探してみりゃあ、こおんな町外れの家の中からそれはそれは面白そうな話が聞こえてくるじゃないか。

だから、妻にもその楽しみをちよいと分けてもらおうと思ってねえ。だろ？みんな！」

その言葉を皮切りにそれぞれの連れ合いが次々と姿を現し、そこかしこで悲鳴が上がる。

嘩然とその様子を見ていたマサの背後にも、当然のごとく忍び寄る影があった。

「恐妻家の会…ねえ。」

「っアミ！？」

「マサって、私をそんな風に見てたんだ。ふうん。」

…まあ、別にいいけど？思う分には勝手だし？」

「いやっ、そのっ、違う！誘われて断れなかっただけで、俺はそんなこと全然思つてな…！」

「だから、別にいいつて言ってるじゃない。」

それじゃ、私は先に帰らせていただきますから。どうぞ、じゆうくり楽しんでいらして旦那様？」

「ちよっ、まつ！アミ！」

呼びかけを無視してその場を素早く後にするアミの背に、思わず伸ばした手を固まらせたまま呆然と見送るマサ。

愛する妻たちによる強襲を受けて以降、恐妻家の会が開かれることは2度と無かったという…。

出産・子育て編はまたの機会に

「あ、そうそう。最近ちょっと体調が悪いつて言ってたでしょ？あれねー。妊娠してたせいだったみたい。」

先日、お医者様に診て貰ったらそうだった。」

「……………は？」

「だ・か・ら。赤ちゃん、できたって。」

「誰のだ？」

「ちよっ、バカ言わないでよ！マサとの子に決まってるでしょうがっ！」

「あだだだっ！ヒゲを引っ張るな！」

「自業自得！何、私が浮気するような女だとも思ってたの？」

「違っつ。スマンっ。ちよっと、混乱しちゃっただけだ。」

「いや…、というかアミ…。産む気か？」

「当たり前でしょ？」

「……………どうしたの、いきなりそんな真剣な顔して。」

「悪いが……………俺は、反対だ。」

「っ！？…なんで！」

「アミ。お前は知ってるだろう。俺の母親がどうして死んだのか…。」

「

…それは。」

「俺は…お前に母親の二の舞になって欲しくない。」

「でも、死ぬとは限らないじゃない。」

そんな可能性の話で子供を諦めるなんて私はイヤ。」

「俺はお前を失う可能性なんて考えたくも無え。」

「じゃあ考えなければいいでしょう。」

今のところ、マサの話で聞いたみたいに生命力を奪われるような感覚は無いし。

私は貴方のお母様みたいに竜人族の里にしばらくいられているわけでもないんだから、優秀な医師のいる都に移ればそう心配することも無いと思うけど？」

「だが……。」

「ねえ。本当に大丈夫だから、心配しないで。この子のこと素直に喜んであげてよ。」

私、マサに家族がいる幸せを教えてあげたいの。それができるのは、世界中探したって私だけでしょう？

お願い。産ませて……。」

「アミ。……分かった。スマン。」

完全に納得はいつていないのか、苦渋に満ちた顔で小さく頷くマサ。

彼の態度に少なからず不安を覚えるアミだったが、それはすぐに払拭されることになる。

「アミ、何やってる！」

「何って、……掃除だけ。」

「そんなに動き回って、腹に障ったらどうする！」

家事は俺が全部やるって言っただろぅが！何でじつとしてねえんだ！

それで、万が一転んだりなんかした日にゃ目も当てられねえ！

俺がやるから座ってる！いや、いつそ寝てる！いいな!？」

「いいわけないでしょ！そんな過保護じゃ、産まれるものも産まれないわよ！」

今までつわりが酷くて仕方なく代わってもらってたけど、もう安定期に入ってるんだし、むしろある程度の運動は推奨されるものだからね!？」



子供が大事な私は私だって同じなんだから、知識のないマサは黙ってて！」  
「ぐっ…。」

その後、言い負かされて口こそ出さなくなったが、今度は無言で彼女の後をつけまわすというストーカーのごとき行動を取るようになったマサだった。

当然、それも禁止された。

アレ、なんか男女逆じゃねっていう

窓から柔らかな太陽の光が差し込んで、ベッドの上で微睡む存在が2つ、ゆるやかにその意識を取り戻す。

「ん〜。ふぁ…。あ、おはよう。マサ。」

「あ、ああ。」

「ん？どうしたの？」

「いや、その…昨日の…あの…夢…じゃ…なかったんだよ…な？」

「じゃなきゃ、この状況の説明がつかないと思うんだけど。」

「わあっ！アミ起きるな！シーツがはだけてっ…。」

「えっ。昨日さんざ見といてまだそんな反応!？」

「…起きないと服が着られないじゃない。」

「う…。まあ、そうなんだが…。」

「もー、真っ赤になっちゃって。マサ、可愛い。」

「かわっ…。その言いようは止めてくれ、全っ然嬉しくねえ。」

「というか、何でアミはそんな平然としてんだ。」

「平然っていうか。そうね…。  
恥ずかしいより嬉しいの方が勝ってるから、かな。」  
「へ。」

朗らかな空気から一転して、アミは視線を落とし静かに語り出した。

「…私ね。」

実はもう随分前からマサが私のこと女として見てくれてるんだな  
って気が付いていたの。

でもね。マサが決心してくれるまで、私と一緒にになってくれる覚  
悟ができるまで、待とうって思ってた我慢してた。

まあ。結局、逃げ出されそうになって、つい実力行使に出ちゃっ  
たけど…。

それでも、ずっとマサとこうなりたかったから…：ようやく願いが  
かなって嬉しいの。

「ごめん。ごめんね。こんな、自分勝手な女で。」

「アミ…。いや、俺もすまなかった。」

いつまでも嫌われるのが怖えだなんだと手前勝手な臆病風に吹か  
れて、お前を追いつめてた事に気付けなかった。」

その言葉を受けて、アミはマサの顔を見つめながら小さく笑んだ。

「そんなこと、いいの。謝らないで。」

あの…、ね。昨夜もさんさん言ったけど…：好きよ。マサ。」

「……………ああ。」

「…ああ、俺もだ。アミ、愛してる。」

「うん、私も。愛してる。」

「アミ…。アミ…。」

ひどく切なげな表情で、マサはアミの名を呼びつつ頬に手を伸ばす。

その手に自らの手を添えたアミは、視線をマサの顔に戻すと静かに目を見開いた。

「……………マサ、泣いてるの？」

「え。…うわっ。なん…っだ、コレ…。なんで…」

慌てた様子で乱暴に腕で顔を擦るマサ。

アミはその腕をそっと掴んで下ろさせる。

「落ち着いて。…大丈夫。マサ、大丈夫だよ。」

悲しい涙じゃないんでしょう？ だったら、大丈夫。」

そう言って、アミはマサの濡れた脛に、頬に、優しく口づけて涙を拭っていく。

それから、そっと彼の大きな頭を胸の内にかき抱き、そのままゆるやかに髪を撫でた。

しばらくして、冷静さを取り戻し、恥ずかしさから小さく呻き身じろぎするマサ。

アミはそんな彼から身体を放してコツリと互いの額を合わせイタズラに笑う。

「ふふ。ねえ、マサ？」

こうなった以上、私、絶対に貴方を逃がす気はないから。

例え逃げても、地の果てまで追って行くから。

だから……………覚悟、してよね？」

「はっ…、お前って奴はホントに…。」

むしろ、そりゃ俺の台詞……………いや、望むところだ。

俺を逃がさないように、常に傍で見張っててくれ。アミ。」

「うん。頑張るよ。マサと、ずっと一緒にいられるように。」

クスクスと小さく笑い合って、そのまま2人はどちらからともなく静かに唇を寄せた。

彼らの魂に深く刻まれていたはずの孤独という名の傷跡は、もうどこにもない。

「そんな番外編で大丈夫か。」 「大丈夫じゃない。大問題だ。」 (前書き)

番外編その2目次

- 1 . 男性が同じ痛みを味わうとショック死しておかしくないレベルなのだそうですね (出産的なアレ)。
- 2 . 小柄な騎士ユウバードの見解 (本編の一部を第3者視点にて)。
- 3 . 疑ったら負け (知人への結婚報告)。

「そんな番外編で大丈夫か。」「大丈夫じゃない。大問題だ。」

男性が同じ痛みを味わうとショック死しておかしくないレベルなのだそうですね

アミとマサは東の国を出て、現在、とある辺境の地にいた。

妊娠出産にあたり高名な医者のある町へ移ろうと決めてはいたのだが、いかんせんそういった情報の正確性はあまり高くない。

ダメで元々と言うアミの案で、以前ヴェルスの件で銀の騎士団から派遣された王宮専属医師を訪ねてみると、腕は確かだと言う知り合いの女性医師を紹介してくれた。

彼の元同僚だったようだが、何を思ったのか急に職を辞してとある山の麓に家を建て生活を始めたらしい。

紹介状を受け取って彼女の元を訪ねてみると、そのままその家に滞在するように言われ現在に至る。

アミはすでに臨月を迎えており、いつ陣痛が来てもおかしくない状況だ。

「しかし、コレがかの有名な鮮血の悪魔とはねえ。噂とはまこと、アテにならないものだ。」

それとも、相手のキミがよほど特別なのかな。」

「ふふ、先生つたら分かってるくせに。本当、冗談がお好きですね。」

「冗談…ね。それこそ噂を信じている者からすれば、この光景こそ冗談極まりないんじゃないか。」

「まあ、それは確かに。」

マサは2人の目の前で、一心不乱に果実の皮を剥き種を外し食べやすい大きさに切り分けるといふ作業を行っている。

その果実もまた『サツパリしたものが食べたい』というアミの一言で、彼が山へ赴き採って来たものだ。

「よし、出来た。アミっ。」

「はいはい。ありがとー。」

マサが満足気な顔で差し出す皿から果実をつまみながら、アミは笑顔で礼を返す。

彼の見た目さえ気にしなければ、実にほのぼのとした風景が広がっていた。

だが、数時間ののち、緊迫した空気に変わらざるを得ない状況が3人を襲う。

~~~~~

「つくそ！どうして子どもは女しか産めねえんだ！

代われるもんなら、いくらだって代わってやるのに！」

絞り出すように言って、マサは己の膝を拳で強く殴りつけた。

目の前の扉の中から絶え間なく聞こえてくる悲痛な叫びに、彼は眉間にこれでもかと皺を寄せ、歯を食いしばり手を固く握り込む。

最初はいてもたってもいられずソワソワと身体を動かしていたのだが、あまりに心臓が激しく鼓動を繰り返すので、無駄に体力を消耗しないよう床に腰を下ろした。

そのまま何時間経過したのだろうか。

もう幾日もそうしていたかのような強烈な疲労感の中で、マサは小さく発された産声を聞きつけて素早く顔を上げた。

すぐにその声は何倍も大きな音量となってハッキリと耳へ届いて

くる。

…う、産まれた！産まれた！アミ！

マサは床から立ち上がり、アミアミとブツブツ呟きながら待ちきれない様子で扉の前をうろついた。

と、そこで中から勢いよく扉が開いて彼は強く頭を打ち付ける。

「がっ…。」

「おっ、すまん。マーシャルトくん。

だが、喜びたまえ。無事に産まれたぞ。珠の様な女の子だ。

今のところ、母子共に危険は無い。良かったな。」

「っ…！そ…うか…。ありがとう…先生…ありが…とう…

…ぐっ。うう。」

感極まって、その場にへたり込み涙するマサ。

その様子を見て女医は呆れたようにため息をついた。

「泣くならせめて母子の状態を確認してからにしたらどうだね。

まあ、今の君は不衛生極まりないから結局は後にしてもらわないといけないわけだが…。

「というか君ね、医者の前で自傷行為とはいただけだよ。」

「へ…、え？」

「なんだ、自分で気が付いていなかったのか。

手だよ。強く握り込みすぎて血が流れている。

汗もかなりかいているようだし、いったん身ぎれいにしてから出直しておいで。

それまでには君の奥さんも落ち着いているだろうしな。」

その言葉にマサは小さく頷いた後、フラフラと覚束ない足取りで



扉の前から遠ざかる。

女医はそんな彼の背を少々心配そうに眺めた後、再び部屋の中へと戻って行った。

~~~~~

「マサって案外泣き虫よね。」

すやすやと寝息を立てる我が子を前に、起こしてしまわないよう声を殺して涙を流し続けるマサ。

そんな夫を前にアミは苦笑いを零さずにはいらなかった。

「…ねえ、旦那様。」

そろそろ頑張った妻に労いの言葉のひとつでもかけて欲しいんだけどなあ。」

赤ん坊しか目に入っていない様子のマサに、軽く拗ねた風を装って催促する。

途端に、彼はハッと目を見開いて素早くアミの横たわる寝台の傍へと移動し跪いた。

「…スマン。忘れてたわけじゃねえんだ…。」

「……………その、…アミ。よく…頑張ったな。」

なんつーか、言いたい事は色々あるんだが…どう言葉にしたらいいかわからねえっつーか…。」

「悪い、上手く言えねえ。悪い。」

「うっん。充分だから謝らないで。」

それに、そんなに泣いちゃうほど喜んでくれて、私とっても嬉しいよ。ありがとう。」

「アミっ…。」

掠れる声で名前を呼んで、マサはアミの肩口に額を擦りつけた。  
アミはその行為を咎めるでなく、優しく彼の頭を撫ぜる。

「マサ。」

これからはきつと苦労もたくさん増えると思うけど、それ以上に  
幸せになれるように、2人…ううん、3人で頑張っ行ってこうね。」

彼女の言葉にマサはゆっくりと顔を上げて、次いで、その頬へそ  
つと手を添えた。

「ああ。……………そうだな。」

…そうだな。と、もう1度心の中で呟いて、マサは幸福の余韻に  
浸るように静かに瞳を閉じた。

彼があのだこまでも冷たい過去に心を凍えさせる時は、もう2度  
と訪れない。

### 小柄な騎士ユウバードの見解

悪魔と称される男マーシャル・グリンストンは、そんな表現す  
らも生温いほどのそれは恐ろしい容貌をしていた。

鍛え上げられたガツシリとした肉体と3メートル近い身の丈など、  
その顔の前にはちよつとした付属品にすぎない。

たっぷりと蓄えられたヒゲの下の獣のように大きく裂けた口。そ

こから覗く鋭く尖った歯はもはや牙と呼んだ方が正しいだろう。その蛇の様なギョロリとした瞳を見れば、生物としての本能的な恐怖心呼び起こされる。

どのような努力を重ねたところで永劫覆る事の無い絶対的上位種の立場にある者の放つ気配に圧倒され、男の身を2倍にも3倍にも大きく感じていた。

これが同じ人間などと到底信じられるものではない。いいや、同じ人間であつてたまるか。こんなもの、ただの怪物だ。今の自分はこの目の前の怪物の気まぐれによってのみ生かされている、卑小な存在でしかない。

それでも、誉れ高い銀の騎士団の副団長としての矜持が、己をこの場に立たせていた。

正義が悪に屈するわけにはいかない。か弱き存在を守るために命のひとつも賭せずして何が騎士か。

それに何より、敬愛する団長の前で情けない姿を晒したくはない。本能を意思の力で無理やりねじ伏せ、怪物の背後にいる女性へと声をかけた。

~~~~~

何という事だ。

団長ですら軽くあしらわれてしまうほどの力を持ったあの怪物が

…、あの怪物が…。

あんなに小さく無力そうな女性に叱責され怯えている…だと!? 先程まで放たれていた威圧感も今は雲散霧消し、もはや影も形も無い。

彼女が武の心得のない一般人であることは、その動きを見れば明らかだ。

もしま…。この女性の話の通り、本当に彼はただ顔が怖いだけの

善良な人間だったと言っのか！？  
そんな馬鹿な事が！

茫然と2人を見てみると、突如団長が…あの強く気高く凛々しく誰にも平等でまこと尊敬に値する至高の存在である尊き団長が…泣きだした。

今日という日の出来事が、全て夢であったのならどれだけ良かったか。

~~~~~

やはり団長の判断は正しかったようだ。

意識を失った女性を前に激しく取り乱す姿を見て確信した。

これは悪魔でも怪物でもない…どこにでもいるただの1人の男なのだ。

よほど大事な相手だったのだろう。それはそうだ。彼の顔に怯まず話しかけられる女性が、いかに貴重な存在であるのかは想像に難くない。

この男の、おそらく唯一の慰めとなる存在であったに違いない。彼の心情を慮れば、このまま放っておくことなどとても出来る事ではなかった。

ヴェルスという男を監査へ引き渡し、副団長の権限を使って王宮専属医師を伴い宿へ向かう。

女性が目覚めない可能性について示された男は、愕然とした表情で視線を落とした。

次の日の、寝台横に佇んで動こうとしない彼の様子にはこちらの心も酷く痛んだ。

~~~~~

喜ばしい事に、数日で女性は目を覚ました。

ヴェルスの件で話を聞くに、女性でありながら聡明で思慮深く義に厚い性格をしていることが分かる。

だからこそ、彼女は外見に囚われずに男の真の姿を見抜く事が出来たのだろう。

本当に良かった。

当日の内に、団長から兵職に就く者は2人に最大級の敬意を払うようにとの命令が下された。

彼らを知らない者たちは渋っていたが、自分は少しでもあの男に対する人々の態度が緩和されればいいと1人祈っていた。

疑ったら負け

マサの友人の一部に結婚報告の手紙を出した。

元々そんなに友人の数が多くないのと、旅をされていて居場所が分からない人がいるのとで実際に出した枚数はごくわずかだ。

それでも、最近はその返事や祝いの品などがポツポツと届いている。

…のだけれど、それらが中々に個性的で面白い。

『ようやく伴侶を得たとの由、心よりお祝い申し上げます。』

『おめでとう。お幸せに。』

『知らせを聞いて安心しました。度胸のあるお嫁さんにも宜しく。』

『冗談は顔だけにしろ。鬱憤が溜まつてるなら話くらい聞いてやる。』  
『実は頭の中の話と違ってオチだろ？こんな幼稚な嘘に引つ掛かるやつが見てみたいぜ。』  
『俺だつてまだなのお前が結婚！？俺は信じない！絶対に信じないからな！』

「うーん、ちゃんとしたお祝いが半分に懐疑的なのが半分かあ。  
まあ、分からないでも無いけどね。マサだし。」

それらを整理し終わった頃に、誰かが外から扉を叩く音が聞こえてアミは玄関へと向かった。

「はい。どちら様ですか？」

開いたそこには、全身を黒い鱗に包まれた半竜族と思わしき亜人の男が立っていた。

~~~~~

旅の途中に寄った町のギルドで、たまたま昔の知り合いのヤスという牛の亜人と再会した。

懐かしさから軽く立ち話をしていたのだが、そこで信じられない情報を得る。

なんと、あのどんな亜人よりも恐ろしい顔面と圧倒的な力を持ったマーシャルトが結婚したというのだ。

ヤスは彼らに祝いの手紙を送るためギルドの郵便施設を訪れていたらしい。

その話が真実ならば喜ばしい事だが、あのこの世の全ての恐怖を一身に体现したかのような男と結婚しようという女が本当に存在す

るものだろうか。

いたとして、それこそ、何か裏があるんじゃないかと勘繰ってしまふ。

例えば、ヤツの金が目当てであるとか、油断したところで害するつもりであるとか。

実際に相手の女を見た事があると言うヤスはあり得ないと否定するが、人前では演技をしているという可能性は捨てきれない。

自分の目で見て確かめようと、ヤスからマーシャルトの居所を聞き出して東の国へと向かった。

マーシャルトの新居だという小さな一軒家の前に立つ。

まあ、小さなと言ってもマーシャルトの背丈に合わせているせい、天井はかなり高いようだが…。

それにしても、アレの稼ぎからすればもっと豪邸が建つだろうに、少し意外だ。

緊張と共に扉を叩けば、中から若そうな女の声が響いた。これが例の嫁だろうか。

間もなく、家の中からかなり背の低い10代後半に見える女が姿を現した。

西の国の特徴である黒髪黒目を持つ、どこにでもいそうな平凡な容姿の女だ。

こんな弱そうな人間がマーシャルトに耐えるだけの胆力を備えているわけがない。

という事は…。

「…すまない。どうやら家を間違えたようだ。

失礼ついでに尋ねるが、マーシャルトという男の家はこの辺りだろうか。」

「いえ、それならここで間違いないですよ。

マサのお知り合いの方ですか？」

「え。…あ、ああ。そうだ。」

「そうですか。それは、いつも宅のマサがお世話になっております。」

そう言つて、女は微笑みながら頭を下げた。

それを呆然と見つめる自分。

ここで間違いない？宅のマサ？

…まさか。では、この女が？

いや、そんなはず。アレはこんな程度の女の手におえるような男ではないはずだ。

だが、この言いようは紛れも無く…。

「あの？どうされました？」

「失礼。何でもない。」

それで、………貴殿はマーシャルトとはどういつ？」

自分の中でも半ば答えは出ていたというのに、それでもハッキリと聞かすにはいられなかった。

「私ですか？私はマサの妻で、アミと申します。」

…っ！では、やはり貴殿が…。

あ、いや。度々失礼。

それがしはコルチギンと申す者。マーシャルトにはギンと言えは分かるはずだ。

突然の訪問まことに申し訳ないが、ご主人は在宅だろうか？」

聞けば、マーシャルトは隣人の畑の手伝いに行っているらしい。

アレが真つ当な近所付き合いまでしているとは驚きだ。

この町の間人は皆、並み以上に肝が座っているという事なのだろ



うか。

すぐ近くだからと、彼女に畑に案内された。

与えられた情報があまりに自分の持つているマーシャルトのイメージと違いすぎるので、もしや同名の人違いでは無いのかと密かに思っていたのだが…。

案内された先には確かに己の見知った男がいて、彼は一般の人間と混じって談笑しつつ畑作業に精を出しているようだった。

女がその名を呼ぶ前に彼女の存在に気がついたマーシャルトが、仕事を放り出して一直線に駆けてくる。

彼が勢いよく迫って来る様子は酷く恐ろしいもので、情けなくもその場から逃げ出したくなつたのだが、隣りに立つ女はソレを目の当たりにしても全く堪えていないようだった。

これが…、マーシャルトの嫁…か。

「もー、マサ。せめて一言断つてからにしまさなきゃ迷惑でしょう。

後でちゃんとみんなに謝っておいてね。」

「…スマン。そうする。で、アミは何でここに？」

「マサにお客様。案内ついでに私も顔を見たくて来ちゃった。」

「そつ、そつか。客つ、客な。」

もう一体どこに驚けばいいのか自分には分からなかった。

獰猛な瞳を爛々と輝かせているマーシャルトに対し、一切脅えもせず開口一番注意を促せる女の度胸にか。

それとも、これ程までに狂気的な顔を平然と眺め続け、あまつさえ会話まで出来る人間がこの世に存在した事にか。

女の単純な言葉一つで首元まで真っ赤になって動揺するマーシャルトの意外すぎる姿にか。

一瞬にして見ていられないほどの甘い空気を醸し出す、この二人の想像以上の仲睦まじさにか。

……ああ、心配して見に来て損をした。

これ以上2人にあてられたくなくて、未だ動揺しているマーシャルトにげんなりとした気分で簡単な祝いの言葉を送り、さっさと帰路についた。

まるで、食べたくもない甘味を無理やり口に詰め込まれたような気持ちの悪さだ。

…自分に続く第2、第3の被害者が出ない事を心から祈る。

セリフが無いと、俺は番外編も書けねえのかよッ！（前書き）

番外編その3目次

- 1・まあ、それでも皆さん顔は見ないようにしているわけですが…
- （マサの日常ご近所付き合い）
- 2・汚いなさすが女きたない（アミの嫉妬話？）
- 3・マニユアルなんて飾りです。偉い人にはそれが分からんのですよ。（子育て風景）

セリフが無いと、俺は番外編も書けねえのかよッ！

まあ、それでも皆さん顔は見ないようにしているわけですが…

「よお、マサの旦那！今日は1人で買い出しかい？」

「ああ。いつもの銘柄を4俵頼む。」

「まいどあり！」

…しかし、こんだけの量を片手で軽々持ち運べるのは旦那ぐらいだなあ！

いやあ、その力で今度の大口の卸しを手伝って貰いたいぐらいだ！はっはっは！」

「別に構わんぞ。いつだ？」

「いやいやいや、冗談だよ！旦那は本当にお人好しだな！」

気持ち嬉しいが、客を頼ったとあっちゃ母ちゃんに怒られちまわあー！」

「そうか。…じゃあ、俺はこれで。」

「おう！また次もヨロシク頼むぜ！」

大通りを歩いていると、すれ違う人々から挨拶の声がかかる。

マサの存在は有名だが、彼の方は町人全員の顔と名前が一致しているわけではない。

覚えていない事を申し訳なく思う一方で、怖れず話しかけてくる彼らを好ましく思いながら、簡単に挨拶を返していく。

と、そこへ正面からやって来た青年がマサに気がついて大きく手を振ってきた。

「マサ師匠！ちようど良かった！」

ちよつと、聞いてもらいたいことがあつたんですよ！」

「…師匠は止めると言つてんだろつが。で、何だ。」

「いえね、自警団の武術講習なんですけど…。週1回からせめて2回に増やせないですかね？」

最近、マサ師匠の手ほどきを受けたいからつて、入団希望の人間がやたら増えてるんですよ！

町の自衛力が上がるのは良い事ですし、余程の事が無い限りは全員受け入れてるんですけど、そうすると今度はいつもの広場じゃ狭すぎて、肝心の講習が受けられないなんて事に…。」

「ああ、事情は分かつた。」

アミにも相談しねえといけねえから、今ハッキリとは答えられねえが…。」

ま、おそらく大丈夫だろう。他のヤツにもそう伝えとけ。」

「はい！ありがとうございます！」

じゃあ、僕、見回りの途中なのでこれで！」

「おう。無茶はすんなよ。」

ヒラヒラと手を小さくふつて、青年を見送る。

それから歩きだして間もなく、今度は背後から声がかかつた。

「おやつ、マサさんじゃない。偶然ねえ。」

「ああ、お隣の…。」

「あら？そのお米ひよつとして…。」

「1俵はそつちの分だ。後で家に届けておく。」

「まあまあ、いつもスミマセンねえ。ご厚意に甘えっぱなしで申し訳ないわ。」

「なに、ウチのを買うついでだしな。どうという事はねえ。」

「はあ、優しい旦那様でアミさんが羨ましいわ。」

そこをいくと、宅の主人は本気が利かなくなつて…。」

「まあ、そう言つてやるな。他所の畑はたわわに見えるつてヤツだ

る。」

「…そうかしら。」

「すまんが、あまり遅くなるとアミが心配するんで…。」

「あらっ、そうね。引き留めちゃってごめんなさい。じゃあ、また。」

「

その後もちよこちよここと知り合いに声をかけられながら、マサはのんびり自宅へ戻った。

彼のこれまでの人生からは考えもつかない様な、のどかで平和な生活がそこにはあった。

汚いなさすが女きたない

「ねえ、自警団に最近女の人も増えてるって本当？」

「ん…？そうだな。正確な数は知らねえが、若いのを中心に急激に増えた印象があるな。」

「…そっか。」

「あん？どうした、アミ。」

「…あ。こんなこと言ったら、マサは呆れちゃうかもしれないけど…。」

「なんだ？」

「教える立場なんだから、仕方ないって分かっているの…。」

その、でも、できれば…：必要以上に若い女の人には近付かないで欲しい。」

一瞬、言われた意味が理解できずにきよとんとした顔でアミを見

つめるマサ。

それを受けて、彼女は今までにない情けない表情をしてジワリと頬を赤く染め瞳を潤ませた。

「じっ、ごめつ。やっぱり何でもな…。」

「アミっ！」

口に手を当て慌ててその場から立ち去ろうとするアミを、マサは素早く腕を掴むことで引き止めた。

彼女の態度から、言葉の意味をようやく咀嚼できたマサは真剣な表情で口を開く。

「謝らなくていい。俺だっていつも同じことを考えてる。」

「……………いや、それ以上か。」

「え？」

不思議そうに振り返るアミに、苦笑いを浮かべるマサ。

空いている方の手で後ろ頭を掻きながら渋い顔をして彼は言った。

「あゝ。例えば、御用聞きの男だとか。商店の息子共とか。自警団の連中とかな…。」

とにかく年の近い奴らと話してるアミを見ると、いつ取られちまうんじゃねえかと気が気じゃなくてよ。

…別に、お前の気持ちを疑っっちゃあいねえ。そこは勘違いしてくれるなよ。

ただ…、理屈じゃねえんだ。…そうだな、自分に自信が無えからかもしれねえ。

いつだって不安で不安で、ずっと家の中に閉じ込めて誰にも会わずにいれたらどんなにいいかと、そんな犯罪じみた事ばかり考えてる。「

「マサ。それ、…本当？」

「ああ。…俺が怖えか？」

「ううん。そうじゃなくて。そんな事じゃなくて…。」

「じゃあ、私、言ってもいいのかな…。」

「何をだ？」

「わ…私以外の女の子と2人きりで話をしないで…とか、できるだけ触ったり触られたりしないでとか、必要以上に見つめないでとか、何か貰っても受け取らないでとか、笑いかけないでとか。」

「そんな…我が儘な…束縛するような事…言っちゃっても、いい？」

「マサ…私の事…嫌わない？」

不安そうに彼の服の裾を掴んで、上目遣いに見つめるアミ。

グツと心臓を掴まれた様な気持ちになって、マサは彼女の身体を覆うように抱きしめた。

「…俺がお前を嫌うわけねえだろ。」

「我が儘なんか…いくらでも言ってくれ。その方が嬉しい。」

「マサ…。」

それから、2人は互いに抱擁したまま熱い眼差しで見つめ合い、心のまま深く口付けを交わした。

途中、我慢の出来なくなったマサがアミを抱き上げて寝室に消える。

だが、マサは知らなかった。

彼女の心の奥底にある酷く冷静な部分が『これで彼に大きな釘を刺す事ができた』とほくそ笑んでいた事を…。

~~~~~



数日後、アミは自警団が講習を受けている広場へと足を向けた。女性団員は全員同じ日に参加しているらしいとのこと、彼女らの動向の観察と必要があれば牽制するために、アミは差し入れ片手に乗り込んで来たのだった。

最初に、少し遠くから広場を眺めていて気が付く。

大なり小なりマサに恋情を抱く年若い娘が少なくとも3人はいるようだ、と。

顔はともかく、強さと優しさを兼ね備えたマサは自警団に入る様な気の強い女性にはかなり魅力的に映るらしい。

その他の女性陣も、思慕の念を抱くほどでは無いにしろ彼を嫌っている風には見受けられなかった。

だが、実に不愉快。

マサの顔を直視もできない小娘風情が…と彼女は人知れず嫉妬心を滾らせた。

アミは己が平凡な容姿であることを悲しいかな理解している。

ということとはつまり、短慮な女が若さと容姿を武器に本気で妻や妾の座を狙ってこないとも限らない。

マサが自分を裏切るなどとは欠片も思わないが、うっかり罠に嵌められてしまう事もあるだろう。

女は時に目的のためなら手段を選ばないものだ。

彼を取られる事自体もそうだが、何より彼の評判が落ちるような真似をされるかもしれないという事がアミには恐ろしかった。

あの顔と真逆の性格を持つマサを人々に理解してもらったためにアミがどれだけ心を砕いてきたか、その苦勞を彼女たちが知るはずもない。

どこからか偵察されて『これなら勝てる』と勝手に判断されるよ

りは、初手から2人の仲睦まじさを見せつけて他人の入る隙が無い事を理解させてやろうとアミは考えていた。

障害があるほど燃えるようなタイプの人間には逆効果になる可能性が高いもろ刃の剣だが、少なくとも絶対数は減らせる手段である。ついでに、敵意を隠そうともせず思い切りアミを睨みつけてくるような娘がいなかチエツクする目的もあった。

それが出来るという事は、正しいのは己の恋心で、その障害となるアミを悪だと認識しているという事だ。

そして、正しいからには猪突猛進。相手の都合を視野に入れることもせず、また、己の行動の結果を予測することもしない。そんなハタ迷惑なタイプの女に他ならない。

いかに自分の評価を落とさずに、多様な女たちを排除するか。アミは全力で思考を巡らせていた。

それから数週間。

やたらとマサに構っていたはずの特定の女たちが、1人、また1人と離れていき、ついに誰も彼の傍に近寄らなくなってしまうたという。

誰かが理由を尋ねてみても、彼女らは顔を青くして首を横に振るばかり…。

げに恐ろしきは女の嫉妬。

一見するとマサより淡泊そうに見えるアミも、奥底では狂愛と呼べるほどの強い執着心を抱いていたという、ほんのちよつと怖いお話。

マニユアルなんて飾りです。偉い人にはそれが分からんのですよ。

授乳後、ゲップを済ませ眠りについたシャロンをベビーベッドに降ろす。

瞬間、アミはハッと何かに気が付いたような仕草を見せた後、マサのいる方へと顔を向けた。

「ねえ。何か2カ月も経って、ものすごく今さら感あるんだけど…聞いていいかな。」

「どうした？」

「本当に今さらなんだけど…。」

育児中シャロンがいきなり竜になっちゃって、私がペシャンコに潰されたりとかって無いの？」

「…ああ。」

それなら、大丈夫だ。あまりに小さいうちは逆に竜形態をとると身体の負担になるからな。

「だいたい、2歳か3歳くらいまではずっと人形態のはずだ。」

「それから1年くらいは特に不安定な時期が続いて、自分の意志で完全に制御できるようになるのが…え〜。」

「早くて6〜8歳。遅くても12歳くらいまでには何とかってトコだな。」

「そっか。じゃあ、少なくとも2年以内にシャロンが竜になっても大丈夫そうな、人気の無い場所を探さないとね。」

「あ〜…。そういう問題もあったか。」

「そうだな…、とにかく人がいない場所で…なおかつキレイな水場がある…。」

「まあ、具体的な事は今すぐじゃなくてもいいから、おいおい考えていきましょう。」

「私も…今はあんまり頭が働かないし…。」

「…だな。アミ。疲れてんだろ。」

後の事はやっつくから、とりあえず寝てろ。」

「ん〜。…いつも、ごめんね。そう…する。」

そう言つて、ベッドに横になるとアミはすぐに寝息を立て始めた。マサは少しの間その寝顔を見つめ、数回頭を撫でてからため息をひとつこぼし部屋を後にする。

家事はもちろんの事、生れる以前から着々と仕込まれた彼女の教育のおかげもあり、子供の排泄処理や入浴、ぐずりをあやすといった行為について、ここ最近はほとんどマサが1人でこなしていた。

お互い仕事を入れず育児にかかりつきりなため、一般のそれよりも楽ではあるはずのだが、1〜3時間おきに授乳によって強制的に起こされるアミは現状かなり疲弊している。

アミから『もう少しで授乳や睡眠時間も定まってきたて多少は余裕ができるはず』と言われてはいるが、それでも目の下にクマを作つて辛そうにしている姿を見るたびにマサは見当違いにも代わつてやれない己の不甲斐なさを嘆いてしまつたのだ。

~~~~~

それから数カ月。

眠っている我が子を眺めながら、時折『何時間見ても飽きねえ』『世界一可愛いんじゃないか』などと親バカ全開の台詞を口にすマサ。

実際にもう3時間近く眺め続けているというのだから、アミも呆れるしかなかった。

敢えて彼の言葉を否定はしないが、現実主義なアミはこつそり『ベタ寝めするマサのせいでシャロンが勘違い女に育たないように気をつけないと』と酷い事を考えていた。

「ふ…ん…。」

そこでふと、シャロンが目覚め、ゆっくりとその小さな臉を押し広げる。

特に泣き出すわけでもなく、自分を見下ろすマサを視界に入れたシャロンはフラフラと両手を伸ばした。

「あー。ぱーあー。」

「っ!？あっ、アミっ。聞いたか。今…、今のっ。」

ガバツと顔を上げたマサは、小刻みに震えながら目を大きく見開いた状態でアミを凝視する。

「…そうね。パパって呼んでたと思うよ？おめでとっ。」

「だっ、だよなっ。だよなあ!」

すでにシャロンから何度もママと呼ばれているアミは、興奮するマサに苦笑い気味の笑顔を向けた。

アミの言葉にガクガクと頷いて、マサは再び娘へと視線を戻す。

「シャロンっ。もう一回、もう一回言ってみてくれ!」

「ぱあー。」

「おおお!偉いっ、偉いぞシャロン!」

この数秒後、我を忘れたマサが勢いよくシャロンを持ち上げて大泣きされ、アミにしこたま怒られることになるのは、今の浮かれきった彼には知る由も無かった。

~~~~~

長く話し合った末、魔の森に身を寄せた3人。

2歳近くなつてからはシャロンがいつ竜形態になつてもいいように、常にマサが傍に控えているようになったのだが、ここ最近になつて少し問題が起こつていた。

「パパ、やー！ママ！ママ、いーのー！」

「いや、アミはメシの支度中だ。」

「やあー！ママっ！ママあー！..！」

なぜかシャロンがマサに面倒を見られる事を嫌がり、頑なにアミを呼ぶようになったのだ。

どうしたものかと途方に暮れていると、泣き声を聞きつけて当のアミが姿を現した。

「はいはい、サツちゃん。ママですよ。どうしたのー？」

「ママあー！..！」

アミが現れた途端、それまでの癪癢が嘘のように満面の笑顔でヨタヨタと抱っこをせがみに行くシャロン。

それを見たマサは、両手を床について深くうちひしがれた。

「..しゃ、シャロン。俺の何がダメだと言つんだ..。俺の..。」

「もう、ソコ。本気で落ち込まない。小さい子の言う事でしょう。放っておけば、またすぐ気が変わるって。」

「うう..。」

「でさ。悪いんだけど、料理自体は出来上がってるから、あと盛り付けお願いできる？」

私このままシャロンの手を洗わせてテーブルにつかせておくから。

「

「…ああ。」

「じゃあ、よろしくね。」

さあ、サツちゃん。おてて、キレイキレイしよっかー。」

「てー、きえーきえー！」

楽しそうに扉の向こうに消えていく妻と娘を見送った後、フラフラと立ち上がり一人台所へ向かう夫。

これ以上ないほど幸せなはずなのに、どうしてか涙が出そうになってしまつマサだった。

番外編が…。何もかも皆懐かしい。（前書き）

番外編その4目次

- 1．シゝラケ竜 飛んで行く 東の国へ（付き合い初期の話）
- 2．ムーディー・ブルースさんがアップを始めたようです（28話でカットした3か月について）



番外編か…。何もかも皆懐かしい。

シ〜ラケ竜 飛〜んで行〜く 東の国へ

2人が男女の関係になってから数日。

想いが通じ合って一気に距離が縮まるかと思いきや、なぜかマサの挙動不審が悪化するという事態が起こっていた。

「ねえ、マサ。」

「うおっ！ なっ、なん…。どっ、どうしたアミ。」

「あ…うん。お隣の奥さんがね、収穫した野菜を分けてくれるって言うんだけど。」

それが、木箱いっぱいに入れてくれるものだから、私じゃ全然持ち上げられなくて…。

マサ、頼める？ あ、でも、ダメなら小分けにして運ぶから無理はしなくていいよ？

「いや、そ、そうか。よし、分かった。行って来る。」

「ありがとう。って、マサ。玄関そっちじゃないよ？」

「えっ。あ、ああ。そう、そうだな。間違え…あだっ！」

「やだドアにビビっ…じゃなくて、マサ大丈夫？」

「ぐ…、ああ。いや、大丈夫だ。悪い、後で直しておく。」

「うん。えっと、気をつけてね。」

「あー。」

重症だなあ、とアミは歩いて行く彼の背を見つめながらコッソリため息をこぼした。

触れれば大きさに跳び上がり、話をすれば呂律が回らず、傍に寄れば反射的に距離を取られ、あまつさえ視線が合えば顔を真っ赤に

させてすぐにあらぬ方角を向いてしまう。  
相手がアミでなければ、完全に不審者扱いされていたところである。

別段、2人の間に特別な何かがあったわけではない。

単にマサがアミに想われている事を意識しすぎて、どうにも平常心でいられないだけの話だ。

その心中をしつかり察してしまっているアミは、逃げられさえしなければ、後は時間と共に慣れていくものだろうと達観し、彼の様子を生温かい目で見守っている。

しかし、それが1週間も続くと今度は2人の変化を察したご近所さん達に心配され出してしまい、アミはどうしたものかと軽く頭を抱えた。

~~~~~

「マサ、これからはらく仕事禁止。」

「…は？」

目の据わった状態のアミに大事な話があると言われて、マサは戦々恐々としながら彼女の正面に座っていた。

「は、じゃない。」

ねえ、最近の自分自身の様子が変わって事ちゃんと気が付いてる

「？」

「え…あ、まあ。それは…。」

しどろもどろになりながら視線をさまよわせるマサ。

「分かってるなら話は早いわ。」

私が傍にいる時は特にだけど、そうじゃなくても何も無いところで躓いたり、壁にぶつかったり、誰かに話しかけられても気が付かずにボーっとしていたり、かと思えばいきなり頭を勢いよく振ったり、顔を叩いてみたり…。

あげればキリがないけど、とにかく今マサは色んな人に心配をかけてるの。

どうしたのかとか、何とかしてあげてだとか、私が各方面から言われてるの知らないでしよう?」

「そ、そうなのか…。スマン。」

「…それより何より、私はそんな注意力散漫なマサが心配で仕方がないの。」

狩士って、一瞬の油断が命取りになりかねない危険な仕事でしょう?」

普段のマサならともかく、今のマサが仕事に出かけるといつ怪我をして帰って来るんじゃないかって、私、毎日気が気じゃないわ。」

「…アミ。」

本当に不安げな顔を見せるアミに、マサは何とも言えない申し訳なさを覚えた。

それから、一度ゆっくりと目を閉じたアミは、今度は力強い眼差しでマサを見据える。

マサは多少たじろぎながらも、しっかりとアミの視線を受け止めた。

「だから、それが直るまで仕事禁止。」

一連の行動の原因は予測がついてるから、悪いけど荒療治で行かせてもらつわ。」

「…あ、荒療治?」

不穏な空気を感じて、マサは口の端を引き攣らせて額からツツと汗を流した。

彼の様子を知ってか知らずか、アミは小首を傾げ微笑みながら宣言する。

「今日からマサが私という存在に慣れてくれるまで、お手洗い以外はずっと傍にひっついていてから、そのつもりでいてちょうだい。」  
「なっ…!?!?」

予想外の内容に啞然とするマサ。

しかし、微笑むアミのその目が実は一切笑っていない事に気が付いて、彼はこの試練から逃れられないという現実を悟った。

かくして、彼はアミの手によって半ば強制的に不審行動を改善させられるのであった。

その間、マサが日に日にやつれていっているように見えて怖かった、とはお隣の旦那の談である。

ムーディー・ブルースさんがアップを始めたようです

「ん…?」

ゆっくりと意識を浮上させるアミ。

薄く瞼を開いてしばらくそのままボーっとしていたかと思うと、突然、目を大きく見開いて起き上がった。

パサリと身体にかかっていた外套が地面に落ちる。

それを視線で追えば、アミは自分が簡素な長椅子の上に寝かされ

ていたらしい事を理解する。

「…え？ここ…、え!？」

「ああ、起きたのか。」

声をかけられて反射的に顔を向ければ、そこには少しだけラフな格好をして椅子に座っているマサがいた。

「マサ？ここは？私たちイエンバーにいたんじゃない？」

「ここは遺跡の出口からほど近くの西南の国の宿屋だ。」

アミが眠っちまってから…、まあ、大体5時間くらい経ってる。

よく眠ってるみてえだったし、起こすのも忍びなくてな。

そのまま抱きかかえて脱出させてもらった。」

「うわ…。それは…何と言うか…、ごめんなさい。あの、迷惑かけちゃって。」

「気にすんな。迷惑っつーほどのこともねえ。」

本当はベッドに寝かせてやりたかったんだが…、汚れた恰好のままじゃあアミは気にするだろう。

だからつつって、俺が着替えさせるわけにも身体を拭ってやるわけにもいかねえからな。

とりあえずとして、長椅子に寝かせとく事にした。」

「ああ…うん。ありがとう。」

こっちの性格を良く分かっているなあと感心しながらアミはマサに礼を言った。

確かに、何日もお風呂に入れなかったり着替えもろくにできなかつたりした上に、血まみれだったマサに抱きついた事もあり、彼女は上から下まで浮浪者も真っ青な汚れっぷりを晒している。

この状態で清潔な寝具に身を沈めていたら、あまりの申し訳なさに寿命が縮んでいた事だろう。

そこで改めて確認すれば、長椅子にも汚れないようマサの大きな外套が身体の下に敷かれてあった。

彼の細かな配慮にアミが心の底から感謝していると、続けてマサが話しかけて来る。

「着替えるにしる公衆浴場に行くにしる、今のままじゃ気になるだろ？」

とりあえず、湯を貰って来るからそれで軽く拭うと良い。」

言いながら立ち上がり、マサは部屋の外へと向かい歩き出す。

どこまで気が利くんだこの人はと思いながら、アミはその背中越しにお礼の言葉を述べた。

その後、湯と新しい着替えをアミに渡して部屋の外で待機していたマサが、中から聞こえてくる水音や衣擦れの音に耳を塞いで必死に己の煩惱と闘っていたというのはまた別の話である。

~~~~~

次の日、2人は今後の道程について話し合っていた。

「とりあえず、お互い怪我や疲れが癒えるまではこの町でゆっくり過ごすとして…だ。」

すまんが、東の国に行く前に南の国に寄らせてもらっていいか。遺跡で壊れた武器の調達をしてえ。」

「それは構わないけど…。どうしてわざわざ南の国まで？」

アミがそう尋ねると、マサは微妙に渋い顔になって小さくため息を吐いた。

「…あの斧は特注でなあ。

普通に売ってるような代物じゃあ軽過ぎて持つてる気がしねえし、サイズも小さすぎる。

しかし、俺に合う重さや大きさのモンっつーとこれが中々作るのが難しいらしくてな。

かと言って、命を預ける武器が適当な出来じゃあ困るだろう。

だから、信頼のおける馴染みの店以外では作らねえようにしてんだ。

で、まあ、その中でもここから一番近くにあるのが南の国って一寸法だな。」

「…なるほど、色々大変なんだね。

でも、それまで武器が無くて大丈夫なの？」

「まあな。基本的に手加減するために使う事の方が多かったぐれえだ。問題ねえさ。」

「手加減？」

理解が出来ないと怪訝な顔をするアミに、マサは苦笑いを返す。

「あゝ…よっぽどの相手じゃない限り、俺が素手で殴ったり蹴ったりするとだなあ。

その…、グチャグチャになっちまうんだよ。

モンスターだと討伐部位も換金部位も全部おしゃか。

人間だと骨から何から粉々になっちまって治療もできねえ。

見た目も後味も悪すぎてな…。」

「そ…それは…、ご愁傷様…？」

「いや、まあ、今は以前よりはかなり調整がきくようにはなってるけどな。

それでも、日常生活と違って戦いの最中じゃ絶対とは言えねえからよ…。」

自虐的な笑みを浮かべるマサにアミは何と云っていいか分からず、その場は重苦しい沈黙に包まれるのだった。

~~~~~

南の国。鍛冶職人が数多く集まる鉱山街。

その中でも特に多くの武器屋が軒を連ねる一角にその店はあった。レンガ造りの周囲より一回り大きな店の正面に備え付けられた両開きの木扉を押して、マサは店内へと足を踏み入れる。

「邪魔するぞ。」

「ひえッ！……って、ああ、マサの旦那かい。こりゃ失礼。」

しかし、随分とまあご無沙汰だねえ。」

そう云って出迎えてくれたのは、しなやかな筋肉と美しい銀の毛並みを持った健康的な魅力の漂う狼の亜人らしき女性。

襟ぐりの深く開いた衣装からは、亜人種によく見られる豊満な胸（推定エカップ）が覗いており、アミは何となく負けたような悔しいような思いに駆られて小さく眉間に皺を寄せた。

マサの背に隠れているためか、女性はアミの存在に気が付かず会話を続ける。

「で、今日はどうしたんだい？」

「あ〜。その……。ちよいとした事情から斧が2本ともボロボロに壊れちゃってな。」

悪いが1から作り直してくれるか。」

言いづらそうに報告するマサに対して、女性はその大きな口を力パツと開けて叫んだ。



「はあああ！？アレを壊しただつてえ！？

一体、どこの何を相手にしたらそんなことになるんだい！？」

「まあ、んな事いいじゃねえか。で、仕上がるのはいつ頃になる？」

マサが話を濁すと、彼女は呆れたような顔をしてひとつため息を吐く。

「…言いたかないなら別に良いけどね。

つても、完全に作り直しとなると、それなりに日数かかるよ。」

「別に急ぐ旅でもねえし、構わんさ。」

「了解。他の仕事もあるし、材料も集めなきゃだから…。」

ん…、そうさね、3週間後くらいにまた出直しといでな。」

「分かった。3週間後な。んじゃまあ、コレは手付けだ。」

「はい、確かに。きっちり前と同じように仕上げといてやるからね。」

「おう。よろしく頼まあ。」

…さて。アミ、用事も済んだし行くか。」

「あ、うん。」

結局、紹介とかはしてくれないんだなあと思いつつ、マサの言葉に素直に頷いて踵かかとを返すアミ。

が、1歩踏み出そうとした瞬間、背後からそれを止める声がかかった。

「っと、待ったあー！ーッ！！」

そのあまりの大きさに驚いて振り返ると、目を皿のように丸くして人差し指を向けプルプルと震える女性の姿が目に入る。

「だつ、旦那！そのっ…、そのお嬢さんはどこのどなたさんだい！？  
まっ、まさかついに…かどわかし（俗に言う誘拐）を…。なん  
てこつた！

ダメだよ、旦那っ。いくら1人が辛いからって犯罪に手を染めち  
やあ！」  
「違え！」

目の前で展開されるいつかの再現のようなやり取りに、もはや乾  
いた笑いしか出ないアミ。

それから、1人で想像を暴走させる女性に対し、2人がかりで懸  
命に説明を繰り返して、ようやく事なきを得るのだった。

その後、なぜか女性にやたらと気に入られてしまったアミが、斧  
を2週間で仕上げるからと強引に彼女の自宅に泊めさせられ、暇さ  
えあればガールズトークを強請られる毎日を送るようになるのだが  
…、これについては全くの余談である。

ちなみに、アミは彼女から話を聞く事で、ようやくマサの溺愛つ  
ぶりが自分に対してだけのものであると知り、彼から向けられてい  
る感情に確信を持つのだった。

~~~~~

「…マサ。私、この町に住みたいかもしれない。」

ついに東の国へと足を踏み入れた2人は、比較的治安の良い集落  
を点々と巡っていた。

そして、とある町へ滞在して数日。

大衆食堂のテーブル席で正面に座るマサを見つめながら、真剣な  
面持ちでアミが告げた。

怖れていた日がついに来てしまったかと動揺する心を抑えて、マ

サは静かに口を開く。

「…そうか。」

「うん。仕事も沢山ありそうだし、町の皆の人柄も良いみたいだし、お米もあるし…。」

まあ、住んでみないと分からない事もあるかもしれないけど、それはどこに行っても同じだしね。」

「そうだな。…とりあえず、適当な借家を借りて仮住まいをしてみるのはどうだ。」

長期に住むんなら宿より安上がりだし、どうしても許容できないような問題が起こった時にもすぐ出ていけるだろう。

初期費用と向こう半年分くらいの家賃なら払ってやる。」

「んん、そうねえ。費用は後で返すとして、お試して事でその形で住んでみるのが1番良いかな。」

じゃあ、早速だけどマサ。食事が終わったら、良さそうな物件を一緒に探してくれる？」

「ああ…、分かった。」

この時点で2人には決定的な認識の相違があった。

アミは、最初に生活のめどが立つまでと約束を交わしていたので、仕事が軌道に乗って本当にこの町で生きようと決めてしまつまでは、彼と擬似的な同棲生活を送る事ができるだろうと考えて非常に浮かれた気分であったのだが…。

マサは、すでにこの世界の常識も学び、人当たりも良く、翻訳の仕事も成功が約束されているであろう彼女にこれから先も自分が添う意味は無く、何より、傍にいて彼女が他の人間から避けられないように離れてしかるべきだと考えて心に影を落としていた。

結局、アミに押し切られる形で一緒に住む事になるのだが、今のマサにそれを知る術は無い。

~~~~~

2人で生活を始めてわずか数日で、マサは己の選択を非常に後悔していた。

宿とも違う完全な密室内で、己の惚れた女が無防備に目の前をウロついているという状況が、どれほど精神に負荷をかけるものであるか、彼はここに来てようやく気が付いたのだ。

ただでさえ理性ギリギリのところ欲望を押さえつけているというのに、アミはと言えば、しっかりと着込んでいるようで、上から視線をやれば谷間が垣間見えてしまう様な微妙な服を着ていたり、風呂上りに暑いからとやたら生地薄い服を着ていたり、嬉しい事があったと言っては手を握って来たり、家の中に虫が出たと言っては怖がって涙目で抱きついてきたりと相変わらずの無防備さを晒している。

そのどこまでも無警戒な様子に、彼が湧き上がる衝動のまま彼女の柔らかな肢体を組み敷き貪り尽くしてしまいたいと思ったのは1度や2度ではない。

ただし、そうやってマサが日々身を切られるほどの思いで自らを律している裏で、アミがまったく逆の理由でヤキモキしていたなどと、現在の彼には知る由も無かった。

いい加減、自分に女としての魅力が無さすぎるのだろうかと本気で落ち込みかけていたところに、トドメのようにマサが出ていこうとするのを彼女が目撃してしまうのは、それからもう間もなくの事である…。

あの世で俺にわび続ける番外編————ツ!!!!!!!!!! (前書き)

番外編その5目次

1. ひとり上手と言わないで (シャロンの自分語り)

あの世で俺にわび続ける番外編————ツ!!!!!!

ひとり上手と言わないで

私が覚えている1番小さな頃の記憶。それは、3歳の誕生日を迎えた当日の事。

お母さん手作りのケーキという名前のお菓子を食べて、プレゼントを貰って、それがすごく嬉しくて興奮してしまった私は、生れて初めて竜形態へと姿を変えた。

いきなり視界が高くなって驚いたのと、天井や壁にぶつかって痛かったのと、残っていたケーキと貰ったプレゼントがグチャグチャになってしまった事にしばし茫然とする。

それからジワジワと状況を理解して、一気に悲しみに襲われ癇癩を起こした私は、竜の姿のまま暴れ出したらしい。らしい、というのは私にその時の記憶がないからだ。

後で聞いた話、お父さんが竜形態に変わって私を気絶させたそう。で、その時の事を何度も謝られてしまった。

きつとお父さんの事だから、それをした当時はもっと落ち込んでいたんだろうなあ。不可抗力なのに。

まあ、どうせお母さんが慰めたんだろうから、どうでもいいや。本っ当に、あの両親はいくつになっても新婚みたいにベタベタして鬱陶し……………話が逸れた。

次の日の朝に目を覚ました時、心配そうに私をのぞき込んでいる2人の姿が印象的だった。

家が無くなっている様子でビックリしたけど、お父さんがその日の内に森の木を組み立てて新しい家を作ってくれたおかげで、私は本来なら抱いていたであろう罪悪感に悩まされずに済んだ。

そして、その次の日から、お父さんとの特訓が始まった。

お父さんはいつの間にか森の中にとても大きな広場を作っていて、毎日決まった時間になると2人でそこへ出かけるという習慣が出来た。

最初は竜になる練習と、人に戻る練習を繰り返していたように記憶している。

お父さんはいつだって優しく、上手くいけば必要以上に褒めて嬉しくさせてくれるし、そうじゃない時も厳しくするなんてとんでもなくて、むしろふてくされる私の機嫌を取ろうと森から果物を集めて来てくれたり、練習そっちのけで2人で遊び呆けたりと、それはもう甘やかされっぱなしだった。

お母さんにその日の出来事を報告しようとする、お父さんはどうしてかいつも慌てて私の口を塞いだ。

当時は不思議で仕方なかったけれど、きっと躰けに厳しいお母さんの事だから、私が見ていないところでお父さんは私を甘やかした事についてこっそり絞られていたのだろうと思う。

お父さんとの特訓が始まったのと同じ時期にお母さんのお勉強が始まったけれど、お母さんはお父さんと違って一切甘やかしてはくれなかった。

それでも耐えきれたのは、お勉強の後にいつも美味しいお菓子を作ってくれていたからに他ならない。

お母さんは飴と鞭を完全に使い分けるタイプだった。

半年くらい経って竜に変わる事に少しずつ慣れてきた頃に、今度はその姿で空を飛ぶ練習と柔らかいモノに触れる時の力加減の練習をした。

さらに1年くらい経って、形態変化がほぼ自分の思う通りに使えるようになる、お父さんは『絶対に人に向けて使ってはいけない』と前置きをして、私の適性だという氷の魔法の使い方と竜形態での氷のブレスの噴き方について教えてくれた。

あの時はお父さんとお母さん以外の人間を見た事が無かったから、言われた意味がきちんと分かっていなかったけれど、それでも元氣よく返事をしていたように思う。

お父さんは攻撃性の高い魔法だからと心配していたけれど、お母さんは生活に便利な能力だと言って喜んでいた。

さらに1年くらい経って上手く魔法を扱えるようになってからはお母さんの発案で食べ物凍らせて長く保存したり、果物や野菜を冷たくして食べたり、熱が出た日には作り置きしておいた氷柱を砕いて氷枕を作ったりと、色んな事に役立つ自分の能力が幼心にとても誇らしく感じられた。

中でも、お母さんの作るかき氷やバニラアイスという食べ物がと



ても美味しく、我が家の暑い日のおやつ定番になっている。

現在が不幸というわけではないけれど、この幼少期の森での生活が1番苦勞も無く幸せだったのは間違いないだろう。

~~~~~

いつだって叱られる役はお父さんだから、逆にお父さんがお母さんに怒鳴ったのを見た時は、とにかくすごくショックで、私はこの日生まれて初めてお父さんを怖いと思った。

子供心に、父親は何をしても怒らないチヨロい存在だと認識していただけに衝撃が大きく、それから私は少しだけ大人しい女の子に変わった。

本当に滅多な事では見られ無いため、お父さんがお母さんを怒るのは本気で心配するような事があった時だけなのだと思えたのはごく最近だ。

でも、お父さんはどんなに怒っていてもお母さんが謝るとすぐに自分も謝って、その後はいつも以上にイチャイチャし出して、完全に2人の世界に入ってしまう。

∴色んな意味でお父さんには怒って欲しくないと思う私だった。

~~~~~

6歳になった頃、私は両親に連れられて東の国の町へと移り住んだ。

事前に、人のいる場所では何があっても竜になってはいけないうと注意されたけれど、私自身としてもそれを破るつもりは無かった。

5歳になって間もなくの頃、1度だけ竜の姿でお母さんを傷つけてしまった事がトラウマになっているのだ。

その時、お父さんは今までになく慌てていて、赤く染まったお母さんを何度も呼びながら抱きかかえ、どこかへ連れて行った。

お父さんはお母さんの事しか目に入っていなかったようで、私は何をどうしたら良いのかも分からないままその場に1人残される。

何時間経ったか分からないけれど、外が真っ暗になった頃によくお父さんが帰って来た。

お母さんを傷つけたショックから抜け出せず未だに茫然と立ち尽くしている私を見たお父さんは、とても痛そうな顔をして走り寄って来て、私の身体を強く抱きしめた。

お母さんは大丈夫だとか、置いて行って悪かっただとか、そんな事を言っていたんじゃないだろうか。

でも、私はそんなお父さんに何の反応も返してあげられなかった。

それから数日して、元気になったお母さんが帰って来た。

わんわん泣きながら抱きついて何度も何度も謝り続ける私を、お母さんは怖かったねとか、もう大丈夫と声をかけつつ笑いながら撫でてくれる。

気にしなくていいんだとお母さんは言っただけれど、私はその日から竜形態に変わることを止めた。

もうほとんど制御できるようになっていたし、日常生活に支障があるわけじゃあないからとお母さんは私を咎める事はしなかった。

もちろん、それはお父さんも同じだ。ただ、やたらと心配性になって何かと構ってくるようになって、それがとにかく鬱陶しかった。態度に出すとすぐに傷ついた顔をされるからあんまりハツキリとは指摘出来なかったけれど、大抵は私が本気でキレそうになる前にお母さんがお父さんを窘めて<sup>たしな</sup>くれて、それで事無きを得ていた。

~~~~~

初めて両親以外の人間を見た時は正直怖かった。

それでも、お父さんとお母さんの子供だというだけで、まわりの大人はみんな優しくしてくれたから、慣れるのは結構早かったと思う。

私と同年くらいの子たちとも、結構すぐに仲良くなれた。

私の知らない遊びをたくさん知っている彼女たちと遊ぶのは楽しかった。

逆に、男の子たちは私の存在を快く思わなかったようで、何かと仲間外れにしようと嫌がらせを繰り返してきた。

その筆頭がガキ大将カツちゃんこと、カークライベルである。

彼曰く、新入りのくせに大人たちにちやほやされて調子に乗っているのが気に喰わないという事らしい。

当然、私はことあることにちよっかいをかけてくるカツちゃんが大嫌いだった。

ただ、私が本気で彼に反撃をすれば、万が一にも大けがをさせてしまう可能性があるのです、どれだけ悔しくても悲しくても耐えるしかなかった。

心配をかけたくなって家ではいつも笑っていたけれど…、お母さんには多分みんなバレていたんだと思う。

いつだったか、何の脈絡もなく『シャロンはマサに似て我慢強いね』と頭を撫でられて、すごくビックリしたのを覚えている。

~~~~~

そんな男の子たちとの関係がハッキリと変わったのは8歳を過ぎた頃。

来なかつたら友達の子を標的にすると脅されて、私は町の外の草原に呼び出された。

町の外はモンスターがいるから子供たちだけで出歩く事を禁止されていたけれど、秘密の抜け穴を見つけたとかで、彼らはしょっちゅう大人の目を盗んでは抜け出しているらしい。

きつと、町で守られて暮らしていたから、モンスターの怖さというものを知らないのだろう。

指定の場所に赴くと、そこにはすでに男の子たちが揃っていて、私は戦々恐々としながら彼らに近付いて行った。

でも、当の彼らは木の棒を振りながら何かを夢中で追いまわしているようで、私が来た事には気がついていない。

自ら声をかける気にもなれず、近くの木に隠れて様子を見てみると、その何かがあるモンスターの幼生体である事が分かった。

それは、この辺りで最も怖れられているクランクモンスター<sup>クランク</sup>雷虎の子供だった。

幼生体の傍には必ず成体がいるはずだという事を、私は森に生きていた時の経験で知っている。

思わずその場を飛び出して、雷虎の幼生体の前に立ちはだかり、男の子たちへ危険だから止めるように忠告した。

けれど、彼らは根拠のない自信でもって、私の言葉を嘘だと否定する。

瞬間、どこからかモンスターの咆哮が轟いて、その場にいた全員が固まった。

私の背後にいた幼い雷虎がそれに応えるように必死に鳴き声を響かせる。

大声で町に逃げるように促せば、数人を除いたほとんど全ての男の子たちが悲鳴を上げ慌てて走り去って行った。

残っているのは、どうやら腰を抜かしたらしい兎の亜人と、未だに固まったまま動かないピア樽のような体形の少年、そしてなぜかカツちゃん。

再び逃げると声をかけると、カツちゃんは私を睨みながら『子分と女が残ってるってのに、オレが逃げられるか』と怒鳴ってきた。

気丈な態度とは裏腹に、彼の足は可哀想なほどに震えている。バカだと思った。そんな小さなプライドのために自らの命をドブに捨てるつもりなのかと。

そして、低い唸り声と共に脅威が訪れる。誰かが小さく息を呑んだ音が聞こえた。

雷虎はその名の通り雷の魔法を使うモンスターで、それ以外にも素早い動きで攻撃が当たりにくいという特徴がある。

竜の姿ならまだしも、私はお父さんと違って人形態ではそんなに強く無い。

雷なんてスピードのある魔法を使われたら避けきれないし、こちらの魔法も当たるかどうか微妙なところだ。

モンスターはこの場で1番力のある私に狙いを定めたようで、真っ直ぐこちらを睨み付けてきた。弱気なところを見せれば雷虎はすぐにでも襲い掛かって来るだろう。

いつでも氷の魔法を放てるように自身の魔力を引き出しながら負けじと睨み返していると、視界の端でカツちゃんがピア樽少年を揺さぶっているのが目に入った。

ようやく正気に返ったピア樽少年は、私の正面にいるモンスターを見て引き攣った悲鳴を上げる。

それを受けて、カツちゃんが彼の頬をガツンと殴りつけ無理やり黙らせた。

さらに、カツちゃんは自分が時間を稼ぐから兎の少年を連れて逃げるようピア樽少年に告げる。

いじめっ子のカツちゃんがどうして男の子たちに慕われているの  
か不思議だったけれど、私はこの時になってようやくその理由がほ  
んの少しだけ分かったような気がした。

どうしてか渋っているピア樽少年にカツちゃんが再び拳を振り上  
げると、彼は慌てた様子で兎の少年を抱えその短く太い足で町へ向  
かいドツスドツスと走り出す。

足音が小さくなっていくのを聞きながら、足手まといが減った事  
に心の中で小さく安堵の息を吐いた。

本来なら、カツちゃんにも彼らと一緒に逃げてもらいたかったの  
だけど…。

僅かでも意識を逸らせば途端に雷虎が襲いかかってきそうので、結  
局、口には出せなかった。

~~~~~

ものすごく長かったような気もするし、あっという間だったよう  
な気もする。

運良くモンスターが魔法を使って来る事は無かったけれど、飛ば  
しても飛ばしても氷は当たらないし、雷虎本気で怒ってて怖いし、  
カツちゃんはオレが囷になるからそこを狙えだとか出来もしない事  
を勝手にやるうとして怪我をするし、怪我をした彼を守るために氷  
の壁を作らなくちゃいけないくて無駄な魔力を消費させられるし、い

っそ気絶でもしてくれれば竜になれるのになんてジレンマを感じつつ、とにかく色んな意味で辛い時間が流れた。

魔力も体力も底を尽き本気でもうダメだと諦めかけた時、大きな何かが私の横を風のように通り抜ける。

次の瞬間には、すでにモンスターは力無く地面に伏していた。

……………お…父…さん？

町に逃げ帰った誰かが状況を知らせてくれたらしい。

お父さんはいつもの優しいけれど気味の悪い笑顔を向けて『よく頑張ったな』と褒めてくれた。

それから頭をゆっくりと撫でてくれて、すっかり安心しきった私はギョっとお父さんの服を掴んでわんわん泣きだしてしまった。

そのまま泣き疲れて眠ってしまったから私は知らなかったけれど、あの後、お父さんはカツちゃんに対して大人げなく脅しをかけたらしい。

カツちゃんがそれにどんな反応をしたのかは教えて貰えなかったけど、お父さんは『案外、根性ありやがんなアイツ』なんて言っただけかちよっただけ彼を気に入ったみたいだった。

この日以降、私が男の子たちにイジメを受ける事は無くなった。ただそのかわり、カツちゃんが毎日のように『オレと勝負しろ』と真正面から喧嘩をふっかけて来るようになった。



嫌だと返事をするより前に襲いかかってくるので、相手をしないわけにいかない。

面倒臭く思いながら、手加減しつつ彼を負かす日々がそれから年単位で続いた。

グングン強くなっていくカツちゃんとの勝負を段々と楽しむようになっていったのは、自分だけの秘密である。

~~~~~

…さて、話を現在に戻そう。

私がここまで長々と脳内で昔語りをしていたのには、それなりに理由があった。

なんて言うのと偉そうだけど、ようは単に現実逃避をしていただけだったりする。

目の前でちよつとばかり有り得ない出来事が起こってしまって、それを正面から受け止めたくなかった私は、つい意識を遠くへ飛ばしてしまっただ。

「っおい、聞いてんのか！」

「…あ、はいはい。聞いてますよーっと。」

「何だよ、その返事は！オレは本気だからな！」

「そんな事言われても、私より弱いカツちゃんを一緒になんて連れて行けるワケないじゃん。」

足手まといを庇いながら旅が出来るほどの実力なんて無いよ、私は。」

「ウルセエ、誰が庇って欲しいって言ったよ！自分の身くらい自分で守れる！」

いいから黙って連れてけ！勝ち逃げなんてさせねえぞ、コラ！

あと、カツちゃんと呼ぶな！カークって言え！」

「ああ、もーっ！そっちこそ話しを聞きなさいってーの！」

いつもお父さんの旅の話を聞きたびに羨ましかった。

私も大陸中のキレイなものや珍しいものをこの目で見たくて、お父さんのように旅をしたいと何年も何年も駄々をこね続け、ようやく両親から条件付きで許しを得たのはつい半年前の事。

お父さんは最後まで反対していたけど、お母さんが『道を誤って傷つくのも子供の権利だから、大人のエゴで奪ってはいけない』と諭すと、渋々納得してくれた。

きっと何年経っても、お母さんは私の尊敬の対象なんだろうなあとしみじみ思う。

将来はあんな余裕のある大人の女になりたいものだ。お父さんの目に痛いラブラブっぷりは別としてね！

準備万端、約束の16歳の誕生日にいざ旅立とうとした時に、なぜカツちゃんが目の前に立ちはだかった。

見れば彼も旅立ちの装備を整えている。

首を傾げながらも興味が無いのでそのまま彼の隣りを抜けようとするれば、腕を掴まれ引き止められた。

怪訝な顔をして振り向けば、こちらよりもさらに怪訝な顔をしたカツちゃんが一言『俺も一緒に行く』などとフザけた事をぬかし出す。

全くもって意味が分からなかった。

大体、カツちゃんは私を目の敵にしていたはずじゃなかったのか。それがどうして一緒に旅をしようなんて発想に到るのか、理解不能だ。

何が良くて好きでも無い異性と2人旅なんぞしなくてはならないのか、その理由を説明して欲しい。

これじゃあ楽しめるものも楽しめないじゃないか。

必死に説得を試みるも、前述の会話でも分かる通り、相手は一向に耳を貸してくれなかった。

いい加減面倒臭くなって、もういいやと無視して歩き出せば、カツちゃんはそのままギャアギャア騒ぎながらピツタリ後について来る。

本当に、意味が分からない。

結局、押し切られて仕方なく2人で大陸を旅をする事になってしまふ。

こんなはずじゃなかったのに、と深くため息を吐きながら私は今後についてどうしようもなく憂えてしまふのだった。

彼が勝ちにこだわり続けた理由が私に告白するためだったなんて意外すぎる事実が発覚するには、これからさらに5年の月日を要する事になる…。

あの世で俺にわび続ける番外編————ツ!!!!!! (後書き)

番外編これにて終了です。ご愛読ありがとうございました。

併せて、リクエストの方も閉め切らせていただきませうのでご了承承く  
ださい。

以降、リクエスト書き忘れ等が発覚した場合は、文字数によってこ  
ちらか活動報告の方に掲載させていただく予定です。

## その1（前書き）

珍しく古いデータを整理していたら、本作の元となった小説が出てきました。

設定や名前はほぼ同じですが、違う部分も多いので完全に別物として楽しめる人のみどうぞ。

特にアミの性格がヤバい事になっていますので、ご注意ください。かなりイタイ子です。

あと、マサの顔の怖さは本編のように一目で気絶するほど酷いレベルではありません。

## その1

異世界トリップを実際に経験するとしたら、どんな世界が良いって？

普通に空気があって重力が同じくらいで人間が住んでる世界ってのは大前提だよな。

憧れるのは亜人や魔族や妖精がいて魔法があるようなファンタジーな世界かな。

とりあえず、ドラゴンはいて欲しい。西洋竜の方ね。龍も好きだけど、王道いいじゃん。

でも、よくある補正ってやつがないときついよねー、異世界トリップって。

身ひとつで知らない世界に放り出されるんだもん。それからそれからあー……。

なーんて、言いたい放題言ったら、本当に来ちゃいました。どっつて異世界ですよ、異・世・界。

どつりで変な夢だと思ったんだよ、こんちくしょー！

何か、心のどこかで異世界行ってみたいなーって思ってる人間全員に聞いた中で一番具体的で、しかも調度それに沿った世界があったから選ばれたとかって、夢の中の自称神様が。

正直、パジャマのままだし、説明少ないうえに勝手に元の世界での存在消されて帰るって選択肢がないみたいだし、ふざけんなって話ですよ！まったくもって。

~~~~~

…只今、絶賛土下座中。

なんかね、いきなり視界が変わったと思ったらね、落下してね、しかもその着地点にね、非常に怖いお顔のおじさんがね、いたんですよ。

え？上から落ちてたのにどうして顔が分かったかって？

そんなの叫びながら落ちてた私の声に反応して彼がこっちを向いたからですよ。

ええ、勿論その怖い顔のおじさんの上に落ちましたよ。ええ。

おじさんも吃驚して固まっちゃってて避ける事もできなかったみたいだね。

ぶつかった瞬間「ぐあっ」とかいう低い声がね、聞こえたりしてね。

顔も怖けりゃ、声もですよ。勘弁して下さいと思ったり思わなかったり。

そりゃ、落下の衝撃でペチャンコにならなかったのは良かったかもしれないけど、これはこれで命の危機じゃないですか。一難去つてまた一難。

とにかく即座に上からどいて、ジャパニーズDO・GE・ZA開始ですよ。

あーあ、展開だけならそれこそ「親方！空から女の子が！」って某有名なアレだったんですけどねえ。

ええ、展開だけなら。

必死こいて「すみません」とか「ゴメンナサイ」とか「命ばかりはお助けを」とか涙目になりながら言っていると、例の低い声で話しかけられました。

「あゝ、嬢ちゃん。俺は何ともないから止めてくれ。

そつちこそ、大丈夫か？怪我不いか？」

……………アレ？

もしかして、顔に似あわず良い人…なのか？

いやしかし、貫禄と穏やかさのある幹部クラスという線も捨てきれない。

怖いおじさんの顔を見つめていると、彼は苦笑いをして手を伸ばしてきた。

瞬間、ビクツと身体を縮込ませて目を瞑ってしまったのは仕方ないと思う。

でも、そのすぐ後にワシヤワシヤと頭を撫でられて、おじさんの意外な行動に驚いてまた目を見開いて彼を見つめた。

「何もしねえって。で、痛いところとかないか？」

やっぱり良い人なんだね、おじさん。怖がってごめんね。

そんなおじさんに残念なお知らせ。笑顔の方が怖さアップだから！マジ勘弁！

「え、と。多分、大丈夫です。」

「そうか。そりゃ良かった。それで、嬢ちゃん。お前さんどっから来たんだ？」

見ない服装だし、この辺の者じゃないよな？連れはいるのか？迷子か？」



ぬおっ！そういうえば私パジャマですよ！ノーヴラですよ！恥ずか  
ティー！！

がばつと自分の体を抱き込んで視線を彷徨わせる私におじさんは  
首を傾げる。

ていうか、何て説明したら良いわけ！？咄嗟に頭回るほど切れの  
いい脳してないのよっ。

「その…、連れはいません。」

夜、自宅で寝ているところに自分を神様だって言う人が現れて、  
気が付いたら空から落ちてて…。」

「俺にぶつかった、と。」

一部を意図的に省いて正直に話したところ、おじさんは難しそう  
な顔をしていた。

まあ、同じ事を聞いたら私でもそうなる。むしろ、頭が可哀相な  
子なのねってなる。

「はい。…あの、ここはどこでしょうか。」

「ここはゼノア王国の王都に程近いディッセンマールという街だ。」

うん、どこですかソレ？

ぬうあああ、やっぱりあの自称神様の言ってた事は本当だったん  
だ！

うん、分かったた。分かったたよ！ちくしょう！

だって、赤い髪の毛で金色の目をしてゲームばりに背中に大きな  
斧を背負った冒険者風の服装したおじさんが普通に歩いてるような  
国なんかあるわけ無いもん！

ああ、そうだよ、異世界だよ！異世界！異世界！

私は異世界トリップしちゃったんだよおーーーーーッ！！

「おい、大丈夫か？」

はっ、すみません。思考の海にダイブしました。

「大丈夫…のような、そうでないような。」

「あゝ、そうか。そうだよな。」

嬢ちゃんみたいなのがいきなり一人で放り出されりゃ平気なわけないか。」

そう言つて、おじさんはまた私の頭を撫でた。

いやはや、意外と丁寧に撫でるよね。おじさん。中々気持ち良いです。はい。

しかし、あんな荒唐無稽な話を軽く信じてくれるおじさんは本当に良い人だなあ。

ところで。なんとなく。なんとなくだけど。

…私、子供扱いされてませんか？

「なあ、嬢ちゃんはどっから来たんだ？」

「日本…です。」

「ニホン？うーん、俺も大概旅してる身なんだが、聞いた事ねえな。悪い、嬢ちゃん。」

そーりやそうだー！世界からして違いますもの！あーっはっはっは………はあ。

絶賛天涯孤独中の私はこの人の良いおじさんを頼ることにした。

「あのっ、突然こんなことを言つてご迷惑だと思いますが、あの…。」

「ん、どうした？」

「自称神様は私という存在を皆の記憶からも記録からも消したそう

なんです。

だから、帰ったとしてももうどこにも居場所はありません。

それで、厚かましい話なのは充分承知しているんですが、他に頼れる人もいないし…その…私と一緒に連れて行って貰えませんか。」

そう言っつて再び土下座体勢に移ろうとしたところを、おじさんに止められた。

「頭なんか下げなくていい。

そうかあ、天外孤独の身になっちまったのか。可哀相になあ。

ああ、安心しろ。俺なんかで良ければいくらだって力になってやる。」

「本当ですか！ありがとうございます！！」

顔は怖いくせにチヨロいなおじさん！

そういうところを利用した私が言うのも何ですが、お人好しもほどほどにしないと食い物にされますよ！

「そついや嬢ちゃん、名前は何ていうんだ？」

「亜美です。アミ・ナカシマ。おじさんは？」

「おじっ…！嬢ちゃん、俺はまだ二十八だ！頼むから、おじさんは止めてくれ！」

「は！？嘘っ！五つしか違わないの！？絶対四十五くらいだと思っただのに！」

いや、髭だ！髭が悪いんだ！そのせいで老けて見えるのであって、私は悪くない！

でも、二十八歳ってことは幹部クラスの可能性はほぼ消えたと思っ  
つていいよね！？

などと考えつつ老け顔を眺めていると、おじさんも私をポカンと

見ていた。…何？

「五つ？おいおい、嬢ちゃん。お前えまさか…。」

ああ、そついうことか。こっちはこつちで子供に見られてたんだっけ。

「私は二十三歳です。」

「…っ！ウソだろ。てっきり十四かそこらのガキだと…。」

なんと！そんなにも若く見られていたとは！さすがは東洋人マジツク！

って事は、見た目が四十五の男と十四の女が連れだって歩く事になるのか。

…うはあ、なんとも犯罪の臭いがプンプンするよ！

おじさん…訂正、私だっておばさん呼ばわりは嫌だ。老け顔のお兄さんは心ここにあらずと言った雰囲気で一人腕を組んでブツブツ言っていた。

おや？

「あの…、大人だったからって放りだしたりしませんよね？」

老け顔のお兄さんの服の袖をつまみ、上目遣い&涙目で弱々しく言ってみた。

すると、それを見た彼はピタリと動きを止めた後、真っ赤になつて首を振りまくった。

こっちはばつぐんだ！

しかし、こんな十人並みの容姿の上にスツピンな私を前にその反応とは。

…そうか、顔が怖いから女の人が寄って来なかったんだね？

よし、とりあえず笑顔だ。笑顔。

「良かった。それで、あの、名前……。」

「あ。ああ、そうだな。俺はマーシャルト・グリーンストーン。マサでいいぞ。」

マサで！任侠ものの登場人物か！似あうけど！

「マサさんですね。これから宜しくお願いします。」

すつと手を差し出すと、何故かあわあわと戸惑った後、服で手を拭いてから握ってきた。

おやあ？そんな凶悪な顔でまさかの純情系ですか？

なんか可愛く見えてきちゃいましたよ、マサさん。……くっくっく。

~~~~~

私が寝巻きだったことを知って、マサさんは最初に服を買ってくれた。

スカートは嫌いなのでズボンにしたんだけど、マサさんはちょっと不思議そうにした。

ここに来るまでに見た女の人は皆スカートだったからなあ。

でも、冒険者風の女性の中には短パンなんて人もいたし、変では無いはず。

ちょっと恥ずかしかったけど服を買うついでに「下着も買ってい

いのですか？」って首を傾げながら聞いたら、「…しっ！」って言うて固まつて、また真っ赤になっちゃって。

いやもうね、そこまで反応されるとこっちは逆に冷静になるわ。

その後、「ひ…一人で」とどもりながら言うて財布ごと渡してくるから、私は彼の純さと警戒心の無さに苦笑いをして「すぐ戻って来ます」とだけ言うてその場を離れた。

支払いについては、マサさんが買うところを見てたからもう大体分かるし問題ない。

何となく急ぎで用を済まして十五分ほどで戻ると、そこには修羅がいた。

彼は相変わらず顔を赤くしたまま、眉間に皺を寄せて腕を組み小さく唸っている。

その姿は一見、怒れる鬼神のようにしか見えず、周囲の人間を恐怖に陥れていた。

小走りで近寄ると、どこからか「おいっ！」とか「危ないぞ！」等の声が聞こえてきて、親切のつもりなんだろうけど、どう反応して良いか分からずため息をつきたくなった。

とりあえず、大人のスルースキル発動。簡単に言うて聞こえないフリ。

だって、下着を買う女性を待つてシチュエーションに羞恥を覚えて悶えているだけだと思えますよ、彼は。

笑顔で「お待たせしました」と言うて財布を返すと、マサさんは無言で背いて歩き出した。

まだ恥ずかしいのか早歩きになっていたので、後ろから服を掴んで早いと抗議したら謝罪の言葉を述べ、今度は私に合わせてゆっくり歩いてくれた。

靴や鞆、その他必要そうなものを揃えた後、昼時だということ

大衆食堂でご飯を食べた。

食堂には味噌汁味の具沢山スープがあつて嬉しかったけど、白飯は無くてちよつと残念。

私は彼にせがんで今いる国の事や常識について教えてもらった。ちなみにどこにいても周囲からはそれなりに奇異の目で見られた。

うんまあ、二人でいるところつて元の世界だつたら誘拐か援交かつて感じるもんね。

犯罪臭が半端無いもんね。一応、そんな事実は無いんだけどね。皆から関わりたくないオーラ出てて、ちよつと混んでる道とかもそれなりに快適に歩けた。

私は若干いたたまれない気持ちになつたんだけど、マサさんは平然としていた。

もしかして、彼は一人の時でもこんな風に皆に避けられているんだろうか。

顔も怖いし、ガタイも良いし、何より玄人っぽいオーラが漂っているから仕方ないのかなとも思うけど、ちよつぴり悲しい気分になつた。

そうこうしている内に夕方になつていたので、マサさんが滞在している宿に戻つた。

宿に入つてすぐ、彼はもう一部屋とろうかと提案してくれたけど、私は同じ部屋で構わないと言って断つた。

無駄金を使つちやあいけねえぜ、マサさん。

それでも渋るマサさんに「信用してますから」と天然を装つてにつこり笑つてあげたら、片手で顔を覆つてため息をつきながらも折れてくれた。

牽制の意味も含めて発言だつたんだけど、男のマサさんには分かるまい。ふはは。

一応、ベッドが一つしかない部屋から二つある部屋に移動はしてもらいました。

本当の事を言うと、ここに来るまではまだ完全にはマサさんを信じられていなくて、どこかに売られたらどうしようなんて考えてた。自分から連れて行ってくれって言ったくせにね。

だってヤクザ屋さんて、最初は優しくして油断させたところでヤバいことに手を出させて、抜けたくても抜けられない地獄へと落とすのが常套手段だと思うし…。

でも、マサさんはいつだってどこか不器用だったり、ちぐはぐだったり、それでも誠実なのは伝わって来るから、とても人を騙すようなタイプの人じゃないって思えた。

どちらかという人慣れしてなくてどうしていいか分からない感じっていうか…。

だから、私はこの人の優しさを信頼する事にした。疑ってばかりだと疲れるし、何より人を信じられないって寂しい。

あと、顔が怖いってだけで人に避けられちゃうマサさんが可哀相に思えて、自分だけでも怖がらずに接してあげたいなって同情心も少しあった。

傲慢だけどね。

部屋に入って最初にした事は荷物の整理だった。

マサさんは結構几帳面な質らしく、色々ときっちり仕分けしていた。

しかも、私が持つ荷物を最低限まで減らしてくれたり、必要のある時に使えるように少しお金を持たせてくれたり等、それは細かい配慮に関心させられる。



宿の一階にある酒場で夕食を取って再び部屋に戻った後、今後の予定とか、今までの旅の事とか少し話してもらった。

ところどころ何かを隠してるなって感じの話し方だったけど、別に言いたくない事を聞き出す趣味はない。

会ってすぐの人間に全てを話せる人なんかいるはずないしね。

話し終わった頃に、マサさんが思い出したように言った。

「そういえば、この宿には共同の浴場があるんだがアミの住んでいたところでは風呂に入る習慣はあったか？」

「一応ありました。」

ただ…、こちらでの入浴作法と同じかどうか分かりません。」

「そうか。まあ、でも大体同じだろ。一応簡単に説明するとだなあ……。」

話を聞いた後、マサさんからタオルと石鹸を買うための小銭を貰って浴場に向かった。

簡単に言うと、学生時代に林間学校で泊った施設を思い出させるようなシヨボいゲフンゲフンツ素朴なお風呂だった。

他にお客もいなかったの、のんびり湯船につきりながら一人考える。

彼はやっぱり独り身だった。そして現在想い人もいないらしい。

……………どうするよ、私!?

一・あくまで恩人。ただでさえ迷惑をかけているのだから弁えましよう。

二・籠絡して利用しつくす。そしてこの世界に完全に慣れたらバイバイ。

三・本気で嫁の座を狙っていく。反応が可愛いし、良い人だし、ライバル少なそう。

四・一発やってから考える。やっぱり、身体の相性って大事だね。

五・保留。世の中はなるようにしかならないもんだ。流れに身を任せようじゃないか。

……うん、自分の人間性に疑問を持った。

何この選択肢！もつかい言う。何この選択肢！

とりあえず、二だけは何がなんでも無いわ！人の心を弄んではない！

特に二十八にもなって独り身のモテナイ君の純情を利用するなんて鬼の所業だ！

そして四も駄目だ！色んな意味でダメダメだ！

大体からして、自分から誘うとか平凡な容姿の私にはムリ…って違う！

それに万一身籠ったらそれから考えるも何も無い…じゃなくて！マサさんは二メートル強の大男だし、十四にしか見えないちんちくりんな私じゃ満足できなくて逆にフられる可能せ…だから何を考えてんだ私いいい！

何ですか！？マイ辞書の貞操観念の項目がゲシユタルト崩壊でも起こしたのですか！？

知らない間に宇宙の法則でも乱れたのですか！？

いや、アレだ！自分でも気づいてないだけで、異世界初日で混乱してるんだよ、多分！

マサさんと旅をしている間に他の出会いが無いとも言えないし。

とりあえず選択肢は五の保留でいいか。うん。よし。

後は、これからのマサさんの態度次第で一か三か決めればいいさ！

ええい、日和見の何が悪い！ズルくっただっていいじゃない、大人だもの！

色んな意味でのばせそうだったので風呂からあがった。

そういえば化粧品買ってもらうの忘れたなあ。

別にスッピンでも困らないっちなや困らないけど、せめて乳液とか化粧水とかに相当する物がないと肌荒れが気になる。

うーん、でもそんな贅沢品を買ってもらうのは流石に負担かけすぎか。

一応、自分で何かしら稼げるようになってから返す気ではいるんだけど…。

財布を預かった時にそれなりに持つてるなっていうのは見てとれたけど、それでもこれから先、何にいくら必要になるかも分からないし節約は当然するべきだね。

よし、やっぱり我慢しよう。下手に身綺麗にして攫われフラグとか立ってもヤダし。

部屋に戻るとマサさんに開口一番冷えない内に寝ると言われ、特に異論もなかった私はすぐにベッドに入った。

横になるとやはりというか疲れていたようで、間もなく眠気が襲ってきた。

## その2

朝、私はまだ完全に日が昇りきららない内に目を覚ました。

時計が無いから分からないけど、トリップした際の夜からいきなり朝という時差？にも負けず、いつものジョギング時間に起きてしまったっぼい。

毎朝の習慣だったし、今では走らないと逆にすっきりしないくらいなんだけど、正直こんな異世界の町を一人で出歩く気にはなれない。

マサさんに付き合わせるのは論外。

だからと言って、目覚めバッチリな自分には二度寝も難しい。ベッドの端に腰かけて思考していると、声をかけられた。

「…何だアミ、もう起きたのか。まだ日も昇ってないぞ。」

頭をガシガシと掻きながらのっそりと上半身を起こすマサさん。

「あ、起しちゃいましたか？スミマセン。

いつもこのくらいの時間に起きていたから自然と目が覚めちゃって。」

ほほーう、マサさん寝る時は半裸派ですか。

って！上半身に何も身につけていないのを確認して即座に下半身まで視線を落とすとか、どうなの自分！？痴女なの！？

あ、でも私がいるから全裸派でありながら気を使って半裸で寝たのかもしれない。

だからって、直接「全裸派ですか？」なんて聞けるわけもないし。聞いて肯定されたところで、全裸を容認できるわけでもないから

なあ。さすがに。

それにしても、すぐ照れる割に女の前で自分の裸体を晒すのは抵抗ないんだ。不思議。

ふむ、やっぱり筋肉質だね。あと、思ったより体毛が濃くなかった。これは意外。

などと朝っぱらからとんでもなくアホなことを目の前にいる女が考えているとは欠片も思っではないだろ。マサさんは普通に会話を続ける。

はっはー、ポーカーフェイス万歳。

「そうか。……起きたんだったら、水でも貰って来るか？」

「そうですねえ、お任せするのも心苦しいので一緒に行きましょう。」

「おいおい、別にそんな風に気なんか使わなくていいんだぜ？」

昨日からずっと思ってたんだが、面倒見るって言ったのは俺なんだからそっちはもっと遠慮なくだなあ……。」

「やー、それはちょっと難しいです。お世話になってる身ですから。でも、正直言ってこれでも随分と遠慮のない方だと思いますよ？色々買ってもらったり教えてもらったりしてるんですから、気軽に使わせて下さい。」

心苦しいですもん。」

「そういうもんか？  
だがなあ、せめて敬語を無くせないか。どうも肩っ苦しいっつーかな。」

「んー、年上には敬語って主義だったんだけど、マサさんがそう言うなら……。」

「ああ、頼む。さて、話がまとまったところで行くか。」

朝早くからすっかり身支度を終えた私たちは朝食時間まで部屋で

話をしていた。

「じゃあ、今日は朝食を取ったらギルドに行くのね？」

「ああ。この国ではどの街に入るにも身分証がいるというのは昨日話したな？」

ギルドで登録すればその登録証が身分証代わりになる。

他にも方法が無いわけでもないが、それが一番時間もかからないし自己申告だけで済むからな。」

「ふーん。でも、ギルドって言ったら仕事斡旋所でしょ？」

そんな簡単に登録できていいの？」

「問題を起こせばすぐに登録証は取りあげられるし、以後どこのギルドでも再登録することはできなくなる。」

ランク付け制度のおかげで国としても有益な人間を労せずして知る事が出来るしな。

登録大いに歓迎つてとこだろ。」

「へえ。…でも、名前や姿を変えればまた登録できたりするんじゃない？」

「ギルドでは最初に血を登録するんだ。」

どういつ技術かは知らねえが、その血で本人確認が出来るらしい。だから、いくら名前や姿を変えようと再登録は出来ねえんだとさ。」

……何そのDNA鑑定みたいな謎の技術。怖い。

「す、すごいね。その技術のおかげで解決した事件なんてのもあるんじゃないの？」

「普通にあるな。」

ただ、その技術は一応門外不出のものだつて事で理屈を知っている人間はギルドのお偉いさんだけなんだそうだ。」

「……なるほど。」

というわけで、早速やってまいりましたギルドです。  
外から建物を見た時は神殿かと思ったよ。あ、パルテノンとかそ  
っち系ね。

王都に近くて大きな街だからギルドも立派なんだそうです。

マサさんに案内されて、受付で登録書類を受取り空いた机に座っ  
て記入。

異世界補正でしゃべる方も書く方も問題ないのでサラサラと項目  
を埋めていく私。

名前、年齢、性別、種属はすぐに埋められたけど、住所や職業な  
どの項目に戸惑う。

すると、隣りで見ていたマサさんがそこは任意だから空欄でいい  
とアドバイスをくれた。

ありがとうございます。とことんお世話になります。

書類を受付に提出し血液登録。それから十分くらいで登録証は完  
成した。仕事早いな。

ドッグタグのようなソレには私の名前とランクと登録番号が彫り  
込まれている。

無くしたら再発行するのに日本円換算で千円程かかるらしい。

高いような安いような微妙な金額だけど、勿体ないから無くさな  
いようにしようと思った。

依頼受注には制限は無く、どのランクの仕事をいくつ達成した  
かで評価されるそう。

マサさんのランクを尋ねてみたけど、曖昧にはぐらかして教えて  
くれなかったよ。

登録はしてるんだよね？って聞いたらハッキリ肯定してチラッと  
タグを見せてくれたから、こっそり考えてた問題を起こして登録を

消されてしまった説は消えた。

すっかり見せてくれなかった事で何となく予想してみる。

マサさんに限ってランクが低いということは無いだろうから、あんまり高い事を公言したくなかったって感じかな。

彼のランクがどうだろうと特にどうこう思わないし、私の中で何が変わるわけでもないからマサさんの杞憂にすぎないんだけど、聞かれないというのなら敢えて聞くまい。

わたくし、おとなのおんなでございますから。おほほ。

マサさんは特に仕事を受けるでもなく、昼飯にするかとギルドを後にしようとした。

…んだけど、出口に向かって歩く私たちの背後からマサさんの名前を呼ぶ人がいて二人で振り向いた。

そこには無駄に洗練された佇まいで尚且つ白銀の美しい甲冑に身を包んだおそらく二十代であるう金髪碧眼の美青年がいた。

「やはり、マーシャルトか。」

「…なぜ貴方がこんな場所にいるんです。」

なんと、マサさんが似あわない敬語を！

見た目通りこの人お貴族様とかですか!?

「一度はお前を諦めた身だが、このような場所で出会つとなると運命的なものを感じるな。」

なあ、マーシャルト、あの話もう一度考え直さないか?」

お前を諦めたって何ソレ! 運命とか言っちゃってるし!

これ、まさかのアツ―展開!?

「相変わらず話を聞かない…。」



「アミ、すまんがちょっと向こうで待つててくれるか。」

「あ、うん。」

「ん？誰だ？マーシャルトに怯えない人間がいるとは珍しいな。しかも子供か。」

マサさんに話しかけられた事で私の存在を認めた青年はこちらに目を向けた。

むっ、ジロジロと品定めするような目で見るなんて不躰ですよ！

そんな彼からの視線を遮るようにマサさんは私をその広い背中に庇った。

「別に何でもありませんよ。迷子を一時的に保護しただけです。」

ふむ、マサさんも年齢の勘違いを正す気は無いのね。

その方が厄介事を回避できると踏んだわけだ。

だったら私も話を合わせる？

……いや、いや。下手な事言ってもいけないし、黙っていよう。

「ふうん、とてもそうは見えんがな。」

なあ、マーシャルト。まさかとは思うが、こんな子供一人の為に私の話を断ったわけではあるまいな？

「私はどの国にも仕える気は無いと申し上げたはずですよ。この子は関係ない。」

はい、BL展開とかあるわけじゃないですよ。分かってましたよ。ハイハイ。

って、なんじゃ国に仕えるって！規模デカっ！

何、マサさんもしかして国の騎士団とかに誘われてんですか！？  
そして、その誘いをかけるってことはこの人まさか王宮関係者と

かですか!?

うっわぁ、余計な話を聞いてしまった! さっさと離れてれば良かった。

どうか変なイベントスイッチが入ってませんように!

「別に国に仕える必要は無い。私の私兵となつて貰いたいだけだ。安定した高収入は勿論、武器や食糧、その他必要な物資も全て経費として払ってやる。」

望むなら貴族位でも領地でも与えてやるっ。

働きに応じて追加報酬を支払ってもいい。悪くない話だと思うが?」

「どんな条件をつけようと無駄です。私は誰にも傳くつもりは無い。アミ、行くぞ。」

そう言つて青年を睨み彼が怯んだところで、マサさんは私の手を掴んで早歩きでギルドを後にした。

~~~~~

あれからマサさんは黙つたまま街を歩き続けている。

かれこれ三十分くらい。

元からそう口数が多い人でもないんですけどぉー。普通に空気は重いよね。

それ以上に背中から不機嫌オーラ出てるしね。

それはそうと手を握つたままですよ、マサさん。

きつと、無意識なんだろうなあ。

うん。ていうか、いい加減に小走りも限界というか。

傍目からだ和本当に人攫いにしか見えない状況なのもちよっと勘弁なわけで。

「あのつ、マサさん、そろそろ、速度を、落として、もらえると、助かるん、だけど。」

あと、手を、繋ぎっぱなしで、若干歩き辛い、というか。ぜえ。」

言つと、マサさんはバツと振り向いて息も絶え絶えの私と繋いだままの手を確認し、大慌てで離れた。

「つすまん！」

「大丈夫、大丈夫。ちよつと息が上がっただけ。…ふー。」

……ん、よし落ち着いた。」

キョロキョロと辺りを見回して、マサさんはバツが悪そうにガシガシ頭を掻く。

「無意識で随分連れ回しちゃったみてえだな。悪かった。」

「別に気にしてないって。」

ね、それよりご飯にしょ、ご飯！お腹すいちゃった！」

笑って背中をバシバシと叩くと、マサさんは「痛えよ」と言っ  
て苦笑いした。

その後、目に入った食事処で昼食を摂る。

先に食べ終わったマサさんが、どこか真剣な顔つきで私を見て口を開いた。

「アミ、急な話で悪いんだが…街を出ようと思う。」

この後、宿に戻ったら荷物を纏めてすぐに発つから、そのつもりでいてくれ。」

「ん、分かった。」

私はこくりと頷いてまた食事続ける。

マサさんは至極あっさりと返事をした私に少し驚いたように目を見開いた。

それからゆっくりと視線を逸らして、頬杖をつき深く息を吐く。

「……アミは何も聞かねえのな。」

「なあに？聞いて欲しいの？」

「……いや。」

「だよー。」

正直、聞きたいって思いが全然無いわけじゃあないけど、マサさんが話すべきじゃないって判断したんだったら私はそれに従うだけだよ。」

聞かなくても見てれば大まかな事情は分かるし、とは言わないでおいた。

マサさんはその言葉を聞いて複雑そうな顔をしたあと「そうかと呟いた。」

### その3

それから宣言通り、マサさんと私は街を出た。

当然、現代よろしくコンクリート道路が整備されているわけもなく、自然あふれる大地を二人で歩く。

移動用の魔獣なり馬車なり用意しようとは提案してくれた際に、マサさんはいつも徒歩だと聞いて余計な出費をさせるわけにはいかなことから断った。

三・四日歩きづくめになるけど、まあ毎朝ジョギング一時間してるし、週二でトレーニングジムにも通ってるし、何とかなるだろうと思っただですよ。この時は。

あ、マサさん一人なら二日くらいで到着するそうです。  
聞かなきゃ良かった。私ってば。超お荷物じゃないですかあ。

歩いて、歩いて、暇になったらたまにマサさんと話をしながら歩いて、また歩く。

私の歩調に合わせてゆっくり歩いてくれるマサさんに申し訳なく早歩きを試してみたけど、それが分かったのか「先は長いんだから無理はするな」と窘められてしまった。

そういえば、このあたりは王都に近いおかげでちょっと心配していたモンスターも山賊や盗賊と言った類の輩も滅多に出ないみたい。まあ、マサさんはずっと一人旅してたみたいだし、当然強いんだろつから出て問題ないとは思っけど、やっぱり荒事なんてなるべく無い方が良さ。

日が落ちる少し前に小さな湖のある場所まで辿り着くと、今日はここで野宿をすると彼が言った。

さて、正直に言おう……。私は旅をナメていた、と。  
昼に出発し、実質半日しか歩いていないにもかかわらず、私はすっかり疲弊しきっていた。

うん。ちゃんと整備されてない道を歩くのってすごく疲れるんだって初めて知ったよ。

生まれてこのかた、コンクリートジャングル以外では生活した事無かったからなあ。

それでもマサさんに必要以上に迷惑をかけたくなって、食事の準備の手伝いとか他にも自分でやれそうなことはやらせてもらった。

そしてこの夜、私は何度もマサさんに驚かされることになった。

まず、彼は魔法が使えたらしい。

火の魔法しか使えないからと自嘲していたが、私からしたら充分すごい。

どーりで焚き木とかの用意しないなーと思ったんだよ！

夜も更けたころ、普通に火を消すから大丈夫なのか聞いたら、大抵の生き物はマサさんには近づいて来ないから火を灯しておく必要は無いと返された。

月明かりの下で見るマサさんはいつもより迫力あるなあ、いきなり夜道で出会ったら絶叫ものだなあ、なんてこっさり酷い事を考えながら火のいらぬ理由を聞くと、彼は自分が人間ではなく竜人族という亜人種だからだと教えてくれた。

マジですか！マサさん亜人だったんですか！しかも竜ってレベル高っ！

モンスターも普通の動物も竜の気配を察知して近寄ってこないらしい。

警戒すべきは気配に鈍い人族だけだから、むしろ火はない方が安全なんだって。

何と言うか…。普通の人間にもモンスターにも動物にも怖がられる上に、唯一寄って来るのはゲスだけとか不憫すぎて涙出そうですよ、マサさん。

どう見ても人間にしか見えないというと、人間と竜の二形態をとれる種族だからだと教えてくれた。

人間と竜が混ざったような見た目の種族もちゃんというそうだとマサさんの竜形態が見たいと言ったけど断られた。何でって聞いても教えてくれなかった。

…あ、もしかして変身すると服が破けるのかな。そしたら戻った時は全裸だね。

うん、そりゃ断られても仕方ないな。そして、理由を言えなくても仕方ないな。

一人で勝手に納得しつつ、それでも興味があったのでどんな見た目か聞いてみた。

体長十メートルくらいの赤い竜になるらしい。

ははあ、髪の毛と同じ色なわけですね。

もっと二倍くらい大きいのを想像していたと言つと、これでも竜族の中ではかなりデカイ方なんだがなあ、と苦笑いされた。でも、普通の竜ならもっと大きいサイズもいるんだって。

いざ寝ようという時になると、マサさんは自分の荷物の中から毛布のようなものを出して私に渡してくれた。

お礼を言つて受け取つただけで、その後、マサさんはそのまま荷物を閉じてしまった。

もしかして、マサさんの一枚きりの毛布を奪ってしまったんじゃないかと返そうとしたんだけど、普段からそうだったものは使っていないと突っ返された。

竜人族ってというのは普通の人間と違って暑さ寒さにはめっぽう強いそうなの。

どうやら、私の為にわざわざ用意してくれた物らしい。ちょっとキョンとした。

マサさんは横にならずに木に背を預けて座った状態で寝るみたい。多分、何かあった時にいつでも動けるように警戒しながらって事なんだろう。

じゃあ、私はどうしよう、どこで寝よう、毛布をどう使おう、地面に寝転がるのは抵抗あるなあ、マサさんと同じように座って寝ようかなあ、などとぐちゃぐちゃ考えていてふと思いついた事を実行してみることにした。

おもむろにマサさんに近づいてとんとんと指で肩を叩いて呼びかける。

「ねえ、マサさん。マサさんって利き腕は右だったよね？」

「ああ、一応両方仕えるが基本はそうだな。

…それがどうかしたか？」

「うん、分かった。じゃあ右側はあけておくれー。」

それだけ言って、私は胡坐をかいた状態のマサさんの膝の上に横向きに座り毛布を纏った後、彼の左腕を取って自分のお腹あたりに巻きつけ、頭を左胸に預けた。

この間、わずか二秒。

突然の行動に驚いて固まっていたマサさんがようやくやく言葉を発したのは、私がおやすみの宣言をした後だった。

「なっ、ちょ！おやすみって、おい！アミ！？」

夜でも分かるほど真っ赤になって慌てるマサさんをスルーし、私はあっさり眠りについた。



~~~~~

照れ屋なマサさんのこと、てつきり起きたら木に代わりをさせたり、もしくはその辺に寝転がされたりして離れてるかと思ったのに、普通に寝る前と同じ体勢で目が覚めた。

しかも、いつの間にもやらのみならず右腕も巻きついていて。

ふーむ、これはどう見るべきかな。

無意識？子供相手に対する優しさの延長？多少なりとも下心アリ？ん〜。とりあえず、何かされた感じは無いな。紳士な事で。

ひょいと上を向くと、こちらを見ているマサさんと目が合った。

「わっ！…なんだ、起きてたの？」

「いや、俺もアミが動く気配で目が覚めた。」

「そっか。んじゃ、おはよー。」

「…ああ。」

しばしの沈黙。寝起きの顔を無言で見つめるのは止めて欲しいなあ。

「あーのー、顔を洗ってきたいで、外して貰っても？」

「外す？」

何故、そこで首を傾げる。寝ぼけてんの？

「腕。」

そういつてペチペチと私の腰に巻きついていてるマサさんの腕を軽く叩く。

「っ！すまん！」

慌てて両手を万歳させるマサさん。

やっぱり寝ぼけてたのか。

よっこいしょと立ち上がって軽く伸びをする。

うーん、筋肉痛にはなっていないみたいだけど、同じ姿勢で寝てた

せいか若干身体が固まってるなあ。

ボキボキする。

ま、ちよつと倦怠感あるけどそれなりに回復はしたかな。

体調を確認しつつ軽く首や腕を回しながら湖に向かう。

身支度を整えて戻って来ると、マサさんは朝食の準備をしていた。食べ過ぎない程度にお腹に入れて、のんびり出発。

流石に昨日よりも疲れやすいみたいで、何度も休憩をはさみつつ進んだ。

こんなペースで大丈夫なのかなと思いつつ、一日を歩ききった。

そして、この日の夜も当たり前のようにマサさんに座って寝た。

何なんだったって深くため息を吐くから、満面の笑顔で「だってー、マサさんの傍が一番安全でしょ それにくつついてた方が寒くないしー」と言っちゃった。

ある意味、恩を仇で返してるような気がしないでもないけど、何だかんだ嫌がりも断りもしないマサさんてホントに甘いというか世話焼きというか。

いつか詐欺にあっつてしまわないか心配になるよ、マサさん。

まあ、顔面凶器な彼を詐欺にかけようなんて猛者はまずいないだろうけど。

……本当は、無駄に元の世界の事とかこれからの事とか考えて孤独と不安に押しつぶされそうになって泣いちゃったりしたら嫌だからなんて理由も少しあるんだけどね。

人肌と心音って無条件で落ち着くじゃないですか。

でも、この理由ばかりは大人の女として情けないから内緒。

最初から面倒見てくれる人が現れるなんて絶対幸運なんだし。

きつと、この世界には私より大変な生活をしてる人だっているはずだから。

だから、口に出したってどうにもならない泣き言なんて言わない。不幸とかそういうのは誰かと比較するようなことじゃないかもしれないけど、それでもそう思った。

~~~~~

そして三日目の朝、それは起こった。

起きようとして足をスイと動かした途端に感じるビキビキとした痛み……。

ああああ、初日の旅の筋肉痛が今日になってやって来やがった！

足が！足がああ！

顔を顰めて動きを止めた私を見て、マサさんが心配そうに声をかけてくる。

「どうした？大丈夫か？」

「うう……、あんまり大丈夫じゃない。」

筋肉痛みたい。かなり痛いから今日は歩けないかも。」

「…そうか。だが、そうだとすると今日一日休めば治る様なものでも無いな。」

むうと唸って、マサさんは思案するように眉を顰める。

「デスヨネー。ということ、マサさん。ちょっとお願いが……。」

そして現在、私はマサさんの左腕に座るような形で抱きあげられている。

俗に言う子供抱きってやつね。

いやー、もうマサさん背が半端ないから視線が高いのなんの。

うん、自分で動けないならいつそマサさんに荷物扱いで運ばれてしまえばいいやーとね。

え？自分の事は自分でなんて偉そうなことを言っただくせにつて？

だって、もう三日目なのにこれ以上の足止めとか食糧的な意味でも衛生的な意味でも遠慮したかったんですよ。

まともな風呂に入ってまともな布団で寝たいんですよ！現代人のぬるま湯な精神を舐めるな！

で、姫抱きやおんぶは見た目の恥ずかしさと両手が塞がってしまふという理由から却下。

肩に担いだり脇に抱えたりもすぐに気分が悪くなりそうだし、何より誰かに見られた時に人攫いと勘違いされる可能性が高いからこれも却下。

よって、消去法でこうなったわけです。

一応、重かったら少しは自分で歩くから降ろしていいよって言ったんだけど、マサさんのタフネスとパワーは想像以上に高かったらしい。

早くちゃんとした場所で休みたいだろうとマサさんは駆け足で道を進み、さらに、その日の夕方に目的の町に着くまで降ろすどころ

か昼ご飯以外一度も休憩しなかったという。

しかも、全然疲れてないってどういうこっちゃ。

何時間も動きっぱなしだったのに息もあがってないし、汗もかいてないよ。

おいおい、本当に人ですか貴方はー…って、良く考えたら竜人族でしたね。

それで納得していいのか知らないけど、もうそういう事でいいや。

「ていうかマサさん、お願いだから降おろおしいてーえ。」

本当は町に到着する前に降ろしてもらおう予定だったのに、未だに私はマサさんの腕の中にいた。

何度言っても「無理するな」とか「遠慮するな」とか言って降ろしてくれないマサさん。

そういう問題じゃないんですよ！分からないかなあ！

いくら私が子供に見えようと、抱きかかえられてる格好を見られるのは成人した女としてメチャクチャ恥ずかしいんだって！

大体、般若の顔を倍くらい怖くして髭もじゃにしたような強面のマサさんが十代前半に見える私を抱えてる姿を見たら、そりゃ皆さん驚きますよ！

ギョっとして二度見する人、続出ですよ！

いやそれより、いけないものを見たとでも言うような視線の逸らし方をするのは何故！

あー、恥ずかしい！恥ずかしいよー！

くそう、ここに来て嫌がらせなのか！？意趣返し of 羞恥プレイなのか！？

周囲から無理矢理でも意識を逸らすために、マサさんの肩にグリグリ顔を埋めてみる。

「どうした？疲れたか？」

途端に、どこか心配そうな声で聞いてくるマサさん。

「やっぱり、天然だ。あー、悔しいけど憎めない男ですよ、ホント。気遣ってくれるのは素直に嬉しいけど、その場所が見事に見当違いなのよね。」

「もう少し女の心理を理解して欲しいって思うのは、やっぱり我がままなのかなあ。」

「……でも、逆に女の扱いに慣れまくってるマサさんは胡散臭い感じがして嫌だし、言っちゃアレだけど面白くない。」

「うん。そんなマサさんになるくらいなら、このままでいいや。」

「アミ？大丈夫か？」

「おっと、しまった。また思考の海にダイブしてマサさんを無視してしまっていた。」

「うん。大丈夫。問題ないよー。」

顔をあげてニヘラと笑うと、マサさんも安心したように息をついた。

「そうか。…もうすぐ、この町の宿屋につくぞ。」

「ん、分かった。」

それだけ言って、また顔を彼の肩に埋める。

降りしてもらおう事はもう諦めたよ。

宿に入った後は、ベッドに座って足をマッサージして、宿の食堂でご飯食べて、お風呂に入って、またマッサージして、それからすぐ寝た。

そういえば私、まだ不安で眠れない夜つてのを体験してないな。  
マサさん効果なのか、それとも単に凶太いんだか…。

## ラスト

以降は特筆するような事も無く、二人での旅は淡々と続いた。旅を続けるにしたがって、移動の間はマサさんに抱えられるのが当たり前になっていった。

勿論、人前では降ろしてもらいますけどね！

さて、そんなこんなで旅を続けて一年ほど経ったある日のこと。

「え？一人用の部屋がひとつ空いているだけ？」

マサさんはぴくつと片眉を吊り上げた。

「他に空いてる宿も無かったし、もうここでいいんじゃない？」

別に一人用だろうが何だろうが私的には無問題です。

「ばっ…！アミ、一人用の部屋ってことは寢床が一つしか無いって事だぞ。」

「うん、知ってるよ？別に一緒に寝ればいいじゃない。」

野宿の時はいつもくっついて寝てるでしょ？」

「野宿の時とは違うだろ。…あれもどうかと思うが。」

うん、ごめん。マサさんの言いたい事は分かってる。

そして敢えて無視している。

「でも、ここがダメなら野宿になる可能性が高いよ。」

それならここで手を打とう？」



それからマサさんはうーうー唸りながら考えたあと、宿に人に話しかけた。

「…部屋にもう一つ寝床を用意してもらうことは出来るか？」

「いえ。その、新たに用意するだけのスペースが部屋には無…ひいっ！申し訳ございません！」

宿の人が言葉を発する度にマサさんは不機嫌を顔に現していった。あーあ、宿の人が怯えてチワワみたいになつてるじゃん。可哀相に。

それからも一悶着あつたけど、最終的には私の説得にマサさんが折れてこの宿に泊まることになった。

その後、久しぶりのお風呂タイムを満喫。同時に考え事タイムに突入。

ん〜、ていうかさあー。

マサさん大事にはしてくれるけど一年も一緒にいて全然手を出してこないし、恋情なのか親愛なのかいい加減分かんないのよね。

伴侶になる見込みが無いなら、いつまでもマサさんにくつついていられないじゃない？

私だつてそれなりの年齢なんだから、無理なら早めに次を探したいよ。

まあ、いちいち真っ赤になつて過剰反応するのを見る限り、一応女として見てもらえてるんじゃないかなあとは思っただけど、男性の場合イコール好きってわけじゃないからねえ……。

そりゃ、気持ちが無いまま手を出してきても怒りはしないよ？

拾ってくれた恩もあるし。

でもその場合、万一子供が出来ちゃった時にどうなるかっていう

不安があるのよね。

まだ一人で生きていく事も難しい状態なのに、ハラボテ状態で捨てられでもしたらと考えるとさー！。

マサさんの性格から言って無いとは思うけど、常に最低の想像しておかないといざという時に対処が遅れて身動きとれなくなるからね。

何て言うのかな、気持ちはハッキリさせたいけど、今後を考えると自分から誘うわけにもいかないし…。

何かとジレンマっていうか。

え？充分煽ってるだろ？……はてさて、何のことやら。

なーんて、実を言うと向こうから手を出してきたらとりあえず相手の責任に出来るかなっていう思惑があったり無かったり？

って、そんなこと言ったら計算ばかりしてるみたいじゃん。

これでもちやんとマサさんのことは好きですよ？

いやいや、マジでマジで。

じゃなきゃ、あの凶悪犯罪者顔が可愛く見えたりしないってー！。

絶賛盲目中だよ、私は。

でも、生活もあるんだし現実は見えておかないとさ……恋に恋する小娘じゃないんだから。

~~~~~

さて、そろそろ寝るかという段階になってマサさんが渋りだした。

「……やっぱり床でいい。」

「今更何言ってるのマサさん。そんなことしてたら野宿疲れは取れないよ。」

「別に、今さら野宿程度で疲れたりなんか……。」

「問答無用！ほらほら、いいから横になりなさい。」

ぐいぐいと腕を引っ張り強引にベッドに寝かしつける。

「いや、アミ。だから。」

「むっ、マサさんの身体が大きすぎて隙間が無い。」

「ああ、そうだろうな。それじゃあ俺は床で……。」

「まあ、マサさん丈夫だし上に乗っちゃっても問題ないよね？」

「は？」

「よいしょっと。」

ひょいとマサさんの大きな身体の上に寝転がって布団をかぶる。ふむ、暖かい。

床で寝るより負担になるんじゃないかね？っていう疑問はこの際無視する。

マサさんは私の突然の行動にびっくりして固まっている。

うーん、野宿初日を思い出す反応だわー。

「うん、充分広いしこっちは大丈夫。……マサさん重い？」

顔を上げて問いかけると未だに固まったままのマサさんは反射的に答えた。

「いや。」

「そっか、だったら大丈夫だね。じゃ、おやすみなさい。」

そう言って、彼の意識が覚醒する前に胸板を枕に目を閉じた。

頭の下から響いてくる中々早く打っている心臓の音に少しだけ口が緩む。

うつうつと眠りに落ちる直前、マサさんは深い深いため息をついていた。

それから数時間後、ふと目が覚めた私は現在の時刻を確かめるために窓のある側へと身体を傾けた。

「…んん？」

私が動いたことに反応したのか、マサさんが眉間に皺を寄せた後、うつすらと目を開ける。

「あ、ごめんね。起しちゃった？」

小声で謝ると、マサさんは私をぼんやりとした目のまま見てくる。そして、ゆっくりりと手を動かして私の頭の後ろを掴んだかと思うと唐突に顔を近づけてきて……。

口と口がくつついた。

ひゃっ、へっ！？ちよ、まつ、ええ！？いきなり何！？

って、うわ、舌ぁ！舌入ってきたぁぁぁぁぁ！ひいーっ！

…やっ、マサさ…、激し、ていうか、やたらウマ……。ひええ。

しばらくそのまま翻弄されていると、急にピタリとマサさんの動きが止まった。

そして目をカッと見開いたと思うともものすごい速さで顔を離した。それから彼は一気に顔色を真っ青に染めて、口をパクパクと開閉

する。

「マサ、さん…?」

私は自分が潤んだ瞳にほんのり朱色に染まった頬と少し荒い呼吸という中々に扇情的な様子であることを理解しつつ、あえてそのまま彼の名を呼んだ。

だってさあ。寝ぼけてたにしろ何にしろ、これってちょっとチャンスじゃん。

名前を呼ばれたマサさんは青かった顔を一瞬で赤くして狼狽えた。

「うあ…、いや、その、違っ、俺…。あの…。」

捨てられた子犬のような情けない顔をして弁解しようとするマサさん。

ああー、もうっ！何、その表情！可愛いなあ、おい！

思わずへらりと笑うと、マサさんはピタッと動きを止めた。

「……………のか?」

顔を少し俯かせ、呟くように何かを問われて私は首を傾げた。

「アミ…………、怒って無いのか?」

今度はきちんと聞こえたその問いに、黙って首をフルフルと横に振る。

「怖くなったり。」

フルフル。

「嫌いには？」

フルフル。

「じゃあ、もう一緒に旅をしないなんて事は……。」

ていうか、マサさんキスひとつでネガティブになりすぎ！そろそろウザい！

埒があかないので、私は黙ってマサさんをギュツと抱きしめた。

一瞬ビクツとしたけど、そのあと彼は何も言わなくなった。

しばらくそうしていると、マサさんは震える腕を私の背に回してくる。

それから懇願するような、どこか苦しげな、そして熱のこもった声で何度も私の名前を呼んできた。

彼はゆっくりと互いの身体を反転させ私をベッドに横たえさせると、その巨体で覆い被さってくる。

はい、キターーーッ！マサさん、一・本・釣りいーーっ！

っていうか、この反応はアレでしょ。単なる性欲とかじゃなくてもう両想いって事でいいよね？イケるよね？

よーしゃ、よしゃ。いやあもー、待ちくたびれたあーっ！

据え膳一年目にしてようやくですよ、本当にもう！腐る前で良かったね！

このあと特に寝落ちなんてお約束もなく、晴れて二人は男女の仲間となりました。

おほほ、ごちそうさまでした。

~~~~~

はいはいはい。アミです。

何だかんだで早くも約半年が経過しましたよん。

で、一つご報告。

このたび、私ことアミ・ナカシマはマサさんと夫婦になることが決定いたしましたー。

わー、どどん、パフパフー。今日からアミ・グリンストーンだよ！

実は、旅の途中イケメンからフツメンまで沢山の男に出会ってはいたんだけど……どいつもこいつも最悪だった。

例えば、ナルシストで選民思想な冒険者、マザコンでロリコンの商人にマッドサイエンティスト気味な魔術師、脳筋で汗臭い鍛冶師、腹黒で性悪な騎士……エトセトラ、エトセトラ。

いくら顔が良くて、そんな奴らと恋愛だなんてとんでもない！  
その度にマサさんの良さを再確認したわ。

顔はともかく、照れ屋で可愛いし、優しいし、強いし、素直だし、  
何より常識人だしね！

最上の伴侶を得た今では、あの自称神様にもちよっただけ感謝してるかな。

でも、ほんとにちよっただけね。

だって、家族や友人といきなり引き離された恨みの方が大きいもの。

……。

……。

……。

さて、……と。

これから一緒にめっぱい幸せになりましょうかね、マサさんっ。

パラレル赤い竜・完。



## マサ視点と会話集

道を歩いていたら、突然少女が降ってきて驚いた。

俺が顔を上げた瞬間、少女がその表情を恐怖に歪めたのは……まあ、いつものことだ。

俺を怖がって必死に謝る少女に声をかけたのは、単なる気まぐれだった。

大抵は俺が声を発した途端にさらに怯えさせてしまうから、普段は黙って立ち去っている。

だが、予想に反して彼女は目を見開いて俺をまっすぐに見て来た。その後も、自身の置かれた境遇に不安な様子はありつつも、俺に対して怯えるといったことも無く、さらにあることかについて来たいとさえ言った。

怖がりもせずに俺を頼りにしてくれたことが嬉しくてろくに考えもせず了承してしまったが、それを聞いた少女が本当に安心したように笑うので何とでもなると思ったのだ。

その直後に成人した女性であることが分かり、色々とマズイだろうと考え直したのだが……涙目ですがってくる彼女に反射的に頷いてしまう。

……あんなの反則だろう。

その後も彼女はどこまでも規格外というか、とにかくおかしかった。

平気で俺の隣りを歩き、平気で俺の顔を見て、平気で俺と話し、平気で俺に触れる。

そして、何でも無いことのように彼女は俺に笑顔を向けてくる。それなりに親しい知人たちですら、俺を直視することは少ないというのに、なぜ会ったばかりの彼女がそんな態度でいられるのか不思議でならない。

ひとつ困ったことに彼女は女としてどこまでも無防備だった。

おそらく最初に子供だと勘違いしたことが原因なんだろう。

それにしたって大の男、それも俺のような奴を前にやれ下着が欲しいだの同じ部屋でいいだの…。

普通なら誘っているのかと思うところだ。

まあ、その後の信用発言であっさり撃沈したわけだが…。

あんな風に言われて手を出せるのはよっぽどのロクデナシ野郎だけだ。

とは言え、風呂上がりの中の彼女を見た時は少しヤバかった。

湿った髪がほんのりと朱色に染まった肌に絡まり、薄い寝間着が彼女の成人女性らしいラインを浮かび上がらせ…あー、くそっ！思いつくすな、俺！

大陸を広く旅しながら生きている自分としては、最初はそれこそ誰か信頼できる人間に預けようかとも思っていたが、一日ですでに俺が彼女から離れがたくなっていた。

だから、二人で旅ができるように彼女をギルドに連れて行き登録させた。

その際、彼女からランクを聞かれ少し焦った。

俺が最高ランクだと知ったら、彼女の態度は何か変わってしまうだろうか。

適当に濁すと彼女もそんなに興味はなかったのか、それ以上聞いてはこなかった。

ホツとしたのもつかの間、ギルドを出ようとしたところで予想外の人物に会った。

この国の王太子殿下だ。

竜人族の中でも突出した力を持つ俺を利用しようとする輩は多いが、その中でも特にしつこく勧誘してくる厄介な男。

前回、近衛兵百人抜きという賭け勝負に俺が勝つことでようやく諦めたかと思っただが…、どうやらまた気が変わったらしい。

何が運命だ。くそつたれ。

余計な事をしゃべられる前に席を外してもらおうとアミに声をかけたのだが、そのせいで殿下が彼女の存在に気づいてしまった。

もし、俺がアミに懸想している事がこの男に知られたら危険だ。

殿下は有能だが、極端な合理主義で人の感情には疎い。

俺を手に入れるためなら彼女を利用する事に躊躇いは無いだろう。アミを子供と勘違いしていることを正さずに関係を誤魔化してみるも、殿下は彼女が俺を恐れない様子を見て何かあると感じたように挑発するような質問を投げかけてきた。

思わず舌打ちをしそうになるが我慢する。

結局上手く誤魔化しきれず、殺気を発して怯ませたところで無理やり殿下の前から去った。

殿下は追手を差し向けて来るだろうか。

アミを不必要に危険な目にあわせてしまわないだろうか。

そういえば、あの会話を聞かれてしまったが、彼女は思っただろう。

悶々と考えていると、後ろから声をかけられた。

振り向くと、息の上がったアミが少し潤んだ瞳で俺を見上げている。

そして、彼女の華奢な手をがっちり掴んでいる俺。

慌てて手を離して謝ったが、彼女は笑って首を横に振った。

ふと辺りを見回すと、ギルドから随分と離れた場所にいることが分かった。

一人で思考に耽って彼女を長く引つ張り回していたらしい。何てこった。

再度謝ると、今度は強引に話を変えられる。

その際に背中を叩かれたが結構痛かった…。案外、力強いんだな。それにしても、黙って俺に振り回された挙句、笑顔で許すなんてアミは優しすぎる。

殿下の搜索が入る前に街を出ることを決めた。

それをアミに伝えると、彼女は酷くあっさりと了承した。

なぜそんなに簡単に頷くことができるのだろうか。

不安じゃないのか？

そこまで考えてふと気が付いたことを口に出してみた。

「…アミは何も聞かねえのな。」

街を出る理由にしろ、さっきの殿下の事にしろ、俺の事にしろ、こっちから口にしらない事や、言葉を濁した事について彼女は一度たりとも言及してこない。

すると、アミは食べる手を止めて俺を見ながら首を傾げた。

しまった、藪蛇だったか？

「マサさんが話すべきじゃないって判断したんだったら、私はそれに従っただけだよ。」

アミのその言葉は衝撃だった。

彼女は全部わかっていて、それでも敢えて口を閉ざしていたんだ。

信頼されている事を嬉しく思いつつも、それに足るほどの存在ではないと苦しくも思った。

旅の途中のアミはどこか子供のようだった。

初日の夜から当然のようにアミは俺の膝の上で眠り、さらに三日目の朝は筋肉痛を理由に彼女は俺に運んで欲しいと言って抱きあげることを提案してきた。

勿論、この程度で何の負担になるといっわけでもないし、頼りにされるのは嬉しい。

……が、正直生殺しは辛いぞアミ。

腕の中の彼女はいつだって柔らかくて良い香りがした。

その黒い髪に顔を埋め抱きつぶしてしまいたくなる衝動を何度こらえた事が。

出費がどうの手間がどうのと変なところで気を使う前に、男としての俺に気を使って欲しいものだ。

ずっとこんな調子じゃ、いつ理性が決壊するか……。

そんな事を考えながらも、彼女と触れあえる機会を逃す気にもなれずに言う事を聞く己の浅ましさに自嘲の笑みが零れる。

『愚かな……化け物の人並みに誰かに愛されようなどと……』  
いつだったか誰かに言われた言葉が頭の中でこだました。

それでも、旅は順調に続いた。

だが、久しぶりに宿のある町に立ち寄った夜、とんでもない失態を犯してしまう。

他に空いている宿も無かったため、仕方なくアミと一人用の部屋に泊ったのだが……。

久しぶりに布団で寝たせいか、それともいい加減アミへの欲求が強くなりすぎていたのか、寝ぼけて彼女の唇を奪ってしまったのだ。それも、ごく軽いものではなく深く貪るように、だ。恐れていた事を現実にしてしまったと青くなる俺に気付かないのか、アミはまるで誘う様な表情をしたまま俺の名を呼ぶ。血の気が引いたはずの顔面が一気に火照るのを感じた。弁解しようとして口を開いたが、上手く舌が回らない。それに焦っていると、俺を見ていたアミが気の抜けるような笑顔を見せた。

「何で、笑える…？アミ…。お前、怒って無いのか？」

ほぼ独り言だったのだが、きよとんとした表情になって首を傾げるアミに今度はしつかりと問いかけた。

彼女は俺の言葉に黙って首を横に振った。

ならばと、聞き方を変えるがやはりアミは首を横に振る。

その後、質問に答える代わりに何も言わず俺を抱きしめてきたア

ミに…、己の頭の片隅で理性が切れる音を聞いた。

以下、会話集

大・丈・夫。全部計算だよ。

「ところで、竜の方のマサさんてさ。空は飛べないの？」

「いきなりだな。飛べるがどうした。」

「動物や人を乗せて飛んだ経験は？」

「無い。」

「乗れないの？」

「さあな。乗せた事ねえし分かんねえよ。何でそんなことを聞く？」

「乗りたい。」

「ダメだ。落ちたらどうする。」

「試しに低空低速飛行からやってみればいいじゃない。」

「んなの、関係ねえ。背中に乗った時点である程度高さがあるんだぞ。」

「アミには無理だ。」

「じゃあ、飛ばなくていいからとりあえず一回乗ってみたい。」

「落ちそうになったらその前に尻尾でも足でも使って受け止めてくれたらいいよ。」

「マサさんなら出来るでしょ？」

「おまつ。……大体、竜なんて化け物だぞ。普通は怖がるもんだろーが。」

「正体がマサさんなのに怖がるわけないでしょー。」

「ねえ、お願いっ。」

「……はあ。つたく、しょうがねえな。乗せるだけだぞ。飛ばねえからな。」

「やった！ありがとー、マサさん！」

首飾りなんかになると死亡フラグ回避アイテムとして作用します

「なあんだー、もっとジワジワ変身するのかと思ってた。一瞬なんだ。」

「ゆっくり変わってたら隙だらけになるだろう。」

「わっ、竜の姿でもしゃべれるのね。声帯どうなってるの?」

「……知らねえ。」

「ま、いつか。しかし、間近で見ると大きいねえ。」

「そうか。」

「うーん、思ったより登るの大変そう。」

ねえ、啞えて背中に降ろしてもらったり出来ないかな?

せっかく、首長いんだし。」

「せっかくの意味が分からん。啞えるったってこの口だぞ。」

「何とも鋭い牙ですね。」

仕方ない。頑張って頭にしがみつくから背中まで宜しく。」

「結局、自分で登らないのか……。ほらよっ、と。」

「おおう。高い、高い。中々良い眺めだよー、マサさん。」

「落ちるなよ。」

「いやあ、広いから大丈夫!。ところで、記念に鱗一枚貰っていい?」

「何がところでなんだ、何が。……別に構わんが。」

「よし、じゃあこの大きめの……うぐぐ、ぬぬ、せい!ほやつ!

とえいつ!

……取れないい。マサさあーん。」

「あーもう、つがねえなあ。…つと、これでいいか?」

「わあ、ありがとう!大事にするね!」

期待なんかしてなかったんだからね!

「ふー、満足満足。ありがとう、マサさん。もう人型に戻っていいよー。」

「ああ。…あ?何で後ろを向くんのだ?」



「え、大丈夫なの？」

「大丈夫？どういう意味だ？」

「人に戻ったら服を着て無かったりするんじゃないの？」

「何でそうなる！」

「なーんだ、違うの。」

てつきり人型に戻ったら裸になっちゃうのが嫌だから竜になりたくないって言ってるのかと思ってた。」

「ってーと、何か!？」

お前は全裸ありきで俺に竜になれと強要していたのか!？」

「見なきゃ平気かなって。」

「んなわけ無えだろ！」

「あれ？だったら、竜の時は服はどこにいつてるの？」

「話聞けよ!…って、別にどこにもいつてねえよ。服も同時に変化するからな。」

「ええー。」

「何でそんな微妙な顔になる。」

「だって、物理的におかしいじゃない。どういう理屈でそうなるのか全然わかんない。」

「物理……?」

「あ、細胞ごと変化するものだと考えるからいけないのか。」

魔力的な力を使つての変化だったら服ごと変わってもおかしくないのかな。」

「……でも、それにしたって理屈が分からないのは一緒だわ。」

「アミ?」

「魔力……、魔法か。」

無から有を生み出す仕組みを科学世界に生きる人間に理解しろってのが無理なのかもね。」

「おーい。」

「大体、ファンタジーな世界に連れてきておいて補正が言葉だけってのはおかしいわよね。」

「そうよ。普通、魔法が使えるなり身体能力の強化なりあるもんじやない？」

「あの自称神様はもつとラノベを読み尽くすべき。」

「……………」

君を知ったその日から僕の心のともしびは消えない

「ねえ、マサさん。竜人族って、竜と人どっちが主体なの？」

「別にどっちって事あ無えよ。」

「まあ、生活するのに便利だから人間の姿をとってる奴の方が多いかな。」

中には一生成の姿で生きるような奴もいるが、流石にそれはほんの一握りだ。」

「そっかー。じゃあ例えばさあ。竜人族のマサさんと人間の私との間に子供が出来たらどうなるのかな？」

「ゴホツ！おまつ、アミつ。いきなり何言ってたんだ！？」

「私、そんなに変な事聞いた？」

「……………いや。何ついたら良いのか。」

基本的に竜人族は里から出ずに一生を終える奴がほとんどの閉鎖的な一族でな。

他種族と夫婦になつたなんて話は俺も聞いた事が無い。

「だからどうなるってのは俺にも分かんねえよ。」

「ん？里から出ない？え？じゃあ、マサさんは？」

「……………俺は例外だ。」

「例外ねえ…。『逃げて来た』『攫われた』『追い出された』『始めから里にはいなかった』『不明』の内のどれかに当てはまる？」

「追い出された……………が、一番近えかな。」

「そうなんだ。でも、おかげで私はマサさんに会えたし、ある意味

感謝だね。

って、不謹慎かな。ごめんね、マサさん。」

「あ、いや、ああ。……その、追い出されたのも悪くなかったかもな。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7750s/>

---

幸せの赤い竜

2011年12月12日01時49分発行